
想望する者たち

柊唯音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想望する者たち

【Nコード】

N2495W

【作者名】

柊唯音

【あらすじ】

地方都市アクナリアに突如として現れた噂に名高いとある殺人鬼。その出現よって都市内で暗躍していた者たちの思惑が僅かに乱れ始める頃、ふとしたことが切っ掛けで一人の少年と少女が出会う。そしてその出会いが収りかけていた静かなる騒動を大きく狂わせることになる。交差する疑心と思惑は予期せぬ事態を巻き起こし、そこに噂の殺人鬼が深く関わってくることで事態はさらに混迷を極めていく……。

何かを秘める少年、運命に翻弄される少女、想いを貫かんとする騎士、都市の執政者、復讐を狙う巨漢、謎の青年、その他様々な者たちの織りなす王国と都市を舞台とした少し歪んだファンタジー群像譚です。

第一章完結しました。現在は第二章執筆中（公開日はおそらく年内……の予定です）

第零節・彼は狂気を孕みつつ……

もうだめだ。

凶器を手にした彼は、今まさに自身の内から湧き出る猛火の如き衝動に正直になろうとしていた。

楽になりたい。はやくこの衝動から 欲望から解き放たれたい。どうしても抗えないという認識に押し流されそうになる一方で、しかし彼はそれに抗おうとしていた。

その心情の現れなのか、彼は額を汗で濡らしつつ苦悶の表情を浮かべ、呼吸は音をたてるほどに荒い。

だがそんな抵抗が長くは続かないことを、彼はこれまでの経験から知っていた。

どうしても抗いきれないことを、彼は抗う前から知っているのだ。故に彼は己の欲望に負けてしまうことを始めから予期している。

ならばなぜ抗うのかと問われれば、それは一重に贖罪だった。罪には罰を、という当たり前の倫理観。

せめて少しでも抵抗することで、これは己の理性が望むところではないと自身に言い聞かせるため。

せめて少しでも抵抗することで、その抗いで生じる苦しみをこの身に刻むため。

しかし彼とて分かっている。たったそれだけの罰では足りないことを。彼自身、十二分に分かっているのだ。

これから己の為すことが、如何に非人道的で冒瀆的、暴虐で身勝手な振る舞いの極みにあるのかを理解している。

だからというわけではないが、その悪行を被るに値する人間の選定には慎重だ。

だがそれでもその行為そのものが悪ということに変わりはない。

だから、それ故に、彼は善行を重ねている。

病の者には高価な薬を。

餓死寸前の乞食にはその手にパンを。

無念を残して死にゆく者には最後の願いを。

暴漢に襲われている女性には救いの手を。

もし望まれるなら、一国の危機には滅私奉公の貢献を。

それはまるで彼という人生の絵画に描かれた悪行を覆い隠し、善行で重ね塗るような行為だ。

そうして彼は半ば無意識的に善を為し、その裏では半ば意識的に悪を為す。その度に繰り返される善行と悪行を、彼という一枚の絵画に塗り重ねていく。

だとしても、そんな上塗りも長くは続くまい。

塗り重ねた色というのは、単に見えなくなっただけで、確かにそこに存在する。

いつの日か、何かの拍子で下の色が滲み出ないとも限らない。

それでも、いつかそうなるのだとしても、彼は生きること自体を辞めはしない。

自身がたとえどんなことをしようとも、彼が生きること放棄するのは赦されないから。

だから変わらなければならない。

変わらなければ、後悔しかない人生になってしまう。

そう思う彼はその努力を重ねてきた。多くの人々と積極的に関わり、様々な行動を起こして、彼なりに様々な人々に手を差し伸べてきた。

だが、彼は気付かない 否、気付けていない。

彼という人間がもう取り返しも付かないほどに、如何に異常で異端で逸脱しているのかを。

いつの間にか彼の額に浮かんでいた汗も、苦悶の表情も、荒い吐息さえもなりを潜め、その口元が三日月の笑みで歪みだしていた。

かくして彼自身の予想を裏切らず、彼はまたしても己の欲望を満たすために動き出そうとしていた。

もはや彼の心を占めるのは己の衝動の発露と欲望を満たすという欲求、そしてほんの一片の理性のみ。

歡喜に震えるその手が、握られた凶刃を陽炎のように小さく揺らす。

そうして今宵もまた夜陰に紛れて、彼は凶刃を振るうために動き出す。

第一節・孤影は夜闇に鮮血を散らす

如何に市壁に囲まれた都市といえども、闇が視界を遮る夜半ともなれば、大半の人々は寝静まる。

深い暗闇の都市を照らす光源はといえば、月と星々の輝き、それに市内を疎らに徘徊する角灯持ちの明かりくらいだ。

しかしそれも薄汚い貧民区では、そんなわずかな明かりさえも闇がその多くを喰らい尽くす。そんなほとんど月光と星明かりだけという気休め程度の光の中を、なんとか走っているのは一人の女。

二十歳前後という若い彼女だが、しかしその手には一振りの血塗られた長剣が握られている。腰程まである長髪を後頭部で一つに束ね、踝^{くるぶし}まであるスカート^{スカート}の側面は荒く大きな切れ目が入っている。それ故に彼女の風のような疾駆が衣服に障害されることはない。

彼女の背後からは闇に紛れて複数の気配が静かに、しかし風を切るほどの速度と大胆さで追いつがる。

「ッ」

思わずといった様子で舌打ちをする彼女は、わずかに視認できる家々の壁面と己の足音の反響とで、半ば勘を頼りにぶつかることなく走り抜ける。

「あっ」

しかし不意に無秩序に道に転がる木材に足を取られ、無様に転倒してしまう。

その間にも背後からは依然として確かな人の気配が着実に接近していることを、彼女は実感する。

薄汚い地面に手をつけて起き上がると、すぐさま再び彼女は風になる。

だが、それも数瞬の間だけだった。

「ぐっ」

背後から短剣が飛来した。

この夜闇で如何なる狙い方をしたのか、それは見事に彼女の右腿に後ろから突き刺さり、彼女はまたもや地に伏すことになった。

うつぶせのまま顔だけで振り返る。

尚も暗いが、先ほどと違うのはわずかながらに移動したおかげで、月明かりがちょうど背後から来た五人の刺客を照らしていることだった。

彼らは皆一様に顔に目だしで布を巻き付け、その手にそれぞれの武器を握っていた。

ある者は剣を、ある者は珍しくも鎖鎌を、またある者は両手に三本ずつの短剣を指の間に挟み込むようにして、それぞれが凶器を手をしている。

「……………」
五人は未だ地に伏せっている彼女に無言で近づきつつ、それぞれの獲物を構える。

月明かりに照らされた彼らの瞳は月光を反射して異様な輝きを放っており、それはまるで人心惑わす悪魔もかくやという光景で、彼女の心を折るに足るものはずだった。

しかし彼女は一層に強く長剣の柄を握りしめると、背後から迫り来た鎖鎌の鋭利な刃を、手にした剣で起き上がりざまに振り抜いて弾き落とした。

そうして彼女はついに逃げることを諦めたのか、五人の刺客どもに相對する。

戦力差など明確なのはいうまでもなく、先ほど腿をやられたせいで彼女の俊敏さは大きく劣ったことだろう。それ故に相對した訳なのだが、しかし無理がありすぎる。

「……………ミーファ様、申し訳ありません」

彼女は思わずここにはいない者に対して、小さく謝罪を口にする。今まさに彼女が相對するのはこれまで夜陰を歩んできたと思しき日陰者たち。対して彼女はこれまで光の当たる道を歩んできた日向者。

当然、彼女が知らない慘く汚い戦闘法を彼らは熟知していることだろう。

「しかし、お前たちは私を殺せはない。そうだろう?」

そこが唯一の突破口だと言わんばかりに、彼女は威圧するかのよう
に言い放った。

先ほどの短剣にしても、偶然腿に当たって転ばしたというのは少々無理がある。その後の鎖帷子にしても同様で、あれは急所の避けられた一撃だったことを彼女は見抜いていた。

だがそれでも捕まれば終わりだ。

彼女は腰を落とし、痛む片足をなんとかごまかして眼前の敵に集中する。

道幅は横に五人並べばいっぱいになる程度で、それは皮肉にも敵対する者たちと同数だ。

左右には集合住宅である木造四階建ての建物が屹立している。あと数時間の時間が前後していたなら、背の高いこの建物に遮られてこつも都合良く月光が届いていなかったことだろう。

「

彼女は息を整え、愛剣を正中に構えた。

五人の刺客たちも一様に獲物を構え、両者たちの間に緊張の糸がはち切れんばかりに張り詰めた

まさにその時、

「くっ!?!」

彼女の背後からまたしても短剣が矢のように飛んできて、それは彼女の左肩に命中した。

思わぬ方向からの攻撃と短剣の的確な狙いによって、彼女は痛みと驚愕で剣を握る力を弱めてしまった。

そしてその瞬間を狙っていたかのように五人は一斉に急襲する。

否、彼らは狙っていたのだ。すぐさま彼女を捕らえなかったのは、危険を少しでも減らすために仲間の不意打ちを待っていたからに他ならない。

今度は前方から短剣を投げつけられるが、今度はその凶器の刀身

に月の光がうまい具合に反射した。おかげでなんとか明確に視認できて回避を果たす。

しかしそれだけでは当然終わらず、避けたと思ったときには眼前に凶刃を手にした覆面の仄暗い瞳があった。

「っ!？」

避けられない。彼女はとっさにそう思った。

そうしてその予測は寸分変わらず、彼女の腹部が衝撃に見舞われる。

「がア……はっ」

死を告げる斬撃ではなく、それを為す凶器の柄頭で強打されたのだ。おかげで一瞬視界がかすみ、吐き気が襲いかかる。

防具もなしに喰らってはさすがに衝撃は大きかった。それに左肩と腿からの出血もある。

彼女はなんとか四肢に力を入れようとすも、どうにもならずその場に崩れ落ちてしまった。

そうして彼女は意識が急速に遠のくのを感じた。暗い闇の中に引きずり込まれるように逆らえない引力が彼女の意識を引っ張り込んで、身体に力が入らず思考が鈍くなっていく。

これまでか、そう諦めの念を抱く彼女。

そしてもはや意識の落ちる寸前といったとき……

それは現れた。

「なっ!？」

まず驚愕の反応を示したのは六人のうちの鎖鎌使いだった。

しかしその驚きうめいた声が発せられた次の瞬間には、何かが地を叩いて鈍い音を生じさせていた。

彼女の消え入りそうだった意識は起こった現象を捕らえたそのとき、恐怖にも似た驚きよって一瞬で覚醒した。それはこれまでの捕まるという危機感から、殺されるという恐怖心へと移り変わったことで起こりえたことだったが、それでも依然として身体はうまく動かない。

視線を先ほどから前方にいる五人の刺客に移すと、彼らの背後に

それは在った。

身体を包むように外套を羽織った何者かが、血に濡れた細い剣とともに漂っている。

漂う いや、実際はそう見えるだけで、その者は動いているわけではない。

だがその外套の頭巾を目深に被った何者かは、微風で裾をたなびかせ、まるで揺らめくように佇んでいるのだ。

そんな彼女なのか彼女なのか知れない者の足下には、仄かな明かりに照らされ揺らめく液体の中で、球形の何かが沈んでいた。

鼻をつくような独特の臭気が狭い路地に漂い出しているのを感じる。それは彼女の肩と腿からの出血など比にならないほどの血が流れ出ていることの証だ。

液体の中で沈んだ『それ』は、目を見開いたまま胴体と別たれた覆面の男の頭部だった。先ほどの鈍く響いた音は、その者の頭部と胴体が泣き別かれし、首から先の頭蓋が地を叩いたせいで発生したものだ。『……』

その場の誰もが固まった。

だがそれも一瞬で、斬首された男の胴体が頭部に遅れて倒れ伏したのを皮切りに、四人が弾かれたように動き出した。背後の一人は彼女を拘束するためか縄をかけようとしており、それら一連の動きから彼らが相当の手練れであることがまざまざと窺える。

彼女と謎の闖入者との間には、覆面の四人が臨戦態勢で獲物を構え、道を塞ぐように遮っている。

外套の者は何も言わず動かさず、先の不意打ちの一撃が嘘のように佇んでいた。

「……何者かは知らぬが、ここは引いてもらおうか」

刺客の誰かが場の沈黙を破って口を開いた。

「貴様が今し方斬り殺した者については追求せん。ここは早々に立ち去るが良い」

殺された仲間のことなど齒牙にもかけないで、この場における不確定要素たる危険因子を排除すべく、覆面の男はそう言った。

尤も、先の首切りの一撃で彼らが外套の何者かを強者だと認識していなければ、こんな譲歩はあり得ないのだろうか。

「……………フ……………ハハ、ハハハッ」

しかし返ってきたのはどこか狂気のようなものを孕んだ歪みのある声だけだった。しゃがれたような、あるいは擦り切れたような声で外套の者は笑いを洩らす。

その声は男のものだった。月光と血の紅で彩られた流麗な細剣を握る左手だけを外套からだしたまま、彼は小さく肩を揺らすだけでそれ以上は微動だにしない。

「どうやら聞こえなかったようだな。……………もう一度だけ機会を与えよう。早々に立ち去れっ」

覆面の男の声は謎の男の狂笑を無視し、語気を強くして言い返す。しかしその口調とは裏腹に声が僅かに震えていることに、果たして本人は気がついているのだろうか。

「……………お前たちは、その女を攫う気が……………？」
低音の絶望感さえその内に見いだせそうな声音で、彼はゆっくりと呟くように問うた。

だがその言葉を覆面たちはどう捕らえたのか、ある者は舌打ちし、ある者は「関係者かっ!？」と驚き洩らしたかと思うと、話しかけていた覆面の一人が突如として踏み込み、その手の長剣を下段から切り上げた。

突っ立っている外套の彼にとっては完全なる不意打ち。覆面の男の実力も相当なものだろう、月明かりに反射して鋭い剣閃が闇に一筋の軌跡をもたらす。

その一撃は場の緊張が一気に破裂した瞬間だったのだが、

「……………」

彼は幽鬼の如き足取りで一步右にずれて、死の刃を紙一重のところで躲してのけた。そして血に濡れた左手の細剣を無造作ともいえ

る動きで閃かせる。

紅刃が月光で鈍く煌めいたように見えたとすれば、それはすでに覆面の喉を突き刺して貫通しており、さらなる紅で刀身は深紅に染まっていた。

「ハハツ、ハハハ！」

そしてあざ笑うかのように、喜悦の声が夜気を虚ろに震わせる。彼のその一撃か、はたまた狂ったような笑いが引き金になってか、他の三人が一斉に外套の彼に襲いかかった。

そして、ここからはものの数瞬であった。

彼は突き刺した細剣を引き抜き、刹那のうちに鋭い刺突でもって襲い来る一人の胸部を刺し貫く。

だが一人がやられたその間に、あとの二人が手にした凶器を繰り出した。

彼の頭上からは拳大の鉄球に棘のついた鉄塊　　メイスが、そして右方からは短剣が同時に三本迫り来る。

彼は突き刺したままの細剣から未練なく手を離すと大きく一步踏み込み、左手一本でメイスを握る覆面の手首を掴む。すると彼はなにをしたのか、覆面の手から力が抜けたかのように呆気なくメイスが落下した。

そして投擲された短剣はすべて、先の彼の踏み込みで躲され、外套を傷つけただけに終わる。

「なにっ!？」

まさか前に出てくるとは思っていなかったらしい二人は、その一瞬の驚愕が命取りになった。

彼は落下してくるメイスの柄を蹴り上げながら掴んでいた手を離し、代わりに勢いよく上がってきた鈍器をその手に収める。

彼はそこから武器を奪い取った男の左側面に踏み込みざま、側頭部にメイスをたたき込もうとする。

当然、男は回避し抵抗しようとするも、外套の彼のすさまじい脅

力のせいなのか、風切り音と共に凶器は到来し、骨の碎ける怪音とともに血をまき散らしながら覆面がまた一人倒れる。

加えて、そのまま振り切ったメイスを今度は逆に払うように振るうと、彼のその手にはすでに紅く染まった鈍器の姿はなくなっていた。

その間、覆面の男によつて再び投擲された短剣は投げられた鉄塊によつて明後日の方へと弾き飛び、高速で飛来するメイスは短剣の投擲元たる覆面の男の顔面に直撃した。

またしても骨が粉碎する奇怪な音が貧民区の路地に響き渡る。

「……………」

彼女を縛ろうとしていた最後の一人は、この間、呆然とした様子でこの圧倒的な戦闘を眺めていた。

それは彼女とて同じで、あり得ざる光景から目が離せなかった。驚異的なまでの流れるような行動は、しかし人間業の範囲に収まるもので、それが彼女に一層の恐怖　どころか畏怖という念さえ抱かせた。

彼女は思った。彼は常に最適な行動を執っているだけなのだと。そしてそれは端から見れば一目瞭然のもので、彼女自身がまさにそうだった。

彼女のそんな心証など露知らずといった様子の彼は、死体から深紅に染まった不気味な細剣を引き抜くと、幽鬼の如き足取りで最後の一人に歩み寄る。

「うあつ……………く、くるなっ！」

意外にも若々しい声の覆面は腰の短剣を引き抜いて、倒れていた彼女を無理矢理起こして白く柔い咽喉に鋭利な切っ先を向けた。

「ここに、こいつが、どうなってもいいいいのかっ!？」

「……………」

だが彼は、何も聞こえてはいないのであるかと思いたくなるほどに平然と歩み寄り、最後の覆面男と彼女を見下ろす。

この場の唯一の光源たる天体の輝きでは、頭巾を目深く被っ

ることも相まって、俯くように見下ろす彼の顔はこの闇夜では窺い知れない。

それでも、いやそれ故に、彼女と覆面は恐れ、畏れた。なぜなら彼から伝わってくる異様な何かは、紛れもなく狂気だったから。いや、それとも狂喜だろうか。

どちらにせよ、そんな彼らの恐怖と畏怖の念など素知らぬ様子で彼は細剣をゆるりと構える。

「お、お前、こいつを殺されても良いのかっ!？」
すっかり怯えた様子の覆面は中腰で後ずさりながら、彼女の喉元に短剣をあてがう。

その動揺して震える手が、彼女の薄皮を意図せず浅く切り裂いた。血が一滴だけ首から滴るのを彼女は感じつつも、しかし目の前の外套の彼から目が離せなかった。

「……………」
彼は彼女の存在など気にもしない様子で、その手の紅刃を振るった。

「あつ、あ」
彼女の顔の真横を神速の一撃が通過した。そして死の刃はすぐさま引き戻され、同時に彼女の背後から喉元に回されたい手が力なく垂れ落ちる。その直後、肉が地に叩きつけられる鈍い音がした。

「……………」
彼女は動けなかった。

それは恐怖や疲労のせいであつたのは確かだが、それ以上にやはり恐怖 もとい畏怖という念が大きかった。

この小道に倒れる覆面たちは果たして気付いただろうか。
目の前の何者かが、終始彼らを屠るのに片手しか使わなかったことを。

彼女はそう思った矢先、張り詰めていた緊張がついに限界に達したのか、それともあまりの畏れに精神が摩耗したのか、視界が暗転して意識が遠のき始めた。

意識が完全に途絶える直前、彼女は確かに一つの眩きを耳した。外套の男が手にした細剣が小さく震えて鳴る金属音と、笑いではない苦しみに混じった一言を。

「っ、俺は……変わらなくては……っ」

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

眼下の光景を眺める一人の青年は、恍惚とした表情を浮かべていた。

「やっぱり素晴らしいね……最高だよ」

遙か頭上から淡い自然光に照らされた青年は顔の左半分を長髪で覆い隠しており、僅かに身を震わせている。

彼がいるのは四階建ての集合住宅の屋上だ。

見下ろす先には外套で身を覆っている不気味な者と、倒れ伏す一人の女性。加えてその周囲には鮮血の海に沈んだ六つの骸^{むくろ}。

「これでまず間違いなく、彼の狂気が本物ってことに確信が持てた」
微笑とともに呟く青年は、二十代にも見えれば十代にも見え、異質ともいえる不思議な雰囲気を出している。

見下ろしていることを外套の彼に気づかれないように、そつと身を潜めている青年は、ふと何かを思いついたかのように眩きだした。
「……あの女騎士と主^{おん}の少女、そしてこの都市にいる彼ら……それに彼……加えて……」

考えるようにして呟くその声は次第に小さくなっていき、やがて彼の顔に妖艶な笑みが浮かぶ。それは男なのか女なのか区別が付かないほどに蠱惑的な表情だ。

「アハッ、これは面白いことになりそうだね。フフ、すぐにも準備を始めないとっ」

その口にする青年の笑顔は、しかし無垢な少年のようでもあった。

第二節・都市と少年と童女と……

「ねえフェイ、あれなに？」

賑わいを見せる通りの中で、一組の兄妹らしき男女がゆっくりと歩いていった。

正午にほど近いだけあって、晴れ渡る蒼穹からはまぶしいほどの陽光が降り注ぎ、種々の出店が立ち並ぶ大通りは買い物客であふれている。

「ああ、あれはベルトだな」

そんな中を歩く少女 もとい童女の質問に答えたのは、隣を歩く十代半ば過ぎ頃と思われる少年だった。

「あれが？ あんなにいっぱい飾りがついてるのに？」

「まあ……そうだな。あんな装飾過多なものは初めて見たけど」

幼い少女の視線の先には宝石や色鮮やかな織物などで装飾された派手なベルトがある。加えて露天の店主が威勢良く声を張り上げながら商売に励んでいるが、それはとても売れそうには思えない代物だった。

童女はそんな珍妙といえる品から視線を移し、興味津々な様子で辺りを見回している。

「リム、あまり離れるなよ」

少年は穏やかそうな顔つきに年相応の身の丈、釣鐘型の外套を奇妙に纏っている。というのも、本来は外套の切れ目が正面に来るはずなのだが、彼は左側面にそれを持ってきている。

彼はその切れ目から伸びる左手で、先行する少女の右手をしつかりと握っていた。

「えへへ」

どこか嬉しそうに少年 フェイシスの手を握り返すのは、七、八歳ほどの童女であるリムだ。

濡れ羽のような漆黒の長髪は腰よりもなお先まで伸び、フェイシ

スの胸ほどまでもない矮軀は見るからにか弱げだ。あどけない顔立ちをしているものの、疎らに黒髪が伸びており彼女の目元は半ば隠れてしまっている。

「さて、と。もうほとんど買うものは買ったよな」

「うん。さつきもわたし、何回も思いだしてかくにんしたよ」

「そっか。二人とも忘れていたものがないなら、大丈夫だな」

フェイシスの肩には皮の鞆が提げられており、中はいつぱいなのか見るからに窮屈そうだ。

「わすれると、イヴがうるさいからね」

リムの言葉にフェイシスは「だな」と頷きつつ、その足は帰路につくべく差し掛かった十字路を右折する。

先の大通りでは道の両脇で露天商が商売に励み、道行く人々はそれらを見て回り、大変混雑していた。それに比べて、脇道に一本入るだけで大通りのような喧噪はなりを潜める。

「この都市はやけに頑丈そうな建物が多いな」

フェイシスは歩きながら、しみじみとそう呟いた。

いま彼ら二人のいる都市アクナリアは石造りの頑強な建築物が多い。白亜の壁で見栄えの良いそれらはこの都市が安定して平和であり、且つ賑わっている証拠だった。

「いままで見てきた都市でいちばんきれいだよー」

リムは首を巡らせて辺りを見回している。

フェイシスとリムはそうして何気ない都市の一部を見物しつつもしっかりと歩みを進めて行く。

いま歩く通りは大通りまでとはいかないまでも、静かに路肩で商売をしている者もいれば、都市警備隊の者が背筋を伸ばして歩いている。そのほかにリムと同じ年ほどの乞食もいれば、質素な僧服を着た托鉢僧までいる。

安定して平和とはいってもそれは都市全体の話であり、これらの光景はそこに住むすべての者たちが裕福というわけではないという事実をまざまざと感じさせていた。

「ところでリム」

「なに？」

童女は長い髪を揺らしながら、フェイシスに顔を向ける。

「実はさっき気が付いたんだけど、首飾りをどこかに落としてしまったらしいんだよね……」

「首飾りって……ずっと前にイヴからもらったっていつ？」

「……ああ」

フェイシスは重々しく頷いた。

首飾りといっても、フェイシスの格好は外套で首から膝下まで隠れているので、身に付けたところでその大きな外衣の下に埋もれて見えはしないのだが。

「今だからこそ言えることだけど……正直、アレはすごく大事なものなんだよな。それでいつも身に付けていて……なんというか、普段は付けていること自体をさして気にしてなかったから、気づくのに遅れちゃって……」

例えるならそれは目のようなもので、見えて当然というものだから特に見えるということ自体に意識を割かないことと同じで、フェイシスのしていた首飾りとはまさにそういう在って当たり前のものであった。

顔を顰めて何ともやりきれない気持ちで吐露するフェイシスに、リムは優しさの籠もった口調で、

「いまからさがす？」

「まあ……そうしたいんだけど、さすがにもう誰かに拾われてるだろうからな。諦めるしかないよ……」

首を振ったフェイシスの言葉を聞いたリムは「でもまださがせば

」と口を開きかけるが、

「いや、いいんだ。なくしたものは……仕方がない。でだ、なんでリムに話したかっていうと……」

「イヴへの言い訳？」

フェイシスはリムの鋭い指摘にある意味感心しながらも、頷いて

続ける。

「話はこうだ。『買い物に来ていた人が多すぎて、人とぶつかることが多かった。そして気がついたらなくなっていた』」

「『スリにあったのか、人にもまれて落ちてしまったのか』っていうこと?」

年齢以上の知性を感じさせる童女に、フェイスは苦々しく頷いた。

「多少……いや、かなり無理があるがそれしかあるまい。とはいっても、あくまでも追及された場合のことだからな。こちらから言い出す必要はないぞ?」

本来であるならば『首飾りの紐が切れて落ちてしまった』というのが自然なのだが……如何せん、紐はつい最近変えたばかりなので言い訳としては不十分だった。

「でもそれじゃあ、フェイスはどうして落としちゃったの?」

「それは」

フェイスには心当たりがないこともないが、それを言うわけにはいかないし、何より聞かせたくなかった。

「うん?」

リムは可愛らしく小首をかしげてフェイスが答えるのを待っている。

その無垢な仕草に対してフェイスは、

「うりゃっ」

「きゃっ」

返答に窮したため、やむなく誤魔化すことにした。

握られた小さな手を強引に引き寄せ、リムが体勢を崩したところを掻っ攫って一気に抱きかかえた。

リムは唐突に左腕に座らせられるようにして抱き上げたフェイスに、

「み、みんなにじろじろ見られてるよ……」

少しだけ驚きを示した後、童女は顔を赤くして小さく暴れるよう

に手足を動かした。

とはいえ二人の姿は周囲から見れば別段おかしな光景には見えな
いもので、歳が十ほど離れていることからしてせいぜい仲睦まじい
兄妹がじゃれ合っている風にしか見えていないことだろう。

「ははっ、悪い悪い」

それにフェイスとリムの本人たちからすれば兄妹というよりも
親子だという認識なので、それほど恥ずかしがるようなことでもな
いのだが、リムはどうやらいきなりすることに羞恥心が刺激されたら
しい。

フェイスはリムをそつと石畳の上に立たせると、悪戯っぽい笑
みを浮かべた。

「ううう〜、むうう〜」

妙な呻きを上げるリムは恥ずかしいのか名残惜しいのかよく分か
らない表情で見上げたあと、再びフェイスの手を握って、今度は
意図的に引つ張るようにして歩き出した。

何とか誤魔化せたか、とフェイスは小さく安堵の息を洩らし、
童女に引つ張られるがままに再び歩みを進めた。

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

「フェイス」

しばらく歩いていると、いつの間にか並んで歩いていたリムが横
合いから唐突に呼びかけてきて、これまでの雑談とは違った硬質な
声と共に彼女は立ち止まった。

その立ち姿は先ほどまでの童女とはどこか異なり、妙な雰囲気
を纏っているように感じる。

「リム？ どうした？」

宿への帰路についていたフェイスとリムはちょうど十字路口に差し掛かっており、その左に折れた道の先を童女はじっと見つめていた。

黒い長髪が風になびいて揺れる狭間、リムの宝石のような瞳が真剣さを伴って視線の先を凝視しているのが見える。

フェイスは彼女の行動に感じるものがあり、ふざけた雰囲気ではないのを覚つてリムの返答をじっと待っていると、

「……だれかが怖がつてる。それになんだか興奮……ううん、焦つてる」

「……………」

リムのその発言に、フェイスはしばし黙考するように目を伏せる。

彼女のこういった一見すれば特異な発言や行動は、何も知らない他人からすれば異常に見えることだろうが、しかしフェイスはリムのことを十二分に理解している。

「気になるのか？」

「うん」

リムは即座に頷いた。

それほどまでに彼女の興味を引く何かがこの先にあるのだろうとフェイスは考えて、

「……なら、行くか」

彼自身も多少の興味がわき、フェイスはまたも小さな手に引っ張られながら、本来は直進するはずの道を左折する。

これといって先ほどの通りと見違えるほどの変化はなく、認可を取っているのか甚だ不思議な怪しい露天商もいれば、道ばたで談笑している女たちもいる。

小さな手に引かれながらしばらく真っ直ぐに進んでいくと、今度は三叉路があり、リムはそれを右折する。

そうして何度か分かれ道を通って行くが、長い髪を揺らしながら前を進むリムの歩みには一切の迷いがない。

(相変わらずリムの『感覚』は異常なまでに敏感だな……)

フェイスは前を行く彼女の後ろ姿を見て、内心でそう呟いた。しばらくリムに手を引かれるまま、フェイスは前へ前へと進んで行く。

何度目かの角を曲がると、先ほどまでは白亜の建物が多かった景色が、いつの間にか木造の家々が軒を連ねている光景に取って代わっていた。

「……貧民区に入ったのか……？」

フェイスは周囲を見回しながら、独り言のように呟きを洩らした。

都市という性質上、市民たちの家屋や建物は財産に多寡よってその外観は均一ではない。また当然、都市という秩序的集団を運営するのに必要な施設も当然存在する。

一般的に都市は大別して商業区、工業区、行政区、そして居住区の四つの区画に分けられている。

その中でもこの都市アクナリアの居住区は貧民区、市民区、富裕民区の三つに内分され、いまフェイスとリムがいるのは考えるまでもなく貧民区だった。

木造の家々は建物の外観からしてすでに老朽化しており、あまつさえ腐食している部分もある。下手すれば崩れ落ちそうな建物も見かけ、街路にはごみ散見され、加えて泥水が上手く排水されずに水たまりを作っている。

「にしても、空気が濁っているな……」

貧民区は主に日当たりの悪い都市北部の市壁付近に位置しており、陽光を市壁や丘状に小高い都市中心部の建造物に遮られている。故に空気は淀んでおり、場所にもよるが昼でも薄暗いところも存在する。

先ほどの商業区がこの都市アクナリアの表だとすれば、こちらは完全に裏だった。

そんな貧民区に足を踏み入れてしばらく、

「つ」
フェイススの鼓膜を盛大に振るわせる澄んだ音が都市中に響き渡った。

時鐘の音だった。身体の芯にまで響くようなその盛大な鐘の音は、都市民に刻を知らせる唯一の手段だ。

フェイススは歩きつつも振り返ると、視界に入るどの建物よりも飛び抜けて高い細身の建造物 鐘塔を見た。

方向からして都市中心部に位置しており、それはまるで一本の杭が天上から突き刺さっているようである。鐘塔の頂部には陽光を鈍く反射する大鐘が吊されているのが遠視からでも確認できる。

「ねえ、フェイ」

「ん？」

不意にリムが歩きながら話しかけてきた。

「この鐘は十二の刻の音だね……？ おそくなったらイヴ、おこらないかな？」

「……まあ大丈夫だろう。さっきからさほど歩いていないし、こことは、どのみち普通に宿に戻る道を行っても一二の刻には間に合わなかっただろう」

宿で待っている少女には悪いとは思いつつも、フェイススとリムは尚も歩みを進める。

本来の帰路からずれてまだそんなに時間が経っていないのが救いだろう。もともと貧民区に近い区画にいたためか、周囲の景色の変化でだいぶ歩いたように錯覚してしまうが、距離的には大したことはない。

フェイススがそんなことを考えていると、

「……………」

リムがいつの間にか差し掛かった十字路の手前で足を止めていた。それに気付いて、フェイススも彼女の隣に手を繋いだまま立ち止まる。

「近くにきてわかったけど、移動しているみたい」

「……移動？」

フェイシスは聞き返しながらも先ほどリムが言っていたことを思
いだした。

『だれかが怖がつてる。それになんだか興奮……うっん、焦
つてる』

「つまり……リムの言う誰かは何者かに追われていて、そいつらか
ら逃げているってどこか……？」

「きつとそう。まだ恐怖とか焦りをかんじる」

フェイシスは十字路の先を見つめ、しばし考えるように目を細め
る。

（一応は来てみたものの、追われているってことは高利貸か何かの
類いの厄介事……っていうのが関の山だろうな）

リムはフェイシスの判断を仰いでいるのか、繋いだ手はそのまま
で彼の顔を見つめている。

彼女の妖しく輝く瞳はもっと進みたいと言ってきているのがフェ
イシスには十分に理解できて、ここで引き返そうなどとは言えな
かった。

「じゃあとりあえず……二手に分かれるのは絶対にならないとして、俺
はリムみたいな『功』の使い方はできないし……勘でも良いか
ら、リムの好きな方へ行けばいいんじゃないか？」

「ん〜、わかった。じゃあこつちっ」

リムは十字路を左手に折れることにし、フェイシスも後に続く。

辺りは四、五階建ての集合住宅が多く、しかしそれらは当然の如
く木造であり、いささか耐久性に不安がありそうなのは言うまでも
ない。そんな建物の各階にある簡素な鍍戸はほとんど開け放たれ、
時折フェイシスはそのから視線を感じていた。

（無理もない、か）

フェイシスとリムの着ている服が裕福そう　　というのは外套に

遮られて判断できないだろうが、それでもフェイススの肩からは中身のたつぷりと詰まった鞆が掛けられている。

そしてここが貧民区だけあって当然のごとく貧しい者は多く、皮革性のその鞆を肩から提げている少年と童女の二人連れがそんな中においては襲ってくださいと暗に言っているようなものだろう。

故に別行動はしたくないし、する気もない。

フェイススは道ばたに座り込む薄汚れた少年や老人を意識して見ないようにしているのだが、さすがに幼いリムにとっては物珍しく興味があるのか、ちらちらと周囲を見回している。加えて先ほどまっていた商業区との差異が顕著で驚いてもいるのだろう。

そうして二人が言いしれぬ居心地の悪い空気にさらされていたとき、リムが突然に繋いでいた手を強く引っ張った。

一歩先を歩いていたリムは駆け足になり、突然のことにフェイススは思わずつんのめる。

それでも彼女を止めたりはせず、仕方なく走りながら問いかけた。

「どうした？」

「うごいていたのが止まった。でもまだつよい恐怖はきえないっ」
さすがにリムの歩幅ではフェイススよりも速く走れることはないが、焦っているのは彼女の背中を見ているだけでも十分に分かる。

停滞して淀んだ貧民区の空気を切り割きさながら、二人は舗装されていない湿った地面を蹴り進んで行く。

道の脇にいる乞食のような中年の男は何事かというように二人に視線を向け、またそうした者は一人だけに留まらない。

そうして、僅かばかり走ったその先を右に曲がると

第三節・彼は意図していない

「くそつ、なんなんだこの女はっ」「ぼやくなよ！ いいからさつさと拘束しろっ！」「しかし諦めの悪すぎる女だな……いい加減苛ついてきたぞ」「お前ら口じゃなくて手を動かさせての」

道端で四人の男が暴れる少女を押さえつけていた。

男たちは皆一様に二十代か三十代ほどの者たちで、壁に押しつけられた十代半ばかそれ以上　おそらくフェイスと近い歳の少女は、口を押さえられて尚、暴れていた。

「ソーッ、ムーッ！」

両手足をばたつかせ、押さえつけようとする四人を疲弊させているその光景は、

（借金取り……ではなさそうだな。人さらい……いや、暴漢か？）
辺りを見回せば家々の木窓や鎧戸は開いているし、中には屋根の上からそれを眺めている者もいる。道端に座り込んでいる者も、さすがに近寄ってはいないが遠巻きに様子を眺めている。

今、この少女と男たちの行動は貧民区の住民たちのいい見世物になっっているようだった。

「フェイツ」

「あ、ああ、そうだな。まずは止めた方が良いな」

リムに促され、今まさに手足を拘束されそうになっている少女の元へ近寄るが、しかし四人の男と少女は余程に必死なのか、二人の接近にまるで気がつかないようだ。

近づきつつあったフェイスはリムを後ろに下がらせると、

「あの、ちよつと」

「良っし、あと少しだぞ　つて、ん？　うおっ！？」

一人の男がフェイスの声に振り返った。

背が高く角張った顔の男はフェイスが突然後ろに現れたと思っ
ているのか、妙に大げさな反応をした。

「なんだ小僧っ！？ 邪魔だっ、とつと消えろ！」

男はただでさえ強面ぎみなその顔に苛立ちを募らせて怒鳴った。

「いや、そういう訳にもいきませんって。とりあえず何をしているのかだけでも……」

「うるせえっ！ お前には関係えねえんだよっ」

「……………」

長身の男はフェイススを意に介さずに、目の前の少女に掴みかける。

さてどうしようか、とフェイススが思ったそのとき、暴れる少女と目が合った。

「……………」

息を呑むほどに澄んだ瞳をした少女だった。

底抜けにどこまでも続く蒼穹のようなその瞳からは、一切の邪悪を感じない。それはまるで 善というものを象徴しているが如き清澄な瞳だった。

フェイススがそう感じた次の瞬間には、肩から提げていた荷物を後ろのリムに投げるように渡し、目の前の長身の男の側頭部を殴りつけていた。

「 がっ！？」

背を向けていた男はフェイススの左拳の一撃で大きく身体を傾けて、一緒に抑えにかかっていた一人に倒れ込み、思わぬ方向からの力で二人同時に倒れ込む。

そこでやつと他の男たちもフェイススの存在に気がつき、呆然とした様子で彼を眺めた。

そしてその呆気にとられた数瞬は、少女が抜け出すに十分な隙を与える。

結果、少女は押さえつけられていた壁を蹴り、飛びだすように脱出した。

「……………」

ほんの一時、沈黙が場を支配したかと思いきや、

「この小僧っ!？」

「なんだてめえはっ」

倒れた男のうち一人はフェイススの拳で沈んだのか倒れ伏したままだが、その男を除けて起き上がってきた共倒れの男とあとの二人は憤怒の形相だ。

「え、あゝ……その……」

(……どうして俺は急に殴りかかったりしたんだ)

そう思いながらも、男たちに相対するフェイススは自身の行動に戸惑いを覚えていた。

本当はいきなり殴りかかるつもりはなかった。まずは言葉でなんとかならないものかと思っていたのだが、しかし少女と目が合った瞬間、身体が反射的に動いていた。

思わず己の行動を振り返ったフェイススはその自身さえも予期していなかった身体の勝手さを、彼女の瞳を見遣ることで霧のように臆気に理解し納得したが、それ以上考える暇は与えられなかった。

「くそがっ!？ ぶっ殺してやる!」

「お、おい、さすがに殺しは不味いって」

「うるせえ、どうせ上がもみ消すだろうよ!」

小太りの男は仲間の制止を聞かずにそう言い放ち、腰の剣を抜き放った。

そこでフェイススは遅まきな柄にやっと気が付いた。先ほどから遠巻きに様子を眺めていた貧民区の住民たちは、四人の男全員が腰に剣を携えていたから何もしなかったのだと。

とはいっても無気力な人間の多い貧民区住民は、何があるかと傍観に徹するのもかも知れないが。

凶器を抜き放った男は、ためらいもせずフェイススに斬りかかろうと鈍く光る直剣を振りかぶる。

「あつ、キミ、避けてっ!」

その時、後ろから少女の声が聞こえた。リムとともにいるのだから彼女は悲鳴にも似た声をあげる。

鈍く光る獲物を振りかぶっている男は、フェイシスを袈裟斬りにしようと斜め上方からその刃を振り下ろす。

「
しかし振り下ろされた凶刃は虚空を切り裂き、男がそうと認識したと同時に、彼の右手から剣がこぼれ落ちた。

そしてそれが湿った地面に突き刺さる寸前に、拳が男の横顔を捕らえていた。

「なっ!?!」

他の二人の男が驚愕の声を漏らす。

男を殴り飛ばしたフェイシスは、地に突き刺さった剣を拾い抜いて悠然と構えた。

フェイシスの動きはまるで一瞬の出来事のように見えたのだったが、落ちて見ればさして驚くようなことでもないものだったことだろう。

彼は先ほど、誰もが袈裟斬りにされるはずだと思っていた一撃を左前に踏み込んで回避すると同時に、剣が振り下ろされる力を逆に利用して男の手首に下から蹴りを入れ、凶器を落とさせた。

また、右足での蹴りが入ったと同時にその動作で自身の左半身は後ろに傾く。そこから体勢を立て直す勢いを利用して、振りかぶられた左手を相手の顔面に叩き入れたのだ。

それらが一切の無駄のない動きで行われたため、単に一瞬に見えてしまっただけのことだった。

「退くなら今だぞ」

フェイシスは意識して怒気を孕ませた声でそう言った。なるべくならば争いたくはないからだ。

しかしフェイシスのそんな思いとは裏腹に、先ほどとは違って一撃では倒れなかった小太りの男は尻餅をついた体勢から即座に立ち上がると、

「……舐めくさった真似しやがって……っ!」

屈辱に満ちた顔つきで睨み返し、フェイシスに奪われた剣の代わ

りに倒れている長身の男の剣を引き抜いた。

あとの二人も戸惑いを見せながらも、それに呼応するように続いて抜剣する。

「リム、ちょっと下がってる」

リムと少女をさらに後ろに下がらせ、右足を後ろに引き、左手だけで剣を正中に構える。

(逃げる……のは難しそうだな)

心の内で小さくぼやいて覚悟を決める。

ここで逃げようとしてもしつこく追ってくるのは目に見えているし、何より明確な敵意を感じるのだ。

フェイスはそんなものを向けられて緊迫しないほどに間抜けではないし、殺意を向けられて平然としていられるほどお人好しでもない。

三人の男はフェイスを半円に囲むようにしてじりじりと動き、ある種の緊張感が場を満たした

と思えたそのとき、斜め左右から同時にフェイスに向かって二人の男が襲いかかってきた。

右からは突き、左からは横薙ぎの動作で突っ込んでくる。しかしどうしたことが、左の男は妙に動きが遅い。

そしてそれが時間差による二段構えの攻撃のためだとすぐに気がついた。右からくる突きを回避しても、その隙に左から切り裂くつもりなのだろう。

即座に彼らの意図を察したフェイスは舌打ちしつつも左の男に向かって蹴りを放つ。しかし当然まだ彼我との距離は十分に開いており、蹴り脚が届くわけではない。

だがそうではなく、彼は湿った地面を思いきり抉り蹴って、土の塊を迫り来る男の顔面めがけて放ったのだ。

思わぬ攻撃に目を見開く男は一刹那、判断に迷ったように立ち止まる。

「くそっ」

男はぼやきながら、構えていた腕を解いてなんとか土を防ぐが、しかし彼が竦んだ一瞬だけでフェイシスが動くには十分だった。

すぐさま斜め右から迫りくる男の突きを恐れを見せることなく引き寄せてから悠然と回避し、同時に左手の剣を斜め上に斬り上げる。「うがあああアアッ！」

相手の突いてきた力を逆に利用したおかげか、男の左腕は見事に下腕部で下から上へと斜めに切り落とされ、彼はその場で悲鳴を上げてうずくまる。

フェイシスはそうして斬り上げた自身の腕をそのまま斜め左から迫ってくる男に向かって振り下ろすと、投擲された高速で回転する刃は男の右足に根元まで深々と突き刺さり、その場で転倒する。

「あっあああああッ」

だが二人が悲鳴を上げる最中、フェイシスは視界で常に捕らえていた影がここぞとばかりに動き出していたのを感じていた。

迫り来るのは正面にいた小太りの男だった。

その体型とは裏腹に思いのほか俊敏な動作で地を蹴った男は、あつという間にフェイシスの前まで踊り出る。

「っっ」

男の動きは思った以上に軽快だった。

フェイシスは先のやりとりですでにある程度の目星はつけていたのだが、接近が読みよりも素早く、また攻撃に出る時機も正確であった。

完全に相手の力量を読み違えたことになったフェイシスに接近する、鈍く輝く死の刃。

「馬鹿があっ！ 隙がありすぎなんだよっ！！」

剣を投擲した姿勢からはまだ立ち直れていない身体に向かって、男は興奮しているのか、怒声と共に鋭い突きを胸部めがけて繰り出してくる。

間に合うか、という考えがフェイシスの脳裏に一瞬だけ思い浮かんで霧散した。

内心で焦りながら、その後に繋げる動作や受け身を気にする余裕もなく、フェイススは投擲で振り下ろした左腕の方へと回避のために全体重を傾ける。

そうして、小太りの男の刺突は、しかしフェイススの外套を貫いた。

第四節・風変わりな二人

少年が倒れ伏す音が貧民区の薄汚い通りに鈍く響いた。

「キミツ!？」

リムの後ろにいた少女が思わずといった様子で声を漏らす。

だがそれも無理はないことだった。

たとえ外套に隠れて分かりにくいフェイススの身体でも、少なくとも腕には当たっていることが素人目にも明らかだったからだ。

フェイススの姿は迫り来る小太りの男に隠れて見えず、その手に凶器を持った男は刺突の勢い余って、そのままフェイススの着ていた外套を巻き込みながらリムと少女の前までやってきた。

「クソツ、命令なんか無視して、はじめからこうしてれば良かったんだっ!」

緊張しているのか、脂汗を流しながら男は己の剣に絡みついた外套を煩わしげに取り払うと、リムと少女に向かって一步を踏み出す。

と、その時、

「くるなあっ!」

リムが少女を庇うように前に出て、小さな手を広げつつ幼い声質ながらも張りのある声で言い放った。

その動きにリムの黒髪はふわりとなびき、彼女の長めの前髪もまばらに乱れる。

「ハッ、チビに用はねえんだよ。さっさとどきやが

あ?」

二人の少女に迫っていた男は何か奇妙な いや、畏ろしいものを見る目つきで、

「……お、おいチビ……な、なんだその目はっ!？」

リムの幼くも整った顔を見て、男は驚愕と恐怖とを織り交ぜたような表情で叫んだ。

明らかに異常なものを見る目つきで、小太りの男は華奢なリムを見下ろしている。

彼の顔はあり得ないものを前にしたかの如き色合いをしているが、それはある意味で当然の反応だったといえよう。

「
」
無言で男をにらみつけるリムの、その瞳の色は異常だった。

彼女の瞳はあたかも聖典に登場し、また教会の聖画に描かれた悪魔のそれにあまりに酷似していたからだ。

金色、山吹色、あるいは藤黄色ともとれる黄玉のような瞳は、彼女の真つ白い肌と相まって並々ならぬ異常さを醸し出している。

「……や、やめろ……こつちを見るなっ！」

悪魔の邪なる眼のようなそれはリムの濡れ羽の如き漆黒の長髪と合わさり、まさに悪魔と形容すべき容姿だった。

男もそれを畏れているのだろうか、彼は本当に悪魔と対峙しているかの如く狼狽している。それは小太りの男のような無法者然としている者でも、教会の教えは信じているのだからうことを窺わせる反応だった。

リムはその黄玉と見紛うほどの美しくも妖しい瞳で、尚も男を睨み付けた。

しかし彼女のその行動が裏目に出たのか、男は己の内の恐怖とも知れぬ畏怖の念に耐えきれなくなり、

「こ、この、あ、ああ悪魔がああアツ!!!!」

男は叫びながら、先ほど見せた鋭さの欠片も見えない動きで、鈍色に輝く剣を大上段に構える。

リムの後ろにいた少女は男の急変に疑問を抱きながらも、咄嗟に眼前の矮躯を後ろから覆うようにして抱きしめる。それくらいしか少女にはできそうなことが他になかったのだ。

そうして振り下ろされる凶刃が迫り来るまでの間、リムは全く動じることなく、大きく広げていた腕を抱きついてきた少女の腕にそつと重ねた。

「だいじょうぶ」

リムが安全を確信しているかのように呟いたまさにその時、異変

は起こった。

「あ？」

何が起こったのか分からない様子の男は、間抜けな声を上げた。それも無理なきことで、男の今まさに振り下ろそうとしていた両腕は肘から先が宙に舞っていたのだ。これで驚くなど言うのは酷である。

それを為し得たのは、美しく白銀に輝く細剣を紅い血で染めながら振り抜いた少年。フェイシスだった。

彼の外套の下は、簡素な薄青い上衣の上から黒を基調とした上着を羽織り、腰から足先までは上着と同系の色あいのズボン、右腰には細い鞘を携えている。

斬り飛ばした腕が地に落下したのを小太りの男は呆然と眺め、ハツとした様子で後ろを振り返ろうとしたとき

男の肉付きの良い身体に、血に濡れた細剣が背中から深々と突き刺さった。

「が、あッ」

胸から突き出る鮮血に染まった細剣を信じられない様子で眺めながら、男の口は無意識的に言葉を発する。

「お、お前、は……？」

「貴様のお仲間のように、痛みにうめいていても思ったか？」
狼狽える男に、フェイシスはどこか怒気を孕んだ口調で答えた。

「……痛みにうめくどころか、かすつてもいないよ」

「な、に……？」

「焦って手応えなんて気にする余裕、なかったのか？」

男は顔だけで僅かに振り返り、納得できないといった表情で腕から血を流し、加えて吐血しつつも口を開く。

「しかしあれは……位置的に、右の腕をもがれても……おかしくない剣筋、だったはずだ」

その言葉にフェイシスは自嘲的な笑みを浮かべた。

自分よりもかなり年下の少年がそんな表情を浮かべたのを不思議

に思ったのか、男は彼の右腕　切り取る勢いで当たったと思つていたその腕に視線だけを動かして見てみると、そこには、

「な……！？　お、お前、もとから……腕がないのか……っ！？」
力なく垂れ下がった上着の袖が、風に微かに揺れていた。

フェイシスの上着の肩から先には全く肉体の膨らみが見られず、事実彼の上腕部のさらに上　すでに肩に近い腕の付け根辺りの上着が半分ほど切り裂かれてはいるが、そこから見えるはずの人肌は当然のごとく確認することが出来ない。

フェイシスによって左の手で胸部を貫かれたままの男は、しきりに口から血を吐き出し、目を見開いている。

そんな男に口を開きかけたフェイシスだったが、なぜか僅かに自身の背後をうかがった後、男にしか聞こえない小声で、

「お前はリムを悪魔呼ばわりした。それはまだ……まだ許してやってもいいが、しかしお前は殺そうとしたな……」

ぞつと底冷えする声で、続けて男を絶望感にたたき落とす言葉を口にした。

「俺はお前を赦さない」

「や、や、め　」

男の制止の声が終わらぬうちに、フェイシスは突き刺していた細剣を横薙ぎに切り払う。

胴体を半分だけ切り裂かれた男が倒れる音を聞く間もなく、フェイシスは横に薙いだ勢いそのままに背後を振り返った。

するとそこには先ほど腕を切断された男が密かに立ち上がるようにしており、斬られていない方の左手には得物である剣が握られていた。鮮血が流れ出る腕には布が乱雑に巻かれており、どうやら一応の応急処置を済ませているようだ。

だがフェイシスに振り返られて反撃の好機を逃がしたその男は、そのまま力が抜けたのか、尻込みしながら震える声で言った。

「た、たた頼むっ、殺さないでくれえっ」

「そう思うなら無駄に反撃しようとせず、さっさと他の二人を連れ

て消える」

その言葉を聞いた途端、男は中腰の前傾姿勢で気絶していた男を起こしに行き、脚に剣が突き刺さったままの男もフェイススの言葉を聞いて壁伝いに立ち上がる。

気絶していた長身の男は覚醒してすぐに、視界に飛び込んできた光景を正しく認識したのか、他の二人をおいて脱兎の如く一目散に逃げていった。

残る二人の背中が十字路を曲がって完全に見えなくなるまで、フェイススは細剣を握っていたが、

姿が見えなくなった途端、まるで何かを抑えるかように静かに息を吐き出しながら、細剣を左右に払って血糊をおとし、鞘に収めた。

〃 〃
〃 〃
〃 〃

フェイススは細剣を鞘に収めると、もう一度小さく息をついた。

身体の芯のようなところで未だ得体の知れない鬼火のようなものが燻っているのを感じる。それは『功』を使った後に必ず生じるもので、もはや馴れたもののだが、これでまた致命的な欲望が蓄積したのを確かに感じて陰鬱とした気持ちになる。

そんな暗いものを振り払うように小さく頭を振って、リムの方へと振り返った。

すると先ほど少しだけ見たときと同様に、リムは後ろから少女に抱きつかれていた。

リムは特に恐怖を感じているような様子は見受けられないが、一方でその童女を庇うように抱きしめている少女は、絶対に放さないと言わんばかりに俯きながらきつく腕を交差させている。

(これはどうするべきだろう……?)

僅かに思索したフェイシスは、少女になんと声をかけたものかと迷ったものの、とりあえず肩を叩きながら、

「えーっと、もうだいじょ」

「きやつ!?!」

フェイシスが少女の肩にそつと触れて話しかけると、短く悲鳴を上げて驚いて、リムを抱えたまま背後から転倒した。

だが幸いにも頭を打った様子はなく、少女は尚もリムをその腕に抱きつつも、ゆっくりと目蓋を開いた。

「……つて、あつ!?! キミツ、無事だったの!?!」

「それはこつちの台詞なだけどな……」

目鼻立ちのくつきりとした顔で少女は言いつつ腕を緩めると、軽々と起き上がったリムはフェイシスの胸に一直線に飛び込んだ。

「……フェイ、こわかった」

先ほどまでの平静とした様子が嘘のように崩れ落ち、鼻をすすりながら静かに泣くリムはフェイシスの胸に顔を埋めずめる。

張り詰めていた緊張が一気に緩んだせいか、背中に回された腕が強くフェイシスの身体を抱きしめる。

リムとてまだまだ幼童だ。この童女が人の死を目撃したのは初めてではなく、それどころか先ほどよりも酷い光景を目撃したこともあるが、それ故に過去を思い出すのだろう。リムにはあまりこういったものは見せられない。

フェイシスはリムの繊細な黒髪を撫でながら、上目遣いに見上げてきた黄玉色の瞳を見つめて、

「頑張ったな、リム。でも無茶はするなよ」

「……うん、ごめんね」

か細いうめき声とともに答えるリムは、その華奢な腕を一層強く背中に回して抱きついてくる。

それを拒むことなくフェイシスも彼女の背中に手を回して、安心させるために背中を小さく叩いてやる。

そうしてなんとか童女を落ち着かせながら、今度は立ち上がった少女に声をかけた。

「大丈夫？」

「ええ……うん、大丈夫。ありがとう」

そう答えた少女は、肩胛骨辺りまでの緩く波打った髪を揺らめかせて頷いた。

彼女の服装は簡易なものだったが、酒場で働く女のような格好でもあった。膝程までの生地厚そうなスカートに、白い上衣、それに丈の短い簡素な上着を羽織っている。

活発そうな顔つきからは生気が嫌と言うほど感じられ、見るからに明るそうな少女だった。これで前掛けでもして酒場で働きでもすれば、たちまち人気者になるのは間違いなさそうだ。

しかしそんな彼女は僅かに表情を曇らせて、

「えつと……この人、死んじゃったの？」

「ああ、こうするしかなかったから」

頷くと、彼女は自分を襲った存在に向けて、申し訳なさそうに目を閉じて黙祷した。

(……おいおい、この子……)

それをフェイススは訝しく思いながら見つめた。

自分を襲った人間なのにも関わらず、どうして悲痛な表情をしているのか理解できない。

多少驚きながらも、目の前の少女を計りかねていると、

「……私はミーフアっていうのだけど、キミは？」

目を開けた少女は先ほどまでの沈痛な面持ちは淡い幻想のように消え、整った顔にすっかり笑顔を浮かべていた。

今まさに人を殺した男に向けるような表情ではないのだが、助けられたことを意外と冷静に受け取っているのだろうか。このミーフアという少女の心情に何らかの機微があったことは確かだが、それがなんなのかフェイススには分からない。

とりあえず名乗られたからには名乗り返すことにし、

「俺はフェイシス・クーリオ。この子は」

「リムだよ。リム・フレス」

リムがフェイシスの胸から振り返ると、ミーファは自分よりも小さな少女に視線を向けたまま、そこで固まった。

少女の大きく曇りのない瞳が見開かれ、驚愕しているのが分かる。

「……………」

フェイシスからすれば、ミーファのそんな反応はいつものことだった。

リムの黄玉のような瞳は明らかに異質だ。それを見て先ほどの男のように怖がるのか、それともあえて何も言わないのか、どちらの反応が多いかは先の一件でも明らかだろう。

「………… フェイシスに、リムね………… 二人とも本当にありがとう」

だがミーファは僅かに沈黙しながらも、リムのその視線を受け止めた。

そして作り笑いとは到底思えない笑顔を絶やすことなく、はきはきとした声でそう言ったのだった。

「……………」

フェイシスにとっては意外な反応だった。てつきり彼女もリムの容姿に怖がったりでもするものと思っていたのだが、実際は違った。先ほどまで四人の男に襲われていたとは思えないくらいの朗らかさはそのままに、ミーファは首をかしげて、

「それにしても良く助けてくれたね。………… この人たちは薄情なのか、みんな見てるだけだったから」

貧民区なんだからそれは当たり前だろう、と喉まで出かかった言葉をフェイシスは押しとどめた。この少女にそんなことを言っても所詮はどうしようもないからだ。

ミーファは「ほら」と周囲の家々を指差すが、

「って、あれ？ さっきは私のこと遠巻きに見てたのに……………」

フェイシスとリムが助けに入る前には開けられていた窓や錠戸たちはすでに完全に閉ざされ、道端で傍観していた乞食たちもどこか

へ姿を消している。

しきりに辺りを見回して確認しているミーファだが、フェイシスにはさほど疑問ではなかった。先ほどの戦闘が原因なのは明白であり、しかも死人がでたのだ。貧民区住民たちは恐怖を感じたのだらう。

「？ まあいいわ。それにしても、フェイは強いね」

「フェイ……？」

フェイシスは穏やかそうな目を見開いてミーファを見返すと、

「ん？ ああ、ごめんね。その子　　リムがそう呼んでいたから……
…馴れ馴れしかったかな？」

「いや、そんなことはないよ」

美麗な面持ちに微笑を浮かべて僅かに首をかしげるミーファに対して、フェイシスは短く答えた。

彼女の容姿は言い尽くせぬ美しさがあり、フェイシスとしてもほんの僅かとはいえ見とれてしまうほどだ。

綺麗と可愛い、優美と可憐といった成熟した女性と少女の狭間で奇跡的な美しさを成しているミーファは、改めて見てみると明らかに貧民区にすることが異常だった。

「ミーファはこんなところで、何していたんだ？」

「わ、私は……… ちょっと追いかけて。それで逃げてたらこんなところに来ちゃって……。そういうフェイはどうしてこんなところに？」

先ほどまでの生氣あふれる声を濁らせ、ミーファは追求を避けるように逆に尋ねてきた。

フェイシスはなんと言おうか少し迷ったが、率直に答えることにする。

「リムに引つ張られて、な」

「……ん？ どういうこと？」

「えーっとだな……」

不思議そうにするミーファになんと説明しようかと僅かに悩んだ

末、やはりありのままをそのまま伝えることにした。

「この子にはちょっと色々あって……まあ簡単に言えば他人の気配とかを感じ取ることが出来るから。それでミーファの感情を察したリムは気になつてここまで来た、と」

フェイシスは最後に「だから俺はリムに引つ張られてきたつてこと」と付け加え、肩を竦める。

「へえー……そっかそっか。ありがとうね、リム」

素直にフェイシスの言葉を信じている様子のミーファだが、しかしフェイシスは逆に腑に落ちない。

（こんな荒唐無稽ともいえる話を信じるのか……？）

そう思ったが、もしかしたら単に気にせず流しているだけなのかもしれないとも考えた。

この活発そうな少女には後ろ暗いところは感じられないが、それでも気になつたフェイシスは思ったことを尋ねてみると、

「うん、フェイの言いたいことは分かるよ。でも私の知り合いにも、気配とかなんとか、そういうのに敏感な人がいるから」

「……なるほど」

フェイシスは一応は頷きつつも、『功』の使い手が知り合いにいらつてということがフェイシスには僅かに意外であり、内心で少なからず驚いた。

そう思う一方で、今そんなことを考えても詮無いことと思ひ直し、「とりあえず貧民区からは出た方がいい。ミーファもここに用がないなら、商業区　いや貧民区を出るまでは一緒に行くか？」

貧民区は十二の刻の時鐘が鳴る前にいた商業区と一部が隣接しており、そこまで出れば都市の警備隊の者もいるので無闇に襲われる危険は減るだろう。

このリムを怖がつたりしなかつた少女は、少なくともフェイシスの目から見ても悪い人間には思えなかつた。

「うん、ありがとう。是非そうさせてもらおうかな」

人懐こい、不思議な魅力を持った笑顔でミーファは頷いた。

そうしてフェイスたち三人は彼が殺した男を横目にその場から離れた。

元来た道を辿るように十字路に差し掛かると、そこでフェイスは何気なく後ろを振り返ってみた。

すると後方では姿を現し始めた乞食たちが男の死体を漁って、競うように身ぐるみを剥がしているのが目に入った。

第五節・彼女は無人の死地で目覚める

木々に囲まれた中、一人の女性が横たわっていた。

その齡^{よわい}二十ほどの彼女は均整のとれた目鼻立ちをしている。

乙女としての可憐さが抜けて女としての美しさが開花しかけた美麗な容姿の彼女は眠っているのか、目蓋は固く閉じられている。

踝ほどまであるスカートは側面が大きく裂けており、上衣にはなぜか袖がなく、薄汚れてなおきめ細やかな素肌を露出している。

「う……っ、あ」

漏れ出るようにうめき声がこぼれるが、そんな彼女の苦しみは誰に届くこともなく虚空に消え入る。

彼女の苦しみは左肩と右腿からくるものだった。

そしてその焼けるような痛みは次第に彼女の意識を浮上させ、目を覚まさせるのに十分であった。

ゆっくりと開かれた目　その瞳の奥には覚醒直後とは思えないほどの強い光が感じられるが、流麗な眉は苦痛のためか僅かに歪められている。

「……ここは」

彼女は呟きつつ周囲を見渡すと、あるのは深緑の葉を茂らせた木々にそれらから漏れる陽光が照らす適度に乾いた地面、そして墓碑だった。

(なぜ……私は……)

どうしてここにいるのだろうか、と彼女はまだぼんやりとする頭で記憶を呼び起こそうとして、左肩と右腿の痛みを思い出す。

横たわったまま力なく顔を左に傾けてそこを見ると、見覚えのある布地が腋^{わき}を通して肩に巻かれていた。

綺麗とはいえないその巻き方などは気にせず、肩から伸びる腕へと視線を移すとあるはずの袖がない。

「……………」

そこで彼女 エクスは、昨夜の出来事を思い出した。

月光と星々の明かりを頼りに逃げ延びていた彼女は、しかしついに追いつかれ、絶体絶命の窮地に陥った。

だが諦めかけたエクスの前に突如として一人の男が現れたのだった。

幽鬼という類いの不気味な言葉がふさわしいその男は、頭から足下までを外套で不気味なまでにすっぽりと覆い隠していた。

彼は少ししゃがれたような声で笑い、追っ手たちに質問した後、見る目を疑うような剣技や体裁きで彼らのことごとくを惨殺した。

そうして目の前に立った男を見上げたエクスは、疲労と緊張で意識がなくなったのだった。

（あれから……どうなった……？ どうして私は、こんなところに……？）

そう思ったとき、大気を盛大に振るわせる鐘の音がエクスの耳に届いた。

時鐘の音が以前聞いたときよりも音量が小さいと思う一方で、その鳴らし方のほうが気になった。

「これは……十二の刻の音。ということは……あれからもう夜が明け……」

木々から暖かい光が漏れてきているのだが、横たわる彼女は呆然とそう口に出しつつも、とりあえずは身体を起こすことにする。

左肩の痛みを我慢しつつ、まずはなんとか上半身を起こすと肩に髪がかかるのを感じた。右手を後頭部にもっていくと、結っていた髪が解けている。

それを気にすることなく今度は痛む右腿を見てみると、どうやらそこも肩と同じく丁寧とはいえない処置がされていた。

右腕の袖も肩からなくなっており、この応急処置をした何者かは両の袖を破り取って包帯代わりにしたらしかった。

痛む箇所の確認をした後、すぐ傍に屹立している木の幹に手をついて、なんとか立ち上がってみる。

そしてエクスはもう一度、周囲をよく見回した。

やはりそこにはいくつもの墓碑が並び立っている。膝ほどの高さのそれらは灰色がかり、その各々に文字と数字が刻まれている。

(……墓地か)

いまエクスのいるそこは墓地を囲むようにして植えられた木々の狭間だった。

その木々のさらに外側には塀もあり、道行く人々から墓地内は見え辛いようになっていた。

墓石の数は百ほどで、おそらくは都市の有力貴族のものだろう。

ただの市民がわざわざ都市内に個人の墓を建てられるほど市壁内の土地にあまり余裕はないはずだからだ。

あらかた周囲の状況を確認したエクスは、

(墓地ということは……ここは行政区の南端だな。それなら先の鐘の音が遠く聞こえたのにも頷ける)

もはや完全に覚醒した頭で、今後どう動くかを考えるために都市アクナリアの地図を思い起こす。

都市中心の鐘塔の周囲には富裕民区が小さく放射状に広がっており、その南東に行政区はある。

そして行政区として区切られた区画の南端に墓地があり、さらに隣接して聖神教会もある。

エクスはほんの一瞬、もしかしたら気を失っている間に別の都市に移されたのではと思ったが、傷の具合からして気絶したのは昨夜で間違いなく、またそんなことをする人間もその意図も心当たりはない。

「とりあえず市民区の隠れ家に戻って、ミーファ様の安否を確認しなくては」

エクスは声に出して自身に言い聞かせるように呟いた。

そうしてすぐにも向かおうと思ったが、何があるか分からないため装備を確認しようと、先刻まで横たわっていた場所を見遣る。

そこにはエクス自身の身長ほどもありそうな大きな外套と、己の

愛剣が横たえられていた。

(やはり、これは)

エクスはその頭巾の付いた釣鐘型の外套を見て、確信した。

先ほどから誰が自分をここまで運び、応急処置めいたことまでしたのか頭の片隅で考えてはいたが やはりというべきか、その答えは予想と違わなかった。

しかしそうなると思つ先に疑問に思うのは「なぜ」ということだった。

(あの男は、一体……?)

思い当たるような人物を記憶の中に探してみるが、該当する者は誰一人とていない。そもそもこの都市に自分の味方をしてくれるような知り合いはいないはずだ。

エクスは小さくため息をついて思考を中断し、まずは考えるよりも先に行動することにした。

愛剣を拾い上げて腰に携える。そして懐を確認すると、どうやら所持金は昨夜から減つてはいないようだった。

金すら盗られていないとなると、信じがたいことに昨晚の男には親切心か何かで助けられたようだ。

簡単に確認を済ませて足を踏み出したとき、自身の身に纏うスカーフが危うところまで裂けていることに、エクスは今更ながらに気がついた。

「っ！？」

先ほどの応急処置された箇所を確認したときにも頭には入っていたのだが、考えることが多すぎてすっかり忘れていた。

鐘の音と木々から漏れる陽光から、未だ太陽が天高くに位置していることは明白だ。そんな中をこんな格好で歩いているのは観衆の注目を集めすぎる。

「ど、どうすれば………ん？」

視線を彷徨わせつつ戸惑いながらも思わず呟いたその時、ちょうど先ほどまでその上で横になっていた外套が目に入った。

「……あの不気味な男のものが……背に腹は代えられんか」

凜々しい顔立ちに男口調で言うエクスのその姿は麗人というべきなのだが、このときばかりは頬を僅かに桜色に染めていて女性らしさが滲み出ていた。

仕方なく羽織ることにしたエクスは地面に広がっていた外套を拾い上げる。

（ ん？ ）

と、そこで外套から何かがこぼれ落ち、木漏れ日に煌めきながら地に落ちた。

拾い上げてみると、それは光り輝く首飾りだった。小指の先ほどの翡翠石が丹念に加工されて金属板に埋め込まれ、それに真新しい紐が通してある。

見かけ上は精巧に加工してあつて上等なものに見えるものの、宝石自体の大きさから見た目ほど高価な代物ではないと思われる首飾りだった。

だがそれでも宝石であることは間違いなく、決して安物でもない。
（これは……あの男の物、なのか……？）

エクスは何かの手がかりになるかもしれないと思ひ至り、とりあえず拾った首飾りを懐にしまい込んで外套を羽織る。

頭巾のついたそれはエクスの身体には大きすぎ、裾はなんとか引きずらないまでも、もう一人くらいなら入れる余裕があるほどだ。

「……ミーファ様」

エクスは自身の大切な者の名をそつと呟き、足を前に出した。左足に重心を傾けて、負傷している右足は支え程度にして進んでいく。墓石をいくつか横切りながら出入り口付近まで来たところで、木々に隠れて見えなかった教会がその姿を現した。

ミエディア王国の国教である聖神教ことリユレー教の教会だ。

王国の庇護の下、各都市に必ず存在する祈りの場。外観は三角屋根に大きな鉄扉、貴重で高価なステンドグラスが壁面に埋め込まれ、そこが神聖な場であることを強調している。

「……………」

教会ならば協力してくれるだろうかと一瞬考えもしたが、その神聖な施設とて国の監視下にあることは言うまでもないことだ。

エクスはしばし目を細めて教会の荘厳と言える外観を眺めた後、すぐに歩みを再開して墓地を後にした。

第六節・再会は寂れた一室で

エクスは無事な右腕を胸の高さまで上げると、目の前の扉を軽く叩いた。

薄汚れて灰色がかつた石造りの壁や床には不釣り合いな木製の扉は、こぎみ良い音を立てて周囲の壁面に反響する。

あれからエクスは都市南東部の墓場から南西部に位置する市民区へと、痛む身体を引きずってなんとかたどり着いた。

中流階級の住まう市民区は治安や人の流れが安定しており、また建物の大半が石造の家屋だ。

いま彼女のいる二階建て石造集合住宅はありふれた建物であり、周囲の治安も申し分ない。

「……………」
エクスは扉の前で腕を掲げた状態で待つが、しかし中からは返事がない。

もう一度、予め決めていた速さと回数で扉を叩くが、やはり室内からの反応はなかった。

(まさか……もう……っ)

扉の取っ手を引くがほんの僅かに前後するだけで、鍵がかかっており開くことはできない。

エクスは腰から愛剣を引き抜き、とって下の錠の部分を切っ先で突くようして破壊した。

幸いにも怪我をしているのは左肩なので、利き腕である右腕での動作はこれくらい支障はなかった。

「ミーファ様っ」

エクスは扉を蹴破るようにして部屋の中に入るが、予想通り誰もいない。しかし部屋の中が荒らされているといった様子は見受けられない。

木製の鎧戸は外から見たときと同様に閉じられており、昼時であ

るにも関わらず中は薄暗い。

部屋の中はベッドと丸テーブルが一つずつに、背もたれの付いた椅子が二つという簡素な家具、加えて部屋の片隅に大きな麻袋が二つあるだけだ。

この都市に来てから金に色目を付けて秘密裏に借り受けた部屋だったが、エクスの脳裏にどこからか情報が漏れたかもしれないという考えが過ぎった。

部屋に入る前から予想していたとはいえ、実際にもぬけの殻となつている室内を見て、エクスは状況がいかに切迫しているものかを実感した。

「っ!？」

その時、彼女をあざ笑うかのように荘厳な鐘の音が耳朵を打った。屋内に居ても尚、確かに届くその音色は今の彼女には不安を煽るだけのものだった。

エクスの身体は強ばり、彼女の心臓は早鐘を打ちはじめ。美しい時鐘の音とは別に耳元で自身の鼓動が大きく音を脈を打っており、それがエクスを焦らせる。

「……………ミクヴァン……………ッ！」

エクスは忌々しげに吐き捨てるように呟き、無意識に両の手を握りしめる。

そして冷静さを欠きそうになって、部屋から飛び出そうとしていたエクスが振り返ったその時、開けたままだった扉から、

「エクスッ！」

少女が振り向きざまのエクスの胸に飛び込んできた。

「ミーファ様!？」

「もっつ、無事だったなら早く戻ってきてよっ」

波打った髪を揺らしながら、エクスの胸に抱き付いたミーファは怒りと喜びを織り交ぜた声でそう言った。

「……………も、申し訳ありません。しかしそういうミーファ様は、今までどこに行かれていたのですか？」

先ほどまで胸中にわだかまっていた焦燥感がたちまちに吹き飛び、エクスは顔をほころばせながら尋ねると、

「私は……昨夜エクスと別れてから、なんとかここまで帰ってこれただけど……。あなたが帰ってこないから、その……今朝から探しに行っていたのよ」

「なつ　そんな危険なことをしていたのですか!？」

思わず敬愛する主を叱ってしまうエクスに対して、ミーファは一層きつく抱き付きながら答えた。

「だって……心配だったからっ!　あなた自分から囿になって私を逃がしたりして、もしも……もしも死んでたりしたら、どうしようって……」

「……ミーファ様」

嗚咽を漏らすミーファに対してエクスは今更ながらに心配をかけたことを悔やんだ。

先ほどまでは彼女の身の安全だけを案じていたエクスだが、この少女がこういう人間だということを見失っていた。

「申し訳ありません」

「うっ、ん」

鼻をすすりながら頷くミーファに背にそつと手を回すと、

「……ミーファ様、なにか……少し背中が汚れているようですが……?」

ミーファの服はなぜか背中がざらざらとして、それでいて湿っていた。

「え、ああ、これね……」

ミーファは涙をぬぐいながら顔を上げるが、まだ密着したままの姿勢で続けた。

「えつと……あなたを探していたら、案の定、というか、その……ミクヴァンの手のものに追いかけて……」

「何かされたのですかっ!？」

「う、ううん、何もされてないわ、ちょっと倒れただけ。助けても

らったから」

「……助けて？」

エクスはミーファの言葉に首をかしげる。

「ええ。男たちに追われて貧民区まで逃げただけだ」

「貧民区にですかっ!？」

「エクス、一々驚かないで最後まで聞いて」

ミーファの苦笑にエクスは「は、はい、すみません……」と控えめに答える。

「えーっと、貧民区までなんとか逃げただけど、四人の男にそこで拘束されそうになっちゃって」

「っ」

エクスは驚愕の余りまたしても口を開きかけたところで、ミーファがそつと口元に人差し指を突き立ててきてそれを遮り、さらに続ける。

「そこで、もうだめだと思って思ったら、私と同じ年くらいの男の子が止めに入ってきてくれて、助けてくれたの」

ミーファの淡く微笑むその姿は、可憐な容姿に相まって一層の美しさがあつた。

そんなミーファの姿を見て、やっと主の無事を実感できたエクスは冷静さを取り戻し、

「……あの、いくつかお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「なに？」

エクスが落ち着いたからか、ミーファは口から指を離す。

「ミーファ様と同年程ということは、十六前後だったのですよね？」

「ん、そうだと思う。その人……あ、名前はフェイススって言って、見た目は私と同じ年位かなって思っただけ……雰囲気はどこか落ち着いてて、もしかしたら少し年上かも」

ミーファの意見に、エクスは思わず息を呑んだ。

「フェイスス、ですか」

「そうよ、フェイススって名乗っていたわ。それがどうかした？」

「あ、いえ。以前、目にした者に同名の者がおりましたので、つい……それで、その者の姓は聞かれましたか？」

「え？ うん。フェイス・クーリオって言っていたわ」

「エクスは短く……そうですか」とだけ返答した。ミーファはそんなエクスを気にしたふうもなく、興奮した様子で語り出した。

「でね、その人がまたすつごく強かったの！ こう……あつという間に三人を苦もなく倒しちゃってね。最後の一人は少し苦戦したみたいだったけど、それでも十分にすごかった」

「……そうですか。その者もなかなかやりますね」

「エクスは一応相づちは打ったのだが、彼女の頭には先ほど耳にしたその少年の名前がどうしても頭から離れない。」

そして続くミーファの言葉を聞き、エクスの疑念は更に深まった。「なんてつたつて、片腕なのにそれでも圧倒していたんだから」

「！？」

まるで自分のことのように頬を紅潮させて喜々として語るミーファとは裏腹に、エクスは眉をひそめる。

興奮冷めやらぬミーファにとってもそんなエクスの様子は気にせずにはいられないのか、

「エクス？」

「……あ、はい」

「どうかしたの？」

明らかに様子がおかしいエクスは、ただたどしくミーファに尋ねた。

「あの……その者は、片腕だけで戦ったのですか？ それとも、片腕しかなかったのですか……？」

「フェイスは右腕がなかったけど……それがどうかした？」

「エクスは思わず息をのみ、同時に彼女の脳裏に二つの出来事が思い出された。」

一つは昨夜の外套の男。そしてもう一つは数年前に聞いた一つの

知らせ。

しかしエクスは記憶では昨夜の男は確かに片腕しか使っていないが、果たしてどちらの手を使っていたのか。昨夜の状況が状況だけに記憶が曖昧だった。

それに片腕しか使わなかったというだけで、実際には五体満足な身体をしている可能性の方が高いだろうことだろう。

対するもう一方の知らせの方は、その内容とミーファの語った人物との関連性は高そうだったが、姓が違っているためこちらは見当違いだろう。

どちらの心当たりも曖昧なため、エクスは何とも言えないわだかまりを胸中に残した。

「エクス、大丈夫？」

「っ、申し訳ありません。少々考え事をしていました」

「本当に大丈夫？ …… エクスは色んなことに気を回しすぎるから、私なんだかあなたの身体が心配よ？」

ミーファは上目遣いに首を傾けながら、形の良い眉をゆがめる。

「お気遣いありがとうございます。ですが、ミーファ様に心配されるようでは、私もまだまだです」

「あ、それどういう意味？」

エクスは苦手な冗談でなんとかごまかし、頬を膨らませるミーファに今度はできるだけ真剣な表情で、

「それよりもミーファ様、今後のことですが……」

「ん、ちよつと待ってっ」

ミーファは先ほどまでの雰囲気から一転して即座に頷き、エクスから離れた。

「扉、閉めなくっちゃね」

そう言っただけで彼女は扉まで走り寄り、エクスがこじ開けた木製の扉を閉めるのだが、

「……エクス、ちゃんと鍵は持っていたでしょ？ これ、壊れちゃって鍵がかからないわよ？」

「あ、その、焦っていたもので……」

濟まなさそうに言うエクスにミーファは小さく笑うが、しかしすぐにその表情はなりを潜め、扉を閉めて戻ってきた彼女は静かに頭を下げた。

「ごめんね、エクス。心配かけて」

そんな主人の所作に、エクスは心臓が止まりそうなほど恐縮した。「そ、そんなつ。ミーファ様、頭を上げてください。騎士たる私にはこのくらい何ともないですからっ！」

そつと顔を上げたミーファは、しかし首を振って、

「うっん、これは主と騎士という関係ではなくて、友人としての謝罪よ」

「ミーファ様」

心に染み入るようなその言葉に、エクスは深い感銘を覚える。

ミーファは照れているのかやや頬を紅潮させつつも完全に頭を上げた。そして仕切り直しとでもいうように、ぱんつと手を合わせて、「さて、それじゃあ今後の方針でも決めましょう」

先のことを思えば暗澹あんたんとした気持ちになるはずなのに、ミーファは持ち前の明るさをもって凜とした声音でそう口にした。

エクスもそんな彼女の気持ちを無駄にする気は当然無いので、即座に気持ちを入れ替える。

しかしいざ真剣に話をする段階になって、二人は先ほどから立っただままだったことに気が付き、部屋の中央に備えられた簡素な椅子に丸いテーブルを挟んで対面するように腰掛けた。

「エクスは今後のこと、どう考えてる？」

ずばり本題から切り出してきたミーファに、エクスは形の良い顎に手を当ててしばし黙考する。

「……まず当然のことですが、この都市からは出ます。一刻も早くに。もはやミクヴァン・オスリムは私たちの味方ではなく、『王弟派』に属していると思われ。いえ実際そうなのでしょうから、早々に我々を支援する貴族のいる都市に向かうのが常道かと」

「そうね。その条件でここから一番近い都市って、たしか……プレアードだったわね？」

ミーファの問いにエクスは頷いて、

「幸いにも、そこには貴族間でも有力者であるジャステイ・マクレガンがいます。『王女派』である彼はプレアードでもかなりの影響力を持っていますから、我々の王都までの安全に尽力してくださいませるでしょう」

「ということは、まずは何よりこの都市から無事に抜け出すことが重要って訳ね」

不安を感じさせない微笑みを携えながら意気込むミーファに、エクスも憂いを払うように呼応する。

「はい、できれば今日中にも発ちたいですね。まだ日が高いので目立ちますが、日が沈んだ閉門直前か、朝一番の開門直後の時間帯ならまだ薄暗いはずですし人も多いと思いますので、人波に紛れれば警備兵の目も何とか誤魔化せるかもしれません」

「もし気づかれても門は目と鼻の先だから、強引にでも門から外に出て、あとは暗闇に紛れるなり、近隣の森に逃げ込むなりすればなんとかなる……ってことね」

ミーファの爛々とした瞳には堅い決意が表れており、それはまずありえないことだが 「死」という可能性を考慮に入れても尚の言葉だということがエクスには分かった。

それほどまでの思いをさせておいて、今更に彼女の気持ちを挫くことを言いたくはなかったエクスは、

「そうですね。なんとかしましょう」

自身が負傷しているということをミーファには伝えず、何でもない風に装った。

エクスはミーファと再会してから、謎の男の外套を羽織り続けている。よって彼女にはエクスが負傷していることはまだ露見していないだろう。

このまま せめて右腿の刺傷がある程度回復するまで待ってい

たとしても、その頃にはミクヴァンの手の者に見つかってしまいうだろう。

かといってミーファに足と肩を怪我していることを告げれば、彼女は頑として何か別の脱出方法を模索することは目に見えている。

模索して何か良い代案が出ればいいのだが、もはや先ほどのような強引な手段しか出てこなかったことがその可能性を潰している。

それならば足手まといである自分が門の検問で警備兵の注意を逸らし、その際にミーファだけでも都市を脱出してもらおう……というのが現状でとれる有効な策だろう。

無論、エクス自身も端から犠牲になる気など全くないが、もし好機があればそうするしかないだろう。

騎士たる自分が主の足を引っ張るなど言語道断だと思っているエクスには、主であるミーファにも……いや彼女だからこそ、それを告げることなど出来なかった。

第七節・その男の歩みにあてはない

一の刻を告げる優美な時鐘の音色を聞きながら、一人の男が多くの者たちが行き交う西大通りを歩いていった。

照りつける日差しは強いが、そんなものは些事だと言わんばかりに道行く人々からは活気が感じられる。

都市アクナリアには東西南北それぞれの大門から鐘塔の建つ都市中央部に向かって伸びる大通りが存在する。

もしこの都市を鳥瞰したのなら、四つの大通りが十字架を表していることがつくことだろう。

そんな都市アクナリアにおける主要路を、ゆったりとした東洋風の衣装を身に纏った長身の男が悠然とした足取りで西門に向かって歩みを進めている。

上下一体となったその衣装は全体が黒く染め上げられており、疎らに花びらのような紅色の模様が点在しているのが特徴的だ。

胸元を大きく開けた余裕のありすぎるその服には、腰のところで藍色の帯が全身の緩みきった雰囲気を僅かでも引き締めようとするかのように巻かれている。

だがそんな帯の甲斐はまるでなく、袖は風に吹かれてはためき、踝まであるスカートのような下半身部は歩くたびに揺れ動く。

そして腰には緩く弧を描いた刀を携えており、柄から鞘まで純白のそれは服装とは色合いがまるで違うにも関わらず、男の身に付けている姿には全く違和感がなかった。

「……………」
しかしそんな服装に反して、男の表情はどこか妙な雰囲気を出している。

短めの硬そうな髪に、何かを探るような鋭い視線を周囲に張り巡らせているその男　ヴァンは賑わう人々とは対照的に一人悠々と歩き続ける。

「やはりどこか……都市の空気がおかしいな。何か不自然というか……」

その三十代半ば程の男であるヴァンは、訝しむようにに眉をひそめて呟いた。その声は見た目に反して滑らかな潤いのある声質をしている。

西の大通りは都市西部から北西部辺りに広がる商業区を貫く目抜き通りだ。人通りは当然のように多く、すれ違う人々の様相も多種多様である。

そんな中でどうしてもヴァンが引つかかりを覚える者たちがいた。（都市警備隊、か。なぜこんな何も無い日に警備が嚴重なんだ……？）

ヴァンの鋭い視線の先には簡素な皮の鎧を纏って腰に剣を携えた格好の都市警備兵の姿があった。先ほどから同じ服装の者をもう何人も見かけている。

謝肉祭や劇団の巡業、もしくは聖祭などの都市内外から人の出入りの激しい時期ならともかくとして、こんな何も無い日に警備兵が多いというのは些か腑に落ちない。

ヴァンの記憶にある僅かだが明確な他の都市の光景では、警備の数は少なくともこのアクナリアの半数以下程度だったはずだ。

「……気にしすぎか」

ヴァンはため息とともに苦笑した。

こんなことを考えても仕方がない。もともとヴァンは気分転換の散歩のつもりで歩いているのだ。警備兵がどここうなどという益体のないことを考えてはせつかくの散歩も無駄になってしまう。

そう考えた彼は早々に自らの思考を打ち切り、道なりに周囲の光景を眺めつつも惰性的に足を動かしていく。

路肩の商店や、香ばしい香りのするパン屋、小さな書店に、刀剣を取り扱う武具商店。その他にも多くの店を眺めながらしばらく歩くと、西の大門が視界に入ってきた。

東西南北の四門に見違えるほどの差異はないか、などと失望気味

に思いつつ脳裏に先日通った東門を思い浮かべた。

いま目に映る西門と大差のないその門は横幅が荷馬車四台は通れるほどで、高さは四階建ての集合住宅ほどもある。

それは大門というに相応しいものだが、すでに何度か他の都市でも同じようなものを目にしてきたこともあって、ヴァンには今更なにか思うようなところはない。

「ん？」

しかし段々と門に近づくとつれて、先日までは見られなかった光景がそこにあった。

（検問か……？）

門前の脇には天幕が仮設されており、その下には役人と思しき小綺麗な格好の男が数人いた。

だがそんな文官ばかりの中で一人だけ異様な雰囲気のある男がいる。遠目にも分かる長身痩躯のその姿はまるで蛇のような男だ。

一目見ただけでそうとしかいえない印象的な雰囲気を出しているその男はまだ二十代半ば程に見えるものの、明らかに一回り以上は年上らしき役人たちに指示を下して回っていた。

ヴァンはそんなどこか場違いともいえる男にしばらく意識をとられていたが、いま重要なのはそこではない。

検問は当然のように四六時中、都市に出入りする商人などの大荷物を持つ者に対して行われるが、今ここで行われている検問は毛色が違った。

広大ともいえる門の幅を全く活かさずに、出て行く者だけ一列に並ばせて、役人が一人一人の顔を検分するかのように眺めている。

反して、入ってくる者たちは通常通りに荷物だけ簡単に調べているだけだ。

「……………」

そのような変に面倒なことするのは明らかにおかしいことであり、ヴァンは少し離れたところでまじまじとその光景を見つめる。

考えられることがあるとすれば麻薬の類いの摘発だが、それなら

門外から入ってくる者たちも出て行く者たちと同様に嚴重に検問しなければ意味がない。

その他にも不定期に嚴重な検問を行うことで不正な輸出入業者への牽制なども考えられるが、それでも出て行く者だけに厳しい検問を行っているとなると、この都市から何んらかの物資か人物を逃がさないためにしている、というのが妥当だろうか。

しかしいくら考えたところで、あくまでも推測の域を出はしない。直接聞きに行ったところで教えてもらえるわけもないし、誰かに訊こうにもそこらの通行人が知っているわけでもない。

そもそもヴァンは　繰り返すようだが　気分転換で散歩をしているのだ。こんな結論の出ないことをぐだぐだと考えていてもやはり仕方のないことだった。

「ま、いいか」

よってヴァンはのんびりと散歩を再開することにした。

彼のそれまで纏っていたどこか鋭利そうな雰囲気など一瞬で霧散して、気の抜けたどこにでもいそうな三十五歳の男へと切り替わる。その分かりにくい変化は外見が全く変わっていないにも関わらず、別人なのではないかという思いを抱かせるほどだった。

道行く人々の喧噪も露店の店主があげる威勢の良い声も、それらすべての音を嫌がるでもなく、むしろ心地良い音楽でも聴いているかのように、ヴァンはのんびりとあてもなく歩みを進めた。

第八節・少女の憂慮に少年は

一の刻を告げる時鐘の音が少女の耳に届いてしばらく。

彼女　イヴリーナは、今しがた帰ってきた彼に対してどのような態度で臨むべきか密かに思案していた。

後ろ髪は肩口で乱雑に切り揃えられ、しかし顔両脇の髪は胸まで伸びるほどに長い特徴的な髪型をしており、その突出した髪を指で弄りながら黙考する。

十代半ば程のまだ少女然としている顔つきのイヴリーナは細い眉をひそめてしばし考えた末、その柳眉を逆立てることで今の彼に対して怒りを表明することで思考を打ち切った。

少年　と呼ぶにはその顔に幼さはなく、かといって青年ということも些か成熟が足りていないフェイシスは、宿に戻るなり荷物を下ろしてベッドに背中から倒れ込んでいた。

「あー、疲れた……」

彼の足はベッドの外に投げ出され、唯一の腕である左腕までも所在なさに縁からだらしなく垂れ下げている。まさに脱力しているといった様子だ。

そんなフェイシスに対して、イヴリーナはまず目下気になっていることから訊いてみることにした。

「兄さん？　この外套はどうされたのですか？」

「　　リムも疲れたろ？　一緒に昼寝でもするか？」

ベッドの脇に立つて間近から問いたただいたにも関わらず、フェイシスは何も聞こえてはいないともいうように彼女の言葉をさらりと流す。

彼の言葉に誘われて、真面目にも荷物の整理をしていたリムがその作業を中断し、艶のある黒い長髪をなびかせながら彼の横たわるベッドへと飛び込んだ。

フェイシスの顔立ちはやや中性的なところがあり、少し長めの髪

と相まっつて容姿は悪くなく　むしろ良いといえる方だ。

そんな彼と黒髪に妖しくも美しい瞳を持つ童女との触れ合いはどこか非現実めいた一枚の絵画のように見える。

「……兄さん？　聞いていますか？」

イヴリーナのどこか作り物めいた端正な顔の口元には微笑。しかし一方で目だけは笑っていない。

彼女の未成熟な顔立ちはフェイスと歳が近いことを示しているが、反してその身体は先の推測を裏切るに足るものだった。

おそらくは直立したフェイスよりもやや低い程だと思われる少女にしては長身な身体と、女性としての魅力に早咲きした胸部とで、顔と身体の不均衡が目立っている。

とはいえそれがおかしいということではなく、むしろその差異がある種の魅力を引き出している。

そんなイヴリーナは横たわるフェイスを見下ろしながら今一度さきほどのように問うたのだが、

「うわっ、リムおまえ飛び込んでくるなよっ、危ないだろ！？」

「えへへ〜」

尚も無視。

笑顔で二人して戯れるその姿はイヴリーナから見ると兄妹というよりも親子のようだが、今はその戯れを微笑ましく見ていることは出来ない。

イヴリーナはそんな二人の姿を見ながら小さく溜息をついた。

こうして何かとはぐらかされることには慣れてはいえ、しかしそれを見逃すわけにはいかない。

そう思いながら彼女は再び口を開き、

「リム？　ちよつとあつちで荷物の整理でもしててくれる？」

甘ったるい猫撫で声でそう言った。

イヴリーナのただならぬ気配を感じたのか、リムはまさに飼い慣らされた子猫の如くフェイスから離れ去る。

「……………」

続いてイヴリーナは無言の視線をフェイスに浴びせた。

さしもの彼も冷たい視線に晒されたせいか、上半身を起こして気まずさで顔を歪ませながらもようやく口を開いた。

「えーっと……………何だ？」

「何だ？ ではありません。先ほども言いましたが、これはなんなのですかっ？」

イヴリーナは言いつつ、その手に握られた外套を掲げた。

彼女の身長に最適と言っていていい大きさのそれは、布地の一部が大きく裂かれていた。

イヴリーナからすれば何があつたのか大体想像がつくのだが、フェイスを見たところそんな雰囲気はないように見える。

故に一応訊いてみないことには判然としない。

「それはだな、その……………斬られた」

「え」

言いくさうに口を割つたフェイスだが、一方でイヴリーナは「斬られた」というその言葉に固まった。

そんな彼女の様子に気付いた風もなく、フェイスは焦つたように言い訳をし始める。

「ああ、その、悪いとは思っている。それがイヴから借りた外套だということもちゃんと分かっている。……………でも買物してきたばかりで代わりのものを買う余裕がなかったんだ。いや、そもそも持っていた金だけでは俺の外套を買う余裕すらなかったんだ。だから

明日

「そ、そそ、そんなことより斬られたって……………け、怪我はないのですかっ!？」

長広舌を続けていたフェイスの言葉を遮るように、イヴリーナは彼の両肩を掴んで至近から顔をのぞき込み、次いで全身を眺めるが怪我らしいものは見当たらない。

本来ならそこで安心するところだが、

「ちよっ」

フェイススが何かを口にするより前に、イヴリーナは目を皿ようにして彼の身体に手を這わせつつ斬り傷がないかを確認する。

そんな行動をとる彼女のあまりの気迫にフェイススも思わず身を引いた。そのせいで依然、怪我の確認のために触診するイヴリーナに押し倒される。

しかし当のイヴリーナはそんなことなどまるで意識していないのか、フェイススの左腕の袖をまくって傷がないかを確かめている。

「おいっ、イヴ、待て、おま」

「」

「待てっで、ちよっとお前どこ触って　っで、だから……………」

…待てっで言ってるだろっ！」

フェイススはさすがに話を通じないと思ったのか、腕の拘束じみた触診を振り払ってイヴリーナの頭を叩いた。

「あたっ」

軽く握られた拳を喰らった少女はハツとなったように目を瞬かせる。

あれ自分は何をして…………とそう思ったイヴリーナだが、すぐに状況に気がつく。

「　ッ!?!」

自身が今まさに目の前という距離で困り顔のフェイススと相對していることに気がつき、顔が沸騰しそうになった。

いつの間にか彼の足の間に膝を割り込ませ、密着するように己の身体が少年に押しつけられている。

端から見れば、これではまるで

「」

一気に彼女は自身の顔が上気するのを感じた。

「あ、あああ、スミ、ス、スミマセ　ッ!?!」

慌ただしく己の行為を詫びて、稲妻の如き俊敏さをもって再びベツドの脇に直立する。

フェイススはそんな彼女に苦笑しつつ、溜息とともに上半身を起

「すと、

「イヴ、いい加減その性格……というか、その心配性はなおして欲しいんだが」

「は、はいっ、その、スミマセン……」

先ほどとは立場が真逆の二人はしばし無言でいると、イヴリーナもだいぶ落ち着きを取り戻して、普段の理性的な彼女に戻る。

わざとらしく咳払いを一つしてからフェイスに改めて向き直ると、

「では兄さん。何があったのか、聞かせてもらえますか？」

そうして先ほどのことなど何もなかったかのように振る舞う彼女だが、一方でその心は嵐の如く荒れ乱れている。

フェイスから何があったのかを大まかに聞いているときも、頭の片隅では先の悪い癖がでてしまった己を恥じていた。

長々 というほど長くはない顛末を聞かされ終えたときになって、ようやく完全に落ち着いたイヴリーナはなるほどと頷いた。

「つまり、その暴漢たちが少女を襲って いえ、攫おうとしていたから助けて、その時に外套が切り裂かれたと」

「まあそういうことだ。その……悪かったな、お前のものだったのにダメにしてしまった」

申し訳なさそうに言うフェイスに、イヴリーナは首を横に振る。「いえ、そういうことなら仕方がないです。怪我がなかっただけでも幸いですから」

口ではそう言いつつも、今聞かされたような者たちにフェイスが後れを取るとは俄にわかに信じがたかった。

それでも外套とはいえ傷つけられたのは、話に聞いたミーファとかいう少女とリムが原因だろう。

二人がいなければ後顧の憂いなく戦えたはずであり、そうなればその暴漢たちは手も足も出なかったはずだ。

イヴリーナは目の前の彼に対して、敬意や尊敬の念といったものを守るように内心でそう思いつつ、話の終盤で気になったところを

問うてみる。

「その……兄さんは確かに、四人のうちの一人は斬り殺したのですか？」

「……あの時は、ああするしかなかったからな」

フェイシスが重々しく頷いたのを見て、イヴリーナも深刻な表情を浮かべた。

「分かっていると思いますが、都市内での殺人は重罪です。いくら貧民区とはいえ、発見されれば周辺の住民の聞き込みからいずれ兄さんの人相も突き止められることでしょう」

そう。都市内での殺人行為は最も重い罪の一つだ。

市壁の向こう　都市外ならいざ知らず、秩序によって安寧を保っている都市という空間内においては、殺人という蛮行は断じて許されざる行為といえる。

都市外でももちろん御法度だが、ここミエディア王国に隣接する二大国との関係もある。自国民以外の他国者に対する正当防衛や、野盗などに対しての殺害はそれほど罪にはならない。

というよりも形式だけの処罰でその実なにもなく、むしろ反撃もとい討伐を感謝されることだろう。

だがここは半ば無法地帯ともいえる都市外ではない。

法が人を支配し、またそれによって秩序を形成する都市の内なのだ。たとえ露店先に並んだ商品を盗んだだけでも、法の名の元で相應の刑罰が下される。

「だったらその前に、さつさとアクナリアを去るか」

フェイシスは己の行動を後悔している様子もなくそう言った。

彼は自分の行動が正しかったと信じているし、またそんなフェイシスをイヴリーナも信じている。

故に彼に対してイヴリーナが不満を抱くなどあるはずはなく、むしろ敬愛さえしている。

「はい。もうこの都市はほとんど見て回りましたし、次の都市に行った方がいいですね」

「そうと決まれば荷物をまとめて……って、そういえばヴァンが居ないな。一応あいつの意見も聞いておかないといけないんだけど……」

フェイスが思い出したように室内を見回す。

「ヴァンさんなら、兄さんが帰ってくる少し前に散歩に行きましたよ」

イヴリーナはフェイスとリムが帰ってくる少し前のことを思い出す。

朝方から酒の飲み過ぎによる二日酔いでゴロ寝していたヴァンだったが、昼頃になるともうすっかり良くなったらしい彼は気分転換と称して散歩に出かけた。

ゆったりとした東洋風の服装の似合う男の、のんびりとした歩みで部屋を出て行く背中を覚えている。

「ヴァンの散歩は長いときと短いときがあるからな……」

「そうですね。あの人は都市に住まう人の暮らしを見て回るのが好きですから。満足したら帰ってくるでしょう」

「ま、焦ることはないか……明日か明後日にでも出発すれば、大丈夫だろう」

イヴリーナはフェイスの言葉に頷いた。

確かに殺人は重罪だが、それでもすぐにフェイスのことが露呈するとは思えないし、変に焦っていれば逆に怪しまれることもある。

イヴリーナはフェイスと雑談しながら、この後のゆったりとした時間に身を委ねた。

第九節・不穩分子を追う者たち 一

太陽が地平の向こうに沈み、世界が仄暗くなった中。

農村ではもう床に入る時間なのだが、都市という空間においてはそれもまだ早い。

都市の一角 酒場などが集まる一帯においては未だに騒がしい声と爛々とした明かりが漏れている。

しかしそれもあと数刻もすれば静まり、都市の人々も眠りにつくだろう。

そんな深夜と呼ぶにはまだ早い時間、富裕民区の中でも一等に大きな屋敷では今まさに陰謀の会合が静かに行われていた。

「それでガルヴィア。あの少女は無事確保できたのだろうか？」

威厳のある張り詰めた声で言うのは四十代ほどと思われる一人の男だった。

白髪の交じり始めた長めの髪を後ろへ撫でつけ、落ち着きながらもどこか野心を伺わせる静かな瞳には底の知れない昏さがある。

彼は名をミクヴァン・オスリームといい、この都市アクナリアを含む地方の領主から都市執政者に任命された 実質的な支配者といえる男だ。

ミクヴァンは豪華な椅子に腰掛けて長い机の端で食事をしつつ、後ろに居並ぶ二人に問いかけた。

「申し訳ありません。いましばらくお待ちのほどを」

そんな権力者に対しての問いに答えたのは、長身痩躯の男だった。無造作に伸ばされた長髪の奥、蛇を思わせる顔立ちの男 ガルヴィアは慇懃に頭を下げた。

まだ二十代半ばほどのガルヴィアは感情が欠落した表情で淡々と続けた。

「しかし未だ、この都市に滞在していることは確かですので捕まるのも時間の問題かと」

「ふむ　なぜ、そう言い切れるのだね？」

まるで試しているかのような微笑とともに　　とはいえ後ろに立つ彼には見えないのだが　　ミクヴァンは食事の手を止めることなく呟くように言った。

だがガルヴィアは直立した姿勢を崩すことなく、

「すべての門にはすでに厳戒体制で検問に当たるようにしておりまして、まずもってこの都市から出ることは叶いません。点在する通用口も同様です。それに今日、部下から彼女の身柄を拘束し損ねたという知らせも入ってきました。未だこの都市のどこかにいるのは間違いないでしょう」

常に一定の音量で淡々と述べていく瘦躯の男に対して、ミクヴァンは食事の手を止め、口元をぬぐった。

「なるほど。それでお前の部下はなぜ、たった十六歳の女一人を捕えられなかった？　例の騎士は捕まえたのだろうか？」

「いえ、それは……」

「ほう、それはどちらに対する否定だ？　あの少女を捕えられなかったことへの言い訳か、それとも騎士の件か」

言葉に詰まった部下に、ミクヴァンは鋭く指摘の言を投げかける。しかしミクヴァンの深く彫りのある表情に不快さはなく、少々の驚きとどこか狩りを楽しむ者のような余裕さが感じられる。

「……両方です。まず騎士の方ですが、彼女と王女の捕縛に放った十人の部下が今朝方、貧民区においていずれも遺体で発見されました」

ガルヴィアは叱責されるであろう報告をも淡々と感情を伺わせない声音で言った。

彼のその報告がミクヴァンには余程に予想外だったのだろう、背もたれ越しに僅かに後ろを振り返る。

「お前の部下も結構なやり手揃いだっただけだが……あの女騎士にそこまでの技量があったとはな。一見しただけでは少々できるくらいにしか思わなかったが」

「いえ、それが死体を見る限りでは、半数ほどは第三者の仕業かと思われませう」

素直に感嘆していたミクヴァンに、蛇のような男は否定の言葉を挟む。その意見にミクヴァンは無言で先を促した。

「発見した半数ほどの遺体はあまりにも……騎士の戦闘法で殺されたような傷ではなかったのです。ある者は首を切断され、ある者は眼窩から頭部を一突き、ある者は己の武器であったメイスで頭部を潰されておりませう」

「……………」

食事中にするような話題ではないのだが、それでも当のミクヴァンも報告するガルヴィアもそのことについては何も言わない。

「私も現場を見てきましたが、凄惨　いえ、残酷なものでした。」

一方でもう半数の遺体は袈裟斬りや胸部に刺突など、一般的な傷でした。少なくとも前者は騎士が行うような殺し方でないことは確かです」

これまでは無感情に話していたガルヴィアも、この報告は彼自身にも何か感じるものがあつたのか、声が若干揺らいでいた。

「続いてもう一方の　王女捕縛の件ですが、確保寸前に十代半ばかりそれ以上と思われる少年とまだ年端もいかない童女に乱入され、失敗したと」

「……………ガルヴィア」

常と変わらぬ静かな落ち着いた声で、部下の名を呼ぶミクヴァン。その呼びかけにガルヴィアは「はい」と慇懃に応じ、これまでの報告からくる叱責に備えたのだが、

「先ほどから聞いていたが……王女、という呼び方はいかな」

「……………は？」

「まだあの　ミステイリーファとかいったか、あの娘が王女だといふのは『公的』には決定した事実ではないだろうか？　まだアレはただの小娘だよ」

尚も変わりなく、そこに何の感情が込められているのか見当の付

かない声音でさらに続ける。

「尤も、まだといつてもアレが王女になる日などは永遠にくることはないのだが……。だから、アレはただの小娘でいい」

全く予想と違った叱責　ともいえない注意を受けたガルヴィアは、一言「仰せのままに」と答えるとミクヴァンは先ほどの続きを促す。

「例の小娘を縛り上げる直前で一人の少年に妨害され、一人が死亡、二人が重傷を負いました」

「また妨害か……つくづく我々はついてないな。それで、その少年とやらの身元は分かっているのか？」

あまり残念がっている様子が見受けられないミクヴァンは、銀杯のワインを一口だけ舐めた。

「いいえ。ですが少年と童女の特徴から、門の検問官と警備隊の方へ搜索命令を出しておきました。それに」

ガルヴィアは先ほどから一言も発していない隣の巨漢を横目に見ながら、

「これは以前、グレン殿に聞いた話に出てきた少年に一致するのですが……その少年の特徴というのが、腕が左しかないというものでして」

「っ」

それまでミクヴァンとガルヴィアの話をつまらなさそうに聞いていた巨漢がピクリと反応した。

ガルヴィアと並ぶほどの長身であるにも関わらず、その体軀は筋肉に埋もれて岩のように巨大で、刈り込んだ頭髪の見るからに強面の男だった。

歳は三十前後だろうその巨漢　グレンは、この場で初めて見た目にそぐわぬ野太い声を発した。

「ほう。それはまた腹立たしい奴を思い出させるな」

苛立ちを隠そうともしないその声と表情は、幼子が見れば泣き崩れるのは必至だろう。

しかしそんな隣に並ぶ巨漢を気にした様子もなく、ガルヴィアは続けた。

「そしてつい最近、ここアクナリアに《隻腕の剣鬼》が入ったという密やかな噂が流れています。加えて死体は両腕が切断され、負傷者にも左腕を肘からなくしたものがおりました。……それが何を意味しているのかまでは分かりませんが」

「……………」

「もしかと思いますが、グレン殿に心当たりはおありか？」

グレンは身に纏う簡素な服のせいもあって、彼の欠損した左腕をこれ見よがしに動かした。

肘から先のないその腕には、切断面を覆うように妙な金属が取り付けられていた。それには小さな凹凸がいくつかあって、何かの部品であるように見える。

「心当たりだあ？ あるに決まってるだろうがっ！ ガルヴてめえ、俺を挑発してんのかっ！」

「まあ落ち着きたまえ、グレン」

ミクヴァンが静かになだめると、その外見に反して素直に「こりやスンマセン」と謝るグレンは、幾分か冷静になった声で言った。

「ま、そりゃあ俺の知ってる殺したいほどに憎んでる小僧なら、この蛇野郎の言う年格好に一致しちゃいますか……奴は一、二年前から行方も生死も不明って聞きましたし、さすがに違うと思いますよ。それに俺は《隻腕の剣鬼》なんつーのは噂程度しか知りませんし、腕を切られたつても偶然でしょう」

あくまでも隣のガルヴィアではなく、慣れない言葉遣いでミクヴァンに対して口を利くグレン。

それを聞いてミクヴァンは落胆したように、

「……そうか。その少年が過去にグレンの腕を切断した者で、さらに《隻腕の剣鬼》だったなら、面倒事を一気に片付けられると思っただが……そこまで都合良くはいかないか」

ミクヴァンは高い背もたれに背中を預けて心底残念そうに呟いた。

そこで一旦逸れてしまった話を元に戻すため、ガルヴィアが先ほどの話を再開をする。

「あと念のためお伝えしておきますが、少年と共にいた童女の方は、その……なんでも、悪魔の化身だったとか」

「なんだそりゃ？」

硬質な声で話すガルヴィアにまず反応したのはグレンだった。先ほどまでの無関心さはどこへやら、先の少年の話題で話に参加した方が面白いと踏んだのか、大男はからかうように言った。

「おいおいガルヴ、お前の部下は麻薬でもやってんじゃねえのか？」

それとも敬虔すぎる聖神教徒か、はたまた異国の邪教徒なのか？」

「そのどれでもありません。……部下によると、聖典や聖画に登場する悪魔の様な容姿　漆黒の長髪に金色の瞳をした童女だった、と」

ガルヴィアの話を聞いたグレンは鼻で嗤って一蹴したが、しかしミクヴァンは何か考えるように目を閉じて沈黙した。

「……………ミクヴァン様？」

「　なかなか奇妙な者たちが私の都市にはいるようだな。正体不明の惨殺犯にアレを助けた謎の少年、加えて《隻腕の剣鬼》。しかも政争の火種たるアレとその騎士」

そう言うミクヴァンは突如として小さく笑い出した。

後方に並び立つガルヴィアとグレンは、だがその笑い声の色の無さに寒気を覚えた。笑っているはずなのに、底の知れない何かを感じる声だったのだ。

それから僅かの間、声に出して笑っていたミクヴァンだったが、それも急になりを潜めて、

「不穏分子たる前者三名は見つけ次第、殺せ。アレとその騎士は捕縛だ。その特異な童女は……害が無いようなら捨て置いて構わん。

この都市を脅かす者は、断じて放置しておけん」

先ほどまでの静かな声は変わらぬまま、しかし隠しきれない苛立ちを含んだ声でそう言った。

それはミクヴァンが己が統治する都市アクナリアという領土を踏み荒らされたが故の怒りだった。

「御意」「了解」

ガルヴィアとグレンは同時に応じ、豪華な椅子の背もたれで見えない相手に低頭する。

「ところでグレン」

先の苛立ちのあった声音はどこへやら、平時の落ち着きつつも張りのある声でミクヴァンは訊ねた。

「お前はいつまでここに滞在できるのだったかな？」

「あーっと、確か……………」

答えようと口を開いたグレンだが、しかし先が続かない。彼が考えるように眉間にしわを寄せていると、

「明日までですね。正確には明後日の朝一番には出発される予定だったかと。グレン殿もご自分の予定くらいしっかりと把握なされては？」

「つぐ、てめえガルヴ……………俺だっていま思い出すところだったんだよ」

グレンはその強面を渋面にして吠えるが、それをどこ吹く風といった様子で無視するガルヴィア。

しかし先ほどミクヴァンに注意されたこともあってか、舌打ちを一つしただけで彼も気を納める。

「そうか、実質あと一日だけか。では明日はガルヴィアに協力して、先ほどの患者どもを探すのに手を貸してもらえるかな？」

グレンとガルヴィアのやりとりを気にした風もなく、ミクヴァンは杯に残ったワインを飲み干して言った。

「こいつとですかい……………まあ、了解です。アクナリアには休息ついでに立ち寄っただけですが、これも仕事ですしね」

「たしか……………グレンの行き先は港湾都市プレアードだったかな……………？ ずいぶんとのんびりしているようだが、大丈夫なのかね？」

「ああ、はい。問題ないですよ。あちらさんからは期日までに到着

すれば大丈夫だって言われてますし。でもまあ、さすがにのんびりしすぎたんで、明後日の朝には出発しないと不味いんすよね」

ガリガリと頭をかきながら荒っぽい口調で答えるグレンに、ガルヴィアはその不作法を視線だけで非難する。

「ふむ……プレアードか……」

「ん？ なにか気になることでもあるんですか？」

「……いや、なんでもない」

グレンの問いかけにミクヴァンは座り続けていた椅子からゆっくりと立ち上がりながら答え、立ち並ぶ二人の男を見遣った。

身長こそガルヴィアとグレンよりも低いが、その内に秘める昏い何かがミクヴァンの質量を増加させているのだろうか、その立ち姿は長身の二人に見劣りしない。

「さて、ではそろそろ終わりにしようか。二人とも、今日はゆっくりと休んでくれ」

何気ない一言にも彼の立ち振る舞いには威厳と高貴さが滲み出ていた。そんなミクヴァンの姿を見て、二人は無意識的に背筋を伸ばしてしまふ。

退室するため扉へと歩いて行くミクヴァンだったが、そこで不意に足を止めて振り返る。

「ああ、そうそう。言い忘れていたことがあった」

そして静かに微笑を浮かべながら、

「『狩り』において適度な失敗というのはそれを楽しむ秘訣な訳だが、しかし逃げられてばかりだと苛立ちが募るといふものだ。

この意味、分かるね？」

うすら寒い気配を去りゆく背中に貼り付けたミクヴァンを、ガルヴィアとグレンは最後まで見つめていた。

第十節・追つ手を遮る者は誰何

「っ」
「っ」
エクスは小さく舌打ちしながらも、痛む足など一顧だにせず全力で走っていた。

全力といっても、それは負傷している彼女なりの全力であるため、当然のことながら全快時と比べるとその脚力も些か見劣りする。

それでも並んで走るのは何の訓練もしてはいないミーファだ。

今のエクスの脚力がミーファと同程度なのが幸いした。とはいえその疾駆はエクスの後頭部で一つに結われた髪がほぼ水平となるほどには速いものだ。

早朝、時はほんの僅かに遡る。

陽光が市壁に遮られない程度には太陽が地平の向こうから顔を出しており、爽快な空気を感じながらエクスとミーファは朝一番に西門へと向かった。

開門と同時にいうこともあり、都市内からは早々に出発しようとしていた商人や旅人、または傭兵風情の男や簡素な服を着た巡礼者と思われる者たちなど、様々な人々が大門を通過しようと並んでいた。

その人の多さに紛れて、何とかミーファと二人で検問を突破し、都市からの脱出を計ったのだが……

……それもあえなく失敗に終わってしまった。

案の定というべきか、都合良く神は彼女らに幸運を運んだりせず、検問官にはミーファとエクスの特徴がすでに伝わっており、敢え無く看過された。

一人の検問官が彼女たちの容姿に引っかかりを感じたのか、待っているよう強く命じて天幕へと向かっていった。おそらくは上官を呼びに行っただろう。

その時点でエクスは勘付かれたと考え、ならば今のうちに門を強引に突破しようと思ったのだが、そうもうまくはいかなかった。

門は出入りする者が多く、さすがに幅の広い大門とはいえ荷馬車や人垣の間をぬって突破するには、負傷した足にミーフアを庇いながらという状況では無理があった。

この身を犠牲にしてもエクスは思ったが、それでもあまりに絶望的な状況だった。

焦る彼女とて冷静さを欠いているわけではないのだ。

故に、エクスは即断即決ともいべき割り切りの良さで、あっさりとその場から離脱することにした。

後ろに並ぶ者たちの怪訝そうな顔も、何事かと注視してくる視線たちも無視して都市内に引き返した。

だがさすがに兵も検問途中でいきなり走り去っていくミーフアとエクスを放つてはおかず、他の警備兵に声をかけながら彼女らを不審者として拘束しよう動き出した

「エクスト、これからどうするのっ？」

並走するミーフアが普段は見せない必死さでエクスに訴えかける。

「とりあえず、商業区の方へ逃げ込みましょうっ」

都市西部は市民区と商業区に区画されており、エクスは商業区へと足を向けることにした。

朝の商業区ならば人も多い。これから働き出す商人たちが人垣となつて、自分たちの存在を隠してくれると踏んだのだ。

後方から通行人を隔てて荒々しい足音が響いてくる。

朝から何事かと、道行く人々は疾駆するエクスとミーフア、それに後方から迫る幾人かの警備兵へと視線を投げかけている。

それらをエクスとミーフアは無視して　　というよりも気にする余裕などなく走り抜ける。

昨日から羽織っている謎の男の外套を大きくはためかせ、澄んだ空気を切り裂くように走り続けるが、

「くっ」

やはりというべきか、先ほどから酷使し続けていた右足の傷が悲鳴を上げた。

幾重にも巻いてた包帯はすでに血に濡れて湿っているのが十分に分かり、下手をすれば石畳に血痕を残してしまいそうな勢いだ。

そうなれば追跡が容易になり、後がなくなるのは明白だろう。

（どうする。ここでミーファ様と別れて私の方へと注意を引きつけるか。しかし……そうなればミーファ様のその後はどうなる……）

傷のせい、焦燥感のせい、エクスは嫌な汗を流しながらも懸命に打開策を模索する。

無論、あらかじめこうした事態を考えなくてもなかった。

だがそれでもエクスはどこかで目を逸らしていた。

自分たちは必ずこの都市から脱出すると言いつつも聞かせながらも、理性が告げる不可能だという結論から。

都市という閉鎖された空間の執政者に目を付けられた時点からして、もう捕まったも同然だったのだ。

本来ならあの夜、十人の追っ手に追い詰められたときにエクスは捕まり、その後一人になったミーファは真綿で首を絞められるが如くゆっくりと追い詰められて捕縛されるはずだった。

（それがどうしたことが。運命のいたずらなのかは知らないが、何者かによってあの一時は凌いだ。それが事実だ）

それでも単に捕まるまでの時間がほんの僅かに伸びただけだ。

しかしそうだとしても、逃げないわけにはいかなかった。不可能だと分かっているにしても、他の手段は思いつかなかった。

ならば一か八かのもしかしてという可能性に賭けて行動を起こすしかなかったのだ。

「うおっ」

通行人と肩がぶつかり、見知らぬ男がうめき声を上げる。

エクスはそれを気にする暇も余裕もなく、姿勢が崩れて転倒しようになりながらもなんとか踏んばった。

（そつだ。捕まると半ば分かつていようと、抗わずにはいられない。転びそうになつても、必ず転ぶとは限らないのと同じことだ）
エクスは前方に注意しつつ一瞬だけ振り返ると、簡素に武装した警備兵が数人追つてきている。

おそらくは先の検問で顔を疑われた件が逃げ出したことによつて確信に変わったのだろう。

次いで隣を見ると、ミーファが息を切らしながらもなんとか走っていた。

エクス自身もそろそろ足の怪我に加えて肩の方も激しい運動に痛み出してきている。

（このままでは体力で劣る私たちは、いずれ捕まる。その前になんとか撒かなければ……っ）

都市は広い。一度姿を眩ませることが出来れば、しばらくは発見されることもないだろう。

そう思つやいなや、エクスは前方に見えた脇道に一縷の望みをかける。

「ミーファ様、あちらですっ！」

隣の少女は答えるだけの余裕もないのか、そのまま走り続け、二人は細い脇道へと入った。

二人が並んで走るといつぱいになるかというくらいの細い道を走り抜けると、つい先ほどまでの石畳に石造の家々とは異なつた風景が姿を現した。

貧民区。

奇しくも昨日、ミーファが逃げ込んだとされる区画に今日は二人で逃げ込むことになってしまった。

貧民区は治安も衛生状況も悪いが、道は入り組んでいるので逃げ込むには最適といえる。

しかし、エクスには分かっていた。後方から尚もしつこく追ってくる者たちの気配を。

角を幾度も曲がつてなるべく姿を見せないようにしているが、そ

れでも見失わずに追いかけてくる。

先ほどから貧民区の住民らしき者たちはエクスタちに無気力な視線を向ける者もいれば、迷惑そうな視線を向ける者もいる。

(いずれにせよ他人事なのだ。当然と言えば当然だが……………世の冷徹さをこのときばかりは悔やまざるを得ないな……………)

体力の限界が近い中、愚痴るようにそう思ったその時、隣を走っていた主が思いがけないものでも見たかのような声を上げた。

「フェイ、シスツ!？」

息を切らせながら漏らしたその名前は、昨日ミーファから聞いた少年のものだった。

ミーファの視線の先には、外套を妙な着方で羽織った少年がいた。釣鐘型の外套の、正面の切れ目を左にずらした格好の彼は本来は穏やかそうな顔つきのその目を見開いている。

「ミーファツ!？」

名前からして少年はどうやら昨日ミーファが助けられた人物であるらしく、彼 フェイシスの方もミーファのことを覚えていたのだろう、彼女の必死の形相に驚いているようだ。

「フェ、フェイシス、おね、がい。助けてっ」

「は……………え?」

彼の前で膝に手を当てて立ち止まったミーファは状況を把握できていないでいるフェイシスに向かって切れ切れに言った。

「当の少年は視線を隣のエクスタの方へ移すと、

「ツ!？」

その顔について先ほどの驚きとはまた違った驚愕の表情を貼り付け、エクスタに視線をおいて固まった。

しかしそんなフェイシスに、エクスタが何かを思うよりも前に後方から、

「いたぞっ」「こつちだ、はやく来い!」「急げっ」

立ち止まったことが決定打になったのか、先ほど曲がった角から三人の警備兵が走り寄ってくる。

「って、なんで警備兵っ？」

すると迫り来る追っ手の兵を見たフェイススがまたもや驚いたように言う。

エクスはすぐにでも逃げ出したかったが、一方のミーファはもう限界とばかりに膝に手を当てて腰を折っている。

(どうするっ!? どうすれば……っ)

ミーファを背負ってでもなんとか逃げ切ろうかと思っただが、そこでフェイススはミーファにエクス、次いで後方の警備兵を見やると一言、

「こつちだっ」

疲弊しているミーファの手を取って、少年は駆けだした。

そんなフェイススの姿を見て、エクスは若干ながら驚いた。

ミーファから話には聞いたが、この少年の行動が如何なる理由からきているのがエクスには判断しかねたからだ。

無償で助けてくれる、と言ったお人好しなのは分らないが、しかしこのままでいても埒が明かないことは明白だった。

(今はこのフェイススという彼に賭けてみるしかないか……?)

何より昨日、ミーファを救ったらしいこの少年が自分たちを陥れようと思っていると考えにくい。

ミーファの手を引くフェイススを追って、エクスはその後を付いて行く。

少年はミーファを強引に何とか走らせ、外套をはためかせながら前へ前へと引つ張っていくが、ミーファの手を引いているからか、追っ手を引き離すに十分な速さは出ていない。

一度曲がり角を曲がっても、すぐに後方から追いつがってくるのが分かる。

(……逃げ切れないか)

エクスはそう判断すると、あらゆる考えが脳裏に浮かび上がり、「フェイススとやら、私が足止めをする！ だからミーファ様を

その人のことをっ！」

先に行くフェイシスに向かって叫んだ。

無論、この少年を信頼している訳ではないが、このままではいずれは捕まる。しかし今ならまだ足止めをすれば間に合うかも知れない。

ここでミーファと二人で捕まるよりも、彼女一人でも逃がせる道があるのなら、

（騎士たる自分はそうすべきだろう。いや、そうすべきなのだった）
もしかすればフェイシスがこの後、ミーファを助けてくれる可能性もある。

そう考えたエクスの、複雑な感情の入り交じった叫びはしかし、「馬鹿を言うなっ、怪我人を一人置いて行けるわけないだろう！」

「なっ」

言葉がなかった。

赤の他人もいいところのエクスとミーファに対するこの言動。

それにどうして怪我をしていると分かったのか。動きから読もうにも、外套で身体の動きはよく見えないはず。

そんなエクスの心情など露知らず、フェイシスは続けて口を開いた。

「……貴女に二つ問いたいつ」

「なにか？」

フェイシスは走りながら視線を向けてくる。

先ほどとは違うその目は少年とは思えない仄暗さがあり、エクスは一瞬たじろいでしまう。

「ミーファと貴女は何者か？ 貴方たちは何らかの悪を為した法を侵したのかっ？」

その瞳の奥に宿る言いしれぬ何かは、外見から窺える年齢以上の何かを感じさせるのだった。

エクスは困惑した。

ここで虚言を吐くことはできる。だが今の自分を見るこのフェイシスという少年の目からは悪意というものが感じられない。

代わりに後悔や懺悔といった明るくはない何か、後ろめたい何かを感じる。

（ どうする？ 答えるか、答えまいか……？ ）

しかしフェイススの目からは有無を言わさぬ圧力が感じられた。そんな感覚的な錯覚めいたものが、目の前の少年がただ者ではないことをエクスに悟らせ、それが彼女にはきつかけとなった。

「私たちが何者であるのか、今は明かすことが出来ない。しかし私たちは断じて悪行など為してはいないっ」

自分たちが誰であるのかを明かすのはさすがに出来ないが、悪を為していないことは確かだ。

それをできるだけ真剣に伝えたエクスは返事を待たず後ろを振り返る。

依然として三人の警備兵が追いかけてきており、貧民区の住民たちはこの寂れた区画にはめつたに現れない警備兵を見て何事かと慌てている。

と、そこで前方から聞こえていた足音が急に止まった。エクスは慌てて身体を反らし、衝突を避ける。

「何をしているだ！？ 早く逃げなければっ」

エクスは立ち止まったフェイススに向かって言い放ったが、彼はこちらを見て、

「事情は後で詳しく聞かせてもらいますよ……？」

なぜか自嘲気味に笑ってささやいた。

ミーファはもう体力の限界なのか、荒い呼吸を繰り返して、額に汗で張り付いた髪を鬱陶しそうにぬぐっている。そんな彼女からフェイススは手を離して、振り返る。

追ってきていた警備兵は急に立ち止まったエクスたちに不信感を抱いたのか、一定の距離を保って、腰の剣に手を添えながら警告を発してきた。

「逃げるのはやめさない！ 大人しく捕まれば危害は加えません。もし、抵抗するのならば……」

「……………」

これ以上は言わなくても分かるな、と言いたげに柄を握りしめる三人の警備兵は、じりじりとこちらに詰め寄ってくる。

対してフェイシスは落ち着いた様子で対面し、外套の下から細い刀身の剣をさつと引き抜いた。

白く輝く刀身は、しかしそのあまりに研ぎ澄まされた伶俐さによって逆に不吉な雰囲気醸し出している。

フェイシスが無言で左半身を引き、その手にある細剣を水平に構えた。

「フェイ……シス」

息が整ってきたミーファはフェイシスを見て、

「昨日、みたいに……殺したりはしないで」

小さく呟くように口にしたその言葉に、フェイシスは僅かに頭を動かした程度で答えた。

（…………この隙に逃げるか……？　だがミーファ様はまだそう長くは走れまい）

エクスは焦る内心を悟られない様に、ミーファの側に寄って支える。

少年が構えたことで追ってきた警備兵は一樣に顔をしかめると、正面にいた中年の男が叫んだ

「　捕らえろっ！　この少年だけなら最悪殺しても構わんっ」

そう言うやいなや、一斉に三人は動き出した。

〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃
〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃

「そんな……こんな、ことが……？」

エクスは呆然としていた。

なぜならば逃げる逃げないの選択をしている間に、フェイシスと警備兵三人の戦闘はあっという間に終わってしまったからだ。

たとえ怪我していようと、自分も剣を抜いて加勢すべきかとも一瞬脳裏を過ぎったが、その必要がないことを最初の一人が倒れたところで実感した。

ありえないことだ、という考えがエクスを占めていた。

通常、一対一の剣による戦闘でも自分より体格が勝っているというだけで、当然の如く相手が有利になる。

体格が違うということはすなわち骨格が違う。骨格が違えば筋肉の付きやすさや多寡に影響し、そして筋力は基礎的な瞬発力や膂力を左右する。

そしてそれは剣速や踏み込みに大きく影響し、その優劣が戦闘の見えざる根本的な天秤を傾ける。

フェイシスは見たところミーフアと同じ年ほどだ。外套に隠れて分かりにくいだが、戦闘中に垣間見えた身体は別段恵まれているわけではなかった。

しかし彼は苦もなく大の男を三人同時に相手して、気絶せしめた。見たところ相手方はさして強いというわけではなかったが、気絶させるというのは存外に殺すことよりも難しいものなのだ。

体格　もとい筋力で勝る相手に対して勝利するには技量しかない。

如何に剣術・体術の類いが優れているか。それが身体的に劣る相手に対して見いだせる勝機だ。

たとえ子供が岩のような大男と戦っても、身体的な優劣を覆せるだけの技量があれば子供が大男を殺せることもある。それをエクスはこれまでの経験から熟知していた。

だが、この少年は異常だった。

技量というよりもその判断力　いや、単なる感覚なのだろうか。彼の戦い方は個性的すぎた。

剣と剣での戦いは思いのほか緊張するものだ。命のやり取りなの

だから当然で、一步間違えば即死に直結するといつても過言ではない。

そんな最中にフェイシスは未練なく剣を手放したかと思つたら、まるで恐れなど微塵も抱いていないかのように懐に飛び込んで掌底を叩き込むようなことをする。

「貴方は、一体……？」

意識せず呟きが漏れた。

フェイシスはその声に反応することなく、地に落ちていた細剣を拾い上げて鞘に収める。

彼の横顔を見ると、その少年から青年へと変わりつつある顔つきからは何の感情も読み取れなかった。

いや、むしろ努めて無表情にしているかのように感じる。

エクスは幾分か冷静になると、先の戦闘での不可解な点をもう一度思い出していた。

（あの剣技に筋力……）

驚きが勝りすぎて失念していたが、瞬発力や腕力といった筋力、それに牽制のために放った彼の剣技。

それらはどう見ても彼の身体からは出せないような剣速を誇っていたことはエク스에疑問を抱かせるに十分だった。

（フェイシスという名前……まさか、彼は………いや、あり得ないか）

おかしな というよりもあり得ないのだが、妙な心当たりがあるだけにますますフェイシスという少年に対しては疑問が思い浮かぶ。

「行こう」

フェイシスは先の能面のような表情から一転して、微笑をたたえながら言った。

その姿からはとても先ほどの華麗とも異常いえる戦いを演じた少年にはまるで見えない。

「昨日も見ただけ、やっぱりすごいね、フェイツ！」

「ん？ あ、ああ……そんなことより、早く移動した方が良い」

ミーファはある程度呼吸が落ち着いたようだが、今度は先のフェイシスの戦いに興奮しているようだった。

「それにちゃんと気絶させてくれたね。……人を殺すということは罪深いことだから……」

「……………」

ミーファは悲しそうに顔を歪めて呟くと、フェイシスの顔には見るからに影が差した。それを見たミーファは、

「あ、違うの……昨日のあれは、仕方がなかったと思うよ。フェイは私とリムのためにやったんだよね」

彼女はエクスも聞いた昨日の出来事のことを言っているらしく、取り繕うようにそう言ったミーファは快活さを取り繕った声で礼を口にした。

だがそれを聞いたフェイシスの表情にあまり変化はなく、どこか陰鬱としている。

少年は何かを振り払うように首を振ると、

「……とにかく、早くこの区画からは出た方が良い」

この区画 貧民区のことだろう。と考えたところで、エクスはようやく気がついた。

自分たち ではなく、主に倒れた三人の警備兵を影から見ている視線たちに。

窓や道の角から覗き込むようにしてこちらの様子を窺う者たちからは、荒々しい何かを感じる。

獲物を虎視眈々と狙う獣のような彼らの視線は、今まさに動きだそうと燻っているように見えるが、おそらくは警備兵三人の身ぐるみを剥ぐためだろう。

貧民区とはその名の通りで、都市で生計を立てられない者が安全という蜜によって都市に住むことに固執している人間たちの巢窟なのだ。

そんな彼らが今すぐに襲ってこないのは、おそらく

（先の戦闘でこの少年を警戒しているから、か。だがいつまでも彼らが待っているとは限らない。下手をすれば我々も襲われかねないな）

フェイスもミーファもそしてエクス自身も上等な格好をしているわけではないが、それでも貧民区の住民にとっては格好の獲物なのだろう。

「行くっ」

先ほどと同じ台詞のフェイスに従って、彼を先頭にエクスとミーファは急いでその場を後にした。

第十一節・突飛な話、揺れてないから

フェイシスは痛む頬を撫でながら、隣に立つ少女にどう説明した
ものか考えていた。

「兄さん、二人も女性を連れ帰ってきて、一体なにをしようとしていたのですか？」

「そりゃ、ナニだろ」

「ヴァンさんには聞いていませんっ！」

イヴリーナが顔を赤くしながら興奮気味に怒鳴ると、壁に背を預けていたヴァンは肩を竦めて苦笑した。

そんなどこか飄々としている男を尻目に、フェイシスは丸テーブルの対面に座っている女性二人を見遣ると、二人とも気まずそうに俯いていた。

なぜか警備兵に追われていた二人 昨日も会ったミーファとその連れらしい女性をとりあえず商業区に位置する宿屋に連れ帰ってきたのがつい先ほどのこと。

しかし不慮の事故 ではなく、一人の男に嵌められたせいでフェイシスの片頬は赤くなっていた。

「それに兄さん、部屋に入るときはきちんとノックをしてくださいっ」

「いや……だつて急いでだし、それにヴァンが入ればいいって……」
視線で人を殺せたら確実に死んでいるであろう眼光でイヴリーナはヴァンを睨み付けた。

対してゆつたりとした東方風の恰好の彼は度量までゆつたりとしているのか、どこ吹く風といった様子で涼しく受け流している。

「フェイ、のぞきはだめだよっ」

椅子に座ったフェイシスの膝上に乗っかるようにして座っている黒髪の童女が、フェイシスの頭を小さく叩いた。

先の一撃に比べれば痛みなどないに等しいものだが、今まさに痛

んでいる最中であるフェイシスの良心には痛烈すぎる追撃に等しかった。

それが我が子のようにも妹のようにも可愛がっているリムからともなれば、尚更である。

「……ご、ごめん」

フェイシスは謝りつつ、先ほどまでのことを思い返す。

ミーファともう一人の女性を連れて帰ってきたとき、宿主や他の客に怪しまれないようにと思い、ミーファに了承をもらって左手で肩を抱き、もう一人の女性の痛々しい視線を受けつつも、両手に花 左手しかないが という状態で宿の扉を開けた。

追われているらしい彼女らが宿主から詮索されないようにという配慮からの行動だったわけだが、その心遣いも功を奏し、宿主も客が連れ込んだ女だと勘違いしたのか、にやけた表情を向けてきただけで言及されるようなことはなかった。

そうして無事に部屋まで来られた……のだが、

「俺はフェイシスのための思って、親切心で黙ってたんだがな」

部屋に入ろうと階段を上がって借り部屋にたどり着いたのだが、目当ての部屋の扉の前でヴァンが所在なさげに突っ立っていたのだ。引っかかりを覚えたものの、いつまでも肩を抱き寄せているミーファに悪かったため、早々に部屋に入って解放してあげようと思っただけでフェイシスはヴァンが部屋の前で待機していることを大して考えず、そのまま扉を開いた。

「ヴァン……お前のおかげで俺はリムの本気というものを今日はじめて味わったぞ……」

「そりゃ良かったな。リムの平手打ちはどうだった？」

「良くねえよっ、それに普通に痛かったよ！」

木製の意外に頑丈そうな扉を開けると、目に入ってきたのは半裸状態のイヴリーナで、加えてそんな彼女と目が合ってしまった。

それは考えるまでもなく着替えている最中であり、さすがにフェイシスもその状況に固まってしまった。

何せ偽りとはいえ両手に花という状態で部屋に入ると、そこではよく知る少女が着替え中だったのだ。なんと言えば良いかなどまだ十七年しか生きていない少年に分かるうはずもない。

完全に言葉に詰まったフェイシスはしばらく動けず、そしてそれはイヴリーナも同様だったのか下着状態で衣服を手に持ったまま固まっていた。

だがそこでリムが黒い長髪をなびかせてフェイシスの元へと走り寄ってきて、跳躍してフェイシスの頬に平手打ちを喰らわせたのだ。それでやっと硬直が解けて、急いで扉を閉めたのだった。

「リムも強くなったようですね」

そうして、このイヴリーナがリムの頭を撫でているという状況につながるのである。

フェイシスの傍らに立つイヴリーナは溜息を吐いて、

「先ほどの件は後で兄さんには追求するとして」

「するのか……」

「それはそうと、この方たちはどうしたのですか？」

イヴリーナは視線をミーファとその隣の凜とした雰囲気纏っている女性へと向けた。

「まあ、その……すごく困ってたようだったから」

「分かりました」

皆まで言うなと言外に含ませて、長身の少女は嘆息した。

「で、どう困っていたんだ？」

ヴァンが興味ありげな声で尋ねてきた。

「追われていたんだ、警備兵に」

「は？」 「え？」

かなり省略して言ったためにうまく伝わらなかったのか、ヴァンとイヴリーナの二人は啞然としていた。

フェイシスは詳しく説明したほうが良いと思い、

「ええつとだな、警備兵が」

「……おいおい、フェイシス。一応お前の性格は理解しているつも

りだが、なんでまた警備兵に追われてるような奴を助けたりしたんだ？」

「フェイさ　いえ、兄さん……正気ですか？」

すぐに口を開いてヴァンとイヴリーナが言及してきた。

ヴァンはどこか訝しげにフェイシスと座っている女性二人を眺め、イヴリーナは戸惑っているのか、呼び方が素に戻りかけていた。

「いや、そんなことはない。というか　」

「ミーファ、おはよう」

フェイシスはどうして連れてきたのかを答えようとしたのだが、そこでリムの朗らかさを含んだ声に遮られた。

「おはよう、リム」

それに対するミーファも、今この場の雰囲気にな釣り合いな花のような笑顔で返した。まるで周囲を気にしていないような素振りである。

そんなリムとミーファはとりあえず放置して、フェイシスは疑問を浮かべるヴァンとイヴリーナに大まかな経緯を話した。

「……………なるほど。まあお前の言いたいことはだいたい分かったが、しかしこのお嬢ちゃんたちが警備兵に追われているというのは確かなんだろう？　てことは、何かしら危険があるんじゃないかねえのか？」

イヴリーナはヴァンの言葉に頷いて、

「貴女方は一体なにをしたのですか？　場合によってはすぐにここから去ってもらわなくてはなりません」

フェイシスやリムだけが居るときには見せない険のある声で、冷めた表情と共にイヴリーナはそう口にした。

「……………詳しい事情は言えません。ですがお願いです、私たちがこの都市から出るのに協力してもらえませんか？」

「事情は言えないのに協力しろと？　たまたま兄さんに助けられたからって、その優しさに付け込んで甘えるつもりですか？」

イヴリーナは剣呑さを隠そうともしない。

だがそんな彼女の放つ敵意を孕んだ雰囲気を払拭するように、
「……おねえさん、なんて名前？ わたしはリムだよ」

リムが真つ直ぐにミーファの隣に座る女性を見つめながら話しかけた。

そんな童女の視線を受けた凜々しい彼女は、しかしリムを　おそらくはその瞳を見たのだろう、目を見開いて彼女はしばし沈黙した。

フェイススからすればもはや恒例ともいえる反応だが、リムの黄玉のような瞳を初めて見る人間の反応は二種類だけだったので、さして彼女の驚きには疑問を感じない。

一つは今まさに相対している女性と同じように、単に驚くだけ。反してもう一方は昨日の男のように、悪魔だといって恐怖し罵ったりする。

主に前者は理解ある理性的なあるいは分別のある者がする反応で、後者は敬虔な聖神教徒が見たことのないものに恐怖を覚える類いの臆病者の反応だ。

といっても聖神教徒だからといって誰もが恐怖するわけではない。そんなことになればこの国の大半の人間がリムを忌避してしまうことだろう。

リムの瞳に見とれていたことに気付いたのか、女性はハツとなつて小さく咳払いし、

「　申し訳ありません。私はエクス……エクス・オフイムです。」

こちらは　「

私はミーファ」

ミーファはイヴリーナとヴァンの方へ視線を向けて微笑する。

そんなミーファに圧されてなのか、とりあえず各々が自己紹介をした。

イヴリーナは渋々といった様子で「イヴリーナです」とだけ言い、そしてヴァンはどこか芝居がかった口調で「俺はヴァン・ストレルだ」と低めの声で言った。

「それでエクスさん。……正直、俺は貴女たちが悪い人ではないと思っ
ています。それに出来れば協力してあげたいのですが……やっ
ぱり、理由も分からないままでは協力は出来ません」

フェイススは思った通りのことを伝えた。

いくら協力したくとも、イヴリーナとリムのこともある。彼女ら
の身に危険が及ぶようなことはなるべく避けたかった。

「……それは、ですが」

「エクス。いいよ、話して」

戸惑って口を閉ざすエクスに、ミーファは気負いなくそう言った。
「ですがミーファ様っ」

だがそんな少女の言葉に思わずといった様子で、ミーファの顔を
見るエクス。

「エクス、あなたが『ミーファ様』って言っている時点で、私たち
ってすごく怪しいと思わない？」

「あっ……」

「それにフェイススには二回も助けてもらったし、悪い人じゃない
よ。っていうか、むしろいい人だよ。いい人過ぎる人」

ミーファの説得するような言葉に、なぜかフェイススの隣に立つ
イヴリーナが得意げに頷く。先ほどの剣呑さが嘘のように薄れてい
るが、敢えてフェイススは何も言わない。

「で、話はまとまったかい、『ミーファ様』？」

ヴァンは首を傾けながらからかうように言っと、

「貴様、ミーファ様を愚弄するなっ！」

「……そう怒りなさんな。お堅いお嬢さんだね」

ヴァンは冗談交じりで言ったにも関わらず思いのほか真剣な表情
で反応したエクスに対し、そんな彼女の様子などまるで気にしてい
ないといった軽い調子で言い返した。

そんなヴァンの姿や性格からはまるで三十代には見えない。

「ヴァン」

さすがに失礼だと思ったフェイススは、責めるように男の名前を

呼ぶと彼は苦笑しながら肩を竦めて目を閉じた。

ヴァンとのやり取りを恥じるように顔を顰めて一度深呼吸したエクスは、隣に腰を下ろしているミーファに目を向けてから、

「分かりました。ですが話を聞いたからには協力してもらいます。よろしいですか？」

「ちよつ、ちよつと待ってください。聞いたからといって必ず協力しなければいけないというのは、どういふことなんですかっ？」
エクスの強引とも横暴いえる発言に、フェイスが反応するより前にイヴリーナが口を挟んだ。

やはりまだ疑念が晴れていないらしい少女は睨み付けるようにエクスの目を凝視している。

だが当のエクスは意思の強さが見て取れるイヴリーナの視線にも表情にも怖じ気づく様子はなく、

「それほどに重要で危険な話なのです」
傍らに立つイヴリーナではなく、フェイスの顔を見てそう答えた。

真剣味の感じられる彼女の声はなぜか緊張しているのか張り詰めている。

「……………」
イヴリーナが視線を投げかけてきたのが分かり、フェイスも横目に彼女の表情を窺う。

しばし視線が交錯したが、彼女に向かって頷くと、

「え、ちよつ フェイ様っ!？」

「フェイ……様？」

ミーファが首をかしげるが、

「あ、いえ、その……彼女の真似ですっ」

イヴリーナがどこか早口にそう言つと、エクスの凜とした顔が僅かに引きつった様に見えた。

「ではなくてですね……良いのですか、兄さん？ 危険な話らしいのですよ?」

「でも悪い人には見えない。それに協力といつても都市を出るまでなんだろう？ それくらいは問題ないさ」

フェイシスはイヴリーナに言いつつエクスに視線を投げかけると、彼女は都市を出るまでという言葉に首を縦に振った。

「……そこまで言うのなら、私は反対しません」

「まあ、俺はお前の判断を尊重するさ」

イヴリーナは渋々に、ヴァンは軽く頷いた。

それを確認したフェイシスはエクスに顔を向ける。

彼女はまるで一世一代の告白でもするのかといった程に真剣な表情をしており、余程の話なのか、エクスのその雰囲気思わず背筋が伸びてしまう。

エクスは「ではお話しします」と短く言うと、考えるように少し目を閉じる。

彼女の目蓋が開かれるまでに感じる緊張感から相当な話ということが窺え、フェイシスは自身が生唾を飲み込んだ音が耳に重く響いたように感じた。

そうして微妙な数瞬の沈黙を破って出てきた言葉は、想像を絶する というよりも啞然とするような荒唐無稽なものだった。

「そうですね……まず、結論から言いますと、こちらのミーファ様は王位継承者なのです」

「……………」

沈黙、などという生やさしいものではなく、時間が止まってしまったかのような静けさが六人のいる一室を満たした。

そしてそんな痛々しいくらいの静寂を破ったのは、この中では最年長者であるヴァンだった。

「お嬢ちゃん、今までの俺たちのやりとりから、一応この話が真面目なものだったことは分かっているよな？」

いつもはどこかいい加減な彼も、その声には苛立ちのようなもの

を含まれていた。

エクスと言ったことは、それくらい冗談の過ぎる内容だったのだ。対して引き締まった表情のエクスは、

「当然です」

と、重たく頷いた。

そんな反応にヴァンは真偽を計りかねているようで、それ以上は何も口にしなかった。

「続けてください」

イヴリーナが慚然とした声で促すと、エクスはとつとつと語り出した。

ミーファは、都市アクナリアを含む土地を統治するミエディア王国の国王であるミルデインナイト四世　もといゼルスクス・ミル・デルフィリアの嫡子だという。

しかし彼女の母は城で働いていた侍従であり、それ故に世間には彼女の存在が伏せられ、王都から遠く離れた場所で暮らさざるを得なかったらしい。

そしてその後、国王は他国から妻を娶って二人の息子が生まれたが、その息子たちも幼くして亡くなった。これはフェイススも知っていたことだった。

だがその後は子宝に恵まれず、そして一月ほど前に国王が亡くなったのだという。

そこで次の王位継承者は王の弟であった王国西部一体の領主であるノザリア大公イジエスということになるらしいのだが、その彼も王の死の数ヶ月前に息を引き取っていた。

そうして自然と次の継承者は王弟の息子であるアトウニスという青年が浮かび上がったのだが、重臣たちはこれに難色を示したという。

それも当然で、アトウニスはすでに大公の地位を父から引き継いでいる。

その上さらに国王になってしまえば、王国の均衡が保たれない。大領地をもった領主でありながら、その領主をまとめる国王になれば自分の領地に対して様々な権利を優先させられるためだからだ。

そこで新たな王位継承者として浮かび上がったのが、ミーファ・ミステイリーファ・ミル・デルフィリアだという。

彼女は父親から正当な血を受け継ぎながらも嫡子であり、母親のことに目を瞑れば王弟の息子であるアトウニスよりも重臣たちとしては傀儡として操りやすいし、彼女には何の後ろ盾もない。

しかし重臣たちも一致団結とはいかず……そうして『王女派』と『王弟派』 正確には王弟の息子なのだが という二つの派閥に別れてしまった。

ミーファは『王女派』の貴族により王都に来るように言われたのだが、その道中に『王弟派』に雇われたらしい野盗に襲撃され、結果彼女の騎士であるエクスを残して全滅。

そうして都市アクナリアにいた『王女派』の貴族であるミクヴァンに助けを求めたところ、実は彼が『王弟派』であったために捕まりそうになった……ということらしい。

「……はは……さすがに嘘だと分かるくらい下手な作り話だな」
「……ですね」

ヴァンとイヴリーナの乾いた声が、話し終えた後の僅かな静寂を打ち破るように発せられた。見れば二人とも顔が引きつっている。

「本当のことです」

だが二人の当惑を追い討つかのように首を横に振るエクス。

自称ここミエディア王国の騎士だという彼女の、その後頭部で結われた一房の髪が否定の動作と共に小さく揺れる。

この妙な緊張感が漂う室内において、それはどこか空虚な所作だった。

「……………」
フェイススとしても驚愕すら超えてしまって、なぜか冷静になっ

ている自分がおかしかった。

故にイヴリーナとヴァンの気持ちは手に取るように分かる。

「お嬢ちゃんは嘘の話で俺たちに無理矢理協力させようとしているのか？ にはしてはデカイ話すぎて逆に関わりたくないんだが」

「私は騎士です！ 嘘などつきませんっ！」

「……………」

ヴァンは思わぬところで激高されたことに気押されたのか押し黙った。

それはフェイススとしても同じだったが、それ以上に彼女が本物の騎士としての誇りを持っていることを半ば直感的に察した。

過去に騎士というものがどういった存在なのかを考えていたフェイススにとってはそれが嫌というほどに分かったのだ。

「リム、エクスさんは少しでも嘘をついているか？」

だが万が一ということもある。これはさすがに己の勘だけで判断して良いものではない。

そう思って念のため、リムの絶対的ともいえる『感覚』に頼ったのだが、

「エクスの話はうそじゃないよ」

先ほどの信じがたい話のすべてが本当だということを、フェイススが信頼を置く童女に保証された。

いや、この場合はされてしまったと言うべきだろうか。

ヴァンとイヴリーナはそれぞれ「おいおい」「……………兄さん」と驚嘆と戸惑いの声を漏らしている。

「リムはどうしてエクスが嘘ついてないって分かるの？」

「揺れてないから」

ミーファのもっともな疑問に、対するリムは一言で答えた。

「揺れ…………？ それってどういう意味？」

「ま、とにかく俺たちはリムを信用している。だからまあ、とりあえずエクスさんの話は信じましょう」

ミーファの言及を受け流しながら話の軌道を修正すると、エクス

がどこか釈然としない眼差しを向けてきたものの、こちらを真っ直ぐに見つめながら、

「……正直に話しました。これで協力してくれますね？」

「そう、ですね……」

そういう約束だったのだが、さすがにフェイスも些か大きすぎる話に尻込みしてしまっていた。

「兄さん、関わらない方が良いですよ。危険です！ 下手をすれば私たちはこの国 ミエディア王国から狙われかねませんっ」

「……この都市を出るまでさ。それくらいなら、な」

イヴリーナは普段は見せない妙に焦った表情で訴えてくる。

フェイスもその気持ちは理解できるが、家族も同然の彼女の意見とて、しかし今回は譲れない。

今のエクスの話を聞いて自身が怖じ気づいていないといえは嘘になるのだが、一方でとつくの昔に見限ったはずの神にこの幸運を感じ謝してもいた。

ここでミーファたちに協力すれば、ここ二年近くの放浪で得られなかった何かしらの答えが出るのではないかと。

今フェイスの心中を占めるのは過去の記憶だった。

屈辱と後悔と絶望の中で交わした約束と、途絶えてしまった己の道。そして善を為すという戒めのような あるいは強迫観念のよ
うな使命感。

「ま、お前がそう決断したなら、俺は何も言うまい。ただ見守るだけだ」

ヴァンはいつもの通り、なにを考えているのか判断しかねる様子で頷いた。

「できれば協力してほしいんだけど」

「……気が向いたら、な」

先ほどの驚愕や不信感はどこへやら、ヴァンは何かを期待しているような あるいは面白がっているような調子だ。

「イヴも悪いけど、今回はどうしても譲れない」

今度は視線をすぐ隣に立つ少女へと向ける。

イヴリーナは何かを言おうとしたところで小さく息をのんで、顔両脇の胸部までしなだれかかる長い髪を揺らした。

「もしかして、フェイ様……」

ささやき程度とはいえ、ついに人前にも関わらず呼び方が完全に戻っているイヴリーナは、しかし最後まで言わず首を振った。

そして諦めたかのように嘆息しつつ、次の瞬間には困惑と喜びが入り交じった何ともいえない表情で、

「今回も、の間違いではないのですか、兄さん？」

だが一方でどこか悲しそうに微笑した。

イヴリーナという少女を深く理解していると自負しているフェイシスは、彼女の心変わりとその微妙な表情から伝わる配慮に有り難く思いつつ頷いた。

「リムにも迷惑かけるかもしれないけど……」

「わたしは誰かを助けるためにがんばるフェイが、大好きだよ」

そう口にしたリムの、絹糸の如く繊細な髪を撫でながら視線をテーブルを挟んだ向こう側に向けると、ミーファとエクスがこちらをじっと見つめてきていた。

彼女らを見無視して身内ばかりで話してしまったことを不快に思っているのかと判断しかけたが、どうやらそうではないようだ。

二人の表情は何か珍しいものでも見るかのようなもので、小さく口を開けて、瞬きせずにこちらを見つめている。

おそろくだが、先の話聞いてこちらから食い付いてくるとは思ってもいなかっただろう。

フェイシスは言いしれぬ居たたまれなさを感じ、彼女らにわざとらしくどうかしたのかと問うと、

「あ、いえ、何でもありません……話は纏まったようですね」

咳払いしながら答えたエクスの表情はすでに引き締まっており、しかしどこか信じられないといった様相をも見せていた。

「ご協力、感謝します」

エクスは感情の窺いづらい声音でそう言つと、さっそくといった
感じにこれからのことを切り出した。

そうして、フェイスはミアファとエクスの都市からの脱出
に力を貸すことになった。

第十二節・少年少女は語り合う

エクスとミーファがフェイシスたちに協力を求めてから数刻後。陽が天高く昇り、一日で最も明るく暑い時間帯にエクスはベッドでうつ伏せになっていた。

「エクス、次からはちゃんと行ってよね」

ミーファの普段は耳にすることのない少し怒ったような声を聞きながら、エクスは痛む左肩と右腿の治療を受けていた。

治療　　といっても、傷口を洗って清潔な包帯を巻くだけの簡素なものだ。

今朝方の逃走劇のせいで案の定、服は血で汚れてしまったので今はイヴリーナのを借りており、長身の少女の服はエクスでも着られるものだった。

袖なしの上衣と極端に短い　素足を晒しているといっても良いズボンという服装で、そういった恰好に慣れていないエクスは心穏やかでなかった。

幸いなのは丈の短い長袖の上着と、膝丈まである腰巻きまで借りられたことだった。とはいえ、それも今はつけていないのだが。

「さっきの話聞いて疑問なんだが……王女様が騎士に治療するって、どうなんだ？」

フェイシスがエクスの考えないようにしていたことを指摘してきた。

そしてどういう訳か、他人から言われると自分で思っていたよりも相当に情けなくなる。

「申し訳ありません、ミーファ様……私は騎士失格です……っ」

「　ていつ」

己の実力不足にやりきれなさを感じたエクスは、つい口から自責の言葉が出てしまったのだが、どういう訳かミーファは右肩の傷口を叩いてきた。

「いつ え？ ……あの、ミーファ様？」

突然のことに戸惑ってしてしまうエクス。

あまりの不意打ちとそれによる困惑で凜としていた声ではなく、柔らかな素の声が出てしまう。

「そういうことは言わないでっ」

背中越しに聞こえるミーファの声からは言葉とは裏腹に優しさが感じられる。

エクスには顔が見えなくとも、今のミーファの表情はなんとなく想像がついた。

こういったことはエクスがミーファの騎士として仕えたこの一月の中で何度かあったことで、おそらくいまのミーファは同性のエクスとて感嘆するような整った顔を小さく歪めていることだろう。

眉根を寄せて口を尖らせたような表情がエクスの脳裏に思い浮かんだ。

「王女様と騎士様っていう間柄なのに、仲が良いんだな」

フェイスが意外そうに呟いた。その口調からは嫌みではなく率直な疑問といった念が察せられる。

先刻の重大過ぎた打ち明け話の後、とりあえずは服装を何とかした方がいいというのはフェイスの案だった。

今は借りているとは言え、やはり目立たない無難な衣服は必要だからだ。

そのため先ほど、どこか大人びた風な少女のイヴリーナとヴァンと名乗った性格の掴みにくい男の二人は、ミーファとエクスの服とその他に必要なものを買いに出発した。

フェイスとリムは先日、ミーファを助けてもらった折り警備兵に目を付けられたらしいので宿で待機している。

なので今、室内にはフェイスとリム、ミーファとエクスの四人しかない。

「私ってお堅いのか苦手だからね。エクスと出会った頃はもの凄く仰々しくてちょっと困ったよー」

「いえ、ミーファ様、それが当たり前なのです。貴方様は仮にも王族なのですから」

フェイシスたちから借り受けた薬を傷口に塗ってもらいながら、エクスは申し訳なさを感じながらもそう言った。

ミーファという少女と短期間とはいえ共に過ごしたエクスには、彼女の治療行為に口を出しても辞めないということは考えるまでもないことだ。

「というか、ミーファって名前はミスティリーファの略だったんだよな。……一応訊きたいんだけど、俺たちはミーファって呼んで良いのか？」

フェイシスが気後れしたようにたどたどしく言ったその言葉に、「いいよいいよ。逆にミーファって呼んでくれた方が嬉しいしね。」

あ、あと念のために言うておくと、変に丁寧な話し方とかもしなくていいよ。さつきも言ったけど堅苦しいのは苦手だし」

「そつか。それじゃあそうさせてもらうけど……」
まだ若干気後れしているように言うフェイシス。そしてそんな彼とは対照的に、

「エクス、その怪我どうしたの？」
長い黒髪が綺麗な可愛らしい童女が何の気負いもなくベッドの脇から訊ねてきた。

うつ伏せなのであまり動かせない顔を横に向けると、黄玉色をした大きな瞳とぶつかつた。

金と言うほどには重々しくもない色をしたその瞳は、見る者に不思議な心情を抱かせるよ異様ともいえる雰囲気がある。

エクスはこのリムという少女を初めて見たとき、失礼にも聖神教の悪魔を連想してしまった。

だがこの子は明らかに人間だし、それにミーファのように明るく朗らかなところがエクスの警戒心を和らげる。

「これは……少し人に襲われまして」
「痛むの？」

「ええ、まあ少しだけ」

エクスは苦笑しながら答えた。

リムは初対面の相手にも関わらず心配してくれているようで、そこがまたエクスにとっての主であるミーファとの相似性を一層に強くさせる。

「フェイもたまに怪我してくるけど、そのときは『死ぬほど痛い』って言ってるよ」

「ちよっ、おいリム、それは冗談で言っただけでだな」

フェイシスは慌てて言いつくろっように声を上げ、そんな少年の様子にミーファは小さく笑った。

だがエクスはフェイシス・クーリオという人間を様々な面で判断しかねていた。

まずそもそも、どうして自分たちのような初対面の相手を助けるようなことをしたのかが疑問だった。

先ほどの話　ミーファが王位継承権をもっており、それ故に政敵に狙われてるといったことを聞いて、なぜ逆に食い付くようにこちらに協力することを了承したのか。

彼は昨日、ミーファを助けるために一人の男を殺したという。昨日ミーファから聞いたこの話から推測すれば、それが理由で都市から重犯罪者として追われているはずだ。

そう考えれば、彼もまた早々に都市を出たいと思っっていると思えば納得できなくもないが……

普通なら疑念を抱く程度では足りなくらい怪しい少年だが、彼の連れであるリムにイヴリーナ、そしてヴァンといった者たちはそんな彼の行動を日常茶飯事のような態度で接していた。

そしてエクスには彼の実力も疑問だった。

先ほど助けられた折に見せたあの力量は尋常ではなく、エクスが騎士候補生の頃はもとより、正式に騎士となった今でさえ彼に匹敵する者など数えるほどにしか知らない。

それに先ほどは一对多だったが、一对一での戦闘となると思い浮

かんだ実力者たちの数も減少することだろう。

「……………」
考えれば考えるだけ、エクスの中でフェイススという人物に対する疑念が深まった。

ならばと思い、当たり前障りのないところから話を聞き出してみることにした。協力してもらおうとはいえ、エクスとて相手を信用できる情報は欲しいところだ。

「フェイススどの、普段は何をしていますか？」

「どのって……………」

呼ばれ馴れない言い方だったためかフェイススは苦笑を漏らして、

「まあ、そうですね…………一言で言えば、旅かな」

少年は考えるようにゆっくりと答えた。

エクスは半ば予期していた返答を聞いて、彼女の中でさらに疑問が増えた。

予期していたといっても、宿に泊まるのは旅人が商人、それに傭兵などの各地を転々とする者たち以外にはまずあり得ないからだ。

「何か目的があるのですか？」

「目的……………っていえばなんだか大げさだけど、あるにはあるかな」

「それは何かと、聞いてもよろしいですか？」

感情の読み取りにくい声で話すフェイススからは、それが嘘なのかどうかは分からない。

フェイススはエクスの声に頷いて、

「道探し、ですね」

「……………道探し、とは？」

思わぬ言葉について聞き返してしまうエクスに、フェイススは続けた。

「俺は自分が何をすればいいのか、分からないんですよ。自分の歩むべき道は一体なんなのか。これからの未来、自分はどう生きればいいのか。……………それを見失ってからの二年近く、王国内を転々としましたけど……………未だに分からないですね。そもそも自分という人

間すらろくに分からないんです。何がしたいのか、本当はどんな人間なのか、自分のことなのに、まるで……」

苦笑を漏らしつつも自嘲気味に話すフェイシスの言葉からは、彼がそのことを真剣に悩んでいる様がまざまざと伝わってきてエクスは返答に窮してしまう。

フェイシスの意外な言葉にミーファも黙っている。

しかしそこでフェイシスは思い出したように、

「　　っと、すみません。なんか勝手に色々と喋っておいて暗くなっちゃって」

「ああ、いえ」

気まずさを払拭するように少年は困ったように乾いた声で小さく笑った。

「へえー、旅かぁー……そういうのって楽しそうだね」

しかしそんなどこか暗くなってしまった雰囲気をもるで気にしていないかのようにミーファが口を開いた。

「フェイはさ、なんか深刻そうにしてるけど、旅って楽しくない？」

「え、ああ………楽しい、かな」

ミーファの突然の問いに、戸惑ったようにフェイシスは答えた。

「だよ。私も旅してみたいなーって、思うことあるよ。色んな人と出会って、色んな景色を見て、色んなことを体験出来るのって素敵なことだしさ」

「　　」

ミーファのいきなりの発言に驚いているのか、息を詰めるフェイシスにミーファは気にした風もなく続けて、

「フェイは自分の道も自分っていう人間も分からないって言うけどさ、私だっつてそうだよ？」

「　　え？」

「私だっつて自分の道っていうのは、よく分からないよ。突然、お前は王女だーって言われて、それできつとこれから色々なことをさせ

られて……そんな自分も自分の未来も考えてもまるで分からなくてさ。それでも」

続く言葉をミーファは静かに、しかしはつきりと口にした。

「それでも自分で、自分の意思で前に進もうって思う気持ちがあれば、きつと大丈夫だよ。辛いことがあっても、未来が不安で自分のことさえよく分からなくても、それでも前に進んでいけばきつと答えが見つかるよ」

いつの間にかミーファの治療の手は止まっていて、エクスも痛む肩を気にせずに身体を捻ってミーファを見上げた。

その顔はこれまでエクスとて見たことのない表情で、不安を押し隠しながらも笑っているような、そんな表情だった。

そして今の彼女の言葉はミーファ自身に向けて発せられた言葉でもあるのだろう。

いきなり王女という道を歩かされる彼女自身の不安の表れでもあることはエクスには容易に推測できた。

「少なくとも私は、フェイがそうやって悩みながらも前に進んでいてくれて良かったって思うよ。フェイがそうして旅をしてくれていたおかげで、私は命を助けられたといっても過言ではないしね」

照れを隠すように笑うミーファは、乙女という言葉がこれほど似合う少女もいないだろうくらいに可憐だった。

「わたしも、フェイが旅をしてくれていてよかったよ。そうじゃなきゃフェイと出会えなかったから」

リムがフェイシスの腰に抱きつきながら言った。

フェイシスは突然のことに、ミーファの言葉にも、リムの可愛らしい抱擁にもどうすればいいのかしばし困惑しているようだったが、「二人とも、ありがとな。……あと、なんかごめんな。ミーファもエクスさんもほとんど初対面なのに、こんな話になっちゃって」「いーよいーよ。若者は悩めって、前まで住んでた都市の近所のおばさんも言ってたし」

ミーファの先ほどまでとは打って変わって明るい様子に、フェイ

シスは驚いたように目を見開いて、おかしそうに笑いながら言った。
「ミーファって変わってるな」

エクスはこれまで疑問だらけだった少年の心から笑っているような、年相応の笑顔を見て、思わず気が抜けてしまった。

対するミーファもこれまで見た笑顔とはどこか違う笑みを浮かべて、

「そういう君も、なかなか変わってるよ？」

楽しそうに言った。

エクスはそんな少女を見て自然と笑みがこぼれそうになる。

ミーファと共に今いる都市アクナリアまでの道すがら、エクス以外とまともに話して笑ったのはこれが初めてだったからだ。

それはここ一月の間、ミーファの周囲には王都からの使者ばかりで同年代の者同士の会話など皆無だったせいもある。

ひとしきり二人は笑い会った後、

「私も自分の道とか自分のこととかよく分からないけど、それでも前に進んでいくからさ、フェイも頑張ってるね。そうすればいつか答えがでるはずだからさ」

ミーファはもう一度自分の言葉を噛みしめるように穏やかな声でそう口にした。

「っと、そうだ」

そこで少女は思い出したようにエク스에視線を向けて苦笑した。

「治療するの忘れてた。 エクス、うつ伏せになって」

「……はい」

どことなく顔を赤らめているミーファは背中を押すようにエクスを伏せさせた。

おそらくは先ほどの言葉に今更ながらに照れているのだろう、いつもの彼女らしくらず少々焦っているようだった。

それからはフェイシスとリム、ミーファを交えて雑談に興じた。

エクスは先ほどまでのように用心深くはなっていないものの、それでもフェイシスという少年に対しては依然として警戒心を捨てて

はいない。

ミーファは着々と包帯を巻いていき、その間も主にフェイスとミーファが出会ったばかりとは思えないくらいに饒舌に話しているのをエクスは端から聞いていた。

しかし包帯を巻き終わったミーファが一息ついたとき、それまで楽しそうに微笑んでいたリムがまるで天啓でも受けたのかという勢いで窓際へと振り向いた。

「ん？ どうしたリム？」

「……………」

フェイスの言葉が届いていないのか、リムは窓際から天井、天井から扉、そして部屋中を見回すように視線を巡らせており、なぜだかせわしない様子だ。

彼女が顔を動かすたびに艶のある長い髪が踊るように左右に揺れる。

「リム？」

ただならぬ様子を感じたのか、フェイスはリムの顔を覗き込んだ。

「……………フェイス、いまなんだか変な……………ううん、つめたい、いやな気配をかんじた」

「ん？ どういうこと？」

ミーファもリムの急変に戸惑っているようだ。それはエクスとでも変わらないが、今はリムの言った気配とやらが気なる。

「誰かがいたのか？」

「えーっと……………誰かが近くでわたしたちの方を……………意識？ してたみたい」

適切な言葉が思い浮かばないのか、言った後もまだ考えている様子のリムをフェイスは片手で抱え上げた。

ちょうど左腕の下腕部にリムを座らせるようにしている様はまるで親子のようである。

フェイスとリムとの関係は聞いていないが、それでも実の兄弟

や親子以上に仲が良いことはこれまでの言動やいまの光景だけでも十二分に分かる。

「つまり、誰かが俺たちを見ていた　いや、盗み聞いていたってことか？」

「うん。気のせいかもしれないけど」

フェイススは童女を抱えた体勢で、片腕であるが故にリムを撫でることができないことを悔やんでいるかのように身じろぎして、不安げなりムに穏やかな笑みを浮かべてみせた。

「……」

それにしても奇妙な話である。

エクスとて別にリムの言っていることを信じているわけではないが、それでもこの部屋には盗み見る隙間なんてないし、聞き耳を立てようにも壁の厚さからそれも不可能だろう。

それならば窓か扉のどちらかからでしか無理だろうが、それでもここは二階だし、扉の前で突っ立ていればさすがにエクスとて感づくはずだ。

「ま、リムは気にしなくてもいいさ。そのことは俺も気にとめておくから」

フェイススが笑いながら言うと、リムも小さく笑みを浮かべてフェイススに抱きついた。

第十三節・少女は常に彼を想う

フェイススがミーファとエクスを連れてきて、衝撃の話聞いた後、イヴリーナはヴァンと買い物に出ていた。

フェイススが力を貸すと言った女性二人のために、服や都市を出てから必要なものを揃えるためだ。

袖無しの上衣と長袖の上着、短すぎるズボンに前面以外を覆う膝丈の腰巻きという恰好のイヴリーナは、念のために刃物を持っていた。

後ろ腰で二本の小太刀を交差させるように携えており、その姿は年齢以上の長身に相まって様になっている。

「気になるのか？」

商業区の人通りの多い中、イヴリーナの隣を歩くヴァンが唐突に口を開いた。

正午近いからか太陽はすでに天高く昇っており、時間帯からして通りは結構な混雑模様なのだが、彼の声は良く耳に届いた。

「何がですか？」

イヴリーナは横目にヴァンの顔を見た。

おどけたような表情をしているが、顔立ちは無駄に男前なその容姿は三十半ばとは思えないような、妙に軽いつきと感ぜさせる雰囲気纏っており、普段と同じでその真意が掴めない。

「当然、あいつのことだ」

「……………」

ヴァンの言う『あいつ』など考えるまでもない人のことだった。

イヴリーナにとっては自分の命よりも大切といっても過言ではない少年　フェイススのことだ。

右肩にかけた皮の鞆をかけ直しながらイヴリーナは答えた。

「フェイス様がどうかしたんですか？」

「どうしたもこうしたも、お前からすれば今回のことは無視できな

いんじゃないかねえのか？」

「……………」
イヴリーナとしては沈黙で返すしかなかった。そんなことはヴァンに言われるまでもなく自覚しているからだ。

「それに、『フェイ様』じゃなくて『兄さん』だろ？」

「っ！？」

何も無い石畳の道で思わずつんのめりそうになってしまう。

イヴリーナ自身は冷静でいたつもりが、思ったより動揺していたようだ。

「心配なんだろ？」

「それは……………心配ですよ」

つい本心を漏らしてしまう。

このヴァンという男の嫌味なところは、飄々と振る舞いつつも本心を察する術に長けているというところだった。

イヴリーナとしては心情を見透かされているようで複雑な気持ちになるが、以前に何度か相談に乗ってもらったことがあるので、今更だといえは今更だろう。

「フェイさ　兄さんはこの二年近い時間で、やっと少しずつ過去を振り切れてきたのに……………」

吐き出すように口をから出た言葉を、しかしヴァンは黙って聞いている。

「そんなときに王女と騎士を自称する人が現れて、それでフェイ様に助けを求めて……………別にフェイ様を信用していないわけではないんですが、それでももし失敗なんかして、あのミーファとエクスと名乗った人が殺されでもしたら……………」

まだまだ言いたいこともあったが、愚痴のようになりそうだったのでそれ以上は自制する。

するとヴァンはイヴリーナの持っていた鞆をひったくるように手にとって、自身の肩にかけた。

「あ、あのっ……………？」

「まあ俺としては、基本的にあいつの行動に手出し口出しはしないことにしているんだが……それでも、いざつてときは俺を頼ってもいいんだぜ？」

なんとも気障つたらしい口調でそう言ってくるヴァンは、イヴリーナにとって父親のような頼もしさを抱かせる。

「てか一応聞いておくが、あのお嬢ちゃんたちの言っていることが嘘だつてのは疑っていないのか？」

ヴァンは確認するように尋ねてくるが、

「そうですね……心情的には疑いたいですが、リムの『功』は信頼していますし、リム自身が嘘をつくこともないでしょうから、信じざるを得ませんね」

「……俺は未だに、『功』にそんな使い方ができるのか半信半疑なんだが……まあ今のところ外れたこともないしな」

ヴァンが疑うのも無理はないが、それでもイヴリーナは感情よりも理性を優先する。

疑いたいというのは一時の不安の表れでも、これまでリムが今回のようなことで外したことはない。

それならばリムを信頼して、信じて事に取り掛かるのがいいだろう。

イヴリーナは広い通りを歩きながら、まだ買っていない物を思い出して、次はどこに行くのか目星を付ける。その間もヴァンとの会話は続き、

「話は戻るが……」

ヴァンは前置きして、僅かに真剣味が増したような顔つきになった。

しかし彼は時に表情までも操ってみせるので、実際に真剣なのか判別することは容易ではない。

「お前から聞いたあいつの過去からすれば、この二年程の間、フエイシスはいつなり前に進んできたんだろ？ 歩むべき道を断たれて絶望して、それでもなんとかしようとしてきたんだ。今回の

ことがうまくいけば、色々と吹っ切れるんじゃないか？」

「そう、ですね。でも……だからこそ心配なんです」

過去にフェイシスは様々なものを失った。

友人に夢、居場所、それに身体の一部。あれから彼なりに頑張っていることはイヴリーナは誰よりも理解しているつもりだ。

だからこそ、今回のことで万が一にでもミーファとエクスが殺されでもしたら、彼は壊れてしまいかもしれない。

かつて苦心を重ねた末、騎士となろうとしていた彼にとって、王女だというミーファと騎士だというエクスを守りきれなかった時、彼のここ二年ほどの時間は水泡に帰すことになる。

「それよりも俺が心配なのは、あのお嬢ちゃんたちがこの都市を出た後、フェイシスがそのままの自称王女様について行こうとしそうなんだが……その辺はどう思うよ？」

「……きつと、それはないと思います。確かにフェイ様の性格からすれば、心配して付いて行こうとするかもしれないませんが、それでもあのエクスと名乗った騎士がいます。騎士である彼女の誇りを穢すようなことはしないでしょね」

「誇り っていうと、なにか？ あくまでも『ミーファ様を守る』のはこの私だ』ってやつか？」

低い地声にも関わらず、ヴァンが無理して女声を真似するその姿に、イヴリーナは思わず笑いがこみ上げてきた。

「ふふっ、笑わせないでくださいよ。……でも、そういうことだと思いますよ」

「……その辺のことは俺には理解できねえな。誇り云々だったら、今回の協力のこととはどうなるんだ？ それに怪我していたようだったし、そんなんで守れるのか疑問だぜ？」

「そうですね……私としても半ば想像ですけど、今回のことだって彼女なりに苦心した結果だと思いますよ。それに無関係の人を巻き込むわけにはいかないという心情もあるでしょうし。だから都市から出た後は頼りたくない いえ、頼れないんだと思います。そし

て騎士のなんたるかを理解しているフェイ様ですから、その辺の機微は理屈でないことを承知しているでしょう」

イヴリーナとしても、この考えは本当に想像でしかなかった。

だがおそらく今のエクスの立場がフェイシスだったなら、たとえ負傷していようとミーフアを守り抜こうとするはずだ。

一度、何の関係もない人を巻き込んでしまった後ならば、一人で守り抜こうとより強く思うことだろう。

ヴァンはしばらく考えたようだったが「そんなもんかね」と呟やいた。そしてふと思いついたように顎に手を当てると、

「そっぴや、あの騎士様が持っていた外套……あれ、どう思うよ？」

フェイシスがエクスを連れてきたときに、彼女は見るからに大きな外套を手にかけていた。

大きさからまるで巡礼者が着るようなそれは、昨日の早朝にフェイシスがなくしたと言っていたものと色合いや質感がとてもよく似ていた。

「拾った……のでしょうか？」

「偶然にもか？ それにしてはなんか出来すぎているような気がするぜ」

だがそうとしか言いようがない。

フェイシスは昨日の夜 いや一昨日の深夜というべきだろうか、この都市の情報屋の所に行くと言って、単身で貧民区に向かって

「そっぴえば一昨日の宿を出る前のフェイ様は、どこか様子がおかしかった気がします」

「とうとう？」

「私も付いて行こうとしたのですが、頑なに断られて……」

そう、たしか深夜に貧民区に行くなど危険だからと一緒に行くこととしたところを、フェイシスは一顧だにせず断った。

イヴリーナはそんなフェイシスの普段と違った態度が印象に残っていた。

「……まさかとは思うが」

ヴァンは顔をしかめて呟いた。その表情はいつもの冗談交じりのようなものとは違い、本気で案じているようだった。

そして今までの会話の流れで彼が真剣に考えている内容など、思い当たることがイヴリーナには一つしかない。

「意図せず言葉が詰まってしまう。ヴァンにそれは違つたろうと言いたいが、否定できない自分がいることをイヴリーナは自身の内に感じていた。」

そこでふと周囲を見てみると、いつの間にか商業区から居住区へと風景が変わろうとしていた。

あまりにヴァンとの会話が深刻になりすぎたせいか、買い物をしているのだということを見失念していたようだ。

ヴァンも今まさに気がついたのか、どちらから言い出すこともなく道を引き返す。

「イヴリーナ、お前はと思う？」
隣からいつになく真剣な声があった。

「私は……分かりません」

考えたくはないことだった。イヴリーナとしては、フェイスが情報屋からの帰り道に飢えた貧民区の住民に襲われ、その際に邪魔だった外套を脱ぎ捨ててそれを偶然にもエクスが拾った。

無理はあるがそう考えるのが妥当だし、何よりイヴリーナにとつては一番安心できる考えだ。

「訊いてみないのか？」

ヴァンがこちらの心情を読んだかのように訊ねてきた。

イヴリーナがなんと言おうか逡巡している間に彼は更に続けて、

「怖いかな？　だがお前とて　いやお前こそが一番にフェイスのことは知っているはずだ」

「フェイス様は　」

やはりなんとはいえいいのか分からず、言葉に詰まってしまう。

ヴァンの言いたいことは十分に分かっている。でも

「ま、いいさ」

突然、ヴァンは軽い調子の声を上げた。

イヴリーナは思わず彼の顔を見るが、その表情は先ほどまでであった真剣さはどこにもなかった。

「考えても仕方ないしな。まあ特に都市の方から死体云々の話は公表されてないし、今回は考えすぎだろう」

「そう……ですね」

イヴリーナとしては頷かざるを得ない。いや頷きたかった。

彼の言うとおり、もしフェイススが何か事を起こしたのなら、都市の方から早急に死体や殺人者といった類いの知らせがまわるはずだ。

そう……思いたいのだが、

「警備兵の数が多い気がするのですが、気のせいでしょうか？」

「……昨日散歩したときに気づいたんだが、門の辺りはかなり警備が厳重だったな」

ヴァンのその言葉はミーファが王女で都市から追われているということの裏付けにもなるが、同時に殺人者を探しているのではないかという不安がよぎる。

それも昨日フェイススはミーファを助ける際に一人の人間を手にかけたと言っていたので、彼が一昨日の夜にも同様のことを為したのか結局は分からない。

ヴァンが言ったとおり、フェイススに聞けば彼はありのままを答えてくれるだろう。だがそう考える一方で、彼に本当のことを訊きたくもなかった。

「考えるのはそろそろやめだ。さっさと買うもの買って宿に戻ろうぜ」

もう完全に普段通りのヴァンは気負いなくそう言ったが、胸の内になだかまる不安のせいでイヴリーナは頷くことしか出来なかった。

第十四節・毒蛇は疑念を撒き散らす

「ミステイリーファ・ミル・デルフィリアとエクス・オフィムですね？」

それは突然だった。

「お初にお目にかかります。私はガルヴィア・フロードと申します」

「

フェイスとリム、エクスにミーファの四人は突然に現れた二十代半ばほどと思われる長身瘦躯の男の言葉を驚愕と共に聞いていた。「さっそくで申し訳ないのですが、お二人は私たちと共に来ていただけますでしょうか」

ミーファとエクスに視線を向けながら、その蛇のような男は慇懃に言い放った。

フェイスは慢心とまではいかないまでも高をくくっていたため、思考がほんの僅かに停止した。

さすがにこの宿にミーファとエクスがいることなどすぐには掴めないだろう、と。

まだヴァンとイヴリーナが買い物から帰っていない宿の一室で、ミーファと雑談していたのがつい先ほどまでのこと。

その時には眠くなっていたリムは昼寝をしており、エクスも休息のために仮眠を取っていた。

そんな穏やかともいえる時間の中、しかし急に飛び起きるようにして目を覚ましたリムは窓際に駆け寄って、閉じられていた鎧戸を開け放った。

フェイスとミーファはリムの突然の行動に何事かと彼女の元に駆け寄り、その視線の先を見てみると

宿の前に展開している警備兵十数人の姿がそこにはあった。

通りを歩く人や、周囲の建物の住人は訝しげな、あるいは不安そうな視線を彼らに投げかけていた。

フェイスたちがそんな光景を目の当たりにして驚愕に固まっていたまさにその時、部屋の扉が蹴破られ、ガルヴィア・フロードと名乗る妙な暗さを持った男が現れたのだった。

「ふむ、片腕の君にそちらの幼童……昨日、私の部下の腕を切断し、あまつさえ殺したという少年ですね……？」

どこか不吉そうな雰囲気の中、男は暗澹とした視線を向けてきて、平坦な、しかし良く響く声でそう言った。

ガルヴィアは文官のように整った衣装を着てはいるが、その腰には身幅の広めな一本の剣を帯びている。

彼は部屋に数歩入ったところに直立していて、その後ろには扉を塞ぐように四人の警備兵姿の男たちがいた。

どうしようもない状況だった。

室内には四人の、外には十人以上の警備兵。そして得体の知れない長身痩躯の男。いくらフェイスといえども、数で押されればどうしようもない。

ガルヴィアの声には答えず、フェイスは焦りながらも状況を切り抜ける方法を模索していると、

「ミクヴァン・オスリームの手の者か」

先ほどのリムの突飛な行動で目を覚ましていたエクスは、ベッドの脇に立ってガルヴィアを睨み付けた。

エクスは仮眠時にも剣を傍らに置いていたため、彼女の手はすでに長剣の柄に伸びており、今にも抜剣しそうな勢いだった。

「然り。ですが可能ならば争いたくはありません。大人しく付いてきてはもらえませんか」

「何が大人しくだ。一昨日の夜更けには十人もの刺客めいた者たちを向かわせておいて、良くそんなことが言えるものだ」

エクスは吐き捨てるように言って、男に鋭い眼光を放つ。

フェイスはそんな彼女の憤りながらも自制している冷静さを目の当たりにし、幾分かの焦燥感を拭い取った。

状況は最悪だが、なんとかリムとミーファは無傷で脱せさせねば

なるまい。

「そのときは貴女方が激しく抵抗されたが故に。大人しくしていただけなのであれば、今回は手荒な真似はしないと約束しましょう」
やはり平坦な、感情の籠もっていない事務的な声音のガルヴィア。対してエクスは敵意を隠そうともせず、不気味な男を睨んでいる。そんな二人に注意を払いつつ、フェイシスは冷静に状況を確認した。

正面の丸テーブルを挟んだ向こうには扉があるが、ガルヴィアと警備兵の四人が防備を固めている。

右斜め後方にはリムと窓があるものの、ここは二階でさらに外には十数人の警備兵。

フェイシスの愛剣は今は腰になく、右方の壁に立てかけてあり、距離は大腿で三步ほど。

左隣には目を見開いたミーファがおり、さらにその左にエクスが
いる。

「
」
考えるまでもなくやはり状況は最悪だった。

フェイシス一人ならまだしも、他の者を庇いながらの脱出はきわめて困難だろう。エクスは王国騎士とはいえ、負傷中なのであまり頼りに出来ないことも大きい。

そう考えていると、ガルヴィアは思い出したように、

「そういえば、貴女の言う私の十人の部下ですが……そのすべてを殺したのは貴女ですか？」

「
」
エクスは問いに答えず、ただ隙を窺いながら抜剣に備えているようだ、

「ふむ……その反応からして、どうやら違つようですね。となると、やはり噂は本当なのでしょうか……？」

どこまでも感情というものが見えない男はエクスの沈黙を意に介さず、疑問に思っているのかよく分からない声でそう言った。

どこかわざとらしい口調にフェイスは目の前の男の言わんとしていることを直感的に察したが、しかし口を挟めば怪しまれるのは必至なために黙っていることしか出来ない。

そんなフェイスの内心を知って知らずか、ガルヴィアは一人淡々と話を続ける。

「最近、この都市アクナリアに《隻腕の剣鬼》がいるという噂がありましたね」

「《隻腕の剣鬼》だと……？」

「おや、ご存じでしたか。騎士の間にも広まっているとは、存外に噂だけは広範に流布しているようですね」

全く驚いても感心している風でもないガルヴィアは捕らえにきたのではなく、むしろ話をしに来たのではと勘違いするほどに悠然としている。

「私は部下の死体を見てきたのですが……それは惨いものでした。胴と首が断たれた者、顔を粉碎されたもの、眼窩から一突きされた者など様々な様子で死んでいました」

「……………」

「私の部下たちは私自身が言うのも何ですが、優秀でした。その彼らがそんな無残にやられてしまったとあっては……これは噂といえども馬鹿には出来ません」

エクスは無言のまま、警戒を解こうとしないで話を聞いているようだった。

フェイスとしてはこれ以上この男に喋らせればろくな事にはならないと、そう漠然と思いつつも、しかし何かしらの行動を起こす算段もなく状況に流されるしかなかった。

「《隻腕の剣鬼》。噂曰く、かの人物は各地で様々な凶行を繰り返しているとのこと。アンジースの惨殺がその最たるもので、他にも盗賊討伐隊の中に傭兵として紛れ込み多くの輩をその手にかけてた。これは善行の類いと言えるでしょうが、しかし一方で大商人の商隊を急襲し、護衛を殺しながらも商品と金を奪取した。生き残っ

た者たちの証言から《隻腕の剣鬼》と断定したものの、その凶行は多くの商人を不安にさせた。……このように世間的に見れば善行を為したかと思えば、あるいはそれ以上に悪行をも為している噂の人物ですが……この噂には概ね共通していることが一つあります」

ガルヴィアは見た目の割に饒舌な口調で長々と話し、一拍おいてこれこそが主旨だと言わんばかりに、

「それはどんな話の中でも常に『人を殺している』ということですよ、あるいは人を殺すという目的を果たした結果として、善行・悪行といったものが付随しているのでしょうか……？」

「……その話がなんだというのだ？」

エクスは苛立ちと緊張の入り交じった声で言いながらも柄を握りしめ、抜剣に構えるその手を離そうとはしない。

ガルヴィアはそこで寒気のある冷笑を、これまでの無表情の代わりにその顔に貼り付けた。

「そこで尋ねたいのですが……一昨日、私の部下を惨たらしく殺したのは一体誰なのでしょう？」

「……………」

エクスは答えない。何を考えているのかは分からないが、ガルヴィアの一挙手一投足をも見逃さないとといった様子で尚も彼のことを注視している。

しかし次のガルヴィアの言葉に、エクスの視線は彼から外れ、また半ば予想できていたとはいえフェイシスも動揺せざるを得なかった。

「さて、では貴女の協力者らしきこの少年ですが……彼は五体満足な身体をしているのでしょうか？」

「……………」

フェイシスもエクスも息を呑んだ。

そしてフェイシスはガルヴィアが急にこのような噂を語り出した意味を十全に悟った。

この男は蛇のようだ、とガルヴィアに対して第一にそう思ったフ

エイシスだったが、それは少々間違っていた。
彼は毒蛇だった。

常に慙懃としている風体とは裏腹に、言葉という牙に疑念という毒を塗って噛みついてきた獰猛な蛇だ。

そして、そんな彼の猛毒は即座に効果を発揮した。

エクスがこちらへと僅かに顔を向けてくる。その表情は先ほどから変わりはないが、フェイシスは肌を感じる空気が一気に疑念を孕んだものに変質したことを感じ取った。

ミーファは今や己を捕らえに来た者が目の前に居ることを忘れているかのように、見開いた目を向けてきていた。

「……………」

おそらくガルヴィアにはフェイシスが《隻腕の剣鬼》などという噂の人物である確証はなかったことだろう。

だがそんなものは関係なかった。

ただ単に今この都市に《隻腕の剣鬼》という狂人と、昨日片腕ながらも彼の部下を一人殺したという事実のあるフェイシスがいるという、その状況だけで十分だったのだ。

この男は部屋に入って室内を見たその瞬間に、すでにこの毒を作り上げていたのだ。

でなければフェイシスに対して、

『ふむ、片腕の少年にそちらの幼童……君は昨日、私の部下の両腕を切断し、あまつさえ殺したという者ですね……？』

などと声に出してまで冗長なことは言わないはずだ。

頭が切れるどころではない。この男は有象無象の警備兵とは訳が違つ。

「ではもう一度改めて申しますが……お二人には私たちと共に来ていただきましようか」

ガルヴィアは冷たい笑みを浮かべながらあくまでも口調は慙懃と

している。

エクスとミーファにとっては協力者であったフェイスだが、その頼みの綱を断ち切った上での言葉だ。

完全に包囲された状況下で、孤立無援だと思わされた二人の精神はまさに屈辱寸前だろう。

しかしそんな中、幼い声が唐突に響いた。

「フェイスを信じて」

フェイスは後ろから聞こえた声に思わず首を回すと、リムがミーファとエクスに向かって真剣な眼差しを向けていた。

真っ黒い髪の中で異様な光を携えた金瞳には言いしれぬ何かが宿っているようで、その声その姿は一瞬でこの場の全員の意識を集めるに足るものだった。

リムの言葉を聞いたミーファにエクス、そしてガルヴィアさえも、刹那のあいだ一様に固まった。

どうしようもないと思っていた雰囲気の中でもともせず言い切ったリムは、場の流れに逆らった言葉にも関わらずその声音と姿が妙な説得力を与えていた。

「……うん、分かった」

ミーファは不安げな様子を残しつつも確かに頷き、そしてエクスもすぐさま視線をガルヴィアに戻しつつ、

「フェイスどの、今はどうあっても貴方の力が必要だ。手を貸してもらいたい。……しかしこの男の言っていることの真偽は後で問いたださせてもらいます」

リムの言葉を信じているわけではないとは思っている、しかし童女の言葉は疑惑で散漫としていたエクスの意識を今の状況へと集中させた。

対するガルヴィアはリムに視線を向けると、

「……これはまた不思議な魅力をもった幼童ですね。感嘆とはまさにこういった時に使うのでしょうか」

心なしか本当に驚いているようにも見える彼は、エクスとミーファ

アを一瞥して溜息をついた。

「大人しくは捕まってもらえないのですか。状況からして絶望的なのは分かっていると思いますが……致し方ありません」

ガルヴィアが右手を肩ほどの高さまであげると、彼の背後に控えていた四人の警備兵が一斉に抜剣した。

おそらく後はその手を振り下ろせば、四人はこの密室で一斉に襲いかかってくることだろう。

「……………」

状況はもう引き返せない。

あと数瞬で振り下ろされるであろうガルヴィアの骨張った手を眺めつつ、フェイシスは半ば直感的にこれからとる行動を決定した。

そしてそれを戸惑いもせず、すぐさま行動に移す。

「ッ!？」

フェイシスは予備動作をほとんど見せずに唐突に動いた。

当然、それを見たガルヴィアは即座に手を振り下ろして背後の部下に指示を下す。

飛ぶように床を蹴って壁際の細剣を手にとったそのとき、背後から踏み込んだ足音と強烈な気配を感じた。

勘と経験を頼りに鞘に入ったままの愛剣を上段で水平に掲げると、ガルヴィアの長身が目の前に迫ってきていた。

そしてそう見えたときには腕に衝撃が走っており、片手という不安定さも相まって思わず剣から手を離しそうになる。

今まさに受け止めた眼前の凶器は、こと珍しい代物だった。

剣先が尖っておらず丸みを帯び、刀身は幅が広い特徴的な形をした赤黒い色合いの剣で、それは俗にいう極刑剣や斬首刀と呼ばれるものだった。

しかし処刑用である本来のそれは柄が短く重量も並以上にあるという、一撃で首を切断する必殺の代物のはずなのだが、ガルヴィアのそれは柄も重量も一般的な長剣と同程度だった。

「さすがは《隻腕の剣鬼》ですね。よく反応できたものです」

「勝手にそんな呼び方をしないでもらおう……かッ」

言い終わると同時に身体の内から力を捻り出すように奮起し、風変わりな処刑剣を押しつけた。

「別に私も貴方のような少年が本物だとは思っていませんが……」

ガルヴィアはこちらの力に逆らわずに素直に後退し、

「しかし今の瞬発力は明らかに『功』。やはり本物の可能性も捨てきれませんね」

「ッ」

思わず舌打ちをしてしまう。

ガルヴィアが『功』の存在を知っているということは、彼もその使い手と見て間違いないだろう。そんな者をこの密室の乱戦状態で相手取るとなるとかなり危険だ。

ほんの一瞬エクスの方へと目を向けると、驚愕すべきことにリムとミーファを庇いながらなんとか四人の剣を捌いていた。

それも今や九人もいる狭い室内だからこそできる芸当なのは明らかで、実質一度に襲いかかっているのは二人だけだ。

だがそれも長くは続かないはずで、まずはこの部屋を脱出せねばならないことは考えるまでもないことだった。

「余所見している暇があるとは、余程の自信家とお見受けします！」
狭い室内にも関わらず器用にも不規則に繰り出してくる剣技を、未だ鞘に入ったままの剣で受け止めつつ、フェイシスは一か八かの賭に出ることにした。

もうそれくらいしか、すぐにでもこの男を切り抜ける術は思いつかない。

フェイシスはガルヴィアが放った重い一撃を深く受け止め、それを身体全体で思い切り押し返した。

そんな次にくる剣技を防ぐことの間には合わない大ぶりの動作に、訝しむようにガルヴィアは僅かに表情を動かした。

それを視界の隅で確認しつつ、フェイシスは眼前のガルヴィアから視線を逸らし、開け放たれたままの扉の方に向けて叫んだ。

「ヴァン、今だっ！」

「っ!？」

その声にガルヴィアははつきりと驚愕の表情を貼り付けつつも、しかし顔は依然として正面に向いている。

「フツ」

だがフェイシスは緊張の中、なんとか自信満々といった表情を作り上げ、目の前の男に笑ってみせる。

「くっ」

今度こそ、ガルヴィアは扉の方へと視線を向けた。

頭の切れる人間ほど考えずにはいられないという半ば博打めいた作戦は、しかしなんとか功を奏した。

叫んだときに扉の方を向かなかったときはフェイシスとしても焦ったが、あとは斬られるだけという状態だったフェイシスの笑みには、さすがに相手も疑心に耐えられなかったのだろう。

かくして彼が目を向けた先には当然ヴァンどころか誰も居ようはずがなく、その隙にフェイシスは鞘に入ったままの細剣でもって渾身の一撃を相手の頭部に叩き込んだ。

「ぐ、あっ」

鈍い音の後、うめき声と共にガルヴィアは膝をついた。額からは皮膚が裂けて顔を縦に割るように鮮血が流れ出ている。

しかしフェイシスの予測では今の一撃は気絶どころか死んでもおかしくないものだったはずなのだが、彼は未だに意識を保っている。

「くっ、はあ、あの、土壇場で……なんという、胆力……ですか………っ」

なんとか意識を保とうとしたのだろうが、そう一言言い終わると同時にガルヴィアは崩れ落ちた。

やっと気絶したようだが、この男は得体が知れない。ここで殺しておきたいものの、その間にもエクスは押されており状況は一刻を争っている。

今は刹那すら惜しいときだとフェイシスは己に言い聞かせると、

「エクスさんッ」

警備兵の一人を背後から鞘入りの剣で殴りつけた。後頭部に直撃したそれを受けて一人が倒れ伏し、フェイシスの一撃で他の三人の注意が一斉に騎士から逸れる。

そして倒れているガルヴィアに驚愕した一人をエクスが袈裟斬りにする。深い剣撃が入ったその警備兵は数歩後退したあと、紅い液体を止めどなく流しながら背中から倒れた。

フェイシスとエクスは二人の少女を背に庇いつつ、警戒して距離をとった二人の兵と対峙した。

「まだいけますか？」

「おそらくは」

ただでさえ負傷しているエクスだ。

先ほどのリムとミーファを庇いながらの戦いで消耗しているのは目に見えて明らかだったが、彼女の声は気丈だった。

フェイシスがこのまま突っ切るかと考えていると、対峙している警備兵の一人が懐から小さな笛を取り出した。

「まずいつ」

笛の意味を察して、なんとか止めようと踏み込んだが残るもう一人に邪魔され、その隙に笛は甲高い音を立てて鳴り響いた。

それは考えるまでもなく外にいる仲間を呼ぶ合図以外の何物でもなく、このままではフェイシスたちは完全に追い詰められた形となってしまう。

「フェイツ、たくさん近づいてくるよっ」

気配に敏感なリムが悲鳴じみた声でそう告げてきた。

もはや迷っている暇はないと判断したフェイシスは、目の前の男に牽制の一撃を叩き込んだ。

雑な軌道のそれはたやすく受け止められたが、しかしその分こめられた力は大きく、受け止めた相手は大きく仰け反る。

その隙を逃さず、フェイシスはあっさりと背を向けると、

「飛び降りるぞっ!」

三人に向かつて短く言い放った。

ミーファは驚愕、リムは不安、エクスは苦々しい表情になるが、それらを見無視して、あるいは押し通して窓から飛び降りた。

だが思いのほかこれまでいた二階の部屋は高く、滞空している時間はやけに引き延ばされて感じられる。

落下時特有の何かが身体をすり抜けるような奇妙な感覚がフェイススを襲ったものの、下を見ると先ほどは十人以上居た警備兵は先の笛で呼ばれたからか、五人になっていた。

彼らはまばらに宿屋の前に散っており、落下中のフェイススには気がついていないようだ。

空中で細剣をしっかりと握り直し、着時点の近くに居た男の頭にそれを思い切り振り下ろした。

鞘に入っているとはいえ落下の力も加わったその威力は絶大で、その手応えから致死のものだということは言うまでもない。

その一撃のおかげで着地の衝撃が若干ながらも和らぎ、全身を弛緩させるようにして落下の衝撃をなんとか全身で吸収した。

「……………」
そんなフェイススの突然の奇行に気づいた他の四人は啞然として固まっている。

さっと頭上を見上げると、エクスが両脇にミーファとリムを抱えて飛び降りてきた。

「なっ」

フェイススとしては飛び降りてきたリムを受け止める算段だったのだが、まさかエクスが抱えてくるとは思っていなかった。

彼女の後頭部で一つに結われた髪が、尾を引くように宙に一本の線を引きながら落下してくる。

すぐさまフェイススは一番近くにいた呆然と見上げている警備兵の男の腹に一撃入れると、さすがに後の三人も忘我の堺から脱し、抜剣した。

フェイススとしても剣を抜きたかったが、如何せん、腰に固定してはいないので片手では抜けない。

柄を持って思い切り振れば遠心力で鞘を飛ばすことも出来るが、今それをするのは得策ではないだろう。後で鞘がなくて困ることが目に見えているし、もう抜き身の真剣でなくとも切り抜けられるはずだからだ。

後方でエクスが着地したのか、小さくない音が耳を打った。

土を踏みしめる足音で彼女が負傷していないことを察したが、さすがにフェイススは驚いた。何せ二人を抱えて飛び降りたのだ。

リムはまだ幼いとはいえ、着地時の総重量はフェイスス一人の比ではないだろうことは明らかだ。

にもかかわらず特に負傷した様子もなく着地するとは、さすがに王国騎士というだけのことはあつた。

横に並んだエクスを尻目に、フェイススは手薄になつた宿屋前の警備兵をやり過ぎしながらも、リムに気を遣いながらも鐘塔の見える方へと走り出した。

しばらく人混みの中を走り抜けてから振り返ってみると、まだ宿が見える。その二階の窓から警備兵が顔を出して、こちらを指さしていた。

だがフェイススの視界にはそれよりも気になる光景がほんの一瞬だけ目に留まつた。

宿を起点とした今まさに疾駆している方角とは逆方向、こちらが鐘塔に向かう道ならそちらは西の大門に向かう道だ。その道の向こうに既視感のある巨漢の男が人垣の隙間から一瞬だけ垣間見えた。それは鮮烈に目蓋に焼き付き、長身で横に広い大男は小走りでこちらに向かつて走ってきていたようだった。

「今のは……」

既視感がある、どこの話ではない。

既視感ではなく、あの男は以前に一度見たことがあると意識が警笛を鳴らしている。あの忌々しい過去の記憶とともに忘れ去ろうと

した男の姿であると自身の記憶が告げているのだ。

もし間違いでなければ、今は逃げている場合ではなく、むしろ……

「フェイツ、逃げようよっ」

いつの間にか立ち止まっていたフェイススは、袖を引かれて意識が戻る。

ハツとなつてそちらに目を向けると、リムが不安げな面持ちでこちらを見上げている。

もう一度だけ後ろを振り返ると、すでに人波のせいで巨漢の姿は確認できない。

フェイススは考えを振り切るように首を横に振ると、リムと共に先を疾駆するミーファとエクスを追いかけた。

「……………」

フェイススはもう一度だけ、巨漢とか言いようがない男の姿を思い出した。

だが冷静になつて考えてみると先の姿は緊迫した状況が造り上げた幻影なのでも思えてもきて、妙な引っかかりを残したまま走り去るしかなかった。

第十五節・追う者は暗部を知る

「おいおい、こりやどういうこつたよ」

縦にも横にも大きい男が開口一番にそう言った。

「……見ての通り、取り逃がしました」

「俺はおめえのことを頭の切れる奴だと思ってたんだが……どうやらそうでもねえみてえだな」

額に包帯を巻いたガルヴィアは、グレンのそんな物言いに返す言葉もなかった。

ガルヴィアとその部下である十五名の警備兵が宿を包囲し、ミスティリーファとその騎士エクスを捕縛しようとしたのが先ほどのこと。

だが結果はもはや言うまでもなく失敗に終わった。

負傷者が四名、死者が二名だったのは幸いといって良いのか微妙なところではあるが、自分が死ななかつただけまだ運が良かった。

「グレン殿がもう少しはやく来ていただけでいれば、あるいは何とかなったやもしれなかつたのですが」

「そこはおめえ、指示が急すぎなんだよ。西門でせつせと検問に協力してやってたところに、急に召集かけやがって」

その背に巨大な戦斧を背負ったグレンには事前に協力する旨を部下に伝えさせていたのだが、何分急なことだったので彼が遅れたことをそう強くは責められない。

だが急がなければ移動される恐れがあったため、グレンの到着を待たずして強行したのだが、結果としてそれが裏目に出してしまったことは否めない。

ガルヴィアはまだ頭痛のする頭で事後処理の指示を部下に与えつつ、今は先ほどまで倒れていた宿屋の一室のベッドに腰かけて休息を取っている。

「ところでその趣味の悪いベルトはなんですか？」

「お、これか？」

グレンの腰には派手なベルトが巻かれていた。宝石に見せかけた色鮮やかなガラス玉や煌めき、安っぽい金属類の装飾が目にも痛いものだった。

グレンの屈強そうな容姿に反して煌びやかに輝いているそれは異様に目立っていた。

「へへ、これは商業区の露店で買ったんだけどよ、金額以上の派手さだぜ。これの良さが分かんとはガルヴ、お前の目は節穴か？」
自慢するようにつけられるが、ガルヴィアとしては全く羨ましくない。

それに節穴なのはグレンの方だろう。加えて彼の派手なベルトはどう見ても飾り物の類いであり、人が身につけて歩くようなものではないはずだ。

大男は自慢して満足したのか不気味としかいえない笑みを浮かべていたが、一転して真顔に戻ると、

「しかし相手はそんなに手強かったのか？ 所詮は成り立ての王国騎士一人だろうに」

グレンは椅子に腰掛けてその低い声で尋ねた。

彼の巨体を支えている椅子はその身体よりも一回り小さく、今にも壊れてしまいそうである。

「いえ、エクス・オフイム一人ではなく、昨日話した少年も一緒にした。でなければこんな表通りの宿屋にはいませんよ」

「ああ？ 少年って」と……昨日お前の部下を一人殺ったっていう奴か？」

ガルヴィアは無言で頷いた。

先ほど僅かにだが剣を振るい、その少年もろとも斬り殺そうとしたガルヴィアだったが、逆にやられたことを思い返した。

少年が予想以上の実力だったことに加え、あの時は騎士に注意を払いすぎていた。そうでなくともただでさえ所詮は片腕だと高をくくっていた。

実際のところガルヴィアは、あの場で自分と互角にやり合えるのはエクスという王国騎士一人だけだと思っていたのだ。

「で、一応聞いておきてえんだが、どんな奴だった？」

グレンは自身の欠損した左腕切断部の金属部品をさすりながら訊いてきた。

彼の左腕は肘から先がなく、それが巨体と強面に相まって、見るからに悪漢という人物を作り上げている。

「そうですね……歳は外見からして十六か十七といったところでしょうか。長袖の上着を着ていたので判然としませんですが、右腕は肩からすぐ先がない感じでした。実力の程は計りかねますが……ただ、功を使っていたようでしたから剣術・体術の類いの修練は相分に積んでいることでしょう。あとは……」

ガルヴィアはそこで言葉を切ると、額を押さえながら苦悶の表情を浮かべた。

たしか特異な容姿の童女が名前らしいことを言っていた気がするのだが……如何せん、頭部を強打された影響なのか、記憶が判然としなかった。

「ほう」

しかしグレンはガルヴィアの様子など気にした風もなく、目つきを鋭くして声を洩らすと、

「功を使う右腕のない小僧……こりゃもしかしたら意外と期待できるかもな……」

ただでさえ厳つい顔に笑みを浮かべているグレンのその様相は、強面どころか怖面だった。

「……期待というと、貴方の腕を斬ったという少年のことですか？」

「ああそうだ。二年くらい前　いやもう三年前か、まだ十代半ばくらいだったガキが俺の左腕を斬りやがったんだ。もし奴なら今度こそ……」

グレンは忌々しげに吐き捨てると、右手で左腕の傷口を握りしめた。

相当に恨みがあるのか、これまでガルヴィアが見てきたグレンという男の中でも群を抜いて憤怒しているのが分かった。

しばらくグレンもガルヴィアイも無言でいると、急にグレンが頭をかきむしり、

「があアアツ、やめだ、やめ！ 思い出すだけで腹が立つてくるぜ
っ」

貧乏揺すりをし始め、彼の座っている椅子がギシギシと軋みをあげる。

ガルヴィアはそんな椅子の悲鳴を耳にしつつ、部屋の隅に置いてあるいくつかの革袋を眺めた。

急襲しただけあって、彼らも荷物を持って逃げる余裕はなかったようだった。後で回収して中身を調べれば何かしらの手がかりが得られることだろう。

「って、そついやよ、なんで王女様御一行がここにいてるって分かったんだ？」

気を取り直すかのようにグレンは尋ねた。

ガルヴィアは話すかどうか一瞬迷ったが、この男に隠しても仕方がないと思い直す。

「《異端なる者たち》 ルーインアウターという組織はご存じですよね？」

「おい、ガルヴ。まさか……」

「はい。グレン殿が訪れるよりも以前に、所用ということでもイクヴァン様の元を尋ねられたらしいのですが……どうやらまだこの都市にいるようでして。その彼からミクヴァン様を通して情報を頂いたということですよ」

グレンは目を見開いてこちらを見ていた。だがそんな大男の驚愕はガルヴィアとて分からないでもない。

件の組織についての情報はあまりに少なく、ミクヴァンなどの都市を治めるものや国の重臣らにしか詳細は明かされていないらしい。「……俺はてつきりそんな組織なんぞ、どっかの放蕩貴族の妄想の

類い　それこそ《隻腕の剣鬼》以上に噂だけのもんだと思ってたんだが……実在したとはな」

「はい。私も同じように思っていました」

ガルヴィアもそれは貴族間での噂に過ぎないものだと思っていたのだが、この宿を急襲する前にミクヴァンから彼の組織から情報が入ったと言われなければ今も信じてはいなかったことだろう。

「……なるほどな。なんだかこの都市も面白くなってきたじゃねえか。……惜しむらくは、明日の朝には出発しないといけねえことだな」

グレンは何が面白いのか口元を歪めて笑っている。

「では、それまでは全力で捕縛に協力していただきますよ」

ガルヴィアは未だ痛む額を包帯越しに撫でながら、胸の奥底で先ほどやられた屈辱を思い出していた。

第十六節・その切っ先を向けられた者は

僅かに差し込む朱い日差しが、宙に漂う埃を幻想的に輝かせていた。

「はあ……はあ……」

ミーファは息を整えながら、今し方入り込んだ建物の内装に目を向けた。

見るからに頑強そうな石造りの壁、そして辺りには木箱や樽が山積みにされ、人の生活に必要な家具などは一切見当たらない。

二階部分は床の半分をくり抜いたような吹き抜けになっており、天井近くの鎧戸の隙間から差し込んでくる明かりが、この薄暗い建物内の唯一の光源だった。

建物自体は結構な大きさがあり、先刻までいた宿の部屋の十倍はあるだろうかというほどだ。都市内にこの規模の土地を所有しているとなると、逃げてきた先が富裕民区であることから分かる通り、持ち主は貴族か大商人だろう。

そんな広い空間　おそらくは倉庫だろうと思われるこの建物は、最近は何の出入りがなかったのか妙に埃っぽい。

「ミーファ様、お怪我はありませんか？」
隣で静かに息を整えているエクスが気遣うような眼差しを向けてきた。

この倉庫には二階の鎧戸をフェイスがこじ開けて侵入した。戸は外から見えにくい位置にあったものの、ここに目星をつけられるもの時間の問題だろう。

「私は、大丈夫。それよりエクスは大丈夫なの？　肩と腿から血が出てる」

見ればエクスの左肩と右腿からは白い包帯に赤い染みが滲んでいた。

だがそれは無理もないことだろう。

彼女はろくに塞ぎきっていない傷を負いながらも剣をとって戦い、あまつさえ宿の二階から二人を抱えて飛び降り、そしてここ　都市の中心部に近い富裕民区の一隅まで走ってきたのだ。並の体力がなくては出来ないことだろう。

「これくらいは後でどうともなります。それよりも今は　」

エクスは言うやいなやミーファを自身の後ろに下からせ、腰の剣を抜き放った。そして僅かな朱光に反射して輝くその鋭利な切っ先を、騎士は一人の少年へと向ける。

「エクス!？」

後ろ姿の彼女はミーファの声を無視して視線の先の少年、フェイスに言い放った。

「フェイス・クーリオ。貴方は一体、何者ですか」

「……………」

ここまで共に逃げてきたフェイスは隣にいるリムを下がらせて、エクスの視線を真っ直ぐに受け止めた。

「何者もなにも、俺はフェイス・クーリオです。それ以外の何者でもない」

「そのような無意味な問答をしたいわけではありません。先ほど襲ってきたガルヴィア・フロードと名乗った男の言っていたことは、本当ですか」

エクスの言い様は質問ではなく、むしろ詰問するような口調をしている。

ガルヴィア・フロードと名乗る男が宿を急襲したのは記憶に新しいことで、つい先ほど前に唐突に現れたその男は《隻腕の剣鬼》という人物のことを口にしていた。

ミーファにとっては初めて聞くそれはまず間違いなく異名だと思われ、その何やら恐ろしげな名の人物がフェイスであるということとをガルヴィアは指摘したのだった。

無論、ミーファ自身は信じていない。

《隻腕の剣鬼》という名がどんな意味を持っているのかは未だ不

鮮明だが、ガルヴィアはこの都市を実質的に統治しているミクヴァン・オスリームの手の者であることは、背後に控えていた警備兵が示していた。

そんな敵対する者の言葉を信じるほどにはお人好しではないことをミーファは自覚してはいるのだが、それにしてもエクスの様子がおかしい。

「……ここで俺が違う、と言ったところで貴女は信じるんですか？」
フェイスは顔色一つ変えずに答えた。そして彼は上着の上から自身の右肩の先　腕の付け根を押さえた。

彼は空っぽの袖が虚しく形を変える様を呈しながら、
「俺は見ての通り右腕がない。そして俺は自分が、他人から見ればそれなりに強いだろうと思われるだけの实力があることを自覚している。……そんな人間が特徴の一致している《隻腕の剣鬼》ではないと言ったところで、説得力はないでしょう」

淀みなく饒舌にそう言い切ったフェイスには、相変わらず表情がない。宿でいろいろな話をしていたときはもつと表情豊かだったはずなのだが。

対するエクスはそんな少年を見て、
「そうですね。しかし違うという確証もありません。それに貴方は自分のことをそれなりに強いと言うが、そんなことはない」

「……………」
エクスも感情をなるべく抑えているのか、抑揚のない声をしている。

「貴方は奇妙なほどに強い。協力するときはミーファ様に『いい人』だと言われ、加えて都市から出るまでという短期間での協力ということもあって、敢えて追求はしませんでしたか……そもそもなぜ貴方は私たちに協力するのですか？」

「利害が一致しているからですよ。俺は昨日、襲われていたミーファを助けたとき、一人殺しています。騎士である貴女でなくとも当然知っていることでしょうが、殺人はこと都市内においては特に御

法度なことだ。そして貴女が話したと通り、ミーファを追っている連中がこの都市の権力者なら、俺の人相はすでに割れていてもおかしくはない。だから検問で引っかかってしまうのは貴女方と同様なんです」

フェイスの話は筋が通っていた。確かに昨日、彼は一人の人間を殺したし、殺人が重罪であることは言うまでもない。

それでフェイスも追われているのなら、共に状況が同じ者同士、協力するのもやぶさかではないということだろう。

「ならばなぜ貴方は今朝、一人で貧民区を歩いていたのですか？顔が割れているという心配をするのなら、無闇に出歩かない方がよろしいのでは？」

そういえばそうである。

フェイスは今朝どういふ訳か、ミーファとエクスが追われているときに入り込んだ貧民区を一人歩いていた。

だがそんな矛盾を言い当てられた当のフェイスは別段焦ることなく、

「情報屋のところに行っていたんですよ。都市には大抵、様々な情報を一手に担う情報屋がいます。昨日は彼に会って、俺が追われているかどうかの情報を買いに行っていたんです」

ミーファは情報屋というものに直接関わったことはないが、そういった類いの者たちがいるというのは以前住んでいた都市の噂に聞いていた。

フェイスは旅をしていると言っていたので各地の様々な都市を見て回っているのだから、そういった情報屋などの日陰者たちには詳しいのかもしれない。

「……………」
ミーファの考える限り、今のところ彼の言葉に不審な点はなかった。

やはり、エクスの考え過ぎなのだろう。

その証拠にエクスも反論する点がないことを理解しているのか、

黙っている。

「まあ、俺が怪しいというのはエクスさんの立場からすれば当然のことだと思いますから。……疑われるのも仕方ないことです」

フェイシスの言っていることは彼の立場からすれば納得のいくもので、今回はエクスがガルヴィアにそそのかされたという形で納得するのが自然……なのだろうが、なぜかフェイシスが変に無表情だったり、これまでの話す速さや声音が気になった。

ミーファ自身、人の嘘や表情の変化に敏感だということは自覚しており、これまでもそんな勘のようなものが外れたことはあまりない。

加えて最も気になるのが、彼の隣にいるリムだった。

黒髪に金瞳の少女はフェイシスとエクスが話し始めてから終始浮かない顔をしている。疑心漂うこの場の雰囲気にあてられているとも思われるのだが、それでも理性ではない第六感ともいべき何かが違うと告げている。

しかしフェイシスの言い分は辻褄があっているのだ。疑う余地のないことは話を聞いていたミーファ自身がよく分かっている。

「……そう、ですか。それならば、いいのです。申し訳ありませんでした」

エクスはどこか不満そうにしながらも謝罪し、突きつけていた剣を鞘に収めた。

ミーファもどことなく引っかかりは残るものの、依然としてフェイシスとリムから悪意は感じられない。それに、先刻少しだけ話したイヴリーナとヴァンと名乗った二人からもそれは同様だった。

「それよりも、エクスさんは少し休んだ方がいいんじゃないですか？」

フェイシスは先ほどまでの会話を特に気にした風もなく、気遣わしげな眼差しをエクスに向けた。

「そうですね。少し、休息を」

エクスが小さく頷きながら答えているそのとき、彼女の身体が不

意にふらつた。

高い位置で束ねられた髪をなびかせながら、力が抜けたように下半身から右の方へ傾いて、今まさに倒れそうに なったところを、ミーファはエクスにしがみつくようにして抱き留めた。

先の戦いや宿からの飛び降りが祟ったのだらう、怪我をしている右腿が痛んでいるに違いない。

「エク」

心配して彼女の名前を呼ぼうとしたその時、何かが石床に落ちる音が微かに耳を打った。

「ス……………つて、ん？」

ミーファは不思議に思ったが、とりあえずエクスが体勢を整えるまで支えていると、

「あっ！」

これまでのフェイスとエクスの会話を黙って見守っていたリムが、急に驚いたように声を上げた。

何事かと童女の方へ目を向けると、彼女の視線はエクスの足下に向いている。その間にもエクスは「申し訳ありません、ありがとうございます」と律儀に令を述べつつも体勢を立て直す。

一人で立つたのを確認した後、再びリムの視線を追って先ほど聞こえた音源だと思われるエクスの足下を見ると、そこには一つの装飾品が落ちていた。

差し込む光に反射して淡く煌めくそれは、小指の先ほどの宝石がついた華奢な首飾りだった。装飾品として加工された翡翠らしき深緑の宝石が無骨な石床に転がっている。

半透明の翠色をしたそれは僅かに差し込む朱光と相まって幻想的な色合いを醸し出している。

ミーファには見たことのないその首飾りは、少なくとも装飾品の類いに興味がないエクスのものではないはずだ。

しかし今しがた倒れかけたエクスの懐から落ちた物であることは、それが横たわっている場所から見ても間違いなさそうだ。

ミーファがそう不思議に思っていると、リムが指をさしながら元
気よく、

「フェイツ、あれって、昨日落としたって言ってた首飾りだよねっ」
そうフェイシスに向かって言っていた。

当の少年は床に横たわる首飾りを凝視し、なぜか目を見開き息を
呑んでいる。明らかに先ほどまでの無表情とは違い、驚き焦ってい
るのが分かる。

エクスはそんなフェイシスを見て、床に落ちた首飾りを拾い上げ
ると、ゆっくりと口を開いた。

「着替えたときに服と一緒に処分してしまおうかとも思ったのです
が……まさか、こう繋がるとは思っていませんでした」

先ほどまでとは一転して苦々しい表情のフェイシスは、エクスの
視線から逃れるように目を背けている。

「これは貴方の物で間違いありませんね？」

「……………」

フェイシスは肯定も否定もせず、変わらぬ様子でエクスの数歩前
に立っている。

「…………これは昨日、私が墓地で目覚めた際に、横たわっていた私の
下に敷かれていた大きな外套に紛れ込んでいました」

対するエクスは唐突に語り出した。

墓地で目覚めたことなどミーファは初耳だが、エクスの纏うただ
ならぬ雰囲気を押されて口を挟めるような様子ではない。

「私とミーファ様は一昨日の深夜、約十人の男たちに襲われました。
私は追われながらもなんとか追っ手を攪乱し、仕留めながらミーフ
ア様を逃がしましたが……しかしその後、複数人に一気に追い詰め
られてしまいました。肩と腿をやられて、加えて体力も限界で倒れ
そうになったとき、突如として一人の男が現れて……」

エクスはフェイシスから目を逸らさず、責めるような、あるいは
感謝でもしているかのような、複雑に感情の入り交じった様子で話
している。

その間、訳の分からないミーファとリムはただエクスの話を聞いているしかない。

「頭から足下までを外套で覆い隠していたので、その姿の確認はできませんでしたが、なぜか私以外の六人を片腕だけであつという間に殺しました。細剣で斬りつけ、その手の剣を投げつけ、時に相手の武器を奪つて、それはもう鮮やかともいえる動きでした。……そう、それはまるで」

ミーファはエクスの言葉に当てはまることをどこかで見たことがあると思っていると、

「今朝方、貴方が私たちを助けてくれたときのように」

エクスのその言葉で、ミーファは思い至つた。

フェイシスは今朝、警備兵三人を相手に片腕でそれこそ鮮やかともいえる動きであつという間に気絶せしめたのだ。

まさかエクスも助けていたのかと、そう浅はかに感心していたミーファの耳に、しかし先ほど聞いた異名が飛び込んできた。

「そして、それは噂に聞く《隻腕の剣鬼》のようでもありました」「えっ」

ミーファは思わず声を上げた。

片腕だけで、細剣で、という一昨日の深夜に現れた何者かの特徴を表す先のエクスの言葉と、宿で耳にした噂の人物のことを思い出し、咄嗟にフェイシスの顔を見た。

だが彼はいつの間にか顔を伏せており、髪に隠れてその表情はよく見て取れない。ミーファは半ば訳も分からず混乱していると、エクスは更に続けて、

「《隻腕の剣鬼》は騎士や王国軍の間でここ一年ほどの間、とある案件で議論されてきました。……それは彼かの人物を討伐するか否かというものでした。《隻腕の剣鬼》はその噂から様々なことを成し遂げているようで、善行もあれば悪行もある、しかしどれも噂になるほどに規模の大きなものです。そしてそれは騎士や王国軍にとつては歓迎すべき善であり、同時に秩序を乱す悪でもあったのです」

《隻腕の剣鬼》という異名について、ミーファはつい半刻ほど前にガルヴィアが話していたことを思い出した。

『《隻腕の剣鬼》。噂曰く、かの人物は各地で様々な凶行を繰り返しているとのこと。アンジースの惨殺がその最たるもので、他にも盗賊討伐隊の中に傭兵として紛れ込み、多くの輩をその手にかけて。これは善行の類いと言えるでしょうが、しかし一方で大商人の商隊を急襲し、護衛を殺しながらも商品と金を奪取した。生き残った者たちの証言から《隻腕の剣鬼》と断定したものの、その凶行は多くの商人を不安にさせた。……このように世間的に見れば善行を為したかと思えば、あるいはそれ以上に悪行をも為している噂の人物ですが……この噂には概ね共通していることが一つあります』

『それはどんな話の中でも常に『人を殺している』ということとです。いや、あるいは人を殺すという目的を果たした結果として、善行・悪行といったものが付随しているのでしょうか……？』

そしてその前に、こうも言っていた。

『最近、この都市アクナリアに《隻腕の剣鬼》がいるという噂がありますね』

『私は部下の死体を見てきたのですが……それは惨いものでした。胴と首が断たれた者、顔を粉碎されたもの、眼窩から一突きされた者など様々な様子で死んでいました』

『私の部下たちは私自身が言うのも何ですが、優秀でした。その彼らがそんな無残にやられてしまったとあっては……これは噂といえども馬鹿には出来ません』

ミーファは話が絡みすぎて混乱している自分をなんとか落ち着かせようとしますが、エクスの言葉が、ガルヴィアの言葉が頭の中を渦

巻いて冷静になれない。

「……貴方は一昨日の夜、私を助けるつもりだったのですか？ それとも……ただ人を殺したかったのですか？」

「……………」
エクスの言葉にフェイシスは答えない。いや、答えられないのだろうか。

どちらにせよ、その沈黙が雄弁に彼の正体を物語っているのは明白なことだった。

「……フェイ？」

数歩前にいる彼の名前を呼んだ。だが反応はなく、俯いたままだ。ミーファは《隻腕の剣鬼》というものを伝聞だけでやはり良くは知らないが、それでもエクスとガルヴィアの話を知りただけでも分かる。

その不吉な異名の人物は危険なのだ。たくさんの人を殺している。謂わば殺人鬼というべき者なのだ。

ミーファは当然、殺人に抵抗がある。いや、大半の人間はそうなのだが、それでも騎士という立場のエクスを間近で見ていると、その行為の異常性がよく分かる。

肉を切り裂き、人を苦しめ、紅い血を流させるといことが、端から見ているだけでもどれほど苦しいものなのか。

一昨日の深夜にエクスが自分を庇って追っ手を殺したとき、実際に手にかけてしたのはエクスなのに、ミーファは心が痛んだ。

昨日、捕まりそうになった自分を助けるためにフェイシスが数人を負傷させ、一人の男を殺したときも、やはり心苦しかった。

今日も、自分を庇ってエクスが宿で警備兵の人を斬ったとき、嘔吐感にも似た何かを感じた。

無論、自分が殺される危機に瀕したときには、おそらくミーファは迷いながらも結局は相手を殺そうとしてしまうだろう。

だがそれでも、やはり人を殺すという行為は容易く受け入れられるものではない。

「……………」
誰しもが沈黙している中、エクスは先ほど一度は納めた刃をもう一度抜き放った。鞘から抜かれる際の澄んだ金属音が倉庫内に虚しく響き渡る。

エクスのその行為で、ミーファも認めざるを得なかった。

今まさに目の前にいる、自分と同一年ほどの少年が、《隻腕の剣鬼》という異名を持った殺人鬼なのだ。

そう思ったとき、俯いていたフェイススがゆっくりと面を上げた。彼の瞳には先ほどまでは見られなかった昏い光が宿っている。

それは正体を暴かれたことへの憎しみなのか、あるいは悲しみなのか。

そして彼は唐突に唯一の手を前に突き出した。エクスが思わず構えるのを気にした風もなく、一言、

「……………それ、返してくれ。大事な物なんだ」

暗い声だった。彼の表情からも声からもおよそ正の感情は見られない。

やはりどこか気落ちしているような、感じたことのない雰囲気を感じている。そしてフェイススのその様子はエクスの言ったことを確信させるに十分なものだった。

エクスはしばらくその手を眺めていたが、突き出された手には直接渡さず、首飾りを投げ放った。

放物線を描いて彼の眼前に飛んでいったそれをフェイススは宙で横殴りに掴み取ると、そのまま背を向けて歩き出した。

「何をするつもりだ？」

エクスが剣を構え直して、警戒心をむき出しにする。

一方のフェイススはその声に立ち止まって僅かに振り返り、
「……………もう行動を共にする気はないんでしょう？ だから出て行くんですよ。貴女方のことは、誰にも言いませんから」

フェイススは苦笑なのか泣き笑いなのか判別しづらい表情でそれだけ言うと、そのまま背を向けて入ってきた二階の鎧戸へと向かう

ために階段を上っていく。

リムはそんなフェイシスの後ろ姿に少しだけ狼狽しながらも、彼の後に付いて行った。

しかし特異な容姿の童女は階段に足をかけたとき、そこで僅かに振り返ると、

「フェイを信じて」

奇しくも先刻の宿襲撃の際に言い放つたのと同じ言葉を残して、そのまま少年を追って去って行った。

「……………一体、何を信じろというのだ……………」

エクスは苦々しげに呟いた。そしてミーファとしてもエクスのその言葉には同感だった。

フェイシスは《隻腕の剣鬼》だと暗に言われても否定しなかった。「あなたは殺人鬼だ」と言われたのに、それを取り繕うことさえもしなかった。にも関わらず、彼の何を信じろというのか。

だが同時に思うこともある。

初対面の時のフェイシス、今朝助けられたときのフェイシス、そして宿でのフェイシスは、その剣技や体術の強さを除けばどこにもいる少年のようだった。宿で話したときの彼は悩みながらも自分というものにきちんと向き合っているようだった。

しかし未だに信じられなくとも、フェイシスがここを立ち去ったという事実が彼をして噂となるほどの殺人者だと証明している。

それでもミーファにはやはり疑問だった。

フェイシスとは初対面だった昨日、なぜあのときの彼は見知らぬ自分をわざわざ助けてくれたのか。貧民区の間人は誰一人として手を出すことなく傍観に徹していたあの状況の中、どうして。リムに請われたというだけで、己の命を危うくするかもしれない状況に普通は飛び込もうとしないだろう。

そして宿の一室で彼が口にした言葉。何をすればいいのかわからずに、自分の道に悩んでいた。その時の彼は本当に、真剣に悩んでいるようだったのをはっきりと覚えている。

果たして多くの人を手にかける人間がそんなことを悩むのだろうか。

「……エクス」

信じられない事実としこりのように残る疑問が混ざり合って、ミアファの胸中に大きな不安を生み出し、思わず背後からエクスに抱きついた。

上階から鎧戸が開け放たれる音が聞こえ、その際に燃えるような朱光が光量を増して室内を一気に照らしあげた。

その時、ちょうど五の刻を知らせる鐘が聞こえてきた。その荘厳な音響は吹き抜けを通して差し込んでくる光と相まって、どこか絵画の世界のような非現実めいたものを感じさせ、同時に言いようのない切なげな感傷というべき何かをも抱かせた。

そうして、もはや片腕の少年も変わった容姿の童女もいない中、王女と騎士はしばらく黙したまま身を寄せ合っていた。

第十七節・不安と憧憬、疑いの足音

フェイス・ス・クーリオとリム・フレスという名の二人がいなくなつて、しばらく。

この日最後の鐘である六の刻を示す時鐘の音を聞きながら、ミーファは山積みになされた木箱の前に腰掛けていた。今いる倉庫のある富裕民区は鐘塔の近くなので、やけに鐘の響きが大きく感じられる。「エクス、これからどうしようか……？」

すぐ隣に目を向けると、目を閉じていたエクスがその目蓋を開いた。

男装の麗人とも思える彼女の容姿は端麗で、後頭部で一つに結った髪がそんな容姿に拍車をかけて彼女を凛々しくしている。

エクスは視線をこちらに向け、

「とりあえず、もうしばらくしたらここからは移動しましょう。このような倉庫です。隠れるには打って付けなので、遅かれ早かれ捜索の手が入るのは確実でしょうから」

「そう、ね」

肩が触れ合うほど近くにいた彼女の言葉に、ミーファはそう答えるしかなかった。

思えばエクスとはまだ一月ほどしか同じ時間を過ごしてはいないのだが、それでもすでにミーファの中では今の自分を形作っている大事な一人となっている。

「エクス、ごめんね」

それ故に、ミーファは彼女に謝らずにはいられないかった。

突然の謝罪にエクスは困惑しているのか、僅かに身体を寄せて、薄暗い倉庫内では顔も見えにくいからか間近から覗き込んでくる。

鎧戸から漏れ出ていた光はもうほとんど無く、仕方がないとはいえエクスのその所作にミーファは少しだけ緊張したが、すぐにそんな気持ちも消え失せた。

「ミーファ様、どうかしましたか？」

「その……私のせいで貴方の人生を狂わせてしまって、本当にごめんね」

出会って間もないエクスが今の自分という人間を形成している重要な大事な一人だということは、言い換えればそれほどにこの一月は彼女に頼ることが多く、また心を許せる者も彼女くらいだったということなのだ。

この一月で目まぐるしいほどにミーファの生活状況は一変した。

つい最近まで住んでいた都市では、奇しくも今まさに身を隠している倉庫のある富裕民区と呼ばれる区画に暮らしており、ミーファは持ち前の明るさから友人も多く、毎日を何の疑問もなく楽しく暮らしていた。

家が裕福なこともあり、たとえ隣国と戦争をしようとなつた女自分には何の関係もないと思ったり、税金が厳しくなつたと嘆く市民たちを余所にゆっくりと自分の将来を考えているような、そんな満たされた生活を送っていたのだ。

だが一月ほど前、首都サスペスの王城から来たという使者に自身の出自を知らされ、驚愕した。しかしそれは無理もないことだろう。実は自分がこれまで住んでいたこのミエディア王国の王族だったとは。しかも侍女との間に生まれたから隠されてきたとか、だがそうであっても嫡子であるとか、しかも父親らしい国王が先日亡くなつたため、嫡子である自分に後を継いだとか。

初めて聞かされたときは使者の男の言葉は耳をすり抜けていったものだ。三回目の説明でようやく理解したことは、何もミーファが馬鹿だからであるとか、決してそういう理由ではないことはいうまでもないことだろう。

「ごめんね。私が貴女の主たり得ない、要領が悪くて器量のない人間で」

普段は決して弱音を吐かないようにしているのだが、都市という

大きなものから追われているという現状と先のフェイシスのこと
で動揺してしまったのか、つい口が勝手に動いてしまった。

本当に最近までは、ミスティリーファというどこにでもいる少し
裕福な家の少女だったのだ。

だが事実を知ってから少し冷静に考えてみれば、それまでの生活
には幾つかの疑問があったものだ。妙に長つたらしい名前も、
父親が居ないのにそのくせお金に困ったことがほとんどなかったこ
とも、当時は特に疑問に思っただけではなかった。ただそうであるとい
う事実をありのままに受け入れて、考えるということをしていなか
った。

だからミーファはそう自覚したとき、自らに絶望した。国が戦争
をしているとか、都市の政治のことだとか、そういったこと以前に
まるで自分のことすらも考えていなかったのだ。

故に、ミーファは変わろうと思った。

これまでの無知蒙昧な自分を捨てて、何事にもきちんと思える人
物になろうと思った。

「そんなことはありません。ミーファ様はたしかにまだ色々不慣
れなこと多いですが、それでも大事なことはいつだって努力を怠ら
ないことです」

変わる以前の自分を知らないエクスは、優しい声でそう言った。
ミーファがエクスと出会ったのは、自身が王女であるという事実
を受け入れて、それが何を意味するのか、なぜ自分を王に取り立て
ようとするのか、そんなことを考えているときだった。

エクスを一目見たときにまず思ったのが、とても凛々しい人だと
いうことだった。

女性ながらに背は男性にも負けないほど高く、背筋を伸ばして堂
々と屹立し、そして自信の垣間見える端正な顔立ちは同じ女性とい
えども惚れ惚れした。

そしてそんな心情を抱いていたミーファにエクス・オフィムと名
乗った彼女は、なんと自分の騎士だという。変わろうと思っていた

その時期のミーファには、常に側に居ると言っただけ彼女こそがまさに自身の理想像に思えた。

彼女の豊富な知識も、行動力や決断力のあるその姿も、騎士らしい強さも、すべて尊敬に値した。

ミーファはエクスと出会ってからは劇的に変わったという自覚がある。物事をよく考えて努力を怠らない、行動力のある、そんなエクスのような女性になりたかったため、この短期間といえども努力した。

そんな目標であるエクスは優しく、しかし過ちを犯してしまったときには厳しい態度をとる彼女をすぐに大好きになった。それは王女であるということと周囲に自分を利用しようとする者が急に現れて、他に好意を抱く者がいなかったせいもあるだろう。

しかしそれを除いてもエクスは尊敬すべき人物だと思った。

だから彼女には主と騎士という関係とは別に、友人になつて欲しい旨を告げた。彼女が素晴らしい人だということはもちろん理由の一つだが、しかし何よりもどこかエクスは張り詰めすぎていたような気がしたからだ。

ミーファはそんな大切な人を現在ののような状況に陥らせてしまったことを申し訳なく思った。

自分のような厄介な身の上にある人間の騎士になつてしまったことを謝りたかった。

そんなことを思っていたからか、エクスに落ち込んでるのが伝わってしまった、彼女は真つ直ぐにこちらの目を見てきた。

澄んだ瞳の奥に強い光が宿っているようで、ミーファはつい見入ってしまう。

「ミーファ様はたまに色々と考え込まれていますよね？」

「え、あ……その、知ってたの？」

だがエクスの突然の発言に、恥ずかしくなつて少しだけ目を逸らした。対するエクスは気にした様子もなく頷いて、

「はい。この一ヶ月の間、たとえば短期間といえどもミーファ様のこ

とはよく見ていましたから」

「あうっ」

エクス of 妙な発言に思わず変な声が出てしまった。だが次のエクス of 言葉には固まるしかなかった。

「ですからミーファ様が自分を変えようと必死になっていることも、承知しています」

「

「その努力は大変素晴らしいのでこれからも続けて欲しいのですが、それでも……ミーファ様自身は気がついていないのかもしれないが、貴女はとても人を惹き付ける魅力のある人ですよ」

魅力があるなど、突然そんなことをエクスに言われても実感がないかった。

ミーファの思う魅力とはエクスのような凛々しく誠実な人物が持っているものだ。とてもではないが自分に魅力があるなどとは思えない。

「そんなことはありません」

いつの間にか思考が声に出て漏れていたのか、エクスが首を振った。

「ミーファ様の明朗さは私にはないものです。人を笑顔にさせたり、すぐに他人と親密になったりするそんな明るさは、普通は努力では手に入れないものです。それに私はミーファ様の笑顔が大好きですよ」

「……………」

言葉がなかった。むしろそんな馬鹿なと言いたかった。

確かにエクス of 言うとおり、ミステイリーファ・ミル・デルフィリアという名の王女だと告げられたことの前後に関係なく、幼少の頃から自分は明るい性格だと自認しており、それは今でも変わらなない。だがエクス of ような人になるうと思っただこの一月、稀に脳天気とすら思えてくる自身の性格はどうにも治ることはなく今に至っている。

「でも私はエクスのような人の方が魅力あると思う。優しくて誠実で、自分が嫌われるかもしれないのに間違っていればそれでもちゃんと叱ってくれて……私は貴女みたいに凛々しくなりたいと思うる」

思わず本音を口にしてしまった。

この一月、実はエクスのようにになりたい、などと言ったことはなかったのに。現在の追い詰められた状況がそうさせたのだろうか。

「ありがとうございます。ミーファ様がそんなことを思ってくれているとは思いませんでした。ですが、人にはそれぞれに魅力というものがあります。私がミーファ様のように、意識してもなかなか明るく朗らかなれないのと同じように、ミーファ様もこんな私にはなれないでしょう。そしてそんな必要もないのです。私はミーファ様の明るいところも、こういってはなんなのですが……意外に努力家なところも、尊敬しています。無理にでも自分の性格を変えようとしてその魅力が損なわれるよりも、自分を認めて受け入れて、いいところを磨いていった方がいいのではないのでしょうか？ ですから、どうかミーファ様はその魅力をこれからも損なうことなく、笑顔を保ち続けてください」

穏やかな声で長々とそう言い切ったエクスの顔を見ると、珍しく、本当に珍しく彼女は微笑んだ。

その表情は今の言葉が嘘や冗談でもなんでもなく、素直な本心であることを表していた。

ミーファはエクスの言葉を聞いて、嬉しかった。尊敬している大好きな人から認めてもらったことが、ただ嬉しかった。脳天気さすら入り交じっているといえる自分の明るさのままで、無理に変わることはないと言ってもらえたことで、ミーファの中で何かがぴったりとハマったような気がした。

「ありがとう、エクス」

そう言ったと同時に、ミーファは自分の顔が笑っていることに気がついた。

どうやら本当にこの性格は治らないらしいが、それでもエクスが魅力的だと言ったのだ。もう変えようとは思わないし、思えない。

だがエクスのような行動はこれからも模倣していくつもりだった。彼女のようによく考えることも、起こすべき時に行動を起こすことも、これからの人生には必要なことだろうから。

「さて、そろそろここを出ましようか。一つの場合に長居するのは危険ですから」

エクスは立ち上がって、手を差し伸べてくる。だがミーファはその手を取ることなく、

「怪我をしているのに無理しないで。さんざん迷惑かけてるんだし、なるべくエクスには頼らないようにしたいから」

「……いい心がけです、ミーファ様」

少しも機嫌を害した様子なく、エクスはむしろどことなく嬉しそうに見えた。

ミーファは次はどこに行こうかと考える。エクスばかりに選択を委ねてばかりもいられないのだ。

そして思いついたのが、先刻エクスが口に使っていたところだった。

「たしかエクスって、昨日の朝は墓地で目覚めたって言ってたよね？」

「ええ。あの夜、気を失った私をフェイス・クーリオがあそこまで運んだからですね」

エクスは頷いた。

今更の話、本当にどうしてあの少年がエクスを助けるようなことをしたのかは分からないが、しかしこれは今すぐに考えるべき事ではない。

「次はそこに行ってみない？」

「……そうですね。あそこなら暗くなれば周囲からはよく見えないですし」

エクスは頷いて同意した。一瞬、ミーファの脳裏に教会に助けを求めることも思い浮かんだが、ミクヴァンの手が及んでいないとも

考えられないので考えるだけに留めた。

「それじゃあさっそく行ってみよ」

この時間帯ならちようど夕食時なので、商人や旅人それに市民が酒場や料理屋に出向くだろうからその人波に紛れることが可能だろう。

正面の扉は外から大きな錠が付いているので、やはりというべきか、上階の錠戸から出るしかない。

エクスと共に二階へと上がる階段の一步目を踏み出したとき、しかし彼女は急に立ち止まって手を掴んで引き留めてきた。

「待つてください、ミーファ様」

「ん、どうしたの？」

エクスは急に声を潜めて、何やら張り詰めたような鋭い雰囲気纏っている。

「……足音がしませんか？」

ミーファが耳を澄ますと、無数の小さな、でも確かに石畳を踏み鳴らす音が聞こえる。

そしてすぐに嫌な予感がすると同時、脳裏に思い浮かぶ一人の少年の顔と、その去り際の言葉。

『もう行動を共にする気はないんでしょう？ だから出て行くんですよ。貴女方のことは誰にも言いませんから』

彼がここを立ち去ってすでに一刻ほど。ミーファとエクスのことを都市側に知らせて、捕らえにやってくるのに十分な時間。

考えたくはないことだ。

だが、あまりに時機が良すぎる。

フェイススが自分たちの情報を提供する代わりに彼らは都市側から見逃してもらおう、ということをしたとしてもおかしくはない……かもしれない。

でもだったらどうして去り際にリムは彼を信じるなんてことを言

ったのか。

次第にはつきりと聞こえてくる幾つかの足音を混乱してきた頭でその危険さを理解しながらも、ミアファはエクスにその手を引かれるまでその場に立ち尽くしていた。

第十八節・少年のその後

夕焼け色に染まった空に六の刻を告げる鐘が鳴り響く中、イヴリーナは探し求めていた少年の姿をやつとのもので発見した。

「フェイ様っ！」

見慣れない外套を羽織った、だが確かに探し求めていた少年を見つけたイヴリーナは安心と喜びから自然と笑みがこぼれた。

商業区の最西端である西門付近の通りを、都市の中心方面からフェイシスは歩いてくる。人の多い通りだが今だけはフェイシスの顔しか目に入らない。

イヴリーナは通りを闊歩する人々をかき分けて少年の元へと駆け寄ると、フェイシスが一言、

「イヴ、ヴァン、そっちは大丈夫だったのか？」

どことなく浮かない顔をしている彼の隣には頭巾の付いた外套を目深く被る小さな影も確認でき、イヴリーナはその大きな胸を安堵感からなで下ろした。

「大丈夫だったかは私たちの台詞ですつ。フェイさ　兄さんもりムも怪我はありませんか!？」

「まあ見ての通り……って言っても、外套で見えないか。俺もリムも大丈夫だ……からっ、いちいち確認はするなよ!」

怪我がないか確かめようとしたイヴリーナはフェイシスの言葉をなんとか呑込み、彼の身体へと伸ばしていた手を引っ込めた。

本当なら今すぐにでも怪我の有無を確かめたいが、目立つわけにもいかないので自重する。

フェイシスは一昨日なくしたと言っていたものとよく似た釣鐘型の外套をいつものように妙な着方で羽織っていた。身体の正中にくるはずの外套の切れ目を左腕側にもってきて、フェイシスはそこから出した手でリムの手を握っている。

「……それは買ったのですか？」

イヴリーナはフェイススの手から離れて抱きついてきたリムを受け止めながら、二人の羽織っている外套に目をやった。

「ああ、荷物を持って逃げる余裕がなくてな。それに姿を警備兵に見られたから、俺の身体とかリムの瞳を隠すために必要でな。少ない持ち金を使って、ちよつとそこらで買って来た。……まだ大々的に手配されていないのが救いだつたよ」

「
」
頷きながらさりげなく答えるフェイススだが、しかしイヴリーナは言葉に詰まった。

ある程度のことは予想していたのだが、どうやらそれは当たっていたようだつたからだ。

イヴリーナがヴァンと共に買い物から宿に帰つたのが数刻前のこと。しかし宿の前が騒然としており、そこに倒れていた警備兵数人の姿を見て二人は半ば何があつたのかを理解した。フェイススたちがすでに宿には居ないことなど明白だったので、イヴリーナとヴァンはつい今し方まであてもなく彼らを探していたのだ。

そして案の定、荷物すら持って逃げる余裕がないほどの事態が発生していたらしい。

「ま、積もる話もあるようだし、とりあえず場所を移すぞ。往来の只中で立ち話は目立ちすぎる」

これまで黙っていたヴァンが腕を組みながら視線で周囲を指し示した。

彼の言うとおり、確かに先のフェイススの言葉から彼に加えてリムまでもが現在この都市から追われているのは分かっていることだ。気になることは多々あるが、場所を移した方がいだろう。

「そうは言ってもどこに行くんだ？ 下手な場所に行けば見つかりかねないぞ」

苦々しい表情のフェイススに、ヴァンは小さく口角をつり上げた。「今のこの場について見つからないのがいい例だろ？ 人を隠すには人の中ってな」

ヴァンの言葉に従ってたどり着いたのは一件の酒場だった。

中は十ほどのテーブルに背もたれのない簡素な椅子、そして奥には高く細長いテーブルとその向こうに無数の酒瓶。

店内は喧噪　というほど騒がしくはないが、それでも十分に耳を打つ声たちが飛び交っている。ほとんどが男の声で、女性は数人しか見られない。

確かにヴァンの言うとおり、人の多いところに紛れ込んだ方が見づかりにくいだろうし、それによもや追われていると自覚している人間が酒場などに足を運ぶとは思うまい。

イヴリーナたちは一っだけ空いていた壁際の席に腰掛けると、すぐさま若い女性が飛んできた。

「注文つけたまわりまーすっ」

さばさばとした印象のある彼女は店内の騒がしさに負けない元気な声をしていた。

すかさずヴァンが適当に注文し、それに付け加えるようにフェイシスとイヴリーナも口を開いた。リムの分はイヴリーナが適当に見繕って注文しておく。

「あれ？　外国の子ですか？」

まだ十代後半と思しきその女性は去り際にフードだけ取り去ったリムを見てそう言った。そしてその質問には未だ外套を羽織ったままフェイシスが微笑と共に答える。

「ええ。帝国の方の友人から預かっていまして。髪が黒いのは混血なんで」

「……そ、そうだったんですか」。西の方は小競り合いが多いって聞きますし……」

気まづくなつたからか、店員はもう一言一言残して店の奥へと戻っていった。

無駄に注目を集めてしまいうりムは、彼女の容姿から今のよう質問を多々受けるため、すでに答えは定型文めいたものができあがっている。

ミエディア王国西部は隣国のアプストル帝国と小規模な戦いが相次いでいるため、国民はこの暗い話題を避けることが多い。

リムの真つ白い肌は西方の、黒い髪は東方の者であることを示しているため、先の店員が珍しがするのも無理はない。瞳は長めの前髪がなんとか誤魔化してくれたらしく、突っ込まれなかったのが幸いだった。

王国西部では帝国民への迫害が強いが、今いる都市アクナリアは王国の南 ことに南東部に位置しているため、この辺りの人々はただ話題を避ける程度の思いしかない。

「さて、それで何があったんだ？」

ヴァンが普段よりも真剣な眼差しになって、話の口火を切った。

「そうだな……色々あったのはイヴとヴァンが買い物に出てしばらく経ってからだだった」

フェイスは訥々^{とつとつ}と語った。

あれから宿を急襲されたこと、ガルヴィアと名乗る男とその彼が言っていたこと、それが原因となって逃げた先でエクスに問い詰められ、結果としてエクスとミーファとは手を切ったこと。

そして、一昨日の夜のこと。

それらを聞いてイヴリーナは暗澹とした気持ちになった。淡々と語るフェイスの表情に影が差していることもそうだが、何より彼が一昨日の夜に数人を手にかけていたことがイヴリーナには悲しかった。

「お待たせしました」

ちょうど話し終えた時、注文した料理が運ばれてきた。

しかし今のイヴリーナはテーブルに並んだ湯気を立てるそれらを前にしても、食欲はそそられない。

「つまりだ、お前は一昨日の夜にまたやらかした。そしてガルヴィ

アとかいう奴の言葉であの嬢ちゃんたちは疑心を抱き、協力云々の話は御破算になったと」

「……そうだ」

ヴァンの遠慮のない物言いに、フェイシスは頷いた。それを見たヴァンは小さく息を吐いて、

「いつも言っていることだが、俺は基本的にお前の行動には口を出さない。だがフェイシス、俺はお前の暴走だけは見逃せないんだ。お前からすればその衝動は抑えがたいものなんだろうが、それでも耐えろ」

フェイシスは答えず、ヴァンから目を逸らして苦々しい顔をしている。

対するヴァンは手元にある酒を一顧だにせず続けた。

「俺はお前と行動を共にしてまだ一年ほどだが、それでもイヴリーナに色々とは話は聞いた。お前自身、苦勞していることは知っているが……それでもそう易々と人を殺すな」

「……それは反省している。だがそれでも、俺は斬る人間を誤りはない」

「たとえ暴走しても悪人しか斬らないってやつか？ まあ確かに、世の中には死んでいい人間なんて腐るほどいる。……だが一昨日斬ったっていうその六人がお前の言う悪人だったっていう確証はあるのか？ あの嬢ちゃんが王国騎士だって分かったのは今日のことだ。いくら女一人が六人の男に追われていようと、お前の言う悪人が嬢ちゃんだった可能性もあつたんだぞ？」

問い詰めるようにヴァンは珍しくも長々と弁を振るった。

イヴリーナとしては、今はリムもいるためこういった話はそろそろ止めた方がいいとは思うものの、ヴァンのいつになく真剣な様子に気圧されて口を挟めない。

「彼女が騎士だということは剣技を見て分かったんだ。加えて言うなら、ミーファが王女云々だったという話も王国騎士のエクスさんが側にいることから納得できた」

確かにフェイススはミーファに関する話を聞いたとき、リムに確認する前から割と信じている様子だった。

「だがどうしてお前が騎士の剣技なん　って、そうか、そうだったな……」

ヴァンは口をつぐんで頷いた。フェイススならば見分けることも可能だということを感じ出したのだろう。

「まあ一昨日のことはこれ以上言うまい。もう終わったことだしなだが、その暴走は抑えろ。所詮は悪人しか殺していないと言ってもそれはお前から見た視点での話だ。もつと慎重に相手を……いや、これは色々と長くなりそうだからやめておこう。まあとにかく、暴走しないためにもお前は無闇やたらと『功』を使うな」

言い終わると、ヴァンは手元の酒杯を手にして一気に傾けた。

イヴリーナとしてもヴァンの言いたいことは分かる。

彼の言うところの暴走はフェイススとしても望んでいることではないとはいえ、それでも耐えられる類いの衝動なのだ。もしイヴリーナとリムがその場にいたなら、言葉でもってフェイススを止められた可能性は高い。それはこれまでの経験からも明らかなのだ。

「兄さん、一応聞いておきたいのですが……一昨日の深夜から今までで『功』を使いましたか？」

イヴリーナは何か考え込んでいる様子のフェイススに尋ねた。すると彼は小さく眉間を寄せて、

「あ……使った、な。昨日も、今日も」

気まずそうにフェイススは言った。その言葉に反応したヴァンは、飲みかけの杯を置いて、

「あの嬢ちゃんたちを助ける時に使ったのか……。もしまた暴走しそうになっても、今度は我慢しろよ」

「分かってる」

フェイススは一言だけ返すと、そこでやっと並んでいる料理に手を付け始めた。

イヴリーナは雰囲気にあてられて不安そうにしているリムに微笑

んで、共に食事を取り始めた……のだが、片手で肉料理を切り分けるのに難儀しているフェイシスに気がついて、

「兄さん、食べづらいときは私に言ってください。いつも言っているでしょう?」

「……それ、恥ずかしいんだよ」

常人よりも日常生活では何かと不自由なフェイシスには、イヴリーナがたびたび手を貸している。

料理を切り分けて食べやすくすることくらい恥ずべきことではないのに、フェイシスはいつからか拒むようになった。

そんなことを思っていると、イヴリーナは訊いておかなければならないことを思い出した。これまでの会話が少し重いせいもあって、すっかり失念していたことだった。

「そういえば兄さん、これからどうするんです? 警備兵に追われているんですよね?」

そう、フェイシスはガルヴィア・フロードと名乗った男にエクストミアファと共にいるところを目撃されたのだ。

それに昨日ミアファを助ける際に犯した殺人もある。フェイシスがこの都市から目を付けられて追われていることは確かなことなのだ。

「ああ、そういやそうだ。フェイシス、お前これからどうするつもりだ?」

ヴァンは片手に杯、もう一方には小魚を持ちながら口を挟んだ。

先ほど見せた真面目そうな眼差しはどこへやら、今の話も十分に大事なことなのだが、ヴァンはすっかり元の調子に戻っており、その声は柔らかく軽い。

「まあ……一応は当初の予定通り、情報屋から抜け道の情報を買って、さつさとこの都市からは離れようかと思ってるけど……」

だが反してフェイシスは心ここに在らずといった様子で、答える声に覇気がない。

「ま、それが妥当　なわけねえだろが。馬と荷物はどうすんだ

よ」

「……あ、ああ。そういやすっかり忘れてた」

普段のフェイススらしからぬ失言だった。

フェイススの言うとおり都市には抜け道　　というか通用口があり、門が閉まっている時間帯に外に出るときはそこから通り抜ける出来る。

だがそれは一、二人分ほどの大きさの出入り口とはいえ門衛もんえいが常に守っている。そのため配備されている門衛を買収すれば通れないこともないが、しかしそれを為し得る金は荷物の中で、肝心のその荷物は宿を襲撃した警備兵が押収したことだろう。

今の持ち金ではせいぜい食事回数分しかない。

加えて馬もそう簡単に諦められるほどのものではない。

たとえフェイススとリムが目を付けられているといっても、イヴリーナとヴァンはそうではないのだ。なんとか取り戻しようはあるはずである。

イヴリーナが思案していると、当のフェイススは気を紛らわせているかのようにテーブルのパンを掴んでかぶりついている。

「もしかして、ミーファさんとエクスさんのことを気にしているのですか？」

イヴリーナは当初から目下気になっていたことを問うてみた。

本来、フェイススがミーファに協力する理由などないにも等しかった。

いくら昨日の殺人で追われるかもしれないといっても、それは協力する理由にはならない。あの時点ではまだ通用口の門衛買収という方法で都市から出ることは可能だったのだ。

しかしフェイススは一方的に協力する形になるにも関わらず、ミーファとエクスに手を貸すことにした。

フェイススの過去を鑑みればその理由は分からないわけではない。おそらく彼は自分のために、彼女らに協力しようとしたのだ。その過去に捕らわれた心の整理をするために、あるいは完全に決別する

ために。

「……………」

フェイススからすぐには返答がなかったが、彼はしばし目を閉じてからゆっくりと答えた。

「気にしていない……といえは嘘になる。彼女らは俺の……《隻腕の剣鬼》の噂に警戒していた。だからこれ以上俺が手を貸しても怪しまれるだけ、なんだが……でも……」

「フェイスス、お前は正直なところではどうしたいんだ？」

「俺は……」

ヴァンは食事の手を止めて、フェイススに向き直った。表情や声からは普段の飄々とした彼なのか、真剣な彼なのかは判別が付かない。

「もし俺たちがいなかったら、お前は どうする？」

「……………」

その問いかけはフェイススにとって大きいだろう。

先の彼の話を聞くに、宿が襲撃されたことから今回のことは本当に危険なのだと分かる。そこでフェイススが今回の件とは何の関係もないイヴリーナやリム、それにヴァンにも危険が及ぶと考えても不思議ではない。

フェイススの性格を考えれば、これ以上は自分勝手に行動できないと判断を下すことは分かりきっている。その上でヴァンは自分たちがいなくなったらどうするのかと訊いているのだ。

「俺は……たとえ彼女たちが拒絶しても、俺は俺のためにミーファを助けたい」

フェイススはおそらく本心と思われる気持ちを口にした。

それは彼という人間 彼自身から聞かされた過日の出来事を思えば当然とも言える答えだった。

イヴリーナがヴァンとの買い物中に思ったように、フェイススも今回の件に関わって王女であるミーファを助けることが出来れば、色々吹っ切れると思っっているのだろう。

「ならまあ、そうすりゃいいんじゃないか？」

「でもそれは……俺はイヴともヴァンともリムとだって、別れたくない」

ヴァンの言葉にフェイシスはかなり飛躍した答えを返した。

「どうやら彼はこれ以上ミーファたちに関わればイヴリーナたち三人とは別れなければいけないと思っっているのだろう。」

「まだ余裕のあった昼頃とは違って、宿を襲撃されたときのよう、協力すれば命に関わると実感したフェイシスはイヴリーナたちを巻き込めないと思っっているに違いない。」

「何を言っっているのですか、兄さん？」

「だがイヴリーナにはフェイシスと別れるつもりなど毛頭ない。むしろフェイシスが頼ってくれないことに若干の腹立たしさと寂しさを覚えているくらいだ。」

「イヴリーナにとって、フェイシスは言い表せぬほどに大切な存在なのだから。」

「何って、だから今回のことはかなり危険」

「ま、確かにこれまでお前が首を突っ込んだどんなことよりも、今回のことは危険だな。だが俺はお前を見守ると決めた以上、どこまでも付いていくつもりだぜ？」

「兄さんが　フェイ様が付いてくるなと言うのなら、私には反対できません。ですが私は、私の意志でフェイ様に付いていきたいんです」

「　」
「フェイシスはイヴリーナとヴァンを交互に見て僅かに呆然としたあと、苦笑を浮かべた。」

「……その気持ちは嬉しいけど、でもリムもいるし、やっぱり危険だ。ミーファの件はもう　」

「　ダメだよフェイツ！」

「フェイシスの諦めたような口ぶりを遮ったのは、これまで黙して話を聞いていたリムだった。」

「ミーファもエクスもいい人だったよ？ このままじゃ宿のときみたいにな、二人とも襲われちゃうよ」

「リム……」

幼げな声音に反してはつきりとした意志のこもった声だった。リムに正視されているフェイシスは驚いたように童女の姿を見ている。「わたしのせいでフェイが困るのはいやだよ。それに、ミーファとエクスにフェイを信じてって言っちゃったもん」

リムは真つ直ぐにその宝石のような瞳でフェイシスを見つめた。

この風変わりな童女はイヴリーナから見ても非情に良く出来た子で、特に周囲の感情を読み取ることに關しては異常なほどに敏感な節がある。それは彼女の『功』のせいでもあるのだろうが、それでもリム自身の優しさもあるのだろう。

フェイシスはリムの言葉に今度は苦笑ではなく小さく微笑んで、「信じてって言っちゃったのか……。だったらそれは……。信じさせてあげないとな」

その言葉で花が咲いたようにリムも笑みを返した。その姿はもうイヴリーナからすれば抱きしめたいほどに可愛らしいものだった。

しかしそこで突然、リムは満面の笑みを曇らせて、

「そういえば、ごめんね。わたしが首飾りのこと言ったから、エクスたちがフェイのことを……」

「……首飾り？」

急に出てきた首飾りという言葉にイヴリーナは首をかしげる。

首飾りといえば、イヴリーナはいつしかフェイシスに上げたものを連想してしまうのだが……。どうして唐突にそんなことを言っているのかと疑問に思っていると、フェイシスが横目でこちらを見た後、「あ、ああー、なんでもないぞ、なんでも。リムもそんなこと気にするな」

早口にそう言い切った。

何かを誤魔化しているらしいことくらいはイヴリーナにも分かったが、今の話題にはあまり関係がないようなので深くは追求しない。

フェイススは気を取り直すように咳払いすると、

「じゃあエクスとミーファに関わるが……本当にいいのか？ 正直、かなり危険だぞ」

「あぁつと、一応確認しておくが、協力はこの都市から出るまでの間だけだよな？」

ヴァンが思い出したように眉を顰めた。

確かにそれは重要なことだった。都市から出て関わるとなれば、それはさすがに人生を棒に振らなくてはならなくなるだろう。

フェイススがそこまでのことに関わるとなれば、さすがにイヴリーナとてフェイススを止めなくてはならなくなる。

「いや、それはない。都市を出てからは騎士であるエクスさんの役目だからな。彼女の務めに水を差すのは今回だけだ」

フェイススははつきりとそう宣言した。それはエクスの役目であり、自分はそれ以上は首を突っ込まないと。

彼のその態度はイヴリーナの予想通り、騎士のなんたるかを知っているフェイススの当然の答えだった。だが一方で今回は彼の個人的な感情故の行動なので、そこまで深く関わるつもりもないのだろう。

「んじゃま、どうするか作戦でも練ってくれや」

ヴァンは見守るといった以上、行動の指針はフェイススにとらせるようだ。はやくも再び、酒杯片手に料理を摘み出した。

そんないつも通りの男の言いぐさにフェイススは肩を竦めた。

そして彼はリムの頭に手を乗せると、一言。

「ま、ここはリムに協力してもらおうのが一番だろう」

イヴリーナは不思議そうなりみの顔を横目に、曇りの晴れた表情のフェイススを見て、人知れず微笑みを浮かべた。

第十九節・想起　くエクスく

エクス・オフイムが騎士となったのは、ちょうど十九になる前のことだった。

地方の都市に住まう貴族の末っ子として生を受けたエクスは物心ついた頃に聞いたとある話に感銘を受けて、女の身でながら騎士になることを夢見た。

それは祖父から聞いた話で、四十年ほど前に起こったミエディア王国と西の隣国であるアブストル帝国との戦争での逸話だった。

当時は王国騎士であった祖父は国を守るため、その戦争に参加していたという。

ミエディア王国では王都から見ると陽が沈む西の方角　真つ赤に焼け爛れた夕陽を指して落日戦役と呼ばれたその戦いは、歴史的な激戦で熾烈をきわめていたらしい。

だがそんな戦いの中で一人の天才的な王国騎士が現れた。

ハイン・ヴェリアスというその男は、　今ではより一層の邪険さを見せているが　当時でも謂わば犬猿の仲だった王国騎士団と王国軍部を一時的とはいえ取り持ち、奇抜な戦略を提案し、そして彼自身が前線に立って帝国の侵略を退けたという。

エクスはその話を聞いて、少女ながらに憧れた。英雄的なその男のように王国を、そして国民を守ろうと思った。

そうして元騎士であった祖父に稽古を付けてもらい、十二歳の頃に騎士訓練校に入り、候補生として六年の歳月を送った。

だが候補生としての最後の年の終わりにある一つの事件が起こった。

訓練校二年目の候補生たちが遠征訓練中に何者かによって襲撃され、その大半が殺されたというものだ。それは過去にも例を見ないもの事件だった。

このことでエクスは騎士になることで国を守りたいという気概を

一層強く抱くことになり、そしてその後、彼女は晴れて正式な騎士となった。

よくある人生だとエクス自身は思っている。

語り継がれるほどの英雄に憧れて騎士となり、身近に起こった悲壮な出来事に感化されて決意を強くし、誰かを守るために生きていくとする。

かくしてエクスは国王騎士団の一員として二年ほどその務めを果たしていたのだが、ある日、病床の王から突如として呼び出された。国王に呼ばれるなどエクスの人生の一大事であり、それまでの二十一年間のどの瞬間よりも身体が強ばり緊張した。騎士叙任式のときと比べたら、もはやそれは雲泥の差だったといえよう。

自分のような若輩者に何の用なのかと思いつながらエクスは謁見すると、そこでとある王族の専属騎士になつてもらえないかと言われた。

王なのだから命令すればいいものの、あくまでもそれは個人としての頼みだったということをエクスは覚えている。

ただならぬ気配を感じたものの、エクスは承諾した。

王族ということは王国の未来に大きく関わってくる。不敬な話だが、たとえその個人に対して専属として仕える価値がなくとも、それは変わらない。

エクス・オフイムという人間は自身を騎士であると認識するよりも前に、自他共に厳しい人間であると自覚している。立場のあるものには相応の態度を求めるし、またエクス自身もその一方的ともいえる要求を自身に課している。

その点でいえば、国王は素晴らしい人間だったとエクスは記憶している。

かくして頷いたエクスに王は訥々と事情を語った。

侍女との間に出来た娘のこと、周知の事実である後継者不在のこと、そしてその跡継ぎを件の娘にすること。

当然、エクスは驚いた。もはや驚きなど通り越して啞然とした。

次王は現王の弟の息子　つまりはアトウニスという甥が王位を継ぐことが半ば決定的だったからだ。

だが王はその彼が性格的に問題のある人物だとし、さらに領土的な問題もあることからアトウニスを次の王としては断固として認めではない様子だった。

故にこれまでは政争の火種として遠ざけていた隠し子に、その役を回したのだ。そういったことから、相当にアトウニスを次王にしたいとみたエクスは改めて快諾した。

アトウニスという人物を直接的に知っているわけではないが、王にそこまで言わせるほどの人物ならば、エクスとしても彼の人物を国王に据えてはならないと思った。

王とは国であり、国は国民だ。賢王が国を率いれば栄えるが、そうでなければ腐敗する。

そうして謁見した数日後に王は亡くなり、エクスは今から遡ること一月前にミスティリーファ・ミル・デルフィリアと出会った。

彼女はこれまで、どこにでもいる少し裕福な家の少女として暮らしてきたらしく、事実を知らされたのはほんの数日前だという。

さぞかし混乱しているだろうと思ったエクスは、果たしてどのような人物なのかと思いつつもいざ会ってみると、しかしその少女は予想外に落ち着いていた。

エクスは素直に驚いた。

これまでは政治になど興味がなかったたであろうはずの少女が、突然に貴女は王女だと言われたあげく、次の王になれと告げられたのだ。

混乱どころか発狂してもおかしくはなく、ただ一人の少女からすれば、それは天変地異にも似た出来事なものにも関わらず、ミスティリーファは落ち着いているようだった。

そして数日のあいだ彼女と行動を共にしてもそれは変わらず、むしろ並の少女よりも明るい性格だと分かった。そのくせ現実逃避をしている様子はなく、目の前のことに向き合って、その都度ごとに

色々と考えているようだった。

まさにエクスからすれば尊敬に値する少女だった。

だが明朗快活というべきミスティリーファは時折その表情に影を落とすことがあり、それがエクスには不安だとすぐに察しがついた。故に、彼女から友人になつて欲しいと言われたときは快く頷いた。それで彼女の不安が取り除けかもしれないのなら、そうするのもまたエクスの役目だったからだ。

だがエクスは一方で、まだ出会って間もない年下の少女と友人という関係になれたことが、どこか嬉しくもあつた。

それまでは訓練漬けの毎日でもくに友人などいなかつたのだ。騎士訓練校では女性がかなり少なかったことがそれに拍車をかけていたので、エクスにとってはまさに人生で初めてのことだった。

無理矢理に強要されてミーファと呼ばされたときも、立場的に表面上は渋々という態度を貫いたが、内心では言い表せない喜びに似た何を感じた。

そうしてミーファと行動を共にして一月。

たったそれだけの期間なのに、騎士としても友人としても彼女に好意をもつたエクスは、これから一生、彼女の剣となり盾となつて生きていこうと強く思った。

エクスは誰でもない己自身に誓つたのだ。どんな苦難があろうとも必ず側で支え続けよう。

ハイン・ヴィリアスのように救国の英雄とまではいかないまでも、せめてこの少女だけの英雄になろうと。

故に、今まさに直面している問題など早々に片付けて、一刻も早くミーファの側へ行かねばならない。そうすることがエクスの務めであり、それはエクス個人の意思でもあるのだ。

だが敬愛する少女までの道程はいつにも増して遠かつた。

いや、決して見えないほど離れているわけではない。むしろ今もきちんと目の届くところにいる。話しかければすぐにも返答が帰

ってくる。

そう、今だってまさに、彼女の声が聞こえる

第二十節・巨斧は二人を別ちて

「エクスツ」

これまでに聞いたことのない悲痛な叫び声は、だが確かに守るべき少女のものだった。

無駄に広い倉庫の石床に抜き身の剣を突き立て、エクスは痛む身体に鞭打って立ち上がった。

「ガルヴ、お前は兵と一緒に嬢ちゃん連れて先に戻ってる」

数歩先に巨岩のように悠然と立つ男が野太い声でそう言った。

その体軀はまさに岩のような隆々とした筋肉に埋もれており、その太い片手には巨大な戦斧。

刃の部分だけでエクスの上半身ほどはありそうなその巨斧は、目にするだけでも恐怖を感じさせられる。

「グレン殿、貴方はどうするのですか？」

まだ鮮明に記憶に焼き付いている蛇のような男であるガルヴィア・フロードが巨漢　グレンに尋ねた。

長身瘦軀で髪の毛長いガルヴィアは、無表情でグレンの数歩後ろに立っている。

「そんなん決まってるんだろ。この騎士の嬢ちゃんを片づけるのさ。もちろんサシでな」

「……ミクヴァン様からは捕縛と命令されていますが」

意気揚々と言うグレンにガルヴィアは不機嫌さを見せて答えた。

悠長に会話をしている二人だが、隙が全く見受けられない。

「いいじゃねえかよ。王女サマさえ無事なら騎士のほうは別にどうでもいいだろ？　旦那にはうっかり殺してしまいました、とでも報告すりゃいいのさ」

「しかしですね」

「おいおいガルヴ？　俺は明日の朝にも出発する予定なのに、それでもせつせと協力してやってるじゃねえか。その礼もねえのか

よ？」

グレンはエクスから視線を外すことなく話を続ける。

だが男たちが悠長に会話しているおかげで、エクスは僅かにだが身体を休めることが出来ている。今は機を窺って然るべきだ。

「後ほど上から出るでしょう？ それに何より、ミクヴァン様からの命令は絶対です」

ガルヴィアの反論に、グレンは急に冷めた声になって、

「俺はよ、騎士って奴が反吐が出るほど大嫌いなんだよ。お前には話したよな、俺のことはよ？ それに旦那だって俺の性格を見越して協力を頼んだんだ。俺がこの騎士の嬢ちゃんを殺ることなんて織り込み済みだろうぜ。そうだろ、ガルヴ？」

「……………」

沈黙するガルヴィアに、今度は獰猛な笑みをその強面に貼り付けてグレンは言った。

「と言う訳で、さっさと他の連中を引き下からせる。こいつは俺一人で潰してやんねえと気が済まねえからよ」

「……………分かりました。ですがくれぐれも殺し損ねて逃げられるという事態だけは避けられますよう」

「誰にもの言っただ、誰に」

ガルヴィアは渋々といった様子で部下である警備兵を引き下からせようとした。

と、そこで二人の男に取り押さえられたミーファが エクスにとつて守るべき少女が声を上げる。

「エクスッ」

「ミーファ様っ」

名を呼んでくるミーファは今にも連れて行かれそうになるのを暴れて抵抗しながらも、さらに続けた。

「私が殺されることはないからっ。だからエクスッ、貴方は逃げ
っ」

が、ミーファの言葉は半ばで途切れた。

ガルヴィアが彼女の華奢な首に手刀を叩き込んだからだ。ミーファは糸が切れた人形のように頂垂れると、そのまま警備兵に連れられて行く。

「ミーファ様！」

思わず駆け込んだ。身体から痛みは消えないがそんなことに気を割いている余裕はない。

先ほどこの倉庫を急襲してきたグレンとガルヴィア、それに十数名の警備兵はほとんど一齐に飛びかかってきた。その際、数に押された状況下でミーファを逃がすことなどは当然の如く不可能で、彼女と己の身を守るだけで精一杯だった。だが圧倒的な数の差に為す術もなくミーファは奪われ、そしてすぐにも手足の一本くらいは切られるかと思つたエクスだったが、そこを今まさに目の前に屹立するグレンが止めた。理解できなかったその制止の理由は、先ほど聞いて明らかになつたことはいうまでもないだろう。

エクスは破壊された倉庫の出入り口から連れ去られようとしていくミーファに近づこうとするも、その疾走は巨漢に遮られた。

「おっと、悪いが嬢ちゃんには俺の相手をしてもらわなくちゃならねえんだわ」

「どけっ！」

立ちふさがつたグレンに向かつて、裂帛の気合いと共に左から横殴りの一閃を放つが、その一撃はあっさりと巨大な斧に防がれた。

「っっ」

しかしエクスは防がれたその反動を利用して、飛ぶように相対する大男の左側面に移動。しようとしたのだが、逆にグレンの斧が押し返すあまりの力に真横に吹っ飛んでしまう。

積まれた木箱の山に背中から激突し、激しい衝撃が身体を襲う。だが悠長に痛んでいる暇など当然なく、霞む視界が捕らえたのは落下してくる数個の木箱。

さすがに頭上からそんなものを喰らえば中身に関わらず一溜まりもない。

転がるようにしてなんとか避けるが、体勢は無茶苦茶だった。今襲われればあっけなく斬られるという確信がエクスにはある。

「……………」
「が、そんな予想に反してグレンから攻めの一撃はなかった。

出入り口を見ればすでにミーファの姿も、ガルヴィアや警備兵の姿もない。もはや完全に連れ去られてしまった。

「おいおい、今は俺との戦いに集中してくれよ？　でないと王女サマを助ける前に死んじまうぞ？」

肩に斧を担いで挑発するようにグレンは言った。

しかしエクスには彼の言葉などどうでもよかった。ただミーファを連れ去られたという、自身に対する情けなさがエクスの身体を満たしていた。今この全身を苛む痛みなど、そんな悔恨の念に比べれば兇戯にも等しいほどのものだった。

エクスはゆっくりと立ち上がった、巨漢を見据えた。

この眼前の男を打倒しない限り、この倉庫からは出られそうにもないことは明らかだ。

ならば早々に片を付けてミーファを助け出さねばならない。

それが彼女の　騎士としての役目なのだから。

「おお？　いい顔するなあ嬢ちゃん。たしかエクスとか言ってたっけか？　せいぜい楽しませてくれよ？」

グレンは余裕の態度を誇示するかのように巨斧で肩を叩いている。「貴様など早々に斬り捨てて、私はミーファ様を追わせてもらう」

エクスは己に言い聞かせるように言い放ち、先手を取るために痛み足を無視して駆け出した。愛剣の切っ先が床面に触れ合うほどに身体を沈め、下段から斬り上げる。

まだ二十代とは思えないほどに洗練された鋭い斬撃を、グレンは振り下ろした斧で容易にはじき返した。

彼は見るからに半端な重量ではないこと分かる斧を軽々と操り、そしてその驚異的な膂力で振り下ろした得物を返し、斬り上げた。

「　　つぐ」

腕が千切れそうなほどの衝撃で、受け止めた剣と共にまたも後方に飛ばされるが、今度はなんとか姿勢を保って着地する。

剣が折れなかったことが不思議なほどの威力だった。

こちらが姿勢を回復したことを確認したグレンは命を賭けた戦いの最中であるにも関わらず、やはりというべきか余裕の態度で口を開いた。

「……剣技は申し分なさそうなんだが、どうやら怪我が祟っているらしいな。動きが鈍いぞ、嬢ちゃん？」

ただの力馬鹿ではないことは、すでに数度の打ち合いでエクスには分かっていた。だがこちらの動きまで冷静に観察されているとなると、このグレンという巨漢は相当の強者なのだろう。

左肩の怪我は数刻前にイヴリーナから借りた長袖の上着が隠しているし、右腿は釣鐘型の外套が膝までを覆うような腰巻きによって見えないはずなのだ。

「それは貴様とて同じ」

エクスは視線を対峙する男の左腕に注いだ。巨漢の左腕は肘から先がなく、その断たれた部分には傷口を保護しているのか、妙な形状の金属片が付けられている。

もはやいうまでもなく、グレンは片手で巨大な戦斧を操っていたのだ。少なくともエクス自身は両手で持っても彼の斧を振り切れはしないだろう。

「ふんっ、これが……」

左腕を僅かに動かしてから忌々しげに呟いた。彼は本来ならば斧を両手で操っていたのだろうが、今は片腕だ。何があったかは知らないがエクスとしては都合がいい。

「嫌なことを思い出させてくれる　ぜっ」

突如、グレンは巨体に似合わず俊敏な動きで迫ってくると、その手の巨大な凶器で薙ぐような横一閃を繰り出してきた。

視認できないほどの速度で迫り来るそれをエクスは半ば身体の勝手な反射に任せて、全力で床を蹴って後方へと回避する。

巨斧の生み出した旋風が周囲の大気を揺らし、エクスの髪をなびかせる。その一撃を放った後の僅かな隙を見逃さず、下がっていた身体を左足で急制動をかけ、今度は逆に勢いよく踏み込んだ。

横にも広い肉体を串刺しにすべくエクスは剣を突き出す、驚くべき事にそれをグレンは躲してみせた。

まずもって回避は無理な姿勢だと思っていたのだが、おそらくは全身の隆々とした筋肉を用いて無理矢理に身体を捻ったのだろう。加えてそこから蹴りを一発放ってきたときは、さすがに冷や汗をかいた。だがでたらめな牽制なのか、それは身体に掠りもしない。エクスは怯えることなく次こそはと思いつきながら追撃する。無理に身体を動かしたグレンは体勢を立て直すのに数瞬の時を要するはず。それだけあれば一撃入れるのに十分な時間だ。

「っ」
グレンは舌打ちしつつもエクスの放った剣撃をなんとか躲そうとした。

だがその剣閃は妙に派手なベルトを掠めただけに終わり、エクスのほうが舌打ちしたい心境になった。

いくら何でもでたらめすぎた。本来ならグレンの腹部を厚く切り裂いていたはずだったエクスの剣は、しかし掠めただけなのだ。

巨漢は体勢を持ち直し、戦斧を構えながら言った。

「やっぱり一撃狙いは通じねえか。そこらの雑魚共なら、防ごうとした剣や盾ごとぶった切れるんだがよ。さすがに騎士だけあって、その歳でも経験は豊富か」

「……それはこちらの台詞だ」
エクスとして目の前の男ほど厄介な者を相手取ったことなどなかった。

見た目に反して俊敏なもの、予想外の動きをするのもエクスにとつては不利な要素だ。そもそもが片腕であることで相手に立てる優位性を生かし切れていない。短剣でも持っていれば先ほど応酬の際に隙を見て投げられでもしたが、生憎とそんなものはなかった。

「だが、あの小僧に比べたら物足りないな」

グレンはつまらなさそうに呟いた。

エクスは反応せず黙って隙を窺うが、グレンは話をしている割に気を緩めようとはしない。

「技量は十分だ。だが嬢ちゃんには怒りが足りねえ……感情の発露がねえんだよ。まあ王女サマを連れ去られて少なからず怒ってはいるんだろうが、それでもまだアンタは冷静だ」

「……………」

グレンの指摘は当たっている。エクスはミーファを連れ去ったガ
ルヴィアにもグレンにも、そして自身にも怒りを感じてはいるが、
それでも冷静さは失っていない。

戦いにおいて冷静な判断力を失えば、それは死に直結するからだ。
「俺はよ、そんな奴とやっても楽しくねえんだわ。後先を考えない、
まさに死力を尽くす闘いこそが最高なんだがな。……嬢ちゃんが騎
士だっていうところにはちよつとばかり燃えなくもないけどよ。ま
あそれでも」

グレンが最後まで言い切る前に、エクスは踏み込んだ。対するグ
レンもそれに反応して巨体を前に突進させる。

「ハッハア！」

笑いながらグレンは小刻みに巨大な斧を繰り出す。防ぎきれない
程の重みはないが、それでも巨斧の持つ元来の重量と、ただでさえ
無骨な力が少なからず乗っているのだ。一撃一撃が重すぎる。

それでもエクスは隙を見ては攻めの斬撃を繰り出した。だがそれ
も半ば想像していたこととはいえ、グレンの斧に防がれる。

そんな攻防が入り乱れる打ち合いを数回繰り返したが、怪我をし
ているエクスの方が体力を削られるだけで、勝敗の天秤が一方的に
傾くだけだった。

せめてもう一本剣があればなんとかなるだろう。左右に剣をもつ
て片手で防いでもう片手で攻めれば、なんとかなるという確信があ
る。片手で振るう力が足りなくても『功』で補えば済む話だ。しか

しそもそもエクスは両手に剣　双剣など使ったことはないのだが、そんなことを考えても意味などないのだが。

故に今あるもので打倒するしかないことは自明の理なのだ。

と、エクスが思っていると、

「もう一本剣があれば、なんとかなるってか？」

「　っ!？」

まるで心を読んだかのような的確な指摘は、エクスを動揺させるのに十分だった。

乱れた集中力は猛然と攻めかかっていたグレンの巨斧の一撃を防ぎきれず、呆気なくエクスの左腕を切り裂いた。

「あ、……ぐ」

激しい痛みが洩れる。

それでも手にしている剣は手放さず、一撃入れられた直後にすぐさま渾身の力でグレンの首めがけて愛剣を叩き込んだ。

それは当然のように防がれるが、今はとりあえず間合いを取ることに先決だ。エクスは己の腕から紅い血が滴り落ちるのも構わず、グレンから一気に距離を取った。

「一応は腕を切り落とすつもりだったんだが……ちょっとばかりあなたの力量を読み違えてたか」

グレンは血糊の付着した斧を払った。

「……………」

エクスは一瞬だけ傷口に目をやると、肘の少し上辺りが深々と切り裂かれていた。

痛みの度合いから骨にひびくくらいは確実に入っていることだろう。それ以前に、まだ腕が繋がっているのが不思議なくらいの傷かもしれない。

もはや、左腕は完全に使い物にならなかった。

もともと左肩を怪我していたため、そちらの腕は反応が鈍かった。それ故に躲しきれなかったわけだが、それでも右腕だけで戦うのは相手も同じだ。条件が対等と思えばまだやりようはある。

互いに使えるのは片腕だけとなったエクスとグレンは、睨み合いながらそれぞれの武器を構え直した。

第二十一節・絶望は鬼と悪魔を招き呼ぶ

「昔話をしてやろうか」

「……………なに？」

すでに互いに構えての臨戦態勢だったのだが、唐突にグレンはそんなことを言ってきた。

「ああいや、別にアンタの血を流させて弱らせようってんじゃないぜ。止血したけりやしたらいいぜ」

巨漢は甲高い音を立てて石床に斧を突き刺した。普通ではあり得ないその光景は、しかし目の前の男ならその所行も妙に納得できた。「アンタは不思議に思ってるんだろ？ どうしてさっき俺が心を読んだかのようなことを言ったのか、ってな」

「……………」

グレンのいうことは最もだった。彼は見るからに他人の心情の機微に疎そうな男だ。それを自覚しているから語り出したのだろう。油断は出来ないが、先ほど斬られた左腕から血が止めどなく溢れているので、どうしてもそちらの方に意識が向いてしまう。これは早々に止血しなくては命に関わる。

「俺のこの腕はな、双剣を使っていたガキにやられたもんなんだよ」
肘から先が欠落した左腕を掲げてグレンは言った。

「……………その者も、騎士だったと？」

「お？ よく分かったな」

グレンは妙に楽しそうに笑った。

彼がここに来たとき、この大男はなぜかミアーフアを捕まえることよりもエクスを執拗に狙ってきていた。それに先ほどのガルヴィアとの会話から、グレン一人で戦うことを望んでいたことが分かる。腕を斬られたのが騎士だったのなら、騎士に対して恨みを持つという考えは容易に想像できる。

「ま、正確には騎士じゃねえけどな。騎士候補生だ」

その言葉にエクスは驚きと同時に、素直に感心した。

その候補生とやらはまだ騎士訓練校に通っている身でありながら、この巨漢の腕を切断するところまでいったのだ。

グレンは本当に襲う気はないようで、癩だったもののエクスは止血することにした。彼我との距離は十分に開いているが、念のため数歩下がって十分に間隙を開けておくことにする。加えていつでも動けるように膝たちになって剣を床に置き、羽織っている薄手の上着を脱いで患部を圧迫するように巻き付ける。

「そついや、あんた何歳だ？」

突然、関係のないことを聞いてきた。

「……二十一」

だが答えなければ話が終わってしまう可能性がある。

早くミーファを助けに行かねばならないが、今は応急処置の方が先決だ。話を延ばして時間を稼ぐ必要がある。

「てことは、当時はまだぎりぎり訓練生か。……なら知ってるよな？ 三年前くらい前に起きたことはよ」

「まさか」

エクスの脳裏にある記憶がよぎった。

「そう、そのまさかだ。遠征訓練中の候補生どもをぶっ殺したのは、この俺だ」

そう言いつつグレンは獰猛な笑みを見せた。

そんな表情を見せる人間がどんな者なのか、エクスは知っている。まだ騎士団にいた頃、王都周辺地域で野盗討伐の任を負ったことがあるエクスは彼らが見せた嗜虐的な笑みを今でもはっきりと覚えており、それは人をいたぶり殺すことを、人の尊厳を貶めることを好む者の表情だった。人間を人間と思わず暴力によって蹂躪する。そんな者どもの笑いだ。

「貴様……っ」

「おいおい勘違いするなよ？ 俺は任務でやったただけだ。何も好んでガキをぶっ殺したりはしねえよ」

巨体に似合わず、肩を竦めるといふ所作でおどけてみせるグレン。エクスは即座に首を切り飛ばしてやりたい衝動に駆られたが、まだ止血が出来ていない。戦いでは冷静さを欠いたものから死ぬという事は訓練校でさんざん教えられたことだ。

それに、一つの疑問が浮かんだのだ。

グレンは今、ミクヴァンの元で動いているはずである。そんな男がなぜ同じ国の少年少女　ことに未来の騎士たちを殺すような真似をしたのか。

「だがよ……そんなガキの中に妙な奴がいた。はじめはガキにしてはなかなかやるなと思つてたんだが、そいつが急に人が変わったみてえになりやがったんだよ。俺がそいつの側にいた奴を殺したせいなのか、泣きながら怒り狂つて攻めてきやがった。しかもガキのくせに『功』まで使つてきやがったんだぜ？　あの時は本気でやばかつたな」

『功』　それは王国騎士の戦闘法の一つだった。

元はこのミエディア王国成立当初に東方との戦争で捕虜になった東洋人が拷問によつて吐いた情報から体系化されたものだが、今やそれは『功術』と呼ばれ、正式な王国騎士になつてから教えられる秘技だった。

『功術』はあまりに不可解なことが多く、教えられなければ

いや教えられたとしても、そうそう容易に使うことは出来ないと言われている。とはいえエクスは幸いにも才能があつたのか、騎士団に入つて一年足らずで使いこなせるようになったが。

「あのガキはたぶん天才つてやつだな。普通は急に『功』なんて使えねえもんだが、おそらく奴は無意識で使つていやがった。まあおかげで腕をもつていかれちまつたんだがよ」

『功術』は『功』という誰もが持つていとされている力を使つて、一時的に筋力などの身体能力を増強させるものだ。筋力が上がれば当然、腕力や脚力が上がり、瞬発力も上がる。

それ以外にも『功』は使い道があるらしいが、生憎とエクスはそ

れ以上のことは教わらなかった。

「でもまあ、俺も奴の右腕をぶった切つてやったがな。しかも俺より上のところだ。ハハッ」

グレンは笑ったかと思うと、すぐさま苦々しげな表情になって、「だが互いに血が止まらんかったもんだからよ、応援が来る前に逃げるしかなかったのが唯一の憂いだぜ」

エクスは止血するのに片腕では無理だったので、上着の一端を口でくわえてきつく縛った。

と、グレンはそこで真つ直ぐにエクスを見た。巨漢のその瞳の奥には明らかな憎悪が見て取れる。

「でだ、アンタならもしかしたら奴の名前くらいは知ってるんじゃないか？ フェイシス・ヴィリアスってんだけどよ」

「っ！？」

グレンの口から出た名前には、大いに聞き覚えがあった。

「お、その顔は知ってるって顔だな」

グレンの声が遠く聞こえるほど、反射的にエクスは埋没されていた記憶を掘り返していた。

フェイシス・ヴィリアス。その名前を初めて聞いたのはエクスが訓練校にいた頃だった。

訓練校五年目にしてエクスは救国の英雄とされるハイン・ヴィリアス。その孫であり当代ヴィリアス家の次男が同じ訓練校に騎士候補生として入校した、という噂耳にした。以前はその兄が訓練校にいたのだが、エクスが候補生二年目になると同時に彼は訓練校での六年間を終わらせてすでに姿を消していた。

野次馬になる気はさらさらなかったエクスだったが、騎士を目指すきっかけとなった英雄の孫となれば、さすがに次男だろうと好奇心を刺激されたのを覚えている。それに件の次男の兄はまさに天才というべき傑物だったため、余計に興味^{くだん}が沸いたのだった。

どのような者なのかと一目見に行ってみると、しかしその子はとも十二歳とは思えない少年だった。

彼には表情というものが一切なく、常に無表情で妙な雰囲気を感じてきたからだ。エクスとて当時の己が感情の薄い人間だったと記憶してはいるが、彼はそれ以上に徹底されているようでもあった。入校して間もない時期だったが、それでも彼の周りには奇妙なほどに誰もいなかったことをよく覚えている。

しかしそれとは別に、フェイススという名前にエクスはもう一つの心当たりがあった。

心当たりどころか今日この日にも会っていた人物だ。その者はイヴリーナとリム、そしてヴァンという者たちと共にエクスの協力をなぜか引き受けた者だった。

そして特徴的なのが右腕がないこと、にも関わらず圧倒的に強かったこと。

「おい嬢ちゃん、奴が今どこにいるか知ってるか？ 二年前から行方不明なんだがよ。実は王国側が匿ってるってことたあねえよな？」

二年前から行方不明。

たしかフェイススは今日、ミーファとの会話でこんなことを言っていた。

『何をすればいいのか、分からないんですよ。自分の道は一体なんなのか、これからの未来、自分はどう生きればいいのか。』

それを見失ってからの二年近く、ミエディア王国内を転々としてきましたけど……未だに分からないですね。そもそも自分という人間すらろくに分からないんです。何がしたいのか、本当はどんな人間なのか、まるで……』

二年前から行方不明のフェイスス・ヴィリアス。そして二年前から旅をしているというフェイスス・クーリオ。妙に時期が合っている。

奇妙なほどに無表情だったフェイスス・ヴィリアス。そして何をすればいいのか、自分という人間すらろくに分からないというフェ

イシス・クーリオ。

三年前にグレンに右腕を斬られたというフェイス・ヴィリアス。そして右腕のないフェイス・クーリオ。

当時は十三歳であったはずのフェイス・ヴィリアス。そしてどう見ても十代半ば以上だったフェイス・クーリオ。

今日会ったフェイスは感情表現の豊かな、という面だけで見ればどこにでもいる少年のようだったが、この二、三年で変わったとしてもおかしくはない。

そして些細な疑問はまだあった。

『え、ちよつ フェイ様っ!?!』

フェイスの側に付き従うようにしていた少女、イヴリーナの言葉だ。

彼女はエクスがミーファを呼ぶときの真似だと言ったが、あの時の彼女は焦っていたように見えた。フェイスが本当にヴィリアス家 英雄を輩出した名門とされる騎士の家系の者ならば、彼を敬称で呼んだとしてもおかしくはない。

そしてフェイスが見せた剣技もそうだ。

思えばフェイスの剣技は騎士候補生の習う細剣技によく似ていた。片腕を失って、今度は比較的重量の軽い細剣を使い出したとしても不思議ではない。

加えて少年とは思えないあの動きは明らかに『功』を使っていた。先のグレンの話にも一致する。

「……………」

それらの考えが一気にエクスの思考を埋め尽くした。

一昨日、ミーファが助けられたという少年の名前を聞いたとき、聞き覚えがあるとは思っていた。一瞬だが確かにフェイス・ヴィリアスの無表情顔が思い浮かんだ。

だがフェイス・クーリオと名乗る少年と出会ったとき、全くの

別人だと確信していた。彼は表情も豊かだったし、何より、

「馬鹿を言うなっ、怪我人を一人置いて行けるわけないだろ
うっ！？」

などと言っていたのだ。無表情で感情の一切が窺えなかったフェ
イシス・ヴィリアスとは別人だと思わざるを得ないだろう。

だが、もはや疑いようはない。

明らかにフェイシス・クーリオはフェイシス・ヴィリアスその人
だ。

「おい嬢ちゃん？ 聞いてんのか？」

グレンの低い荒々しい声で深い思考から目覚めた。

エクスは未だに混乱気味の頭を振りながら、右手に剣を握って立
ち上がる。

「聞いています。ですが私は、貴方の探し人の行方は知りません」
エクスはなんとか出血を止めた身体でグレンに対して片手で剣を
構えた。

フェイシスのことを目の前の男に言うことは簡単だ。むしろこの
男はフェイシスがこの都市にいるとなれば、すぐさま探しに出るだ
ろう。先ほどから感じる憎悪はそれほど確かなものだ。

だがこのような危険人物をフェイシスに会わせるわけにはいかな
かった。

別にエクスはフェイシスを庇っている訳ではない。彼は今や《隻
腕の剣鬼》と呼ばれている男なのだ。何があったのかは知らないが、
噂の通りならば彼は殺人鬼のようなものに成り下がっているはずで
ある。

しかしエクスには借りがあった。

一昨日の深夜、経緯はどうあれ六人の男たちからフェイシスに救
われた借りが。そして昨日、ミーファを助けてくれた借りが。そし
て今朝もまた、警備兵から逃げている際に助けられもした。

『…………っ、俺は…………変わらなくては…………っ』

そして唐突に思い出した、あの夜の気絶寸前に聞いた苦し紛れの一言。

その言葉がエクスにとって大切な少女の在りように被るのだ。運命に翻弄されて、次期国王という重すぎる責任を背負う少女の変わろうと努力している姿に。

だからというわけではないが、エクスはただ騎士としての借りは返す　いや、義理は通すだけなのだ。

「…………そうかい」

グレンは斧を手にしながら頷くと、

「んじゃま、アンタ本人に恨みはねえが、騎士サマってことでぶっ殺させて」

「　待て。私からも一つ問う。なぜ貴様は候補生たちを襲った？　誰の差し金だっ!？」

エクスにはこの問題を問いたださずにはいられなかった。

あの事件では約二百名近い騎士候補生が殺されたのだ。それを裏で仕向けた人物を、当時は同じ騎士候補生だった者としては追及せざるにはいられない。

「さあてな。俺に勝ったら教えてやるよっ!」

言うやいなや、グレンは先ほどとは比べものにならない速度で駆けだした。

それはエクスからすれば高速で迫り来る巨大な壁のようで、とてつもない圧力を感じる。

「う…………らあっ!」

グレンは首を切断しようとする憎悪の顕現した必殺の一撃を見舞ってきた。先ほどまでは遊びだったとでもいうのか、今まさに迫り来る巨斧は有り余る殺気を孕んでいる。

「　ッ」

エクスは反射的に身体を屈めてそれをなんとか回避する。

だが後頭部で一つに結っていた髪は身体の動きに追いつけず、断頭台の刃の如き凄まじい一撃によって呆気なく切断された。

長い髪が風圧で宙を舞う中、肩ほどまでの短髪となったエクスは低く屈めた姿勢から立ち上がり様に逆袈裟斬りを放つ。

が、当然の如くそれは躲かれてしまい、空ぶつた身体を蹴りが襲う。エクスには躲せる軌道だが、時機悪く右足の怪我が悲鳴を上げて、僅かに回避が遅れた。

鉄球でも投げつけられたかと思えるほどの衝撃が腹部を襲った。だがそれも僅かにでも躲せることが出来た結果なのだろう、衝撃に反して威力自体はさほどなかった。それでも腹の中を混ぜっ返されるような衝撃は相当のもので、吐きそうになるのを堪えつつ体勢を立て直そうとするも、グレンはそんな隙も与えてくれず追撃の一閃を放ってきた。

即座に『功』を駆使しつつ右腕一本で握られた長剣で防いだが、痺れるほどの圧力が肩まで襲いかかってくる。グレンの斬撃はここで終わることはなく、一撃、二撃、三撃と次々に打ち込んでくる。

そのたびに不安定な姿勢のままなんとか受け止め、避け、捌いたが、それでも小さな裂傷までは防ぎきれない。それにいくらミーフアと出会う前　王都出発前に持たされた格段に業物の丈夫な剣でも、圧倒的な力の応酬にいつまでも保つとは思えない。

「おらおらッ、どうした騎士サマよ!？」

野獣のような面持ちで雄叫びを上げるグレンは、その体格から熊のようにも見え、それは巨斧を振るう力強さからも強ち間違った表現ではないだろう。

「く　なめるなッ!」

エクスは一瞬の隙を突いて攻勢に転じ、片腕とは思えないほどの剣技を繰り出していく。

その剣技はまだ約二十年とはいえ、エクスの人生で何度も何度も繰り出したものばかりだった。その鋭さは折り紙付きで、さしもの

グレンにも僅かにかすらせる程度には傷を負わせられている。

しかし所詮はその程度で、それ以上はこの恐るべき巨漢に届きはしない。

「ふっ、なんだやるじゃねえかつ」

エクスは何度目かの突きを躲したグレンは場違いに楽しそうに笑い、そして驚くべき行動に出た。

なんと己の手に握っていた斧を手放したのだ。超重量のそれは刃から落下し、見事に石床に突き刺さった。

だが驚愕すべきはそこではなく、グレンは空いた右腕でちょうど刺突に伸びきっていたエクスの腕を掴んできたのだ。

「なっ」

戦闘中に武器を手放すなど と思ったが、同じ隻腕の者がどんな戦い方をしていたのか、エクスは走馬燈の様に思い出した。

フェイシスはたとえ凶器という戦いで優位に立てる道具を手放すことになっても、それ以上の優位に立てる状況になればためらわず手を空にしていた。一昨日の深夜の六人との戦い、今朝の警備兵三人との戦いがいい例だった。

果たしてその戦法はグレンも同じなようで、エクスの腕を握ったグレンは万力の如き握力でエクスの腕に圧力をかけた。骨折する勢いで瞬間的に締め上げられた右腕は、やはりというべきか、聞き慣れない嫌な音と共にへし折れた。

「くっ、ああああ、ああああああっ！」

エクスの口から悲鳴が洩れ、力の抜けた手から愛剣が滑り落ちる。そしてグレンはあっさりと手を離すと、エクスの零した長剣を宙で掴み取り、一閃。

「うらあアアッ」

グレンの逆袈裟がエクスの身体に斜めの紅い軌跡を奔らせた。

「う、 あっ」

内臓まで届いたその斬撃は、エクスの口から深紅の液体を吐き出させるに足るもので、彼女は斬られた勢いそのままに背中から後ろ

へと倒れ込んだ。

受け身など今のエクスには当然とれる訳もなく、肉と骨が石床にぶつかる鈍い音が虚しく倉庫内に響き渡った。

「……………まあ、なかなか強かったぜ。少なくとも二年前のあの小僧よりはな」

グレンはエクスの折れた右腕の側に奪い取った剣を放り投げると、そのまま背を向けて巨斧を回収した。

「でも、ま、俺もあれからだいぶ強くなったからな。…………あの小僧の圧倒的な『功』を見せられてから、特にな」

グレンは彼本来の武器を背負い込みながら、そう吐き捨て、

「アンタの『功』は鋭いが脆い。腕を掴まれたとき、俺よりも硬く『功』を練っていれば折られなかったのにな」

石床を踏み鳴らしながら、これまでの死闘など無かったかのように清々しくグレンは去って行く。

そして出入り口付近で巨漢は一度振り返り、「死体は後で部下に拾いに来させてやるから、安心して死にな」と見下すような、嘲るような侮蔑の言葉を残していった。

「……………はあ……………は、っあ」

だがエクスにはグレンのそんな言葉など届いてはいなかった。ただ、彼女はミーファのことが心配だった。

握りつぶされるように折られた腕の痛みも、身体を奔る傷の痛みも、どんな身体の痛みより、今のエクスには心痛のほうが勝っていた。

ミーファの側にこれ以上いられない。いられそうにない。そんな騎士としての、いや友人としての悔いがエクスの心を苛む。

もうすでに助からない傷であることはエクス自身、分かっている。あと半刻もしないうちに己が死体と化すことは肩から下腹部までを奔る深い傷と、そこから漏れ出る出血量から明らかだ。

ミーファは大丈夫だろうか。

エクスは死の間際に立つても、そればかりが思い浮かぶ。

騎士として主を守ることが出来なかったことは悔しいが、しかし騎士としての名誉や誇りではなく、それ以上にミスティリーファ・ミル・デルフィリアという一人の少女であり、エクスにとって友人でもあった彼女の身を守れなかったことに対する思いの方が何倍も強かった。

ミーファは気絶する前の彼女の言葉通り、殺されることはないだろう。

だがそれでもあの少女にはさんざんその立場を利用される苦難の人生しかないことは確実だ。

「……………け、ん」

顔を横に傾けると、下腕部で奇怪に折れ曲がった腕の先に一振り
の長剣が横たわっていた。

主に忠誠を捧げた剣によって、騎士である己が致命傷を負うなど冗談でも面白くないものだと思いながらも、腕を伸ばしてなんとかそれを掴もうとする。

しかし折れた腕のせいか、あるいは過度の出血、または死期が近いせいかわからない。どうにも力が入らず満足に腕を動かすことすら出来ない。それでもエクスは今すぐに剣を手にしてミーファを助けに行きたかった。

「……………く、うう」

だがそんなことはもうできない。

それならばせめて、ミーファから「エクス」と名を呼んでもらい
たかった。あの明るく朗らかな少女の笑顔をもう一度だけでも見
たいと思った。

「う……………ミーファ、さま……………」

だがそれもまた叶わぬことだ。

刻一刻と命の水は流れ出す。それは次第に紅い池となってエクス
を飲み込もうと拡大していく。

「……………だ、れか……………」

誰でもいいからミーファを助けてくれと頼みたかった。もはやこ

の身では叶わぬ願いを聞き届けて欲しかった。

今のエクスなら鬼にでも悪魔にでもこの身この魂を捧げてもよかった。

だからせめて、ミーファだけは助けて欲しかった。彼女の笑顔を守って欲しかった。

「ミ……ファ、さま」

そうエクスが呟いたとき、不意に音が聞こえた。

意識が朦朧としてくる中で、だが微かに耳を打つこの音はなんだろうか。ついに死が近いせいか幻聴でも聞こえているだけなのだろうか。

しかし次第に大きくなるその音　それは紛れもなく足音で、しかも複数のものだった。

と、そこでほんのついさっきグレンから言われたことを臆に思いだした。死体は部下に回収させるから、という旨の言葉だ。

最後はどこの誰とも知らない者に看取られて死ぬのかと思うと、情けなくて涙が出そうになる。だが身体はすでに死に始めているのか、涙は出ないし、挙げ句視界は霞みだしてきた。

耳はまだ大丈夫なのだろう、次第に聞こえてくる足音が大きくなってくる。もはや屍一步手前のエクスしかないこの倉庫に、石造なだけあって不気味に音が反響する。

そしてその石床を踏み鳴らしていたであろう人物が、ゆっくりとぼやけた視界に映し出された。

「……………は、はは」

エクスはあまりの皮肉に思わず声が洩れ、それは微かな音となって己の耳にも届いた。

表れた人物は奇しくも、本当に奇妙なもので、エクスが願ったとおりの鬼と悪魔　剣の鬼と呼ばれる少年と、特異な瞳をした悪魔のような姿の童女だった。

第二十二節・それでも騎士は彼女を想う

フェイシスが目の前の惨状を見てまず思ったことは、もう彼女は助からないだろうということだった。

つい先ほどまでフェイシスたちは酒場で今後の行動について話し合っていた。

そして思いのほか長引いた相談によって得られた結論を元に、まずはエクスとミーファに合流しようとする行動を起こした。リムの特殊な『功』によってエクスとミーファの気配を探らせたところ、しかしミーファの気配は感じられず、一方でエクスのそれは都市中央部の　つまりは富裕民区の方角から感じるという。

リム曰く、『功』は死んだ人間や気絶中、睡眠中の者からは感じられないという。その言葉通りなら、ミーファは死んでしまったのか、あるいは意識のない状態なのか、それとも感じ取れないほどの短時間の間に都市から離れてしまったのか。いずれにせよ、フェイシスたちは確認できたエクスの方へと足を向けることにした。

急ぎたかったのだが、人通りを走っていれば目立つし怪しまれる。リムの案内の元、なるべく急ぎ足で向かっていたとき、その途中で突然にリムが首をかしげた。フェイシスはその仕草が気になってどうしたのかと訊いてみると、なんでもエクスの気配が徐々に弱くなってきたというらしい。

フェイシスはその言葉の意味するところが二つしかないことをこれまでの経験から知り得ていた。

一つは今まさに睡眠状態に入ろうとしているとき。
そしてもう一つは、死に瀕しているとき。

はやる気持ちを抑えて、フェイシスたちはリムの『功』を頼りに足を運ぶと、着いたそこは先刻エクスたちと別れた倉庫だった。

リムにエクス以外の気配がないかを確認してもらい、なぜか開け放たれていた扉から中に入ると、そこには血臭漂う中で鮮血に塗れ

たエクスが横たわっていた。

まだ浅く呼吸をしているらしい彼女の側に駆け寄ると、エクスはこちらを見てなぜか力なく笑ったように見えた。

フェイススは傍らに膝をつき、まずは何と言おうかと僅かに逡巡している。

「……フェ、イシス…… ヴイリ…… アス……」

「……っ!？」

エクスが揺れる瞳を向けながら一つの名を口にした。それは

その姓は、フェイススからすればもう捨てたものであり、あまり聞きたくはないものだった。

「……フェイ様」

隣でイヴリーナが不可解そうな顔を向けてきた。動揺しているからか、普段から禁じているにもかかわらず、エクスの前だということに呼び名が元に戻っている。

だがそれも死にゆく者の前では瑣事だろう。それにエクスはどういう訳かフェイススの本名を知っているのだ。今更、貴族出身だろうとなんだらうと知られたところであらゆる意味は消え失せる。

「……頼みが、ある……っ」

エクスは唐突にそんなことを言い、そして同時に小さく吐血した。彼女の身体は酷いもので、胴には深々とした傷が斜めに奔り、左腕は血に濡れた上着が不格好に巻かれ、右腕は折れているのか下腕部が歪んでいる。

フェイススがエクスの言葉に答える前に、彼女は独りでに続けた。「ミーファ……様を、助けて……くれ……ガル、ヴィアに……連れて……」

小さく咳き込んで紅い血を吐きながらも、確かに彼女はそう口にした。

その言葉はおそらくエクス・オフィムという騎士にとって、最も切実な願いなのだろう。彼女の声に何か力でも宿っているのではないかと思うほど、エクスの声はフェイススに重く響いた。

「かつて騎士を……志した、ヴィリ……アス家の、次男に、頼みたい」

なぜエクスがフェイスのことを知っているのかという疑問など、その声から感じ取れる悲壮さ前にしてどうでもよくなった。

死にゆく者の言葉ほど重いものはない。

今まさに人生の終焉を迎えようとしている者の想いの重圧。フェイスはこれまでの様々な出来事からそれを嫌というほどに知っている。

そしてその想いを一度引き受けたなら、その重みはこのさき常に付きまとうことになるということも。

人殺しがそんな偉そうなことを言えた義理ではないが、それでも死に瀕した者の想いというものが何よりも尊いということは事実だ。それが誰かを想うものであるなら、尚更。

フェイスは隣に立つリムを見やった。

人の死というものにどこか達観しているかのような童女を見て、かつて今のように彼女の母親からリムを託された際の 過日の記憶に思いを馳せ、そうした想いの重みを確かめる。

「……………分かりました」

フェイスは僅かにだが確かに考え抜いた末、そう答えた。

何も死に際の人間に対して色よい返事を聞かせたかったわけではない。そんなことは不敬な行いだと分かっている。

しかしフェイスは承諾した。

エクスという出会ったばかりの人間に対して思うところがないといえは全くの嘘になるが、それ以上にフェイスにとってミーファを助けるということはすでに決めていたことであり、たとえそれが重ねてきた いや今も重ねている殺人という悪を上塗る行いだとしても、そうしようとしたのだ。たとえエクスの望みがこの都市を出るまでではなく、このさき多少長引くことになるのだとしても、「すま、ない……」

エクスはフェイスの返答を聞いて、話すことすら無理そうなの

にも関わらず、それでもなお言葉を紡いでいった。

今後はどうすればいいかはミーファが知っているということ、その彼女はガルヴィアに連れて行かれたこと、重要な書状などは宿に置いてきてしまったこと。

エクスは微かな声で簡潔にそれだけを言い終わると、僅かに安らかな表情になった。

そんな騎士をイヴリーナもリムも、そしてヴァンも沈痛な面持ちで見守っている。

エクスはもう目が見えているのかどうか分からない瞳をフェイスの方へ向けると、青ざめた唇を動かした。

「……貴方が、なぜ……《隻腕の剣鬼》、と呼ばれるに……至ったのか……は、知らない。だが、二年前の、あの……事件で……生き、残ったことを……気にしている……のなら、それは……貴方が、気負う……必要は、ない」

「……」
フェイスは言葉に詰まった。

それはフェイスの今ある人格を形成した中核となっている出来事についての話だったからだ。

フェイス・クーリオという いや、フェイス・ヴィリアスという人間にとって最も忌避すべき、後悔すべき過去。それをなぜ今になって、それも死に際に言うのか。

「……グレン……という男に、出会った」

「なっ!？」

「……左腕の、ない……斧を、持った、大男だった。……私は……彼、に、やられた……」

信じられない話だった。だが同時に納得している自分がフェイスの中にはいた。

エクスとて怪我は負っていたもののミエディア王国騎士団の純然たる騎士だったのだ。その彼女がここまでやられるのは相手が多数か、余程の手練れによる者のはずだ。

だが瀕死の彼女をそのまま放置していると、彼女をやったのはおそらく一人だということが分かる。でなければこんな誰の持ち物とも分らない倉庫に、今まさに屍と化そうとしている者を残してはいかないだろう。

「……………」
そしてあの男ならばたとえ自身と同じ片腕でもやってのけるだろうという確信があった。

奴が生きていることは想定していたことなのだが、こんな形で再び関わりを持つなどは考えてもみなかった。

正直なところ、フェイシスにとって今回の件は王女であるミーファを助けることよりも、騎士であるエクスを助けることの方が協力した理由としては大きかった。

過去に多くの騎士候補生たちを、仲間を殺され、フェイシスは悔いていた。あの時もつと何かが出来たのではないのか、二百人近い者たちの中で生き残った数人にどうして自分が含まれたのか。

フェイシスがこのミーファを巡る件で少しでも騎士であるエクスの手助けが出来たなら、少しは胸の内にわだかまる悔いを晴らしてくれるのではないのか、と。

そして王女であるというミーファをも助けることで、かつて騎士を目指していた　今はもういない彼らの想いを少しでも果たすことが出来るのではないかと。

だがそれさえも過日に右腕を切断された巨漢に邪魔された。

フェイシスは己の内でも復讐心が沸々と湧き上がるのを感じていると、エクスの消え入りそうな声が増していくばかりの憎悪を遮った。

「奴は、危険……………だ……………気を、つける……………」

「分かっていきます」

エクスはもう限界なのか、声が一層小さく途切れ途切れになる。

だが、それでも彼女は懸命に最後まで言葉を、その思いを紡ぎ続ける。

「……………けん、を……………」

尚も武器を求める彼女の姿は見ている方が痛々しい気持ちになるが、目を逸らしてはいけない。逸らすことなどできはしない。

フェイスはエクスが呟いた言葉の意味を察して、傍らに落ちていたエクスの剣を彼女の手握らせてやった。最後は騎士らしく剣を握っていたいのだろう。

しかしそんな推測とは裏腹に、

「ちが……う。ミー、ファ……さま……に」

彼女は己の剣を捧げた主に最後までその忠誠を果たそうとしていた。

たとえ騎士であるエクス自身が死しても、自分の剣を持ってほしい。いや、持っていることで必ず自分が守るとでも言いたいのだろう。

それは確かに本物の騎士としてのあるべき姿であり、それになり得なかったフェイスには到底その想いの深さを理解できそうになかった。

「……けん、と……ともに、ミーファ……さま……に、つたえ、てくれ……」

もはや閉じかけの目蓋に真つ青な顔色で、エクスは絶え絶えに主への想いを口にした。

「……あな、た……に、であえて……よかつ……た、と」

その言葉を最後に、エクス・オフィムという名の若き女騎士は静かに息を引き取った。

第二十三節・不穩分子を追う者たち・二

深夜。すでに日付も変わろうかという時間に、昨夜と同じく三人の男が再び顔を合わせていた。

より正確には四十代ほどの一人の男　　ミクヴァンを中心に集まっているというのが正しいだろう。

すでに行政区の庁舎から帰宅しているにもかかわらず、自宅の執務室で残りの政務を終えたばかりのミクヴァンは椅子に腰掛けたまま、机を挟んで並び立つ二人の男に視線を向けている。

二人の内の一人ことガルヴィアは相変わらぬ無表情でその額には白い包帯。もう一人のグレンはどこか機嫌の良さそうな顔をしている。

「では報告を聞こうか」

ミクヴァンは室内を照らし上げる燭台の一つ　　机上に灯された蠟燭の灯を眺めながら口を開いた。

「はい。……まず結果だけを申し上げるのであれば、ミステイリー

ファは捕縛、騎士エクスは始末しました。しかし　　」

「　　しかし？」

「始末したはずの騎士なのですが、その遺体が見つからないのです。ガルヴィアは表情を変えずに主に報告を続ける。

「夕刻にグレン殿が富裕民区にある倉庫で騎士を殺したそうなのですが　　」

そこでグレンが話の途中で唐突に口を挟む。

「いや、俺は確かに殺しましたよ。……つかガルヴだってあの出血痕を見ただろ？　　ありやもう致死量どころの話じゃねえよ」

責任を感じているのかいないのか、そんなことを言うグレンをミクヴァンは睥睨して、

「死体を部下に回収させるのではなく、お前自身が持ってくるべきだったな、グレン」

「……スンマセン」

頭をかきながら不法に頭を小さく下げるグレンを一瞥して、ミクヴァンは椅子から立ち上がって近くの木柵まで移動する。

「まあいい。別にグレンの話を嘘だとは思っていないさ。ガルヴィアも致死量の血痕は現場で確認したのだろう？」

ミクヴァンは言いながら柵から葡萄酒の瓶と銀杯を取り出して席に戻ると、血色の液体を杯になみなみと注いだ。

「はい、それは間違いなく。もはや死んでいるのは確かかと」

「……ふむ。報告を続けて」

芳醇な薫りを楽しみながら、ミクヴァンは部下の声に耳を傾けて続く報告を聞く。

「昼過ぎに宿を襲撃した際、昨夜に話した少年と思われる者を発見したのですが、名前すら聞き出せませんでした。彼は騎士たちともにいたので何か繋がりはあったのかと思われず。宿からは逃がしてしまいましたが、その後に見つけた倉庫では少年の姿は確認できず、そのままミステリーファは捕縛して、騎士はグレン殿が……」
「……というのが本日の大まかな流れでした」

それからガルヴィアは一つ一つの事の詳細を報告し始め、その間ミクヴァンは政務後の酒を楽しみつつもしつかりと報告を耳にしていた。残る巨漢は退屈そうに己の腕の欠損部をなで回し、大口を開けて欠伸をしている。

「と、以上が本日起こったことの詳細です」

長々とした報告を終えたガルヴィアに、ミクヴァンは「ご苦労だった」とだけ言うと、しばらく室内を沈黙が満ちた。そんな中でミクヴァンは何事かを考えているかのように杯を机上において、顎に手をあてていた。

そして高貴さを漂わせる男は、黙して立つ二人の部下を僅かに眺めてから沈黙を破った。

「グレンが騎士を殺してしまったことは本来なら咎めるべきところだが、協力してくれたことと騎士の利用価値が低かったことから、

今回は不問にしよう。アレさえ無事に捕らえられたのなら十分だよ」
「どうもっす」

ミクヴァンの言葉にグレンは低頭したが、大男は悪びれた様子などなく、むしろ当然といった様子だった。

「して、アレは今どうしている？」

「二階の一室で眠っているようです。捕らえるときに気絶させたのですが、おそらくは連日の過労からそのまま眠りに入ってしまったものかと」

「そうか……アレもつい最近まではただの小娘だったのだ、無理もないだろう。……では、起きたら私に報告しろ」

何事か思案している様子で命令を下したミクヴァンに対し、ガルヴィアはやや訝しげな表情になり、

「……すぐにでも起こさないのでですか？」

「いいさ。だが目覚めたならばすぐにでも私に知らせてくれ。色々聞きたいことも多いのでな」

ガルヴィアはその言葉に瘦躯を折って了解した。ミクヴァンはそれを横目に今度はグレンへと視線を移すと、まだ半分以上残っている酒瓶を巨漢に差し出した。

「グレンはもう下がって良いぞ。」苦勞だった」

「あの、このすげえ上等そうな酒は？」

「お前はそのままの方が良いだろう？」

目を丸くしたグレンだったが、ミクヴァンの思いもよらない差し出しを喜々として受け取った。

「明日は早いのだろうか？ 朝は私も色々忙しいので会うことは出来ないだろうからね。この場で別れを言っておこう」

「ああ、そりゃそうっすよね。明日は開門と同時に出る予定なんで、もう顔を合わせることはないだろうし。……せつかく面白くなってきたところで去るのは惜しいっすけど……まあまた会うことがあれば、その時はよろしくしてください」

ミクヴァンとグレンは一言二言話すと、巨漢は受け取った酒瓶片

手に部屋を後にした。

グレンが大きすぎる身体を揺らしながら出て行ったところで、もどかしそうな様子でガルヴィアが、

「 よろしいのですか？ まだ不穏分子たる例の少年と《隻腕の剣鬼》はこの都市にいるのですよ？ グレン殿には出発直前まで協力させた方がいいのでは？」

「いや、それはいい」

溜息とともに小さく首を横に振った主に対してガルヴィアは尚も食い下がる。

「なぜですか？ 今は一人でも多くの手が必要です。特にグレン殿は、こと荒事においては貴重な戦力です」

具申する部下を手で制し、ミクヴァンは机の上で手を組んで、彫りの深い顔を少しだけ顰めた。

「……………ガルヴィア、お前はグレンが関わった三年前の出来事を知っているか？」

「はい。……………確か、我が国の騎士候補生を彼が襲撃し、その大半を殺害したと」

急な話題の転換にも関わらず、ガルヴィアはミクヴァンの問いかけに答えた。

「そうだ。あれは政争の果てに起きてしまった不幸な……………いや、恣意的に起こされた凶事だった。謂わば、身内同士での喰らい合いだ。

……………当時から作業員として上層部に雇われていたグレンは、一部の過激派の命令で候補生たちを幾人もその手にかけて」

「あの、ミクヴァン様……………急にどうされたのですか？ 話が見えないのですが」

「つまり、奴は命令ならば味方をも 同じ国の将来を担う者たちをも殺す人間だということだ。そして今回の騎士エクスを独断で殺したことといい、あまり奴を信用しない方が良く……………今回、私はグレンが騎士を殺す可能性について危惧してはいても、それでも使えなかった……………それはどうやら間違いだっただようだ」

ミクヴァンは組んだ手を額にあてて深く溜息を吐いた。

「……それは、仕方のないことです。彼は騎士に並々ならぬ憎悪を抱いていますから。私も彼を止められませんでした」

ガルヴィアもミクヴァンも、グレンの左腕が騎士候補生襲撃の際になくしたことは知っている。

だがそうであつても、さすがに今回の捕縛という命令の無視は小さくはないことだ。下手をすればミステイリーファまで死んでいたかもしれないのだ。

「いつまでも過ぎたことを気にしても仕方がないか……。すまないな、先の話に戻るう」

「はい」

切り替えの早いガルヴィアは、ミクヴァンの一言ですぐさま話を元に戻す。

「先ほど申しましたが、騎士とともにいた例の少年と《隻腕の剣鬼》のことです。彼らは如何しますか？」

「……その少年とやらは十中八九、アレと騎士がこの都市に来てから行動を共にしたはずだ。深い関係性までは分からないが、その協力はおそらくこの都市からの脱出までとみていいはずだ。少年が事情を知っているのかは知らないが、知っていたとしてもすでに捕らえられているこの状況で助けに来るようなことはしないだろう。…

…所詮は他人なのだ、わざわざアレを取り返しに来るような馬鹿な真似はしない」

「そうですね。あの倉庫にもいませんでしたし、宿の襲撃で事の大きさを理解して別れた」と判断するのが妥当でしょう」

ガルヴィアが頷いたのを見て、ミクヴァンは一息ついた。

そして溜息まじりの吐息を吐きながら、部下に命令を下す。

「一応は警備を強化しておけ。やっと再びアレを捕らえたところで逃げられたり奪取されたりしてはかなわんからな」

ミクヴァンはそれだけ言うと、背もたれに身体を預けて目を閉じた。

だがガルヴィアはふと何かに気がついたような表情になり、恐る恐るといった様子で主に声をかけた。

「……そういえばミクヴァン様、《異端なる者たち》……ルーインアウトターの者はまだこの都市に？」

「ああ、彼か……まだいると思うが、それがどうかしたか？」

「その、彼は何者なのでしょう？ 一応、信用はできるといふことなら宿の一件で分かったのですが、なぜ彼は騎士たちが宿にいたことが分かったのでしょうか？」

ガルヴィアは眉をひそめて珍しくも目に見えて訝しそうだ。そんな部下にミクヴァンは目を閉じて苦笑を漏らした。

「私にも分からないよ。ただ分かることは、彼らはその名の通りの異端で、異常で、逸脱した者たちであり、国の上層部 おそらくは王都にいる重臣たちのどこかと繋がっているということだけだ。私の元を訪れたのもほんの瑣事だった」

肩を竦めながらミクヴァンとて疑問をその顔に張り付けて答えた。「……そうですか。ありがとうございます」

ガルヴィアは律儀に低頭し、部下の疑問にわざわざ答えてもらった礼を述べた。

ミクヴァンはそんな彼を眺めつつ、

「では今日はもう休んでくれて構わない。だが部下に警戒を強化させるということだけは怠るなよ」

「御意」

ミクヴァンはその返事を聞くと立ち上がり、そのまま部屋を出て行った。

執務室の机上に残された銀杯に燭台の灯火が鈍く反射して、それを見たガルヴィアは何とも言えない不安を感じた。

しかしその直感のようなものを本人は気のせいだとして、即座に心の内から不安などと言う感情を取り去った。

第二十四節・侵入者は敢え無く……

フェイススは瀟洒な鉄柵にできた、もとい今し方作った隙間に身をくぐらせた。

あと一、二刻もすれば朝日が都市を淡く照らし出すような時間帯。夜明け前という言葉がもつとも適切だろう時刻にフェイススたちは静かに動き出していた。

「つたく、端から見れば俺たち完全に泥棒じゃねえかよ」

ヴァンは己が切り裂いた鉄柵を眺め、流麗な白い刀をこれまた純白の鞆に戻しつつばやいた。

「仕方ないじゃないですか。というか柵を斬ったのはヴァンさんですから、もし見つかったら私たちより罪は重いですよ？」

「……おいフェイスス、もし捕まったら俺はお前のせいにするからなっ」

後ろから聞こえた小声の会話を聞き流して、フェイススは綺麗に手入れされた庭先に足を踏み入れた。

リムがミーファの気配をその特殊な『功』で感じ取って間もなく、フェイススたちはミクヴァン邸を囲う鉄製の柵を斬り裂いて敷地内に侵入した。ミーファの気配を感じ取るまで眠たそうだったリムだが、それからは目が冴えてきたのか、今では平時と変わらず軽快に後ろを付いてきている。

フェイススは振り返ってもう一度鉄柵を見た。

半ばから途絶えた数本の鉄柱　その断面は真つ平らな小円を為しており、ヴァンの剣技が如何に異常なのかをまざまざと見せつけていた。見とれるほどに美しい切断面はフェイススにはできない芸当だということを実感させられる。

「兄さん？」

イヴリーナがどうかしたのかという目を向けてきたので、フェイススは我に返って柵から意識を逸らした。

「いや、なんでもない」

新たに左腰に携えたエクスの剣を掴んで、気持ちを引き締める。今いる場所は植木に隠れて外からしか見えないが、入り込んだこのミクヴァンの屋敷には、リムによると二十人近くの人間がいるらしい。屋敷の主であるミクヴァンや泊まり込みの使用人が数人、それにミーファを除けば警備兵の数は十から十五人といったところだろう。

もしかしたらその中にグレンがいるかもしれないと思うとフェイスの心はざわつくが、今はミーファが最優先だ。

「ここからはイヴとリムが先行してくれ」

フェイスは一度深呼吸して気持ちを整理し、イヴリーナとリムを見やる。

「はい、任せてください」

「うん、わかった」

イヴリーナは今回のような隠密な行動が得意だ。

リム曰くイヴリーナは元から気配が薄いらしく、加えて夜目が利く。前者の気配云々はリムしか分からないのでさほど関係はないが、それでも今回の侵入行動にはフェイスよりは適任だ。

イヴリーナは腕の長さほどの小太刀を二本、腰の後ろで交差させるように帯びている。彼女はそれを抜き放つと右は順手で、左は逆手で構える。

リムが周囲に誰も居ないことを確かめてから、フェイスたちは行動を開始した。

ミクヴァン邸は都市内でも有名で、その話は偶然にも酒場で耳していた。

この都市アクナリアの執政者である彼の屋敷はだだっ広い庭に三階建ての建物が特徴的で、特に庭はその屋敷自体よりも数倍の広さを有しているらしかった。実際、今まさにフェイスたちはその庭の隅を移動中だが、その広さは一般的な家屋が優に六軒は建つほどである。

都市内は土地不足が常なのだが、さすがは貴族であり執政者といつたところだろう。

庭には見えるだけで八人の警備兵が退屈そうに突っ立っていた。巧妙に植木に隠れて移動しているフェイスたちには気がついていないようだが、何か下手を打てばすぐにでも感づかれるだろう。

「リム、それでミーファの気配はどの辺からするんだ？」

屋敷に近づきながら前を歩くリムに小声で尋ねると、更にその前に行くイヴリーナがなぜか急に立ち止まった。

「どうした？」

イヴリーナは静かにかがみ込むと、不意に自身の足下を見つめた。薄暗いのであまり見えないのだろうが、それでも彼女は懸命に何かを凝視しているようだ。

「……畏？ のようです。紐が足首ほどの高さで張られています」

「そりゃあ……また定番だな」

後ろからヴァンが呆れたように呟いた。

「だがこの薄暗い中では十二分に効果はあるな。気をつけて行こう」
フェイスは発見したイヴリーナに内心でさすがだと驚きつつも、先に行くことを促した。

そうして先頭のイヴリーナがその紐をまたいで一步を踏み出すと、

「警備兵のみんなー、侵入者だよー。庭の西側に侵入者がいるよー」

少年のような陽気な声が広い庭全体に響き渡るほどの大きさで、フェイスの耳を打った。

「……え、はい？」 「これ、なに？」 「……どういうことだ、こりゃ」

イヴリーナもリムも、そしてヴァンさえも突然の声に困惑している。

そしてそれはフェイスとて同じで、突然の声もそうだが、それが自分たちの位置を指し示していることに呆然とした。

意味不明だった。リムがいたものの、フェイス自身も警備兵には細心の注意を払っていたし、まだ誰にも気付かれていないという確信があった。

にも関わらず、突然の発見声明。

茂みから庭中央の方を見てみると、警備兵もその声に困惑しているらしく、声の主を探しているようだった。

「……………」

フェイスはますます理解不能な心境に陥りながらも、これは最悪だと判断した。

誰からどうして見つかったのかは分からないが、それでも警備兵はこちらに近づいてくることは必至だろう。

その予想通り、訝しみながらも何人かがフェイスたちが姿を隠している茂みに近づいてくる。

「フェイス、ここは任せろ」

ヴァンが後ろから肩を叩きながらそんなことを言ってきた。

「なに？」

まだ庭には確認できただけでも警備兵は八人。幸いにもそれくらいの人数ならリムを庇いながらもイヴリーナとヴァンとの三人なら十分に無力化が可能だろう。

だがヴァンは何を任せるといのか。本気でやってくれるという意味での任せろなのだろうか。

そうこう考えているうちに、警備兵の男二人がもう気付かれてもおかしくない距離にまで迫ってきた。

これ以上『功』をあまり使えないフェイスにとっては避けたい接触だが、仕方がない。

フェイスが覚悟を決めて飛び出そうとしたとき、

「ハッ」「よつと」

イヴリーナとヴァンが勢いよく茂みから飛び出し、二人を突き飛ばした。不意打ちの衝撃で倒れ込んだ警備兵からは出血こそないものの、気絶したらしくそれ以上は動く気配がない。

「イ」

口を開きかけたところで、フェイススは二人の意図を理解した。

この状況はもう覆しようがないが、それでもまだフェイススとリムは発見されてはいない。イヴリーナとヴァンが囿になっているうちに、まだ見つかっていない二人で先に行けということなのだろう。

イヴリーナはヴァンの任せるといふ一言を聞いてそれを覚り、ヴァンに合わせて飛び出したのだ。

「……ごめん、ありがとう」

フェイススは声にならない声で呟いた。

足音と人の声が茂みの向こうから聞こえてくる。警備兵が集まってくるのだろうが、あの二人ならば大丈夫だという確信がフェイススにはある。

「リム、先に進むぞ」

「……う、うん」

少し驚いていた様子のリムが戸惑いながらも頷いたのを確認し、フェイススとリムは気付かれないように注意しつつ先へと進んだ。

第二十五節・少女はその昏い瞳に何を見る

ミーファは現れた男の姿を見て、自身が捕まったのだということをはつきりと自覚した。

加えて今いるこの部屋には見覚えがあった。

柔らかなベッドに瀟洒なテーブル、それに華奢な椅子が二つだけという僅かな家具とその配置、加えて壁の意匠などは忘れようと思っても忘れられない。

なぜならミーファがこの都市にやってきて助けを求めた貴族の屋敷にこんな造りの部屋があったからだ。

そして四十代ほどの高貴さを漂わせる男は、ミーファが先日助けを求めた張本人であるミクヴァン・オスリームその人だ。白髪交じりの長めの髪を後ろになでつけ、底の窺えない昏い瞳は言いしれぬ何かを醸し出している。

先ほどミーファが目覚めたとき、寝かされていたベッドの側にはガルヴィアと名乗ったあの蛇の様な男がいた。

ミーファはぼやけた頭で彼を見て、おぼろに状況を認識し、戸惑った。

そんなミーファを置いて彼が部屋から出て行き、一人になってようやく落ち着きを取り戻したのだが、そこでミクヴァンがやってきたのだ。

ミーファにとっては自分の与り知らぬところで勝手に物事が進んで行く様は、不安を煽ること以外の何物でもなかった。

「気分はどうかね？」

扉の近くに立っている裏切り者は、張りのある声で悪びれもせず訊ねてきた。

両開きの扉を開けて彼が入ってくる際に、隙間から脇に立った警備兵が覗き見えたことから逃げ出すのは無理そうだ。

ミーファはできるだけ落ち着いた声を出すように己に言い聞かせ

て、

「……………エクスはどこですか？」

ミクヴァンの言葉は無視して、まず騎士の所在を確認した。
少女が目覚めてからぼんやりとだが確かに思っていたことは、エクス
の安否と自身のこれからだ。だがまず聞き出すべき事はエクス
のことだと強く思っている。

ミーファは椅子から立ち上がった状態で、強くミクヴァンを睨み
付けた。普段は笑顔でいることの多い彼女も、このときばかりはそ
うもいかない。

「エクス……………ああ、あの騎士のことか」

「とぼけないで。エクスはどこ？ 今すぐ彼女に会わせないさい」

「これはこれは、さすがは王女様といったところか。気丈な物言
いだ」

ミクヴァンは何を考えているのか、ガルヴィアがしたようになら
ず寒い笑みを浮かべて平然としている。

ミーファはできるだけだけ険のある視線でそんな男を黙って睨み続け
ていると、彼は一つ息をついた。

「まったく、苦労させてくれた。先日、突然この屋敷から逃げ出し
たかと思えば、今度は夜中に目を覚ましたりする……………。私も疲れて
いるのだから、もう少し時間を考えて欲しいものだよ」

先ほど硝子窓から外を見てみたとき、すでに世界は暗かった。そ
の闇は夜更けであることを表しており、ずいぶんと気絶していたも
のだと内心で自身を叱責した。

そして同時に分かったことが、自身が軟禁されている部屋は二階
に位置しており、硝子窓を割り破いて脱出することが出来ないとい
うことだった。

エクスのように二階から二人を抱えて飛び降りることはもちろん、
身体的にはどこにでもいる少女であるミーファには一人でも飛び降
りることなど到底できはしない。

気圧されたら負けだとミーファは自身を鼓舞し、余裕を示すため

に堂々と椅子に座って泰然とした態度を貫ぬく。

「ならどうしてこんな時間に起きてきたの？ もう私を捕まえたのだから、後でも良かったのでは？」

「まあそうだけれど……君には聞きたいことがあってね。先日は聞き出す前に逃げてしまったから、念のためにね」

「聞きたいこと……？」

ミクヴァンは扉から離れると、こちらに近づいてきた。

咄嗟に身を固くするが、ミクヴァンはテーブルを挟んで対面に位置する椅子に腰掛けると、彫りの深い引き締まった顔を真っ直ぐに向けてきた。

「君は一体、どういう考えでいるのかな？」

「……質問の意味が分からないわ」

突然にどうという考えでいるのかと問われても何のことだかさっぱりである。

「もちろん、今回の王女派と王弟派の政争のことについてだよ」

「君は自分が争いの火種だということを理解しているのか？ たたえ王命といえども、君という存在が余計な混乱を招いているということ、君自身はどう思っているんだ？」

それはミーファにとってある意味、急所とも言える言葉だった。

ミクヴァンは遠回しになど言わずにはつきりと、お前は余計な者だ、邪魔者だと口にしたのだ。

そしてその言葉は客観的に見れば強ち間違いでもない。

すでに国王が不在になって一月が経つが、未だ国民にはその死を告げず、同時に国葬も行っていない。

ということは、王不在のこの期間は王都の重臣たちが国の舵取りをしている状態で、これが長引けば様々な弊害が発生しかねない。

それもこれも、すべては次期国王を決める派閥争いのせいである。王命に背いて本来通りに王弟の息子を推す重臣たちと、忠実に命令を守る重臣たちのぶつかり合いだ。

そして王に相応しいのはミーファと王弟の息子であるアトウニス
のどちらかと問われれば、これまで送ってきた両者の生活を鑑みれ
ば後者を推すことが正しいのだ。

ミーファ自身もそれは分かっている。分かっているからこそ、そ
れに対する反論も彼女なりに用意してあるのだが、

「……………」
いざ言葉にしようとする、どうにもそれは傲慢な考えなのでは
ないかと思えて口に来ない。

「どうなんだね？ 君は君自身を厄介な存在だと思わないのか？」
「私、は……………」

ミクヴァンは先ほどから視線を合わそうとしてくる。少し横に逸
らしても、彼は首を傾けてこちらの視線を追おうとする。

ミーファとてそうしてミクヴァンがこちらを精神的に追い詰めよ
うとしていることは分かっているのだが、どうしても底の知れない
瞳を直視できなかった。

だがそれでも一度小さく深呼吸をして、自身の考えを言葉にした。
「私は……貴方の言うとおり、この国にとっては政争の火種になる
ような存在だと自覚しています」

「ほう」
「でも、それでも私は王になる権利があるのなら　そうなるよう
に望まれているのなら、なりたいと思ってる」

そこでミーファは目の前に座す男と視線を合わせた。
彼の表情は先ほどから全く変わりはないが、それでもミクヴァン
は先ほどとは少し違う雰囲気を感じているようにも感じられる。

正面に座る一都市を治める執政者は一度目を閉じて、
「……………なんとこの傲慢さだ。一応、理由を聞かせてもらおうか」
ミクヴァンは左右に首を僅かに振りながらそう言った。

「王弟の息子のアトウニスって人が王になれば、西の帝国とは近々
戦争になるだろうってエクスから聞いたわ。私は戦争なんてしたく
ない。いえ、人間なら誰だってそうだわ。争うことなんて望んでな

い

「ミーファ自身は正直なところ、国王になど興味は無い。

だが自分が王になることを望まれ、またそうすることで無益な争いが回避できるのであれば、是非もない。

「……なるほど。いや、それともやはりと言うべきか。確かにアトウニス公が国王になれば戦争になるやもしれん。一領主である彼が一国を統べる王になれば、おおかた領土問題が起こって内紛に発展することだろう。そしてその際に帝国だけでなく、北や東の方からも攻め入ってきたとしてもおかしくはあるまい。加えて彼自身の性格は好戦的ときている。これは王女派の者たちが最も危惧していることの一つでもあることだな」

ミクヴァンの言っていることはまだまだ政治に疎いミーファでも、エクスから聞かされていたために理解できた。

しかし今の言葉通りにアトウニスが国王になった場合と同じく、ミーファがそうなった場合の弊害ももちろん存在している。

「だが、君が王になったところで戦争が起こる可能性はさして変わりはないだろう」

そう、たとえミーファが王になったとしても、彼女の嫌いな争いもとい戦争が絶対に回避できるわけではない。

「君が王になれば、まず隣国に舐められる。まだ十代の娘が女王になどなってしまうえば、ただでさえ我が国は見下されるのにも関わらず、君の血の半分は平民のものだ。加えて君はこれまでの十六年ほどの人生を市井しせいで過ごしてきた。政治などろくに知らない君が王になったところで、奸臣どもにいいように操られて王政は瓦解する。仮にもし君に王としての資質があったとしても、それが大成する前に帝国との戦争は起こってしまうことだろう」

「……………」

彼の言っていることは至極もつともなことだった。これもミーファにはエクスや書物から知識を得て分かっていたことだが、言葉にして他人から言われると思った以上に重いものだと実感する。

そもそもミーファは一月前まではどこにでもいる普通の少女だったのだ。そして「戦争はしたくない」という単純と言ってもいい考えは、ある一面から見れば、今ある現実を受け止めるための口実に過ぎないものだといえる。

できれば現在のような王だの国だの戦争だのといった話などせず、普通の生活に戻りたいのだが、自身の身分は生まれたときに決まっていたのだ。それを嘆いたところで状況は変わらないし、やはり何よりも戦いなど起こって欲しくはない。

「だが、君が女王となれば国民は親近感を覚え、支持を得ることはあるだろう。いつの時代も美しい女性の王は支配者として一種の人望もとい統率力を高めることに繋がる」

「……え」

「以外かね？ 私が君を支持するようなことを言ったことが」

ミクヴァンは顔を歪めるように苦笑した。

彼がこちらを庇うようなことを言うとは思っていなかったミーファは当然驚いた。

この男は自分のような未熟な少女を国王にはしたくないはずなのに、なぜそんなことを言うのか分からなかった。

「なぜ……私を擁護するようなこと？ 貴方は王弟派のはず」

率直に訊ねると、ミクヴァンは洗面をつくった。その表情は積年の苦心が表れてもいるようで、ミーファは一瞬、目の前の男から見た目以上に年老いた印象を受けた。

そして細められた目の奥 鈍い輝きを放つ昏い瞳には後悔、羨望、嫉妬、あらゆる感情が嵐の如く乱れているように見える。まるでもう届かない何かを諦めたような、諦観さえ感じられるその瞳は狂おしいまでの激情が渦巻いている。

ミーファはそんなミクヴァンを訝しく思っていると、彼は一度瞬きをした。

すると次の瞬間にはすでに瞳からは一切の感情が消え失せていた。「……………一応はな。だが私とて完全にアトウニス公を支持してい

るわけではない。ただどちらか一方を選択しろと強要されれば、王弟派を支持するというだけのことだ」

今回のようなことで中立にたった者は色々と損をするし疎まれるからな、とミクヴァンは付け加えた。

「なぜです？ 貴方ほどの為政者ならば、戦争を起こさない可能性を追求するはず」

ミクヴァンの噂はミエディア王国の都市執政者の中でも名高いものだというのを、ミーファは自身の身分を知った後、短期間ながらの勉強でも知り得ていた。

都市アクナリアは元々大して繁栄していたわけではなく、近年までは王国南部に位置する地方都市の一つだった。

しかしミクヴァンが二十代の頃に若き都市執政者に任命されてからは随分と他の都市との交流が広がって、商業も発展したという。

そんな辣腕として知られる今や四十代半ばほどの壮年の男は、ミーファのある意味で賞賛といえる言葉を誇ることなく、むしろ苦々しく受け止めた。

「戦争は起こるといふ前提で考えているからだよ。可能性の低い方へと賭け、そちらに心血を注ぐことで準備を怠るよりも、可能性の高い方を前提に考えて準備を万全にしたほうが、事が起こってから対応しやすい。……それに、私は君が思っているような為政者ではないよ」

ミクヴァンはテーブルの上に皺のできはじめた両手を乗せてそれを組み、自嘲気味に笑った。

「私は切り捨てるものは切り捨てるという考えを徹底しているのだよ。必要ないものはどこまでいっても必要ないという考え。……君は昨日一昨日と貧民区へと逃げ込んだのだろうか？ ならば見たはずだ。あそこがどういった状態にあるのかを」

ミクヴァンの言葉にミーファはふと思い出した。

商業区や居住区と違って石畳ではなく、舗装されていない土の道。白亜の石造りの家々が多い商業区などとは正反対に、木造の古びた

家々が乱立する貧民区。

乞食や浮浪者ばかりでろくな服装の者を見かけず、ミーファが襲われたときも暇つぶし程度と言わんばかりに眺めているだけだった無気力な住民たち。

そしてフェイシスに助けられた際に、彼が倒した男の身体に群がって身ぐるみを剥ぐ者たち。

彼ら貧民区の住民こそが、ミクヴァンが切り捨てたという者たちに違いないのだろう。

「……………」

ミーファはミクヴァンという人物を見る目を少し改めた。

彼が優秀と言われ、ここまで都市を發展させたのは単に割り切っているだけだったからだ。

幸せになる者と不幸せになる者、生者と死者、得る者と失う者。より多くの者のために少数の人間を犠牲にしている。

ミクヴァン・オスリームは冷静に、そして冷酷に判断しているに過ぎないのだ。

そのようにして今回の王女派と王弟派の争いも、王弟派を選んだのだろう。

先ほど彼はミーファが戦争をしないためという発言に対して、やはりと言った。それはミーファというほんの最近まで市井の娘だった者の思考を読んだことだったのだ。

国民なら誰だって戦争はしたくないもので、喜ぶのは傭兵くらいのもものだからだ。

「つい私ばかりが話してしまったな。次は先ほどの君の話の続きを聞かせてもらおうか」

ミクヴァンが静かな昏い瞳で直視してきた。

しかしミーファは先ほど感じた昏い何かよりも、彼の目に摩耗した精神を見た。

そう見えるのはミクヴァンという人間の一部を知ったからなのかもしれないが、それでもまだ目の前の男と目を合わせたくはなかつ

た。

ミーファは捕まっているということも忘れて考えにふけていたことに気がついて、少し気を引き締めると、口火を切った。

「私は言うまでもなく、政治のことはまだよく分かりません。それでも戦争をしないでいいなら、その道を追求したい。たとえ周囲から無理だとか見下されたりしても。……人が死ぬのは、辛いことだから」

「……なぜ、そう思うのかね？」

「つい一月前まで私の住んでいた都市で、数年前に市民側と都市側が政策を巡ってぶつかったことがあったわ。反乱、というものね。私は富裕民区と呼ばれる区画に住んでいたから都市側の警備兵に守られていたけれど、争いが沈静化してから他の区へ行ってみたら、所々に争った跡が見られた。ものが壊されていたり、壁や道に血が付いていたり。……それは雨でもなかなか洗い流されないものだった」

人と人が憎み合い、対立して傷つけ合うなど、そんなことをしても悲しいだけだ。

エクスが自分を守るためとはいえ、人を傷つけることも、殺すことも本当はして欲しくない。

「戦争はそんな一都市内での争いではなくて、国同士の争い。私は戦争というものを経験したことはないけれど、それでも人と人同士の戦いというものがどれだけ恐ろしいものかは理解できる」

昨日、一昨日とミーファはフェイシスの戦いぶりを見た。

その時に流血沙汰になったものは少ないけれど、それでも血で血を洗う戦いが繰り広げられる光景はある程度想像できる。

フェイシスが一千人、警備兵が三千人という規模の戦いが繰り広げられると考えれば、その結果はどうあっても真っ赤な光景しか思い浮かばない。

ミクヴァンはミーファの話の黙って聞いていたのだが、彼は話を聞き終えると座っていた椅子から突如として立ち上がり、

「……やはりまだまだ小娘か。世界というものを、人間というものを知らなさすぎる。私には君の言葉が、所詮は付け焼き刃の知識で形を整えただけの、ただの妄想めいた願望にしか聞こえないよ」

「……………」
何か言い返そうにも、付け焼き刃のどつてつけたような知識だということとは否定できない。

ミクヴァンは一度こちらを見下した後、扉に歩み寄りながら背中を向けつつも続けた。

「人というものはね、争うことでしか伝わらないということが確かに存在するのだ。もしそれを諦めてしまえば、人は死んだも同然の生き物なのだよ。貧民区の住民たちが良い例だ。……私が言えたことではないが、彼らは自分たちの不幸を、差別を、格差を、我々に訴えようとはしない。そんな彼らの姿を君も見ただろう？ 戦争も同じだ。帝国は我々の国を、国民を、そこから生まれる富を欲しがっている。だが当然、我々はそれを差し出すことなど出来はしない。しかしそうは言っても相手は納得しない。だから言葉で通じないのなら、武力でもってそれを伝え、我々が拒絶していると実感させるしかないのだ」

争うことでしか伝わらないこと。

これまでのミーファにはそうだったことはなかった。親しい人と喧嘩をすることならあったが、それとは程度が異なるのだろう。

彼の言うことはミーファには納得できないが、しかし理解は出来る。貧民区の住民たちは確かに死んでいるといっても過言ではないような有り体だったのだから。

だが、

「それでも、そうなんだとしても、やっぱり納得は出来ない。そもそも貴方だって本当は戦争なんて起こしたくないのじゃない？」

ならばそうなるように尽力すべきよ。やらないうちから無理だと言っているのは、本来は変わることで何も変わらないままになってしまっ

ミーファとミクヴァンの価値観の違いは積み重ねてきた経年の差であり、いずれはミーファも彼のような考えになるのかもしれない。だが未だにただの一国民　もとい都市に住まうただの少女という意識が色濃く残っているミーファの考えは、大半の国民のそれに近いはずだ。

国民は、そもそも人間は、人と争うことなど望んではない。

ミクヴァンは扉の前で立ち止まり、僅かに振り返ると苦々しく笑った。

「……王女だと分かってまだ一月しか経っていないにも関わらず、大した意志の強さだ。だがやはり、君は人間も政治も、世界も知らなすぎる。君の物言いは絵空事だ。そんな君が国王となつて戦争が起これば、まず間違いなく君は国を乱すだけの存在となるだろう」
ミーファにはそれが決定的な決別の言葉に聞こえた。分かり合えないと、そう宣告された瞬間だった。

分かつていたことだ。ミーファがこの都市に助けを求めに来たにも関わらず、彼はこちらを監禁　とまではいかないまでも軟禁しようとしたことから明らかだった。

それは彼の言うところの、話し合う前に可能性の高い方を前提として考え、それに見合った対策をとっただけだった。ミーファとエクスがミクヴァンの話に納得しないことは分かっていただろうから、彼は事前にそれを防ぐため、二人を屋敷に閉じ込めたのだ。

しかしそれが結果としてエクスの警戒心を十二分に引き上げ、逃げ出すことになったのはもはや言うまでもないことだろう。

「貴方の考えは、私には納得できない」

ミーファも椅子から立ち上がり、はつきりとそう口にした。

このままではミーファには思いもつかないような何かに、自身の王の隠し子という立場を利用されかねない。

ここには　王弟派に属する者の元には危険だと再認しつつも、しかし逃げ出す手段はない。

エクスがいればどうにかなるのかもしれないが、そもそも彼女は

安否さえ不明なのだ。

「……………」

扉を開けて出て行こうとするミクヴァンをミーファがやるせない気持ちで見送っている、そこで突然に声が聞こえてきた。

「警備兵のみんなー、侵入者だよー。庭の西側に侵入者がいるよー」

聞いたことのない少年のような声が窓の外から響き渡ってきた。部屋には隙間などないのに、不思議と響き渡る妙な声だった。

だがそんなことよりも、ミーファにはその声の主の発した言葉の方が気になった。

「エクス…………っ!？」

声は侵入者だと言った。ミーファを助けてくれる者などもはや彼女以外にあり得ない。

「この声は彼の…………？ それに侵入者とは…………グレン、仕留め損ねたのか…………？」

退室直前だったミクヴァンはそんな呟きを残して、音高く扉を閉めて出て行った。

第二十六節・再会は予期せぬ誤解の始まり

「リム、ミーファは何階のどの辺だ？」

「……二階の……おくのほうだと思っ」

フェイスとリムは慎重かつ迅速に歩を進めていた。

後ろからリムが音もなく付いてくるのをフェイスは背中を感じつつ、耳を澄ませて自分以外の足音に集中する。

屋敷内への侵入は硝子窓を使ってくれていたおかげで容易だったが、硝子の破碎音が響いていないかがフェイスには心配だった。

しかし侵入してからは一度たりとて誰にも遭遇しておらず、先ほど発見声明があつたにしては屋敷の中は落ち着いていた。

「誰か近づいてきそうだったら教えてくれ」

「うん」

一応リムがいるので誰かに発見されるようなことは事前に避けられそうなのだが、どうしてもと言う場合には剣を抜かねばならない。

『功』はあまり使いたくないフェイスなのだが、そうなったときには仕方がないと割り切る覚悟は出来ている。

「……………」

フェイスは今更ながらに自分の行いを冷めた目で見つめ直してみた。

これから自分がやることは都市というもの、ひいては王弟派だとかいう者たちを敵に回すことになる行動だ。それは国の半分が敵になるようなもので、王女派がどの程度の派閥なのかは知らないが、それでもこうして捕まっている現状を鑑みれば王弟派よりは勢力が小さいことはなんとなく察しが付く。

フェイスは決して馬鹿ではない。自分の気持ちに整理を付けるだけのために、わざわざこんな危ないことに首を突っ込むほど世間知らずではないし、お人好しでもない。

エクスが死ぬ前まではこの都市からの脱出だけだったので、力を

貸すことができていたのだが今はもう違う。都市から出てミーファとはしばらく行動を共にしなくてはならないだろうことは承知している。

こうした現在の状況を引き起こした要因は己の意志もあるが、それ以上にエクスに頼まれたからというのが大きい。かつて騎士を志したものとして、そして三年前の襲撃事件の生き残りとして、彼女の願いは無碍には出来ない。

「フェイ、あそこだけ……だれかいるよ」

半ば意識を思考に割いていたせい、いつの間にか二階への階段を上がっており、そして廊下の角からその先を覗き込もうとしていた。

リムがいたものの、よく警備兵に見つからなかったものだとフェイシスは自分でも多少驚いた。

見上げて判断を仰いでくるリムの頭を撫でながら、もう少し集中せねばと自身を律してから廊下の先を覗き見た。

「……二人か。わざわざ扉の前に人を置くってことは、十中八九あそこにミーファがいるんだろうな」

それにリムが気配を感じたところである二階奥という位置とも一致している。

もうここは強行突破しかあり得ないが、先ほどのフェイシスたちを発見したという声明がどうしても引つかかっていた。

あれはフェイシスたちを見つけたことを警告した警備兵の声だと考えられるが、しかしそれにしてはおかしい。自分たち四人を発見したのなら、庭先で警備兵の相手をしているイヴリーナとヴァンのほかにフェイシスとリムがいることをも彼らは知っているはずだ。庭には二人しかいないのだから、ここは屋敷の中を警戒するのが常道にもかかわらず、実際はそこまで警備が厳重とは言えない。

「畏……？ にしては不可解なことが多いし。まあ考えても仕方がないか」

ここで思考に時間を割くより、少しでも早くミーファを連れ出す

ことの方が先決だ。

これからは考えることよりも行動を優先しなければならない。

フェイスは傍らに立つ童女に、絶対に自分の後ろから出ないように言つてから静かに己の愛剣を抜いた。屋敷内の廊下に一定間隔で灯されている燭台の明かりが、銀の刃を怪しく輝かせる。

廊下はさすが貴族邸だけあつて、なんとか剣が振れそうなほどの広さを有している。

彼ら警備兵はフェイスからすれば悪人という訳ではないが、今回は敵だ。殺すことをためらつたりはしない。

「……」
フェイスの口元が意図せず歪んだ。それを自身では気がつきながらもやめることができない。

ここ数日の『功』を使いすぎた影響がここにきて確実に出はじめていた。

フェイスにとって、後ろにいるリムからはこの歪んだ笑みを浮かべる自身の顔が見えないことが不幸中の幸いだった。

「……リム、離れるなよ」
自身の中の衝動を抑えつつ一言だけ言い残し、廊下の角から静かに飛び出した。

フェイスは半ば無意識的に『功』を練りながら、さながら狼のような姿勢で静かに疾く目標に向かって接近する。自身の内から膨らむ衝動を今はまだ制御できる程度なのがこの状況では一応の救いだった。

扉の両脇に立っている警備兵二人は迫り来る脅威に気付いている様子はない。

彼我との距離は歩幅にして十数歩。

フェイスはそれを瞬く間に駆け抜けて間合いに入ると、そこでフェイスから見て手前 扉の左側に立っていた男がやっとフェイスに気がつき、場違いにのんびりとした視線を向けてきた。

「え」

フェイススは『功』を全身に行き渡らせ、走りながら左の細剣を一閃した。

状況を理解していない間抜けな面をした警備兵の首があっさりと宙を舞い、間欠泉のように鮮血が吹き出す。だがすでに男の身体を通り抜けたフェイススに紅いそれは降りかからない。

「つ、お」

扉の右脇に立っていたもう一人もフェイススに気がついたが、突然のことに余程驚いているのか、腰にある剣を抜こうとしない。

フェイススは斬り飛ばした頭部が落下音を立てる前に、残る一人に血濡れた刃を突き立てた。

男の見開かれた眼窩に刃先を突き入れ、その凶刃は後頭部から勢いよく突き出る。そしてすぐさま突き刺さった細剣を引き抜くと、

「あ、え……？」

言葉にならない眩きを残して、血とそれに混じる脳漿を流しながら人形のように力なく倒れ伏した。

かくして、いとも簡単に扉の前には二人分の死体が転がった。

廊下は飛び散った血液の紅で装飾され、それが蝋燭の灯に鈍く反射し、不気味な色合いを醸し出す。

それらを冷たい視線で眺めつつ、フェイススは己の中に燦る黒い感情を確かに感じながら、一度空を斬って血糊をおとした剣を鞘に収めた。

「……………ふう」

小さく息を吐き出し気持ち落ち着かせる。

フェイススにとって『功』は諸刃の剣のようなものだ。自分自身に直接的な害はないが、それでも周囲にその弊害たる狂気をまき散らす。

あと数回も使えばヴァンの言う暴走状態になりかねない。

フェイススは自身が手にかけて男二人に視線を向けるが、彼らに對して申し訳ないとは思わない。そんなことは殺した自分が思っても自己満足にしかならないことは重々に承知しているし、後悔をす

るくらいならばじめから手にかけてなどいない。

振り返ると、リムが紅色に濡れた床を避けながらこちらに近寄ってきた。

童女は血の海を見ても動じることなく歩みを進め、無言で扉の前まで来ると足を止める。そうして無骨ながらも洗練された小さな取っ手に手をかけるが、

「あれ？ 開かないよ？」

血臭漂う廊下にいる中でも平時と変わらぬ声でそう言った。リムの過去に起こった出来事を鑑みれば、死体と血の海だけでは怯むことはない。さすがに剣を向けられればその限りでもないのだが。

フェイスとしてはこれ以上『功』は使いたくないが、扉が開かないのならば仕方がない。ここで時間を食っても無駄なだけだ。

「リム、ちよつとどいてくれ」

そう言うやいなやリムは素直に両開きの扉から離れる。

フェイスは一度深呼吸した後、脚に力を集中しながら回し蹴りの要領で扉を蹴破った。

錠が碎ける音と共に勢いよく内側に開かれる扉の音が廊下どころか屋敷中に響き渡る。これで確実に誰かが来るだろうが、その前に逃げ切れば良いだけだ。

「…………だ、だれ…………？ エクス…………？」

薄暗い室内から聞こえてきた声は、恐怖と期待が混じり合ったように震えたものだった。

「ミーファッ」

フェイスが部屋に足を踏み入れようとした寸前、後ろに下がっていたリムが飛び出すように部屋の奥へと駆けて行った。

そんな童女に続いてフェイスも後を追うと、蝋燭が一本だけ灯された広い部屋の奥に、探していた少女の姿があった。

緩く波打つ髪に整った目鼻立ち、大きな瞳は僅かに陰ってはいるが、それでもまだ半日ほど前に見たばかりの少女だと判別できた。

「え？ リムにフェイス…………シス」

ほんの半日前までは略称で呼んでくれていた少女は、フェイススを見て困惑したように表情を曇らせた。

「え、えっと……どういうこと？ どうして君が……エクス、は？」
まだ混乱しているのか自身に抱きついてきているリムと離れて立つフェイススを交互に眺めている。

そんなミーファの表情からは不安がまざまざと見て取れた。

「ある人に頼まれて、君を助けに来た」

フェイススは彼女の質問には答えず、敢えて目的をぼかして言うことにした。

「……ある人って……？」

「それは後で話す。とりあえず早くここを離れないとまずい」

ここで事情を話している時間はないし、そもそも彼女がそれを真実だと信じるとも限らない。とにかく今は一刻も早くこの屋敷から出ることが先決なのだ。

フェイススはミーファに近づこうと足を一步前に踏み出したが、彼女は反して一步後ろに下がった。

相変わらずミーファの瞳には陰り　というよりも疑念が浮かんでいるように思っるのは、なにもフェイススの勘違いではないのだから。

すでに彼女はフェイススがどういう人間なのかを知っている。そして現在のような状況で唐突に現れれば、訝しまれて当然と言える。

フェイススがミーファになんと言って連れ出そうかと僅かに頭を悩ませていると、

「……それ」

少女の瞳が不意にこちらの腰　正確にはエクスから預かってきた一振りの長剣へと向けられた。

そしてミーファのたったそれだけの動作から、フェイススはこの少女から自身がどういいう人間だと思われているのか、そして騎士の

剣をそんな人間が持っているというこの状況を作り出してしまった
己の迂闊さを呪った。

しかしそうと気がついた瞬間には、すでにミアファの表情は晴ら
しがたいほどの疑いがはつきりと浮き上がっていた。

第二十六節・再会は予期せぬ誤解の始まり（後書き）

ここで少し修正のお話を。

これまでは名前で「＝」を使っていたが、調べてみると「＝」は主に姓名同士を繋ぐ記号らしく、姓と名を繋ぐには普通に「・」を用いるらしいです。

ということに私は遅まきながら気がついた次第でして、これまでの文章中に出てきた人名には修正を加えておきました。

第二十七節・狂い出す者たち

「その剣……エクスの……」

ミーファは驚きに見開いた目で見つめてきた。

その視線をフェイススは真っ直ぐに受け止めて、

「後で話すから、今はとにかくここから出よう」

自身の一つしかない腕をミーファのほうへと差し出した。

リムは抱きついていたミーファから離れて、その矮躯をフェイススの傍らへと移動させる。その動作はまるで「こっちにおいで」と誘っているかのようで、見る者によっては彼女の容姿から悪魔の誘惑のように見えたことだろう。

「……………」

そんなリムの姿をどう捕らえたのか、ミーファはフェイススの手をしばし見つめた後、ゆっくりと視線を上げた。

「……エクスは、どこ？ 彼女は怎么样了？」

顔を強ばらせながら、ミーファは震える声で呟くようにそうつ口に
する。

「だから、それは後で」

「 いますぐ教えてっ」

有無を言わせぬ気迫だった。

その声も表情も張り詰めていると感じたのは、なにもフェイススの気のせいではあるまい。加えて少女の瞳は恐怖と困惑に揺れているようにも見える。

「……………」

ミーファの姿を見て、もう一度話すべきかどうか考えた。

エクスのことを今ここで言うことは、状況を冷静に鑑みるなら得策ではない。

フェイススをすでに《隻腕の剣鬼》だと認識し、そしてそんな人間が自分を助けに来てくれるはずの騎士が所持していた剣を持って

いる。これだけを見れば誰だって疑うどころか一つの確信へと至る。たとえ、それが事実と異なるのだとしても。

やはり今は話すべきではないと思い、フェイススがもういつそのこと強引に連れて行くのかと逡巡していると、

「君がエクスを……殺したの……？」

ミーファは疑念に彩られた表情でそう呟いた。その声音からは負の感情しか聞き取れない。

そしてその誤解はこれからの行動に大きすぎる支障をきたすことなど考えるまでもなく、

「いや、違う。俺たちが駆けつけた頃にはもう瀕死だっ」

思わず言い返したフェイススは、しかしミーファの表情を見て咄嗟に口をつぐんだ。

彼女は目を見開き、口を小さく開いて呆然としていた。呼吸すら止まっているのではないかと思えるほどに一切の動作がない。

少女の顔は今や絶望というべき色合いに彩られていた。

「……君がエクスを……殺したの……？」

ミーファは震える声で先ほどの問いをもう一度口にした。

そして言いながら彼女は一歩後ろに下がって、泣き出しそうな、苦しそうな様子でフェイススを見つめている。

「だから違う。俺は」

「嘘っ、だって君はエクスの剣を持つてる！」

それまでの震えていた声が嘘のようにミーファは叫んだ。

今にも泣き崩れそうな表情で、その目に疑念の他に微かな憎悪と明確な恐怖が混じり始めたのをフェイススは見た。

「どうしてっ、ねえどうしてなの！？　なんでエクスを　っ

っ

急に錯乱したかのようにわめきだし、彼女は途中で涙を流しながらうろずくまった。

ミーファは完全に混乱していた。こちらの話を聞こうとせず、た

だうめき声を上げている。

彼女にとつて、フェイシスは殺人鬼という存在なのだ。たとえ数回助けたといつても、それはあまり関係が無い。

ミーファがエクスを信頼していたのは端から見ても一目瞭然だったのだ。エクスがフェイシスを《隻腕の剣鬼》だと看過して剣を向けたとき、ミーファの中ではすでにフェイシスは敵のようなものになっていたのだろう。

そんな彼女の前にエクスの剣を引っさげて来たことは完全に誤算だった。フェイシスはミーファをもう少し聡明な　とりあえず話　くらいは聞く人間だと勝手に思い込んでいた。

少なくとも、突然に王女だという出自を明かされてそれを受け止め、前へと進もうとすることが出来るくらいには。

「……………」
そうフェイシスが考えていたとき、隣に立っていたリムがミーファにそつと近づき、混乱し泣き崩れている少女に手を伸ばしたが、「いやあつ、やめて、いやよ……………」どうしてっ、なんでエクスが、そんなの嘘よっ、うそ……………　なんだから……………」

泣きはらした顔のミーファは、リムの小さな手を払いのけた。

ミーファにはエクスの死を信じないという考えが出来るのにも関わらず、彼女はすでにエクスの死を真実だと受け止めている。そう信じる所以はフェイシスが彼女の剣を持っているという、ただそれだけの理由で十分だった。

騎士にとつて剣とは己自身である。いつ如何なる時も自身の愛剣は側に置き、まずもって奪われるなんてことは起こらない。

そしてそんな騎士の剣を、かつて切っ先を向けられたフェイシスが持っているというこの状況。

ミーファの中では殺人鬼と認識している人間が騎士の分身ともいえる剣を所持しているというこの状況は、すなわち彼女が死んだ殺されたという形でもって認識するのは至極当然といえるだろう。

「……………フェイ」

リムがこちらを覗き込むように見上げながらそつと不安げに呟いた。

「すぐにでも離れなければならぬのに、ここで時間を浪費しても仕方がない。ミーファには悪いが、ここは気絶させてでも強引に連れ出すしか方法はないだろう。」

フェイスがそう判断を下しかけたとき、しかし唐突に冷たく平坦な声が背後から突き刺さってきた。

「おやおや、宿にいた少年ではないですか」

咄嗟に振り返ると、声の主は今まさに部屋に入り込んでくるどころだった。蛇という印象を抱かざるを得ない長身痩躯の男は、宿に急襲をかけてきたガルヴィア・フロードと名乗った者だ。

そして不吉な彼の背後から、見知らぬ男が悠々とした足取りで錠の壊れた扉の向こうから現れる。

「まったく……惨憺たるありさまだね。少年、君が殺したのかね？」
髪を後ろに撫でつけ高貴さというべき張り詰めた雰囲気を持った男が、開け放たれたままの扉の向こうを僅かに振り返りながら無表情にそう言った。

フェイスは側にいるリムを見やるが、彼女も驚いたように二人の男に視線を注いでいる。

おそらくはミーファが混乱しているのを見て、リムも取り乱したのだろう。人の気配に敏感だということは、この童女は人の気配を感じ取って共感してしまう力もまた強い。リムが接近する気配に気づけなかったのは、なにも責められるものではない。

「……………」
「とはいえ状況は最悪だった。」

姿を見られる前に逃げ出すつもりが、よりもよってガルヴィアに見つかってしまったのだ。

宿で数合い手合わせしただけでもその強さは垣間見えた。加えて斬首刀を使う者などこれまで相手取ったことがないため、フェイスにとっては戦法が読みにくいために危険要素であり、接触は避け

たい相手だった。

当のガルヴィアはフェイシスの内心など露知らず、ゆっくりと近づいてくる。

フェイシスはなるべく敵意をむき出しにして、意識して殺気を孕んだ視線を向けた。普段は穏やかそうな眼差しの彼も、今ばかりはその視線が鋭く尖っている。

「おっと……そんなに睨まないで頂きたい」

ガルヴィアは扉から数歩だけ進んだところで歩みを止めた。そして見知らぬ男もガルヴィアの隣までやってきて、そこで立ち止まる。「ミクヴァン様、私の後ろに下がっててください。あの少年は油断できません」

「大丈夫だ」

ミクヴァンと呼ばれた男は、手でガルヴィアの言葉を制して微笑を浮かべた。

男の腰にも一振りの剣があるが、体つきから武人には見えないとフェイシスが判断したとき、ミクヴァンという男の名前で思い至った。この屋敷の主であり、都市アクナリアの執政者たるミクヴァン・オスリームだということに。

フェイシスは鞘に収まっている細剣の柄に手をあてながら、どうすべきか考えた。

ここで二人を殺して逃げようにも、二対一でしかもフェイシスはリムを庇いながら戦わねばならない。ミーファは殺されることはないだろうが、隙を見せればどこかに連れて行かれるおそれもある。

それ以前の問題として、都市の執政者を殺してしまえばいずれは犯行が特定されて、王国という大きすぎる権威から追われかねない。「少年、名前を教えるはもらえないかな？」

ミクヴァンは低く威厳の感じられる声で問うてきた。

気負いのない立ち姿は余程に部下を信頼しているのか、あるいはフェイシスが斬りかからない確信でもあるのか。いずれにせよ、張り詰めた室内で堂々としていることには変わりない。

「……………」

「答えてはもらえないか。まあいいだろう」

こちらが黙っていても、気分を害した様子はなく、悠然と続けた。「君はそこのお嬢さんを助けに来たのだろうか、彼女の立場は理解しているのかね？」

「……………」

「沈黙もまた一つの答えと判断すべきかな？ ……ではここで良いことを教えてあげよう」

黙って睨み付けるフェイスに構わず、ミクヴァンはやはり泰然とした態度で話し続ける。

「この屋敷には、グレンという男がいる」

「っ」

「おや、その反応は知っているということかな。となれば、やはり君はグレンの……………」

半ば分かっていたこととはいえ、フェイスはミクヴァンの言葉に反応してしまった。

エクスからグレンがいるということを知ったときから、ミーファの件に関わっていることは分かっていたことだ。そしてそんな奴がミーファの捕まっているところにいるだろうことは予期していた。

殺してやりたいほど憎い相手だが、しかしそんな私怨と死に瀕していたエクスの頼みとを天秤にかければ、今は僅かに後者のほうが重い。

仮にもし後になつて落ち着いて考えた場合には、この判断を後悔するかもしれないが、状況はそれどころではない。

故にフェイスは湧き出る憎悪を押しとどめてミーファの件に集中していた。だがそれが仇となつて急な発言に反応してしまったことは迂闊というほかなかった。

なぜなら、

「もしか君はフェイス・ヴィリアスではないのかね？」

「……………」

フェイスは今度こそ無表情を貫いた。

ここで自身の出生が割れても良いことはなにもない。むしろ殺人鬼だと噂されている者が王国貴族出身だと分かれば、その情報をどんなことに利用されるか分かったものではない。

「ふむ、やはりなにも話す気はないか。……もういい。ガルヴィア、片付けてしまえ」

呆れたように嘆息し、ミクヴァンは部下に命令を下した。

「よいのですか？ 彼がグレン殿の探し人だとすれば、私が殺してしまつては怒り狂うと思いますが」

「構わん。グレンには彼の死体を引き渡す。あの男なら、たとえ死体だろうと切り刻めば気が済むだろう」

「了解しました」

彼らが話している間に、フェイスはそつと視線をミーファのほうへと向けると、彼女はもう泣いてこそいないが、まだうずくまつたまま呆然としていた。

まるで魂でも抜けてしまったのではないかと思えるほどに微動だにせず、少女はただ虚空を見つめている。

「では、すぐに終わらせませす」

視線を戻すと、ガルヴィアは言う否や腰の処刑剣を引き抜いた。

フェイスはそこで決断した。

ミクヴァンとガルヴィアの話からグレンがこの屋敷のどこかにいることは必至だろう。となれば、いずれ奴がここにやってくる。そうなればもはやフェイスは冷静さを保つことなどできなくなり、怒り狂つて斬りかかるというのは自分のことながら容易に想像できる。

故に、一瞬で片を付ける。「功」はこれ以上使いたくないが、それによる狂気の発露よりもグレンと邂逅した際の怒りを制御できないほうが不安だ。

「……………」

フェイスは腰に携えていた騎士の剣をリムに手渡した。剣一本

分の重量は結構なものなので、これからの戦いには不利に働く。

リムは両手でそれを受け取ると、未だ判然としないミーファの側へと走り寄った。

「……手加減はなしだ」

「ほう、宿では手を抜いていたのですか？」

フェイスは右腰の細剣を引き抜いた。細めの刃が蠟燭の淡い光を受けて僅かに輝き、それは血色にも似た光を放つ。

手加減、というのは『功』による影響を鑑みずに行使用することだ。フェイスはいつだって『功』以外は全力だ。剣技も体裁きも常に己の限界を駆使している。

そうでもなければ片腕であるフェイスが五体満足な相手を打倒することなど至極困難なことなのだ。

だが『功』という力がある。フェイスにとっては毒にもなり得るその力は、並以上の身体能力を付加してくれる。普段は抑えて使っているが、一瞬でも早くこの場を去るために、いまは力の出し惜しみなどしない。

ガルヴィアが今まさに動き出そうとしたのを見て、フェイスは小さく息を吸って、そこで呼吸を止めた。

全身の筋肉を緊張させ、それを一気に解放する勢いで床を蹴る。身体に力がみなぎっているのがフェイス自身にも分かり、並大抵の者では比肩し得ない初速だった。

間合いの広さでいえばフェイスの方が上だ。細剣という特質上、突きによる一撃は腕の長さも加味されて間合いは広い。

故に刺突での一撃必殺を狙い、フェイスは間合いに入る数瞬前に左手を後方へと引き絞る。

身体を弩のような発射装置に見立て、細剣と腕を一つのものとして定める。相手を射貫く必殺の刺突のために、十分に剣速を高めようにして身体全体でためをつくる。

と、そこで異常が発生した。『功』の使いすぎなのか、腹の中で

鬼火のような何かが燻り始めたのだ。

それに比例してフェイシスは内から湧き出る衝動を抑えきれなくなってくる。

世界が次第に緩やかに流れていき、彼我との距離がゆっくりと、しかし確かに縮まっていくのを認識する。これまでは流れるようにして室内の風景が過ぎ去って行っていたのだが、今はもう違う。

正面からこちらと同様に向かってくる不気味な男の姿も、髪の毛一本に至まで正確にその動きを把握できる。

その感覚がフェイシスにはたまらなく気持ちいい。

「っ！？」

横薙ぎ一閃の構えをとって疾駆してくるガルヴィアが、そこでなぜか訝しむように眉をひそめた。

だがもはやフェイシスにとってはそんなことはどうでもいい。

早く目の前の男を殺したいという感情がすべての目的を塗りつぶす。そして心を浸蝕するかのように狂気が湧き出てくるのを感じる。しかしそれを半ば受け入れようとしている自分を、内から生まれる衝動に吞まれかけている理性で必至に諫める。

そうしているうちに、ついにガルヴィアが間合いに入った。その瞬間にフェイシスは狂気を押し留めるのを中断し、全精力でもって引き絞っていた全身を一気に解放する。

内から湧き上がる感情に素直になり、相手の剣速を上回る単純な力押しで押し溜めていた左腕の細剣を突き出す。

そうして、室内の淡い灯火が微かに揺れるのと同様、虚空に鮮血が舞った。

第二十八節・巨漢は異常な青年と対峙する

「警備兵のみんなー、侵入者だよー。庭の西側に侵入者がいるよー」

夜明け前に突如として響いたその声を、酒をなめていたグレンはしつかりと耳にしていた。

「なんだあ？」

蠟燭すらない部屋の中は、硝子窓から差し込む月と星の自然光しかなく、部屋の隅は闇が色濃いほどに薄暗い。

グレンはミクヴァンからもらった酒を、彼にしては珍しく珍しく味わうようにしてゆっくりと飲んでいたために、その突然の声で貴重な酒が数滴こぼれ落ちてしまった。

テーブルに肘を付きながら飲んでいたせいで、瀟洒な金属製テーブルの上に高価な罍が数滴だけ見られる。

「……もったいねえ。こんな上等な酒なんぞ滅多に飲めるもんじゃねえってのに」

グレンは呟きつつも酒を飲むことをやめない。

普段は酒の味など気にしない彼でも、今日ばかりは丁寧に味わっている。

だがグレンは美味な液体を少しだけ口に含むと酒瓶を手放し、大きくのびをしながら立ち上がった。

「あああ……つと。侵入者がいるんなら一応様子くらいは見にかねえとな……面倒くせえ」

グレンは気怠く呟き、壁に立て掛けてある斧の方へと足を向ける。テーブル上に置いた酒瓶にはまだ三分の一程度は残っているが、仕方が無い。

と、グレンがそう思っていた時、またしても声が聞こえた。

「うわあ、見た目に反して意外と真面目なのかな？」

巨体に似合わぬ俊敏さで飛び退くように振り向くと、いつの間にか硝子窓が開らいており、窓辺に青年が腰掛けていた。

首をかしげている青年は、しかし子供のようにも大人のようにも見え、年齢が判然としない容姿をしている。顔の左半分は長い髪で覆い隠され、身体の線の細さからも男なのか女なのかさえ分からない。

だがおそらくは男だろうとグレンは予測していた。声は中性的な声音をしているものの、それでも立ち振る舞いは男のそれだった。

「……てめえ、いつからそこにいた……？」

グレンは獰猛な獣もかくやというような声で突如として現れた不審者に威嚇した。

それを受けた青年は音もなく床に降り立つと、少年のようなあどけない笑顔になり、

「フフツ、初めまして、グレン・ダージエン。僕はエネス」

「……………」

エネスと名乗った青年は、握手でも求めるかのように右手を前に差し出す。グレンはそれを冷たい視線で突き刺した。

不思議な雰囲気纏うエネスは巨漢の反応を見て小さく肩を竦めると、手を引つ込めて再び妖艶ともいる口元を動かした。

「まあまあ、そんなに警戒しないでよ。僕はただ忠告に来ただけだから」

「……………忠告だと？」

「そつ。しばらくの間は、何があってもこの部屋からは出ちゃダメだよっていう忠告。いや、やっぱりこれは警告かな？」

グレンは己の巨斧まであと数歩というところで立ち止まっており、エネスの様子を窺っている。

グレンとしてはすぐにも斧を手にとって、突然現れたエネスとかいう青年をぶった切ってやりたいという衝動に駆られたが、不安要素の多い相手に対しては迂闊に動くことは出来ない。

なにせ音もなくいつの間にか現れていたのだ。そんな相手を警戒

するなというほうがおかしい。

「部屋から出るなだあ？　なに言ってんだテメエ。つかいきなり現れてなんなんだってのっ」

苛立ちを含んだ声で、顔をしかめて吐き捨てた。

ただでさえ強面のグレンがしかめ面をして更に厳つい顔になっても、エネスは全く動じることなく、常に微笑を色の薄い顔に貼り付けている。

美少年なのか美少女なのか一瞬判断に困るほどの相貌をしているエネスは、グレンの言葉には反応せず、

「君はもう今回の舞台には必要のない役者なんだよ。騎士を殺す悪者ってというのが、今回の君の役割だったからね。僕がそこそこ頑張ってるって考えて、苦労して運び込んだ場を壊されたくはないし、何よりいま君が出て行けば彼は怒り狂ってしまっただろうからね。……いや、そうでなくともある程度は暴れちゃうかな？　まあいいや。とにかく君はこの部屋からは出ないでよね。もし出ようとすれば………彼には悪いけど、殺しちゃうから」

蠱惑的な笑みとともに一人勝手に語るエネスは、世間話でもするかのように楽しげだ。

反してグレンは不機嫌さを隠しきれずに舌打ちした。

グレンにとってはエネスの言うことは意味不明だったが、それでも分かることは目の前の青年なのか少年なのか判別しづらいこの男は敵だということだ。

エネスはそんなグレンの心情など露知らぬ様子で、顔の片半分が髪に隠れて判別しづらいにもかかわらず、それでもその少年のような相貌に上機嫌な笑みを浮かべている。

「てめえ、一体なにが目的だ？」

「ん？　目的？　うん……君じゃなかったら教えても良いんだけどね。グレンに言うのと怒りそうだから言えないかな」

まるで旧知の仲であるかのようにグレンのことを親しげに呼び、エネスは頭の後ろで手を組んで飄々と言った。

「意味分かんねえぜ、全くよ……。でもまあ、おめえが来た用件つてのは、俺がここから動かないようにするってことで良いんだな？」
グレンは壁に立てかけられた戦斧を横目で確認しながら、警戒を解かずにエネスに対して敵意を振りまく。

巨体のグレンとは違い、線が細く背も高いとは言えないエネスは、コクリと頷いて、

「うん。といつても、君が抵抗しなければ、この都市を出発するくらい時間まで引き留める気はないから」

「へっ、そうかい。だがな坊ちゃん、俺は明らかに俺よりも弱っちそうな奴から命令されんのが……。一番気に入わねえんだわっ！」

グレンは言うやいなや斧まで駆け跳び、巨大な獲物の柄を引っ掴む。

その間エネスは一步たりとも動くことなくグレンの行動を目で追っていた。

凶器を手にした巨漢はそのまま一直線にエネスへと襲いかかる。貴族の屋敷だけあって天井は無駄に高く、部屋も斧を振り回せるくらいには広い。グレンは横薙ぎの暴風の如き一閃をエネスの細っこい身体へと叩き込む。

だがそれをエネスは上に飛ぶことで回避した。彼の身長は大男のグレンよりも頭二つ分ほど小さい。そんなエネスの胸を狙った一撃だったのだが、それでも青年は軽々と跳躍したのだ。

そこらの有象無象どもにはできない驚くべき芸当を軽々とこなしたエネスだったが、

「バカがあっ！」

グレンは宙で身動きのとれない青年へと斜め上に向かって切り返した。

が、それも彼は躲した。

ちょうど窓際に立っていたエネスは、自身の後方にあつた窓枠を蹴ってグレンの左斜め後ろへと飛び退いたのだ。

「ふう〜。もう、しょうがないなあ。そんなに死にたいのなら

本当に殺しちゃうよ？」

エネスは余裕綽々にそう言ったが、グレンは言葉を返すことなく斧を振り回した。

逃げ場の制限されている室内で巨斧を振り回すグレンは明らかにエネスよりも優勢なのだが、エネスは暴風雨どころか雷のような疾く重い一撃を風に舞う羽のように舞ながら躲していく。

「っ」

それでも尚グレンは攻め続けるが、一向に当たる気配はない。

「ねえグレン、君も『功』を使っているなら疑問に思ったことはないかい？ 一体『功』ってなんなのか、ってことを」

「……………」

グレンは一度距離をとって様子を見ることにした。エネスは躲す一方で一向に攻勢に転じる様子がないからだ。

「グレンは知ってる？」

「さあなっ、つかさっさと俺の前から消え失せる！」

「フツッ、まあ落ち着いてよ」

無邪気な笑顔を振りまいて、無垢な少年の如き表情で巨漢を諷める。

だがグレンはエネスの言葉を聞く耳は持たず、またもや距離を詰めて猛攻を開始する。やはり何かされる前に先手を打った方がいいだろうと考え直したのだ。

巨斧によって切り裂かれた大気がうねり、少しずつ小さな風が生じ始める。止めどない斧の嵐は、しかし奇妙な軽業を駆使するエネスには掠りもしない。

そんな状況の中、エネスは平時と変わらぬ声で話を続けた。

「『功』ってというのはさ、言うまでもなく力なんだ。けれど誰にでも使えるものでもなく、生まれ持った才能と努力に比例して、『功』っていう人に秘められた力を使うことができるようになる。そしてこれは人間に与えられた可能性でもあるんだ」

「クソがっ、なに变なご高説垂れ流してんだ、コラア！」

グレンは当たらないことに苛立ち、振り回す斧に力を込めてエネスを狙うが、

「わぁっつっ、いま『功』を使ったね？ フフツ、話を戻すけど、ここで言う可能性っていうのはね、進化の種みたいなものなんだ。『功』という力は人を高めへと昇華させる。『功』を使えない人間は大抵の場合、使える者に勝てはしない。……まあ、技量や体格なんかでいくらでも例外はでてくるけど、そんなのは余程のことがないとまず無理だろうね」

エネスはこれまで躲し続けてきたグレンの攻撃を、今度は攻撃範囲内から脱した。

もう躲すのが面倒になったのか、それとも何か違う理由があるのか。エネスの微笑を貼り付けた表情からは感情を読み取ることなど出来はしない。

「グレンはさつきから断続的に『功』を使って斧を振るっていたけど、疲れたかな？」

グレンは答えない。エネスの言う通り、グレンは先ほどから『功』を使って斧を振る力を振り絞っているが、それでもエネスには当たらない。

まだ記憶に新しい女騎士ならば確実に数回は死んでいるであろう猛攻を、エネスはくぐり抜けている。

「『功』は基本的に有限だけど、でも休息をとればまた使えるようになる。そして『功』を使うのに何の代償もないとなれば、戦いの時に使わない手はないよね？ ……ところがね、強すぎる『功』を持つ人の中には、力を使うことでその代償を被っている人もいるんだ」

グレンはエネスの動向を冷静に観察しつつも一足一刀 もとい一足一斧の間合いを確保すべく、室内を満たす奇妙な雰囲気の中、少しずつ間合いを詰める。

「その代償はさまざまで、ある人は使ったあと激しく体力が低下し

たり、ある人は目や耳といった感覚器官が麻痺したりする。またある人は外見的な体質が変化したり、ある人は精神に異常をきたす。でもその代わりより強い『功』が使えたり、または特殊な形で『功』の力を発現させることが出来る」

エネスは詠うように次々と言葉を紡いでいく。

「そしてそんな異常ともいえる『功』を使う者たちを、一部の者たちは大抵こう呼ぶ 《異端者》と。ちなみに君が探している愛しのフェイス・ヴィリアスはまず間違いなく《異端者》だといえる力を有しているよ」

「っ!？」

エネスに徐々に近づこうとしていたグレンの巨体がその言葉を聞いた途端、急に強ばった。

突然にでてきたその名前にグレンは僅かに頭が混乱する。そして《異端者》という名称。半日ほど前にガルヴィアから聞いた《異端なる者たち》の話。

「フフ、いい反応だね、グレン。お察しの通りだよ」

「……………」

ルーインアウター。ガルヴィアが話していた謎の集団。

グレンも噂程度のことしか耳にしていなが、それでもその《異端者》とは異常者たちの集団であることくらいは分かる。

「ふう、でもなんだか面倒になってきたな。というか、そもそもこんなことを君に話してもしょうがないんだよね。ただグレンには役割を果たしてもらえれば、それでいいんだからさ」

「……………役割だと？」

「そ。でもさつきも言ったけど、今回の騒動での君の役目はもう終わったんだ。…………一々相手するのも飽きてきたし、そろそろ眠ってもらおうかな」

そう言うつやいなや、エネスはふらつと身体を傾けた。かと思ったら、一瞬掻き消えたのように姿を消し、次の瞬間にはグレンの真横に突如として現れていた。

「　っ!？」

なにが起こったのかグレンには全く分からなかったが、しかし彼にもこれだけは分かった。

やはり異端、もとい異常なのだ。常識が通用しない相手、それが《異端なる者たち》という奴らなのだ。

グレンはとつさに身体を捻って斧を振るうが、エネスはすでに懐に飛び込んでいる。

理解不能なまでの速さによる神出鬼没。理解の追いつかない現象の中で、グレンはとつともない衝撃を腹部に感じた。

岩の如き巨漢が吹っ飛び、壁に激突する。だがさすが貴族邸というべきか、部屋自体はほとんど揺れなかった。

「　」

壁にもたれかかった状態のグレンは、ゆっくりと歩み寄ってくる得体の知れない敵を見やる。だがすでに霞み出した視界の中ではそれもあまり意味を為さない。

「へえ、まだ気絶してないんだ。やっぱり見た目通りの頑強さだね」
「ぐ、……あ」

「ああ、しばらく身体は動かないと思うよ。いまの掌底で君の身体に僕の『功』を打ち込んだから。今頃グレンの身体の中では、君の『功』と僕のそれがせめぎ合っているだろうね」

グレンにはもはや十分に聞き取れるほどに意識が明瞭ではなかったが、それでも意味は理解できる。

これ以上は動けないのだと。

四肢に力を込めるが、まるで己の意思に反応しない。手からは力が抜けて斧を手放してしまい、全身が高熱にでもなったかのように熱く怠い。

「しばらくはそのままだから大人しく気絶しなよ。……ああ、一日くらいで治るから安心して。本当は君のことなんて殺してやりたかったんだけど、そうすると彼の成長に著しい障害がでるからね。また今度、次は彼と一緒に会いに来るよ。その時が君の最後になるだ

ろっから、覚悟はしておいてね」

エネスは入ってきた窓ではなく、今度は扉の方へと足を向けた。

悠々と歩き去る決して大きくはない背中を、グレンは最後まで見ることができずに意識を失った。

第二十八節・巨漢は異常な青年と対峙する（後書き）

今更明記するまでもないことですが、あらすじで「『ファンタジー群像譚』と銘打っておきながら、ファンタジーらしい要素は今回の節に頻出した『功』というものだけです（本当に今更ですが）。

人によってはこの要素は納得し難いかなと思いつつも、物語にはどうしても必要なファクターなので入れた訳なのですが、一方で「ああ、そうですか」程度に読み流すだけで十分です。

第二十九節・隻腕の剣鬼

もうだめだ。

凶器を手にした彼は、今まさに自身の内から湧き出る猛火の如き衝動に正直になろうとしていた。

楽になりたい。はやくこの衝動から 欲望から解き放たれたい。どうしても抗えないという認識に押し流されそうになる一方で、しかし彼はそれに抗おうとしていた。

その心情の現れなのか、彼は額を汗で濡らしつつ苦悶の表情を浮かべ、呼吸は音をたてるほどに荒い。

だがそんな抵抗が長くは続かないことを、彼はこれまでの経験から知っていた。

どうしても抗いきれないことを、彼は抗う前から知っているのだ。故に彼は己の欲望に負けてしまうことを始めから予期している。

ならばなぜ抗うのかと問われれば、それは一重に贖罪だった。罪には罰を、という当たり前の倫理観。

せめて少しでも抵抗することで、これは己の理性が望むところではないと自身に言い聞かせるため。

せめて少しでも抵抗することで、その抗いで生じる苦しみをこの身に刻むため。

しかし彼とて分かっている。たったそれだけの罰では足りないことを。彼自身、十二分に分かっているのだ。

これから己の為すことが、如何に非人道的で冒瀆的、暴虐で身勝手な振る舞いの極みにあるのかを理解している。

だからというわけではないが、その悪行を被るに値する人間の選定には慎重だ。

だがそれでもその行為そのものが悪ということに変わりはない。

だから、それ故に、彼は善行を重ねている。

病の者には高価な薬を。

餓死寸前の乞食にはその手にパンを。

無念を残して死にゆく者には最後の願いを。

暴漢に襲われている女性には救いの手を。

もし望まれるなら、一国の危機には滅私奉公の貢献を。

それはまるで彼という人生の絵画に描かれた悪行を覆い隠し、善行で重ね塗るような行為だ。

そうして彼は半ば無意識的に善を為し、その裏では半ば意識的に悪を為す。その度に繰り返される善行と悪行を、彼という一枚の絵画に塗り重ねていく。

だとしても、そんな上塗りも長くは続くまい。

塗り重ねた色というのは、単に見えなくなっただけで、確かにそこに存在する。

いつの日か、何かの拍子で下の色が滲み出ないとも限らない。

それでも、いつかそうなるのだとしても、彼は生きること自体を辞めはしない。

自身がたとえどんなことをしようとも、彼が生きること放棄するのは赦されないから。

だから変わらなければならぬ。

変わらなければ、後悔しかない人生になってしまう。

そう思う彼はその努力を重ねてきた。多くの人々と積極的に関わり、様々な行動を起こして、彼なりに様々な人々に手を差し伸べてきた。

だが、彼は気付かない 否、気付けていない。

彼という人間がもう取り返しも付かないほどに、如何に異常で異端で逸脱しているのかを。

いつの間にか彼の額に浮かんでいた汗も、苦悶の表情も、荒い吐息さえもなりを潜め、その口元が三日月の笑みで歪みだしていた。

かくして彼自身の予想を裏切らず、彼はまたしても己の欲望を満たすために動き出そうとしていた。

もはや彼の心を占めるのは己の衝動の発露と欲望を満たすという欲求、そしてほんの一片の理性のみ。

歡喜に震えるその手が、握られた凶刃を陽炎のように小さく揺らす。

そうして今宵もまた夜陰に紛れて、彼は凶刃を振るうために動き出す。

〃 〃

その部屋はほんの数瞬で紅い血に濡れ、鼻を突く臭気が息苦しいほどに漂う空間と化した。

「が、あ……」
フェイススの雷撃の如き一撃がガルヴィアの胸部 鼓動していた心臓を突き刺した。

その一突きはもはや視認できる速度を超えており、ガルヴィアは横殴りの一撃を見舞うための凶刃を振りかぶっていたところでその動きを止めている。

「ハ、ハハ」
処刑剣を手にした男に密着した状態で、フェイススは低い笑い声を洩らした。

普段はどこか穏やかそうな目元は今や凶相が画然と浮かび上がり、明らかに正気ではないことを現しているのだが、幸か不幸か、その形相は今の体勢からでは誰からも視認できない。

そんな少年に今まさに命の泉を貫かれたガルヴィアは、頂垂れかかるような状態にあっても剣を手放さず、そして狂気の握られた腕を緩慢に動かした。

「」

なんとか自分の胸に刃を突き入れた少年に一矢報いようと、ガルヴィアはまさに死に際の一撃を見舞わんとする。

だが、その決死の覚悟の反撃とて、しかし次の瞬間にはすでに潰えていた。

口が裂けそうなほどに愉悦の笑みを浮かべたフェイシスは、根元まで突き刺していた細剣から手を離すと、ガルヴィアの右腕を無造作に引つ掴んだ。

そしてそのまま何の感慨なく、下腕部を握り潰す。

「……………」

対してガルヴィアは悲鳴どころか呻き声さえ上げなかった。

なぜならその蛇の如き男はフェイシスに腕の動きを止められた時点で、すでに生命活動を停止していたからだ。

急所による必死の一撃によって間もなく骸となったガルヴィア・フロードからは、もはやあらゆる所作は見受けられない。ただ、悲鳴の代わりに骨の砕けた怪音だけが響き渡ったに過ぎなかった。

「フハツ、ハツハハ、ハハハ」

だが薄ら寒い笑みを張り付かせた少年は、粉碎した腕の先からこぼれ落ちようとしていた斬首刀と搔つ攫うと、至近にいた男の身体を無造作に蹴り飛ばした。

そしてフェイシスは先の丸まった 刺突を捨てて斬撃に特化した処刑用の凶器を、すでに息絶え崩れ落ちようとしている屍に対して神速の四連撃を見舞う。

左下から斬り上げた第一撃は左腕を。

振り上がったところから右に一閃の第二撃は頸部を。

更に上段にある紅刃を切り下ろした第三撃は右腕を。

そして振り下ろされたところから左に切り払った第四撃で両足を歪な四角形を描いた鮮やかともいえる狂気の剣閃は死人の四肢を断ち切つて、更に頭部と胴体を別つた。

常人ならここまで鮮やかに切れはしないが、しかしフェイシスにはそれを為し得る力と技量がある。それらは奇しくも、かつては人

と国を守る騎士となるべく培ったものだが、今この瞬間には死者を冒瀆する技術と化していたことは皮肉としか言いようがない。

肉片となり果てた四肢は床に落下した際の虚しい音だけを残し、胴体部は細剣をその胸に突き刺したまま倒れ伏した。

そして数瞬遅れて頭部が転がり落ち、そうして一つの惨殺体が出来上がる。

「……………」

切り別たれた屍肉から止めどなく溢れ出る紅い液体を前に、その場の誰もが沈黙していた。目の前で部下を殺されたミクヴァンも、フェイススの背後から見守っていたリムも、元から呆然としていたミーファも。

そんな中で泰然と佇む狂気に犯された一人少年。自らは返り血を一滴さえも浴びないで、無残な肉片を前にして薄闇の中でただ笑みだけを浮かべている。

フェイススはいま、実に気持ち良かった。

ガルヴィアをこの手で切り裂いたときも、命の灯火が掻き消えた瞬間も、すべてがフェイススの内にある何かを満たしているようで、それがたまらなく快感だった。

もはや今の彼にはほんの一握りの理性しかなく、そして肝心のそれは獲物を見定める狩人の意識である。

殺してもいい者と、殺してはいけない者を見定める冷酷な選別眼。選別基準は善人が悪人かという酷く自分本位な考え。それだけが今のフェイススにとってはある意味で正常だった。

そして一度獲物と定めた者には躊躇しない。殺すことを厭わない。むしろ喜々としてその手を紅く染め上げるだろう。

フェイススという人間にとって、人を殺すということは本心のところでは何ら罪だと思っていない。

死んでもいい人間は山ほどいるし、死ぬべき人間は腐るほどいる。それが率直な、偽らざる彼の本音だった。

だが普段はそんな個人の価値観を凌駕するものが存在し、それは

幼少期から植え付けられた倫理観だった。

両親から、兄弟から、友人から、知人から、恩人から、様々な者たち教えられた良き心が、人を殺すことは罪だと訴えかける。たとえどれだけの者たちが死ぬべきと思っっている人間がいたとしても、それは法によつて裁くべきだという考えがフェイスを抑え込む。

善悪を個人の裁量で決めることは許されず、容易に人を手にかけるべきではないという教えが、フェイス個人の価値観と相克し、それが狂気という名の湧き上がる衝動の発露を妨げる。

「フ、ハ、ハハッ、ハハハッハハハッハハハハハ」

衝動　そう、これはあくまでも衝動的なものだ。

今まさに狂氣的にしか見えない様子で哄笑するフェイスの、この姿は謂わば代償なのだ。

「……………ば、馬鹿な……………まさか、《隻腕の剣鬼》……………？　本物、か……………？」

普段、フェイスは「功」という力を使うたびに己の内の何かが燻っているのを感じている。

そしてそれは　それこそが狂気であり、殺人という衝動が暴れだそうとしていることの証だった。

たとえ彼がどんなにその発露に抗ったところで、その抵抗は謂わば瓶に水を注ぎつつも、そこから次第に溢れ出てくる水を押しとどめようとしているようなものなのだ。いくら抵抗しようとしても、許容量を超えた衝動は抑えきれものではない。抗いきれるものではないのだ。

かつて、フェイスは片腕を切り落とされた瀕死ともいえる状態に陥った際、偶発的に「功」という力に目覚めてしまった。

だがそれはどういうわけか、力が湧き上がるのと同時に猟奇的ともいえる殺人衝動までも感じるようになってしまったのだった。

そして切っ掛けとなった過日の出来事から三年近く、フェイスは悩んできていた。

力があるのなら、それを使って誰かの役に立ちたい。

だがそうになると、次は狂氣的な衝動のはけ口が必要となる。

故にフェイスは誰を斬るのかという意思だけは、たとえ狂気に飲まれようと手放さなかった。その暴虐ともいえる殺人を為す只中にあつても、世に悪人と呼ばれる者たちを標的として切り捨ててきていた。

そうして彼はことある事に誰かに手を差し伸べてはその度に『功』を使い、そうして蓄積した衝動のはけ口を見つけ出して悪人と自分勝手に断定した者を惨殺するという行為を繰り返してきた。そして約二年に渡るその行いが、世間で『隻腕の剣鬼』という殺人鬼の風説を生み出したのだ。

当然、フェイスは好んで人を殺したいとは思わないが、所詮は他人からの入れ知恵である倫理的な考えは、この内から湧き上がる衝動とは相容れないものだ。そして双方を心中の見えざる天秤に掛けたとき、常に傾くのは抑えがたい衝動の方だった。

それでも尚フェイスが抗っていたのは、自らの行いがいくら言葉で着飾ろうとも悪逆なことだと分かっているからであり、変わらなければならぬという想いが胸中にわだかまっていたからだ。

こんな衝動になど振り回されず、理性的な、正常な意志でもって己の行動を決定したいという願望があつたからだ。

だが何よりの理由は、彼女たちとともに居たいからだだった。

彼女たちに離れていって欲しくないからだだった。

「フェイス！」

血濡れた剣を片手に歪んだ笑みを湛えていたフェイスは、背後から聞き慣れた声とともに小さな足音が近づいてくるのを感知した。狂気に犯されると遅々として流れるようになる鋭敏な視覚だけでなく、あらゆる感覚が敏感となったフェイスにはそれが誰のものだか考えるまでもない。

「おちついてよっ、イヴだってフェイスにこんなことしてほしくないよー！」

軽々とした衝撃とともに、小さな温もりが腰の辺りに広がってゆ

く。預けていた騎士の剣を放り出して、リムが後ろから腰に抱きついてきたのだ。

フェイシスは視線を自身の腰元へと向けると、そこにはか細い腕が身体にしっかりと巻き付いていた。

「……フェイ」

「」

内にある何かが急速に冷めていくのを、フェイシスは感じていた。それは唐突に冷水を被せられたという程度ではなく、燃えさかっていた猛火が一瞬にして鎮火するような、不意にすべてが掻き消えてしまうという、もはやある種の喪失感にすら似ていた。

そうだ。リムとイヴリーナがいるのだ。彼女たちを悲しませたくはないし、彼女たちは自分がこうなることを望んではいない。

フェイシスにとつて彼女らは最も親しい友であり、妹であり、家族なのだ。こんな狂った人間を気にかけてくれる心優しい者たちなのだ。いつも側に来てくれている、大切な人たちなのだ。

そして、変わらなければならぬという決意。この想いに嘘はなく、醜い感情に振り回されたくないなどない。

フェイシスは確かにそう思いながら、己の内に燻る何かを追い出すように、深く息を吐いた。

未だ抱き付いてきているリムの温かさを頼りに、少しずつ理性の綱を手繰り寄せながら、力を込めて凶器を握っていた左手をゆっくりと弛緩させていく。

身体の内でも燻る灼熱の如き黒い何かを、脳裏に思い浮かべた大切な者たちと彼らの言葉を思い出しつつ、徐々に押さえ込んでいく。

感情に 衝動に任せて剣を振るう姿など、リムにもイヴリーナにも、それに今この場にいるミーファにも見せたいものではない。

ましてや数年前に失った、もうこの世にいない友人には到底見せられるものではなかった。

「ああ……ごめん、リム……」

そう小さく呟きながら落ち着きを取り戻すフェイシスは、ゆっくり

りと視線をミクヴァンへと向けた。この都市の執政者もまたこちらを凝視しており、観察するように、あるいは訝しむようにして目を細めている。

フェイススは深呼吸してから、しっかりとした口調で前方に立つ男に言い放った。

「……ミーファを、逃がしてもらえますね？」

「……………」

ミクヴァンは無言でフェイススを見返すだけで、返答に応じる様子はない。

「沈黙もまた一つの答えと判断していいんですか？」

先刻　ガルヴィアと対峙する前　の意趣返しといえる言葉をぶつけると、そこでやっとミクヴァンは反応した。

「そんなことを言えるほどには理性的なのか。……些か君という人物が計り切れないので、戸惑っていたところだよ」

ミクヴァンが口にしたことは、先ほどからフェイススを見ていた者ならばおそらく誰もが思うことだった。

急に狂ったかのように笑い出したかと思えば、また突然に正気を取り戻す。

端から見れば、いやフェイスス自身さえも異常だと思わざるを得ない。

「まさかこんな少年が噂の殺人鬼だとはね。だが、先ほどの狂った笑いとその怪奇的ともいえる強さなら納得だ」

先ほどは驚いていたようだったが、すでに落ち着きを取り戻しているらしいミクヴァンは、微笑すら浮かべてフェイススに臆した風もなく視線を注いでいる。

「ミーファを逃がして」

「まあ待ちたまえ。その前に聞かせてもらえないか？　なぜ彼女をそこまでして連れて行くこうとするのかを」

そう言っただけでミクヴァンはフェイススの後方、部屋の隅でしゃがみ込んでいるミーファの方を僅かに見遣った。

フェイススとしてはこれ以上の時間を浪費するわけにはいかないのだが、彼としても確認したいことがあったため、答えることにする。

「彼女の騎士から頼まれたからだ」

本当はフェイスス自身のためでもあるのだが、それを言うと話がこじれるのに加えて出生もばれてしまう。いや、もうばれているのだろうか。

とにかく、噂の殺人鬼が実は王国貴族出身だ、などというさらなる風説が流布してしまうことだけは避けたい。

「……騎士、か」

「グレンに彼女を殺すよう命じたのは貴方が、ミクヴァン・オスリム……？」

フェイススは確かめねばならなかった。この男がエクスを殺すよう指示したのか、それとも奴自身が独断で殺したのか。

威嚇するようにフェイススは紅く彩られた刃をミクヴァンへと向ける。

丸まった切っ先を向けられた男は、一度大きく息を吐き出すと、
「……そうだともいえるし、そうでないともいえる。私はグレンに捕縛するよう命令したが、彼はその命令を破った。だが私はグレンがどういった人物なのか、ある程度は知っていた。騎士となれば彼がエクス・オフィルムを殺すだろうことは予期していたのだ」

それは謂わば黙認していたということだろう。名目上は捕縛だったにも関わらず、実際はグレンが殺してしまってもいいと思っていたということなのか。

フェイススは騎士という者たちに対して並々ならぬ思い入れがあるため、どちらにせよミクヴァンのことは赦し難かった。

そしてもう一つ、訊かねばならないことがある。

「三年前、騎士候補生を襲撃し塵殺させたのは貴方の仕業かっ!？」

フェイススの脳裏に過去の光景が思い浮かぶ。騎士訓練校の制服に身を包み、級友らと共に野外訓練のために遠征地へと向かっ

ていた途中。そこに突然現れた男たち。その中で目を見張るほどの斧を持った巨漢を。

グレンがミクヴァンの部下だというのなら、三年前のことも目の前の男が指示したと考えるのが妥当だ。

しかし、

「いや、その件に私は一切関与していない。グレンと私は……そうだな、一時的な部下と主といった関係なのだよ」

「……………」

再び己の内にある何かが燻りだしたため、フェイススは記憶に焼き付いた光景をなんとかかき消すと、臆した様子もなく答えたミクヴァンを見やる。

どうやら過去の件には本当に関わりがないように思えるが、しかしそれでもエクスが殺されることを黙認した目の前の男を、憎むべき奴の代わりに殺したかった。

ミーファとエクスはただその立場から追い立てられ、そして騎士であるエクスは殺された。フェイススが殺人という行為に対して何かしらのことを言える立場ではないが、それでもグレンはもちろんミクヴァンも赦せなかった。

「どうした？ 私を殺さないのか？」

「……………」

今、このミクヴァンという王国貴族であり都市の執政者である彼を手にかければ、確実にフェイススは国から追われる立場になる。

これまではそうだったことがなかったため特に公的に追われることはなかったが、これからミーファに協力しようという段階で貴族殺しの大罪が万が一にでも明るみに出れば、今後の行動に支障が出る。

故に先ほども自分のこと何も話さなかった。はじめから殺すつもりはなかったが、そうは思ってもやはり憎悪という感情は浮上ってしまう。

フェイススはミクヴァンに向けていた紅刃をゆっくりと、それこ

そ未練がまざまざと見て取れるほどに緩慢な動きで下げた。

「ほう、その彼女のことを頼んだ騎士を間接的に殺したと言ってもいい人間が目の前にいるのに、君は報復しないと云うのかね？」

ミクヴァンはまるで挑発でもするかのように、わざとらしい口調でそう言いいつつ首をかしげる。

これからのことを思えば殺さないということが正しいことだと確信しているし、エクスもそう判断することだろう。

ミクヴァンにはこのあと宿に忘れてきた、おそらくは彼らが回収したであろう荷物の在処を聞き出さねばならない。エクス曰く、そこには今後に必要な書状の類が入っているとのことだったので、ミーファには是が非でも必要なのだ。

フェイシスがそう考えていると、不意に背後から澄んだ鋭利な金属音と、床を踏みしめる臃気な足音が耳朵を打った。

「ッ！？」

そこでフェイシスは天啓にも似た嫌な予感が全身を駆け抜け、まさか、と思って振り返った。

するとそこには俯きながらも立ち上がり、抜き身の剣を手にしたミーファの姿があった。彼女はたどたどしい握り方で、両手で騎士の形見である剣を下段に構えていた。だがその手は見るからに震えているの分かる。

それらの様相から察せる行いは、考えるまでもないことであろう。「やめるミッ　っ！？」

制止の声を上げながらミーファの元へと駆け寄ろうとしていたフェイシスは、しかし半身まで振り返ったところで首筋にあてがわれた長剣の鈍い輝きに行動を遮られた。

視線だけを動かして鋭利な刃の先を辿ると、そこにはミクヴァンの儼然とした姿があった。

「　くっ」

「フェイツ」

あまりに予想外のこと意識をミーファの方へと向けていたフェ

イシスは、ミクヴァンの剣に全く気が付くことができなかつた。

先ほどの狂気の発露と『功』の使いすぎで集中力が散漫になり、体力が落ちていたことも原因としては大きいが、加えてミクヴァンの剣速が意外すぎるほどに鋭かつたことも想定外だつた。

たとえ腰に剣を携えていようとも、所詮は執政者という文官であると甘く見ていた。

リムはすでに抱き付いてはいないが、フェイシスの側で特異で大きな目を驚きで目一杯に見開いている。当然、ミクヴァンの剣先がフェイシスへと向いていることからその意味を正しく察し、リムも動けないでいる。

ミクヴァンは切っ先をフェイシスの咽喉にあてがつたまま、ミーファへと視線を移した。フェイシスも身体は動かさずに横目で様子を窺うと、俯いた少女はゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

だが近づいてくるミーファに、ミクヴァンは何も言わない。ただ剣を手に近づいてくる少女を昏い瞳でじっと見つめているだけだ。

フェイシスには、そんな彼の意図が不明だつた。

少女の予想外の行動はミクヴァンに復讐しようとしている、ということはもはや明白だ。

だが自分はミーファにとっては殺人鬼であることに変わりはなく、よって彼女の奇行を止めるための人質としては有効ではない。それならば傍らに立つリムの方が適任だ。

しかしミクヴァンはフェイシスに切っ先を向けている。これではまるで、ミーファを止めるなというような行動としか思えなかつた。

「ミーファ、やめろっ」

重そうに剣を手にして歩みを進める少女を見て、フェイシスとはとつさに叫んだ。一方、その動きをミクヴァンは警告しようとも、喉を切り裂こうともしなかつた。

ただ依然として、ミクヴァンの目には妙な深さのある窺い知れない何かが宿っている瞳を、静かに少女へと向けているだけである。

フェイシスは男の意図が全く読めないまま、一方のミーファは騎

土の形見をその手に、一歩一歩確実に距離を詰めてきた。

第三十節・壊れかけの少女と一振りの剣

今まさにへたり込んでいる状態にあるミーファの頭は、かつてない程の混乱の極みにあった。

さまざまな出来事が頭の中で交錯し、だがその一方で彼女は真偽を定かにしようと無意識のうちに思考していた。

そろそろ夜明けという時間、侵入者を告げる声と共にミクヴァンが部屋を去ってから、ミーファはこれからどうすればいいのか、どうすべきなのか思索していた。

しかしそこに突如としてフェイススが現れた。彼はミーファを助けに来たと言ったが、ミーファにはなぜまだフェイススが自分を助けようとするのか疑問だった。

ミーファはただとしくもそのことを訊いてみると、ある人に頼まれたからだと言った。だがその返答は要領を得ず、余計に分からなくなるだけであった。

そしてそんな当惑状態を塗りつぶすように、さらなる疑問 いや、疑念が生まれた。

フェイススがエクススの剣を持っている、という看過できない光景に気がついたからだ。

その時、ミーファの中に一つの予感がはしった。

だがそれをミーファは瞬時に否定した。なぜならばそれは到底受け入れがたい、エクススの死という予感だったからだ。

故にミーファは問いただした。

片腕の少年にエクスがどうなったのか確認するために。彼女の無事を彼の口から聞くために。

そうした矢先に、しかしミーファは致命的なことに思い至った。エクススの剣を持っているフェイススに、エクスがどうなったのかを訊くことはおかしいのではないのか、と。

フェイススは騎士である彼女の エクススの剣を持っているのだ。

その腰に携えているのだ。

それはなぜか。

理由は不明。

だが一つ言えることがある。

それはエクスがただならぬ状態にあるということだ。騎士が己の分身ともいえる剣を手放すなど、平時ではあり得ない。そしてそんな彼女の剣が他の人間の手にあるというこの状況は明らかにおかしい。

と、そこでミーファは目の前の少年が何という異名で呼ばれているのかを思い出した。

《隻腕の剣鬼》。噂曰く人殺し。エクスが剣を向けた相手。

そうしてミーファはこれまでの考えが正しいのではないかと思っ
てしまった。故にそんな人物にエクスがどうしたのかと問いかける
など愚鈍もいいところだろう。

だが乾いた喉でなんとか言葉を発して、殺人鬼と名高い片腕の少
年に恐る恐る確認してみたところ、

『いや、違う。俺たちが駆けつけた頃にはもう瀕死だっ
』

それだけでもう、十分だった。

それだけの言葉で、エクスはもう死んだのだとミーファの直感が
告げていた。

だが信じることなど出来ない。信じられるわけがない。あの精強
な騎士であるエクスが死ぬなどあり得ない。

ミーファは目の前の少年に恐怖を覚えるよりも、ただ胸が抉られ
たような痛みと悲しみだけを感じた。

感情はエクスが死ぬわけがないと訴えているのに、どこか冷静な、
あるいは冷酷な理性が彼女は死んだのだと告げている。加えて彼女
を殺したかもしれない男が目の前にいるのだということも。

しかしそこでミーファの思考は決壊し、心は嵐のように乱れ狂っ

た。

それから先はあまりよく覚えていなかった。ただただ言いような喪失感が自身の身を苛んでいた。

目は開けているはずなのに真つ暗だった。耳は塞いでないはずなのに良く音が聞き取れなかった。

だがそんな状態のミーファを支えるものがあり、それは皮肉にもエクスの死を告げた冷酷なる理性だった。

この一月の間、エクスのようになりたいと思つて自身を変えようとしたことの成果なのか、あるいは本当はこうという性格なのか、荒れ狂う感情の波の中で巨岩のように理性は揺さぶられなかった。

だからだろうか。

絶望の淵にあつたにもかかわらず、ミーファは膝に何かが当たつたのを感じた。その衝撃で自身の内へと向けていた意識が急速に浮上する。

頬を伝う涙の跡を感じ、身体はだらしなく床にへたり込んでいたが、それでもなんとかミーファは状況を確認できる状態にあつた。少女は自分でも己の冷静さがおかしかった。エクスが死んだかもしれないのに、いやもう十中八九そう確信しているのに、それでも憧れた騎士のようになぜか冷静なのだ。

疑問と疑念と喪失感、それに僅かだが確かな憎悪を抱えながらも、色の戻つた視界で膝元を見てみると、そこには剣が横たわっていた。確認するまでもなくそれはエクスの剣だ。

そう意識が認識したと同時に、幼げな声が聞こえてきた。

「フェイツ！」

リムと呼ばれる特異な容姿をした童女の声だった。

視線を声の方へと向けると、リムは今まさに一人の少年に背後から抱きついていた。

後ろ姿からでも分かるその少年　フェイシスは左手に剣を握つ

ている。薄暗くて判然としないが、昨日今日とフェイシスが所持していたものではないその剣が、濡れているような光沢感を帯びているように見えるのは気のせいだろうか。

そしてその先、フェイシスの前には何かが転がっており、それは彼の身体と薄明かりのせいによく分からない。

「おちついてっ、イヴだつてフェイにこんなことしてほしくないよ！」

フェイシスの背後から抱きついたリムは、なぜか彼にそんなことを言っていた。

しばらくミーファは呆然と、何が何だか訳も分からず眺めていると、

「ミーファを、逃がしてもらえますね？」

フェイシスが自分の名前を言ったからか、その言葉が妙に耳を打った。その彼の声は真剣そのもので、まるで悪意など感じられないものだった。

「……沈黙もまた一つの答えと判断していいんですか？」

「フツ、そんなことを言えるほどには理性的なのか。……些か君という人物が計り切れないので戸惑っていたところだよ」

フェイシスの声に答えたのは、記憶に新しいミクヴァン・オスリームの声だった。

ミーファの感情は暗い穴の中にでもあるかのように絶望しているのに、理性は目に映る光景と耳が拾う音を平時と変わらぬ正確さで自身の意志に関係なく処理し続けていく。

「まさかこんな少年が噂の殺人鬼だとはね。だが、先ほどの狂った笑いとその怪奇的ともいえる強さなら納得だ」

「ミーファを逃がして」

「まあ待ちたまえ。その前に聞かせてもらえないか？ なぜ彼女をそこまでして連れて行くこうとするのかを」

フェイシスの後ろ姿に遮られてミクヴァンの姿は確認できないが、男の声は落ち着いていた。

そしてミーファはミクヴァンの言葉の意味を正確に理解してもいて、彼の言う彼女とは自分のことであると推測する。

故にミーファは気になった。

フェイススがなぜ、自分を助け出そうとしているのか。なぜ危険を冒してまでこのようなところまでやってきたのか。エクスを殺したかもしれない いやもう彼が殺したとしか思えないが、そんなフェイススがどうして自分に手を差し伸べるのか。彼もまた王女という身分を利用するつもりなのか。

とにかく、ただ疑問だった。

「彼女の騎士から頼まれたからだ」

だからそう思っていたミーファはフェイススのそんな言葉を聞いて、これまで静かに機能し続けていた理性さえも混乱に陥りそうなほどの衝撃を受けた。

騎士 とはつまりこの場合エクスしかない。そしてそんな彼女に頼まれたから……？

もはやミーファには理解不能だった。

エクスがフェイススに頼んだのだろうか。だがそうなるとなぜエクスは、《隻腕の剣鬼》と呼ばれ一度は剣を向けた相手にそんなことを頼んだのだろうか。おかしい。意味不明だ。

だがやはりフェイススの声は真剣そのもので、嘘をついている者の声には到底聞こえない。余程の混乱でそんな風に聞こえてしまうだけなのだろうか。

「グレンに彼女を殺すよう命じたのは貴方が、ミクヴァン・オスリーム……？」

ミーファの耳が拾った音 グレンというその名には聞き覚えがあった。

それは最後にエクスの姿を目にした倉庫、そこを急襲してきた巨漢の男がそう呼ばれていたような気がする。

しかし肝心なのはそこではない。殺すように命じたとは、それはつまり

「……そうだともいえるし、そうでないともいえる。私はグレンに捕縛するよう命令したが、彼はその命令を破った。だが私はグレンがどういった人物なのか、ある程度は知っていた。騎士となれば彼がエクス・オフィムを殺すだろうことは予期していたのだ」

ミクヴァンの言葉を聞いて、ミーファの脳裏に一つの可能性が思い浮かんだ。

考えたくはないことだが、しかし今を逃せばもう行動する機会はない。

故にミーファは理性が情性のままに思考するに任せるのではなく、荒れ狂う感情の中、それでも自分の意思でもって考えた。

そして直感的な思考の末、ミーファは一つの答えに至った。それはこれまでの理解できなかった話の流れを解き明かすものでもあり、辻褄が合っていた。

「……………」

ミーファは緩慢な動作で膝元にある剣を手にした。

右手は柄を、左手は鞘を掴み、生まれて初めて剣という凶器を一息の下に抜き放つ。

無骨ながらも洗練されている柄は握りやすく、しかし重量はミーファには両手でなくては振りきれないほどに重かった。それとも人を殺す道具という認識が体感を狂わせているだけなのだろうか。

こんなにも重いものを振るっていたエクスは、やはり尊敬に値する人物だとミーファは再認した。

鞘を床に置き、四肢に力を込めて立ち上がる。先ほどまでの腑抜けた心は暗い活力を取り戻し、奇妙なほどに力が入る。

どうして急にそんなことができるのか、ミーファは冷めた頭で理解していた。己を突き動かしているのは、一重に憎悪という感情であることを冷静に自覚していた。

「……………」

前へ向け、怨敵へ向け、ミーファはゆっくりと足を踏み出した。

なぜフェイススがエクスの剣を持っているのか。それは未だ

にはつきりとしないのだが、それでも確かなことがある。

それはエクスを殺したのはグレンという斧を持った巨漢であり、それを止められる立場にいたミクヴァンでもあるということだ。

いやそれ以前にミクヴァンさえ自分たちを追い詰めなければ、エクスと離れることはなかったし、エクスが死んだということでは悲しむこともなかった。

フェイシスがエクスの剣を持っているのは、おそらくだが先の彼の言葉の通りなのだろう。

『いや、違う。俺たちが駆けつけた頃にはもう瀕死だった。』

『彼女の騎士に頼まれたからだ』

この言葉を信じるとすれば、彼はあの後どういふ訳か倉庫へと戻ったのだ。

そしてそこでグレンという巨漢によって瀕死にさせられたエクスを発見し、彼女から剣を受け取った、または勝手に持ってきた。

その後どうやってこの屋敷にいることを知ったのかは分からないが、フェイシスは本当にミーファを助けにここまで来たようなのだ。そして彼は言っていた。騎士に頼まれたから来たのだと。

瀕死のエクスにはもう頼れる者がいなく、たとえそれが噂の殺人鬼だとしても、藁にもすがる思いで彼に頼んだのだろうことは推測できる。そう考えれば、一度剣を向けた相手なのにも関わらず、エクスがフェイシスに頼んだということは一応の納得はできる。

「ミーファ、やめろっ！」

声が聞こえた。フェイシス・クーリオの声だ。

視線を向けると、彼の首には剣があてがわれており、それをしてる人物は紛れもなくミクヴァン・オスリムその人だった。彼は昏い目でじつとこちらを凝視してくるが、もうミーファにとってはそんなことはどうでもよかった。

そう、もういいのだ。

もうエクスはこの世にいない。それは確かなことなのだろう。そうでなければ今頃エクスはここにいるはずなのだ。彼女の性格からすれば、どんな傷を負おうとも這ってでも助けに来てくれるはずだ。だが今この場にエクスはいないという状況がすべてを物語っている。

「……………」

エクスは、本当に死んだのだ。

だからミーファはここで復讐しなければならない。大切な人を奪った、その根本たる要因を作り出した張本人であるミクヴァンを殺さなければならぬ。

エクスの仇を、とらねばならない。

たとえどんな犠牲を払おうとも、必ず。

第三十一節・彼女の為そうとしたことは

「……………」
ミーファは自分でも不思議だった。こつも素直に己の内に殺意があることを認めてしまったことが。そしてあまつさえその感情に従っていることが。

だが、抗うことなど出来ようか。

大切な、本当に大切だった人を殺されて、殺意を抱かない人間などこの世にいようはずがないのだ。

「……………エクス」

小さく、声にならない声で呟いたが、その名前は今や空虚さを呼び起こすものでしかない。

「やめるミーファッ！ この男を殺せば、君の道が エクスさんが支えてきたものが潰えるんだぞっ」

フェイシスは剣を突きつけられながらも懸命に叫んでいる。

しかしもはやミーファにとって、彼の言葉も信用できるものではなかった。

依然としてフェイシスが《隻腕の剣鬼》という人物であることは変わりはないのだ。それに彼の制止は、これ以上近づかれれば自分が殺されるかもしれないという理由からだろうことは容易に想像できる。

「ミーファやめてっ」

童女の声も聞こえた。だが今のミーファにはやはりどうでもいいものだった。

視線をミクヴァンの元へと向けると、尚も男はこちらを穴のような深く昏い瞳を向けてきているだけだ。

だがどうしたことだろう、その瞳の奥にはなにか形容しがたい感情が渦巻いているように思える。とはいえ、そんな錯覚だかなんだか分からないものは、今のミーファにはやはり関係ない。

ミーファは剣を握る両の手に力を込めた。

ミクヴァンに襲いかかればまず間違ひなく抵抗されるだろうが、それでも構わない。たとえ敵わなくとも、なんとしてでも復讐する。エクスを殺したのも同然のこの男に騎士の剣で裁きを下してやる。そう思っていたミーファは、しかしあと数歩で剣が届くというところで突然に足を止めた。

いや、止めざるを得なかった。

「……………え……………」

フェイスとミクヴァンの足下、そこに転がる何かがあまりに非現実的だったからだ。

まず眼に入ったときにはそれらが何か分からなかったが、鼻を突く特有の臭気から察しが付いた。

先ほどは薄暗さとフェイスの身体によって見えなかったそれらはあまりに怪奇的で奇妙なものだった。

細長い欠片が四つに、丸い欠片が一つ、そして細い剣の刺さった太く大きい欠片が一つ、それら吐き気を催す何かが無造作に横たわっている。

紅い池に沈んだそれらはあまりに生々しい様相を呈しており、怪奇的なまでに不気味だった。

そしてミーファは　ミーファの冷めた理性がそれらの正体を冷静に突き止めたが、しかし少女は信じられなかった。

なぜなら、あまりに非現実的な光景だからだ。こんな家畜のような有様で散り散りに別たれた人間など、到底信じられるものではないからだ。

だが、認めざるを得ないだろう。目を見開いたままでおびただし量の血の中に沈む、元はガルヴィア・フロードだった者の頭部を見れば、それが認めしかないではないか。

それら人の残骸は、ミーファの十六年という歳月の中でまず間違ひなく最低最悪の光景だった。

「あ、あ……………い、や……………」

数刻前までは当たり前のように立って歩く人間だった男のあまりに惨憺たる姿を見て、ミーファは理解した。

今まさに、自分は憎き男をこのようにしようとしていたのだと。

そう、このような気持ちの悪い、吐き気を催すだけの、意思のなただの肉塊にしようとしていたのだと。

そして気がついた。

人を殺すということがどういふことなのかを。

『私は言うまでもなく、政治のこともまだよく分かりません。それでも戦争をしないでいいなら、その道を追求したい。たとえ周囲から無理だとか見下されたりしても、人が死ぬのは辛いことだから』

自分でも言っていたではないか。人が死ぬのは辛いことだと。戦争はしたくないのだと。

今この瞬間、自分は戦争をしようとしていたのではないのか。国同士のものではなく、人と人の、私怨によって成り立つ個人と個人の争いを始めようとしていたのではないのか。

「い、いや……そんな、な……」

そもそも、エクスはこんなことをして喜ぶのだろうか。

『ミーファ様の明朗さは私にはないものです。人を笑顔にさせたり、すぐに他人と親密になったりするそんな明るさは、普通は努力では手に入れないものです。少なくとも、私はミーファ様の笑顔が大好きですよ』

彼女が認めてくれたミーファという人間の手を汚すことを、騎士は喜んでくれるのだろうか。

「……………」

ミーファは眼前のあまりの光景に、己のしようとしたことに耐えきれず、嘔吐した。

だが腹には何も入っていないかったのか、血とは別の鼻を突く液体だけが床にまき散らされた。それから何度か苦しさに咳き込こみ、胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

別段と身体を酷使した訳でもないのに、身体は荒い呼吸をたて始め、指先が震えだした。

次いで両の手で握っていた剣先も小刻みに揺れ動き始め、そこでミーファは今もなお握りしめている凶器の重さに気がついた。

つい先ほどまでは少し重たい程度だった騎士の剣は、今や巨大な鉄塊もかくやという重さになっている。

と、そこで一つの金属音が響いた。

ミーファ自身の震える手先から力が抜けて、あるいは凶器の重みに耐えられなくなり、剣が床に落ちたのだ。

「……………」

ミーファは呆然とした。

今でもミクヴァンを殺したい気持ちは変わらないが、しかし殺して何になるというのだろう。そんなもの自己満足以外の何物でもないことは、冷静に考えれば分かることだ。

そしてそう考えた後、次に少女は後悔した。

己の為そうとしたことを鑑みて、それがあまりに非道なことだと思いつたからだ。

人を殺すということの異常性を端から見て分かった気になっ
ていながら、それでも尚、抑えられない殺意を 復讐心を抱いて
しまった自分が、どうしても赦せなかった。

すべて、なかったことにしたかった。

自分がエクスと出会わなければ、こんなことにはならなかった。
エクス・オフイムという優しく厳しい人格者であり、王国騎士で
あった彼女が死ぬことはなかった。

そもそも自分が生まれてこなければ、エクスは死ななかったし、

今まさに誰かを殺そうともしなかった。

ミーファの心は後悔という大きな負の感情と、騎士に対して申し訳ないという懺悔の気持ちでいっぱいだった。

「……ミーファ」

名前を呼ぶ声が聞こえる。

だが今の少女に声の主　フェイスの方を見る余力はない。もはや全身から力が抜けているのだ。

これまで絶望していた身体を動かしていた憎悪という力は、すでにミーファの身を支えるほどに滾ってはいなかった。

それよりも自分の為そうとしていたことへの忌諱感と、自己嫌悪という暗闇が心を埋め尽くしていた。

そうして、ミーファは先ほどまでと同じようにへたり込んでしま

う。
エクスの死に加え、地獄のような光景を見て、加えて殺意という暗い感情を初めて抱き、そして己の存在を否定したミーファの心は、すでに擦り切れそうな程に摩耗していた。

第三十二節・異端者

フェイススはミーファの姿を見て、やりきれない思いが胸を締め付けた。

エクスの仇にミクヴァンを　あるいはフェイスス自身を　殺そうとしていたであろう少女は、しかし結局その華奢な手にある剣を振るうことはなかった。

だがこれでいいのだとフェイススは思う。

「……………」

憎悪でもって人を殺してしまえば、後戻り出来ないことは身をもって知っているから。

一度復讐というものに手を染めてしまえば、たとえそれを果たした後でも虚しさしか残らないということは、彼自身分かっているから。

彼女はフェイススが切れ切れにしたガルヴィアを見て、気がついたのだらう。人を殺すということの恐ろしさを。その異常性を。

とはいえ、フェイススがそのようなことを考えるなど傲慢もいところなのだが。

頂垂れてへたり込んだミーファから、ミクヴァンへと視線だけを移すと、厳格そうなその男は少女をしばし見つめた後、なぜかこちらに向けていた剣を引いて鞘に収めた。

緊張していた空気が僅かに弛緩するのを感じながら、フェイススはリムに後ろに下がるよう言い、自身もまたミーファの隣まで跳び退いた。

つい先ほどまで首元に刃を突きつけられていたからか、凶刃がまだ咽喉にあてがわれているのではと錯覚してしまいそんな感覚に陥る。

そんな余念を振り払い、フェイススはミクヴァンを睨み付けるが、男は別段と気にした風もなく、床に座り込んでいるミーファの方を

向いて厳かな声で言った。

「……やはり、人というものを知らない娘だったか」

しかしフェイスにはそんな言葉よりも、なぜ切っ先を引いたのが疑問だった。

先ほどの状態ならばフェイスをほぼ確実に殺すことが出来た。自分の部下を惨殺されたのに、なぜそうしないのか甚だ疑問でならない。

「だがこれで人の 人間の憎悪の何たるかを理解したはずだ。…にも関わらず、結局君は私を殺さなかった……」

語りかけるように一人淡々と話すミクヴァンは、なぜか疲れ切った表情をしている。

「……もう、いい。なんだか……馬鹿らしくなってきたな」

そう呟くと、ミクヴァンは唐突に背を向けた。彼の後ろ姿は本当に疲弊しているように見え、言いしれぬ何かを感じさせる。

「 待ってください。なぜ、剣を引いたんですか？ 貴方は俺を殺せたくは？」

ミクヴァンの行動の不可解さがどうしても気になった。グレンのことを警戒しなければいけないのだが、これは聞いておかねばならない気がした。

すると立ち去ろうとしていた男は振り返ると、

「君は彼女を騎士から頼まれたのだろう？ ならばあの騎士の代わりに、この娘を連れて行かねばならないだろう」

疲れているように見えた背中とは裏腹に、その目だけは依然として強い力が宿っている。

「どういうことですか？ 貴方はミーファを捕らえようとしていたのではないんですか？ 俺を殺せば再びミーファを捕まえておくことが出来たくは？」

「そうだな。確かにそうだ」

ミクヴァンは自嘲気味に口元歪めると、

「だが……もうどうでも良くなってきたのだよ。私はね、正直に言

えは今回のこの派閥争い　こと王女派だの王弟派だのといったものにはあまり関わりたくはなくてね。……しかし立場上、日和ることは難しい。故にどちらか一方を選べという状況下にあった私は、半ば仕方なく王弟派に属することにしたのだよ」

「……それがなぜ、このまま逃がすことに繋がるのですか？　日和ることは出来ないのでは？」

「ああ、出来ない。しかしまさか、ここまでの少女だとは思わなかったのだよ。彼女と話したときはただの理想論者、どこにでもいる無責任な夢見る少女だと思って苛ついたよ。だがそう……よくよく考えてみれば、彼女は私たちから必死に逃げていた。都市という

いや国という大きなものに追われれば、普通はつい一月前までただの少女だった人間ならば早々に諦めようとするだろう。だが彼女は突然に告げられた王女という身分に価値を見だし、つい今しがたもそこから生じた自分の考えを曲げずに、結局は私を殺しはしなかった。まあ……単に君が作り上げたそれに怯えただけということも考えられるのだがね」

ミクヴァンは元は己の部下だった肉片を僅かに見やった。彼は表情を殺しているので、何を考えているのか推し量ることは出来ない。フェイスはすぐ隣に座り込んで俯いているミーフアに視線を移す。

ミクヴァンの言うとおり、彼女は一月前に己の出自を知らされたとは思えないほどしっかりしていたように思う。それは少なからず彼女と話した際に確かに感じたことだった。

「故に、それならば賭けてみてもいいかと思っただのだ。……私とて、戦争はしたくないのでね。それだけの意志があるのなら、もしかしたらという可能性は捨てきれない。それに」

ミクヴァンはゆっくりとそう言った後、「……いや、私らしくもないな」と小さく呟き続きを暈かした。その顔はこれまで張り詰めた雰囲気や纏っていたミクヴァンが見せた中、意外なほどに弱々しい表情をしていた。

「俺の言っていることが嘘だとは思わないんですか？」

「ん？」

ああ、なるほど。君が騎士から頼まれたという件か……

フェイシスにはどうしてミクヴァンがミーファを見逃すのか、やはりその理由は判然とはしない。

彼なりに何らかの考えがあるのか、それともただ本当に馬鹿らしくなっただけなのか。

「別に嘘だろうと構わないよ。私は今でも一応は王弟派だからね。

もし彼女が君に 《隻腕の剣鬼》 に殺されたところで、私には不利益など何もないのだ。噂の殺人鬼ならばそれは天災と同じだからね、私が責められることもないだろう」

「……………」

「それにこれ以上、私の都市を荒らさないでもらいたいのだよ。今回のことで少なくとも死傷者がたし、これ以上はさすがにもう見過ごせない。……私にとって、彼女は厄介事の火種だったわけだよ。君がそれを持っていつてくれるのなら、そうしてくれて構わないというだけの話さ」

ミクヴァンは顔を歪めて吐き捨てるように言った。

つまり彼はもうこれ以上は関わりたくないということなのだろうか。今回のこの、ミーファを巡る一連の出来事に。

「尤も」

執政者はこちらを射貫くように視線を向けてくると、

「君が関わってきたせいでこう思うようになってしまったのだがね。君さえいなければ、今回の件でこれほどの被害を出さずに済んだだろうことは言うまでもないことだ。……………だが君を殺したところで、失った部下が帰ってくるわけでもない」

ミクヴァンはそれだけ言うとそのまま背を向けて、もう用はないと言わんばかりに扉の方へと歩みを進めた。

だが

「ねえミクヴァン、本当に逃がしてしまうのかい？」

突然、声が聞こえた。

それは少年のような、あるいは少女のようなものといえる中性的な声色をしており、どこか楽しそうな印象を抱かせるものだった。

「やはり、あなたですか」

ミクヴァンは扉まであと数歩というところで立ち止まって、そう呟くように口にした。

彼の視線は前へと向いており、そこにはいつ現れたのか、一人の青年が立っていた。

「っ！？」 「えっ」

フェイシスは突然現れた人物に動揺を隠せないが、しかしリムまでも驚いているようだった。

先ほどのミクヴァンとガルヴィアがやってきたときのように、単に気がつかなかっただけなのか、それともそれ以外の何か別の理由があるのか。

「ミクヴァン、もう一度聞くけど、本当に逃がしてしまうのかい？」

僕は立場上、それを看過することは出来ないんだけどね」

「私も貴方も、誰も何も見なかった。……ということにしてはもらえないのですか？」

ミクヴァンは自分の半分も生きていないと思われる青年に向かって、変に丁寧な、どこか畏まった話し方をしている。

フェイシスはそんな彼の態度に疑問を抱くと同時に、いきなり現れた青年……なのか少年なのか判然としない男を警戒した。

薄明かりの中なのであまり良く見えはしないが、顔半分を長髪で覆い隠している中性的な相貌の彼からは、直感的にだが嫌な雰囲気を感じる。

「今回の事では色々と協力してあげたのに、今さら何もなかったことになって出来ないよ」

「……………」

「さあ、どうしたの？ 早くミスティリーファを捕まえなきゃ。彼女はこの国に混乱をもたらす危険因子だよ？」

この場にそぐわぬ楽しげな声で、青年は微笑と共にミクヴァンに語りかける。

フェイスには突然現れた何者かとミクヴァンの会話の内容はよく分からないが、それでもこの都市の執政者であるミクヴァンよりも上の人間だということは彼らの態度から分かる。

「……………」

「捕まえたくても捕まえられない……本当はそう思っているんじゃないのかな？ それらしい言い訳を並べ立てて、自暴自棄になっているだけなんじゃないのかな？ いや、それとも本当は」

沈黙するミクヴァンに、青年は声に抑揚を付けて煽るように言い、小さく首をかしげた。

「フツ、まあ言葉にすると君も恥ずかしいだろうからね。言わないで置いてあげるよ。……でも、君の役目はこの都市でミスティリーファを捕まえること。前にそれが君の役割だってちゃんと云ったよね？」

「そうですね。ですが、私にはもう無理だ。優秀だった部下も失い、グレンがくる様子もない。私一人だ」

青年の言葉に落ち着いた声でミクヴァンは返答しかけたが、

「今の彼女の状態なら、君でも十分にできるだろう？ でも君はそうせず、あまつさえフェイス・ヴェリアスから剣を引いた」

「なっ!？」

どうして名前を知っているのか。そのことにフェイスは驚きを禁じ得なかった。

いきなり現れた、しかも会ったこともない青年にいきなり本名ヴェリアスの名を言い当てられたのだ。

これで扉の前に立つ何者かは、少なくともフェイスとて看過できる状況ではなくなつた。

「それはどう説明してくれるのかな？」

青年は追い詰めるように矢継ぎ早にそう言いつつ、ミクヴァンの元へと歩みを進めていた。のだが、
「ま、とはいえ、君の心情がどうあれ、もう別にどうでもいいんだけどね」

途端にそれまでの追及を止め、わざと戯けて見せるように肩を竦めた。

「それはどういう」

フェイシスが彼らの話から青年がどういった人物なのか分析していると、歩いていたはずの青年の姿がいきなり掻き消えた。

……いや、消えたわけではなく、そう見えただけだった。

フェイシスの目は確かに捕らえていた。急に地を這うかのような姿勢でミクヴァンに急接近する彼の姿を。

髪をなびかせて、ほん一瞬だけ前髪がはためいて青年の笑った顔を完全に晒したところを。

「」

そして、鮮血が散った。

「だって君、もう使えそうにないしね。しかも命令違反 反逆の意まで示されちゃ、もう用済み以外の結論なんて僕の中からは出ないよ」

フェイシスは自らの意志に関わらず、これまでに数々の殺人を行ってきた。故に様々な殺され方をした死体を見てきた。それこそ、先ほど斬ったガルヴィアのような惨殺体なども含めて。

だが目の前の青年は異常だった。

それはフェイシスが思えることではないのだが、それでも、そんなフェイシスから見ても奇怪だった。

「ぐ、あ」

ミクヴァンはうめき声にもならない小さな音を吐き出した。

苦しみに震える彼の身体は胸部の一点を除けば至って正常なのだが、背中から伸びる一本の杭の如き細腕が突きだしていることから、それは異常となっていた。

背中から突き出た紅い腕の先には、言いしれぬ気持ち悪さを感じさせる何かがあった。

そしてそれは五指に掴まれ一瞬だが僅かに動いているようにも見える。

「そして次の瞬間、それは弾けた。」

紅く染まった五指に握りつぶされ、破裂するように周囲に血を振りまいて、その残骸は血濡れた床に落下した。

潰れた果実のようなそれは不快な音を立てて捨てられたのを最後に、もう何の動きも音もたてなかった。

「もう、フェイススが悪いんだよ？」

そんなことを言いながら、異常ともいえる殺人を為した青年は腕を引き抜いた。

胸部を穿たれたミクヴァンの身体は力なく崩れ落ち、それからもう指一本たりとも動くことはなかった。

「……………」
フェイススもリムも言葉がなかった。

いくら人が死ぬところを見慣れているリムでも、今まさに目の前で起こったことはあまりに生々しかったことだろう。

ミーファは先ほどから頂垂れたままなので意識があるのか怪しいが、今のは見ていたら間違いないと嘔吐　どころか発狂しているだろう光景だった。それほどに生々しいものだった。

「君が殺さないから、僕が殺すはめになっちゃったんだからね」

親しげに話しかける青年は、今まさに腕一本で心臓を潰した人間とは思えない冷静さだった。

フェイススは自分のことを異常だと思っているが、目の前の人間はそれ以上だと直感した。

フェイスス自身は、先ほどのガルヴィアのような残酷な殺しは狂気にあてられた時でしか出来ないし、しようとも思わない。

だが、彼は違う。この青年は何の感情の動きもなく、手刀で胸部

を貫き、わざわざ心臓という命の源泉を取り出してからそれ握りつぶした。

「…………お前…………」

狂気で感情を麻痺させないと出来ない者と、何も変わらぬ素面で出来る者。どちらが異常かと問われれば答えは決まっている。

「お前だなんて言わないでよ……………って、そうか、まだ名前を言っていないかったね。というかこうして話すのは初めてだったよね」

どこからともなく取り出した布きれで血濡れた腕を拭いながら、青年は微笑と共に名乗った。

「初めまして、フェイシス・ヴィリアス。僕の名前はエネス・イザウエ。呼び方はエネスでいいよ、よろしくね」

第三十三節・青年は彼を求める

「……お前、何者だ？　なぜ……ミクヴァンを殺した？」

二人分の変死体が床に転がる一室で、血臭が色濃く漂う中にまたしても緊張の糸が張り詰めていた。

「なぜ？　だからさ、フェイがミクヴァンを殺さなかったからだよ」
唐突に現れ、ミクヴァンを手刀で亡き者としたエネスと名乗った青年は、微笑を携えつつゆっくりと歩みを進める。

長い前髪は顔の左半分を覆い隠し、それでも中性的な顔立ちをしていること分かる彼は、線の細い身体も相まって女性に見えないこともない。だが一方でその言動と体裁きから男だと分かる。

「……意味が分からない。なぜ俺が彼を殺さなかったら、お前が殺すことに繋がるんだ？」

フェイシスは未だに握り続けているガルヴィアの処刑剣をしつかりと握りしめ、丸まった切っ先をエネスへと向けた。

すると近づきつつあった青年はフェイシスの数歩前で歩みを止めると、

「ん〜、一々説明するのも面倒なんだけど……でもまあ、それでフェイが納得してくれるのなら、教えるよ」

先ほどから気持ち悪いほどに友好的なエネスは、本当に初対面なのかと疑いたくなるほどに馴れ馴れしい。

フェイシスはこの妙な雰囲気を纏うエネスという人物を計りかねていた。

ミクヴァンにミーファを捕らえるように言っていたかと思えば、今度はそのミクヴァンを一撃の下に殺害した。しかもそれはフェイシスのせいだという。

先ほどミクヴァンを殺したときには表情一つ変えなかったことから、かなりの危険人物だということだけは、フェイシスにも分かった。

「まあ簡単に言えば、フェイにはミクヴァンを殺して欲しかったんだよね。さっきなんて切っ先をフェイの首元に向けたから、これで危機感を煽られた君も彼を殺すかなーって思ったんだけど……まさかミクヴァンが剣を引くとは思わなかったからね。予定が狂っちゃったから、僕が始末したまでなのさ」

「……………」

エネスは溜息をついて、首を横に振った。

一方でフェイシスは目の前の青年が何を言っているのか理解不能だった。なぜミクヴァンを殺して欲しかったのか、何の予定なのか、全くもって説明する気がないのであると思うほどに一方的な物言いだった。

フェイシスは警戒しながらも、最も気になっていることを単刀直入に口にすることにした。

「お前の目的はなんだ？ 俺がミクヴァンを殺す、ということではないんだろ？」

「うん、そうだよ」

エネスは頷いて、こちらの目を真っ直ぐに見つめてきた。

これまで出会った人々の中でも特に異質な何かを感じるその瞳には、形容しがたい不快感と、なぜか親近感を覚える何かがある。宿っている。

フェイシスは不本意ながらも、そう感じてしまった。

「率直に言えばね、フェイ。僕と一緒に来て欲しいんだ」

「……………どういうことだ？」

「僕の 僕たちのところに来て欲しい。異端たる者の同胞として、先ほどミクヴァンを貫いた方ではない手を差し伸べて、エネスは妖艶な笑みを浮かべた。

その表情は美青年というに相応しい容貌をしており、美女にも見えるほどだ。

「悪いが意味不明だ。俺たちはさっさとここから立ち去りたいんだ。……邪魔をするなら、斬り捨てる」

フェイシスは彼の言うことが本格的に理解できないと確信し、それならばもういい加減、早々にこの屋敷から立ち去りたかった。外ではイヴリーナとヴァンが待っていることだろうし、グレンもいつ来るやもしれない。

なぜエネスがフェイシスの名前を知っているのかは気になるが、今はそれよりも夜が明けてしまうまでにここを後にしたい。

「もう、そんなこと言わないでよ」

エネスは肩を竦めておどけてみせるが、フェイシスは依然として睨み続けた。

それをどう捉えたのか、エネスはわざとらしく溜息をつくと、

「フェイはそんなに過去を清算したいのかい？」

「ッ」

どうして知っているのか。

その疑念が頭の中を駆け巡ったが、目の前の青年は妙に得体の知れない人物なのだ。ここで調子を狂わせられれば思いつばかもしれないと思い、フェイシスは努めて冷静さを装う。

「ミステイリーファを救うことで　いやエクススの願いを叶えることで、自分の中に折り合いを付けるつもりなんだろうけど……それよりももっと簡単な方法があるじゃないか」

「……なに？」

フェイシスの怪訝そうな視線を一顧だにせず、エネスは悪戯っぽく笑った。

「ここで彼女を殺してしまえばいいんだよ」

その笑みは本当に、心からそう思っていると思わせるに十分なもので、無邪気ともいえる表情には純粹さすらあった。

フェイシスは理解　いや、確信した。目の前の青年は異常なのだ。絶対的と言っても良いほどに話が通じる相手ではないと。

「ん？　どうしたの、浮かない顔して？　……ここでミステイリーファを殺してしまえば、逆に吹っ切れるとは思わないかい？　逆転の発想だよ」

エネスは抑揚のある独特の話し方で、まるで誘惑するように、あるいは詠うようにそう言った。

「お前の言っていることはおかしい、異常だ。殺せるわけがないだろっ」

「それはどうして？ 彼女が王女だから？ エクスに頼まれたから？」

フェイスの言葉に、小首をかしげてエネスは問うた。

「そうでもあるし、それにこの子は何も殺されるようなことはしていない」

それだけ言うと、フェイスは剣を構え直した。水平に突きつけるような姿勢から、右半身を引いて中段で構える姿勢をとる。

これ以上話しても混乱するだけだし、意味もない。

なぜミクヴァンを殺して欲しかったのか、フェイスには思うところが多々あったが、やはり今はエネスと名乗ったこの青年を殺してでもここを押し通ることを優先しなくてはならない。

「……どうしてなのかな？ 僕と君は同じなのに」

エネスの言葉が終わらないうちに、フェイスは斬りかかった。

斬撃に特化した剣で横風の一闪を放つ。

が、やはりというべきか躲かされてしまう。そのエネスの身のこなしは羽のようで、重さなど感じさせない奇妙な動きをしている。

「もう。分かったよ、分かった。そんなに行きたいのなら、行けばいいよ」

扉の近くまで飛び退いたエネスは、わざとらしく中途半端に両手を挙げた。

「でもこれだけは言うておくよ、フェイ。……君はそう遠くない未来、必ず僕たちと一緒に来ることになる。これは、絶対」

「……世迷い事はそれだけか？」

敵意を隠そうともしないで言い返すと、エネスは大きく溜息をついた。

「まあ、今日はこれくらいでいいか。こうなった以上、すぐにでも

君が来てくれるとは思えないし……………やっぱり何事にも順序つて
ものがあるよね、うん」

エネスはおもむろに部屋の隅　ベッドの元へと歩き出したかと
思うと、飛び込むようにして腰掛けた。

小さく彼の身体が小さく沈み込み、後ろ手について脱力している。

「……………」

もはや何が何だかよく分からないフェイススは、とりあえず部屋
から脱することにした。これ以上、ここにいる理由はない。

フェイススはこちらに視線を向けるエネスを警戒しながらも、ガ
ルヴィアの胴体に突き刺さっていた細剣を抜きだして血振りし、鞘
に収める。

「ミーファ」

未だに脱力しているようなミーファは、よく見るとすでに意識が
あるのかどうかすら怪しく、呆然としていと言つよりも気絶して
いる状態に近かった。

目もすでに閉じられているところを見れば、近いではなくまさに
気絶しているのかもしれない。

そんな少女を片手で　少々乱暴だが　肩に担ぎ上げる。思っ
たよりも軽い身体は、先ほどまで殺人を行おうとしていたとは到底
思えない。ただのどこにでもいる少女のものだった。

「またね、フェイ。僕の言ったこと、忘れないで」

「……………」

エネスの言葉は無視して、背後を警戒しながらも、そのままリム
を引き連れて部屋を後にした。

〃　〃

「ふう」

二人分の変死体が横たわる中で、エネスはそつと息を吐き出した。彼にとつては同類ともいえるフェイシスが去ってからしばらくの間、上半身をベッドの上へと投げだして、何を思うこともなくただ虚空を見つめていた。

未だに左腕に残る人肉を貫いた感覚は、彼に充足感を与える一方で虚しさをも与えている。その相反する二つの感情を同時に抱くようなことはまずないはずなのだが、しかし実際にエネスはそう感じていた。

「結局、今回は完全に道化になっちゃったか……」

エネスは誰にいうでもなく呟きつつも身体を起こして立ち上がると、ゆっくりと一つの死体の方へと足を向けた。

そうしてつい先ほど殺したこの都市の執政者のすぐ側へと歩み寄ると、

「まあ、でもみんな道化だったしね。僕も、君も、そしてフェイも」
物言わぬ骸を見下ろしながら、生者へと語りかけるようにゆつくりと、感慨深くエネスは話し続ける。

「フェイとミステイリーファを引き合わせるのも面倒だったけど、それ以上に一々君に彼女の居場所を伝えるもの面倒だったよ。……それにあのフレスの子は『功』が異常に敏感すぎて大変だった。宿の時なんか特にね。その点でいえば、倉庫の時は全く勘付かれることがなくて楽だったんだけどね」

しかし同時に、それはまるで死者への手向けの言葉のようであり、祈りのようでもあった。

「とはいえ、まだ修正は可能だ。……もうこうなったらフェイには一度すべてを手に入れ、すべてを失って　絶望してもらわないといけなくなっちゃったな。そうしないと……彼はこちらに来てくれないだろうから」

血臭漂う薄暗い室内は、惨殺体と相まってさながら地獄の様相を呈している。

その中でただ独りの生者は、何の反応もない死者へと向けて、周囲の状況を気にした風もなく微笑すらたたえて尚も言葉を紡ぎ続ける。

「フエイとミスティーファが出会って、グレンに騎士を殺させて、君に《隻腕の剣鬼》の正体を覚らせて……ここまでは想定通りだったのに、君と彼女の最後の行動は想定外だったよ」

眼下に横たわる胸に穴の開いた死体を見下ろすエネスは、そこで小さくはにかんだ。

「あの時、君はてっきりフエイを殺そうと……それにミスティーファは君を殺そうとするものだと思ったのだけれど……なかなかどうして、人というものはやっぱり計り知れないね。君のその内に秘めていた消えない理想と、彼女が思いとどまったことだけは計算外だった。まあ、本当にフエイを殺そうとしていたのなら、僕が君をすぐにでも殺つていただろうけど」

エネスは苦笑気味に溜息をつくと、

「おかげで予定が狂っちゃったよ。殺意を向けてくるミスティーファを君が逆に殺して、そして君はフエイに殺される。これが最高の結末だったのに……まあ、そうそううまくはいかないよね」

そこでエネスは落ちていた剣を拾い上げる。フエイがエネスへと向けていた、元はガルヴィアも物だった血濡れた処刑剣を。

そうしてエネスは片手でそれを振りかぶり、すでに息絶えたミクヴァンの身体へと振り下ろした。

小さく肉と骨が断ちきれぬ怪音が響き渡り、そして中空で虚しく霧散する。

エネスはもう一度同じ動作を繰り返し、そうしてミクヴァンの両腕を切断した。

「ごめんね。こうしておかないとここ数日の死体との関連性がなくなっちゃうから。まったく……フエイが殺してくれなかったから」

そう言うつと真っ赤に染まった斬首の剣をミクヴァンの側に横たえる。

「さて、あまり気乗りはしないけど、《隻腕の剣鬼》の新しい噂を情報屋に提供しなくちゃ」

髪で顔の半分を覆い隠したエネスは、それを鬱陶しそうに掻き上げた。

とても男とは思えない魅力的な、魅惑的な、あるいは蠱惑的な笑みを浮かべて、女性と見分けのつかない表情を浮かべる。

そして最後にミクヴァンを一瞥し、背を向けて扉の方へ足を向け、「……絶望こそが人を強くするんだよ、フエイ。過去の君がそうだったようにね」

すでにここにはいない者へと向けて、小さく、零れ落ちるようにそう洩らした。

その時、今まさに惨憺たる部屋を後にしようとするエネスの背中を小さな光が照らした。

いつの間にか夜が明けたのか、透き通った光が硝子窓から差し込んでくる。

その光はまるで彼を祝福しているようでもあり、また彼の歩む先に影を造りだしてこれから起こるであろうことへの不安を煽るようでもあった。

「これから……そう、これからだよ」

エネスは朝日を背中に感じ、予期していなかった『これから』を喜び、また同時に憂いた。

第三十四節・始まりと別れの鐘

東の稜線から差し込む朝日はフェイシスの身体を柔らかく包み込むように照らし上げる。

外套を羽織った隻腕の少年は舗装されていない地面をしつかりと踏みしめ、一步一步、前へと足を踏み出す。

周囲には平原が広がっており、その中を突っ切るようにして踏み鳴らされた一本の道がはしっている。背後には未だ市壁が大きく横たわっているのが見え、その光景が彼に複雑な感情を抱かせる。

ミーファを連れ出した後、フェイシスたちにはとにかく休む暇がなかった。

今は亡きミクヴァンの邸宅で押収された荷物を回収し、意識のないミーファを連れてなんとか都市から抜け出したのはつい先ほどのことだ。

当初の予定通り、情報屋から幾つか点在する通用口。その内の一つを警備する兵に渡りを付けてもらい、通行量と言う名の賄賂を支払って都市から脱出した。こういう芸当は相当に世慣れしていないればできないものだが、フェイシスは多額の金に色目を付けて強引に押し切った。通用口を守る兵の懐に入った金貨や銀貨の総量は、元からの所持金とミーファの荷物にあったものを継ぎ足してなんとか賄って足りる程だった。おかげでというべきか、今のフェイシスたちには僅かながらの金銭しか残っていない。

本来は外敵から身を守るために建造された市壁に囲まれている都市も、一転すれば特定の者を閉じ込める牢獄になり得るということ、フェイシスは今回の件で嫌というほどに実感した。

「なあ、フェイシス」

「……なんだ？」

隣を歩くヴァンからの呼びかけに、フェイシスは視線だけを向けた。

胸元の開けたゆつたりとしている服を早朝の微風ではためかせている長身の男は、少々疲れの見える顔でどこか眠たげに声を出した。「お前の話を聞いた限りじゃ、どうにもそのエネスって奴、今回の件に少なからず関わってたんじゃないのか？」

「まあ……そうだろうな。言っていることの大半は意味不明だったけど」

フェイシスは口ではそう言いながらも、頭では別のことを考えていた。

エネスのことも気になるが、いま最も気になることはやはりミーファのことだ。

あれから依然として意識が戻らないミーファは、馬上でイヴリーナとともに小さく揺られている。前にミーファを座らせ、その後ろにイヴリーナが身体を支えるように乗馬しているのだ。

勝手に走り出さないように手綱はヴァンがしっかりと握っており、本来は荷物を載せるための馬を上手に繰っている。

肝心の荷物は馬に少しだけ載せ、後はヴァンとフェイシスが肩から引っさげている。

「兄さん、エクスさんは本当にあれで良かったのでしょうか？」

イヴリーナが馬上からフェイシスへと声をかけた。

「ある意味、あれが一番安心できるだろ」

フェイシスにミーファと剣を託したエクスは、ミクヴァン邸へと行く前に教会の前へと置いてきていた。

もちろん騎士だと判別できそうなのはすべて取り去って、といても剣くらいしかなかったが、教会側には身元が判別できないようにした。教会もどうせミクヴァンの影響力が及んでいると思われたからだ。

だがそれもミクヴァンが死んでしまったおかげで、どうでも良くなってしまうた。

それにもしエクスだと身元が判明しても、もう騎士は死んでいるのだから何をしようにもどうしようもないし、腐っても教会だろう

から死体は丁重に扱ってくれることだろう。

「……………」
先ほどからフェイシスの隣を歩くリムは臆気な足取りで見るからに睡魔と戦っているのが分かるが、それは無理もない。

この丸一日以上の時間には色々なことがあったのだ。宿を襲撃されて逃げ出し、エクスに問い詰められ、また彼女の死を看取り、ミーファを連れだして、その後は都市から抜け出るのに奔走した。

まだ十にも満たない齡よわいの童女には疲労もそろそろ限界なのだろう。「ヴァン、悪いけど俺の分の荷物持ってくれ」

「ああ」

フェイシスの意図を察し、ヴァンは珍しく口数少なく了承した。普段なら面倒だ何だと言いつつ了解することだが、彼も疲れているらしい。

数刻前、イヴリーナとヴァンは庭先で警備兵の相手をしていてた。フェイシスが屋敷を去るときになって倒れ伏している者たちを見てみたら、数が十以上あり、明らかに当初 フェイシスとリムを先に行かせた時よりも数が多かったことから、相当に苦労したことが見受けられた。

肩に提げていた荷物を預けると、ヴァンは皮革の鞆を行商人のように大量に背負い、または肩から提げていた。

申し訳ないと思いつつ、フェイシスは半眼で歩き続けるリムの前に腰を下ろす。寝ぼけ眼の童女は悄然とした様子でそのままフェイシスの背中にぶつかり、もたれかかった。

そこで左手を回して片手でリムを負ぶると、背中の童女はあっという間に寝息を立てた。

「……………」
フェイシスは小さく、誰にも聞かれないように溜息をついた。

結局ミーファを連れてきたものの、イヴリーナとリム、ヴァンには多大な迷惑をかけてしまったことには変わらないからだ。

ミクヴァン邸へと行く前にその旨はなんとか了解してもらったも

の、特にイヴリーナには当初、強く反対された。この先のこと
ミーファを巡る政争　に巻き込まれることを看過できなかった
らしい彼女には、結局はフェイスの言うことに従ったものの、彼
の中にはやはり申し訳無さが多分にある。

「……う、ん」

都市からなるべく離れるために、そんなことを思いつつも歩みを
進めている最中、馬上でミーファがうめき声を洩らした。

「兄さん、ミーファさんが」

「ああ」

イヴリーナに支えられたミーファは、緩く波打つ癖のある髪を揺
らしながら、ゆっくりと目蓋を開いた。

「あ……う、ん」

横合い　といつても斜め後方に近い　から差し込む朝の日差
しを受け、少女は僅かに見開いた目を再び閉じた。そしてもう一度
ゆっくりと目蓋を上げると、緩慢とした動きで周囲を見回した。

「……………あ、あれ？」

呆然としたように呟き、そして平行して歩くフェイスとヴァン
に視線が固定される。

「え？ えつと……あれ？」

「おはようございます、ミーファさん」

「きやあつ」

と、そこでミーファの後ろで身体を支えていたイヴリーナが声を
かけると、少女は身体を大きく強ばらせて小さな悲鳴を上げた。

「う、うわわ、っと、落ちる、落ちちゃう」

「　ち、ちよつと、お、落ち着いて、ください」

寝起きとは思えない慌てふためいた声で、落馬寸前のミーファを
イヴリーナがなんとか支えた。

その間、自分の上で暴れられた馬の方は一瞬走り出しそうだった
ところを、ヴァンがしっかりとつなぎ止めて諫める。

「い、一旦、降ろした方がいいですね」

イヴリーナはそう言うや否や身軽に飛び降り、ミーファに手を貸して素早く下馬させた。

「うう、あ、ありがとう……」

ミーファは恥ずかしのか僅かに顔を赤らめている。

だが降り立ってもそのまま立ち止まることなく、イヴリーナに促されるままにフェイスたちと歩くことになる。

「ええっと、ここは……どこなの？　というか、どうしてフェイスたちが……？」

やはりというべきか、混乱しているミーファは歩きつつも不安げに問いかけた。

「覚えていないのか？」

「え、えっと……？」

どうやら寝起きで記憶が曖昧なのか、それともつい数刻前の状況が状況だったからか、判然としない様子のミーファはフェイスの言葉に首をかしげている。

当のフェイスは彼女が覚醒してすぐに、そういう状態だと半ば確信していた。

覚えているのならばもつと取り乱して然るべきであり、反していまの彼女はだいぶ落ち着いている　というよりも状況が把握できずに困惑している。

「……………」

フェイススがゆっくりと立ち止まると、他の三人と一頭も自然、歩みを止めた。

本来ならまだ都市からそんなに離れていないところで歩みを止めることはしたくないのだが、さすがにミーファのことを思うと足が止まってしまふ。

イヴリーナは雰囲気を察したのか、それともこれから起こることを予期したのか、フェイススからリムを受け取って抱き上げた。正面から抱かれてもリムは一向に起きる気配がない。余程に疲れているのだろう。

身軽くなったフェイススはゆつくりと朝の清澄な空気を吸い込み、そしてミーファを見据えた。

「ミーファ」

「え、あの、エクスはどこ……？」

未だに記憶が曖昧なのか、状況を理解していないミーファに対し、
「落ち着いて聞いてくれ。……エクスさんは、もういない」

フェイススはなるべく波風を立てないように、静かに、だがはっきりとそう言った。

「え、あの」

「思い出すんだ。何があつたのかを」

ゆつくりと、言い聞かせるように、一語一語はつきりと口にすると、ミーファは何もない中空をしばらく眺め、そうして顔色が一変した。

徐々にミーファの脳裏に数々の光景と言葉が想起され、混乱しそつになる頭を押さえて、ミーファは眩きを洩らす。

「あ、ああ、いや、ち、違う……フェ、フェイス……？」

「……………」

「そ、そんな……ねえ、エクスは……？ エクスはどこ？」

取り乱したようにたどたどしく言葉を紡ぎ、不安な様子を隠そうともせず、ミーファはフェイススを縋るように見つめた。

ミーファの記憶にはエクスが死んだということ自身を受け止めたという事実が深く刻まれていた。

だがそれはあくまでも、そう『受け止めた』だけだ。本当に死んでいる姿など、彼女は目にしていない。だがすでに『死を受け止めている』というのに、そんな矛盾していることを考えている時点で、ミーファが混乱していることはいうまでもないだろう。

努めて無表情を装ったフェイススは、もう一度さきほどと同じ言葉を繰り返した。

「エクスさんは、もういない」

「……………」

「君だって、もう分かっているだろう。彼女は死」

「やめてッ！」

言いかけた言葉を遮って、ミーファはフェイススの胸ぐらに掴みかかった。

しかしそれは掴みかかると言うよりも継り付くようで、現に彼女の腕に力など入っておらず、顔は俯けている。

記憶が完全に思い起こされ、ほんの数刻前の出来事と、その時に自身が感じた思いまでもをミーファは克明に思い出した。

人を殺そうとした　殺意を持った自分、そしてエクスが死んだということを受け入れたときに思った後悔の念。

出会わなければ良かった、生まれてこなければ良かったという思いが次々と心を苛み、ミーファは全身から力が抜けていくのを感じる。

「……………なんで……………どうして……………」

先ほどとは打って変わって悲壮感をその身に纏い、少女は今にも崩れ落ちそうなほどに弱々しく呟いた。

「もう、いや……………グレンって、なによ……………君も、あの男も、ミクヴァンも、みんな、みんな……………おかしいよ……………」

エクスを殺したという斧を持った巨漢。

それを止められたのに止めず、いやそれ以前にミーファたちを追い詰めたミクヴァン。

そして殺人鬼と称されているのにも関わらず、自分たちを助け出すとしたフェイスス。

混乱は極みに達し、ついにミーファは数刻前と同じようにへたり込んでしまう。彼女は服が土で汚れるのも構わずその場にうずくまった。

フェイススからすれば見ていただけで痛々しいが、しかし今の彼がやるべきことは慰めることではなく、伝えることだった。

足下で噁り泣くミーファに、フェイスは刺激しないよう、なるべく何の感情も込めないで淡々と口を動かした。

「エクスさんから伝言がある」

「……っ」

小さく肩を振るわせるミーファは、恐る恐るといった様子で顔を上げた。

涙の跡の残る頬と赤い目元から、その表情はまだほんの幼い子供のようにも見える。だが見上げる瞳には如実に不安と恐怖が織り交ぜになって暗い光として表れていた。

そんな少女に、フェイスは最後まで彼女のことを想い願っていた騎士の言葉を口にした。

「彼女は最後に、息を引き取る直前にこう言った。『貴女に出会えて良かった』、と」

「」

それは今のミーファにとって、どんな言葉よりも彼女を癒やす特別な台詞だった。

結果として死することとなったエクス・オフイムという人間からミーファにとっての騎士であり友人である彼女から、自分と出会ったことを後悔されてはいなかったことが何よりも心に沁みだ。

大きく見開かれた瞳から涙が一滴だけ頬を伝うと、それを皮切りにミーファは顔を歪めて俯き、小刻みに身体を震わせながら静かに涙を流し続けた。

そして、そんな彼女の耳に微かに一つの響きが届いた。

それは都市から届く一日の始まりを告げる聞き慣れた時鐘の音だった。

すでに都市からは市壁が小さく見えるほどに離れているのだが、鐘はそんな距離をもとせずに周囲一帯に朗々と荘厳な音色を響き渡らせていた。これから始まる新たな一日の合図を、時鐘は盛大に大気を振るわせて知らせている。

だが今のミーファには、その音色が大切な彼女を悼む弔鐘ちゅうしゅうのそれ

に聞こえていた。

【第一章・完】

第三十四節・始まりと別れの鐘（後書き）

一章はこれで終わりですが、次節は情報整理の意味合いもこめて登場人物の紹介をしておきます。

〈第一章終了時点での登場人物紹介〉（前書き）

このページには激しいネタバレが含まれています。

以下をご覧になる方は事前に第一章を最後まで読んでおくことを強くお勧めします。

〈第一章終了時点での登場人物紹介〉

【フェイシス・クーリオ】 十七歳 男
通称フェイ。

少し長めの髪に穏やかそうな目をした、一見するとどこにでもいそうな少年。

普段は釣鐘型の外套を変にずらして羽織っており、右腰には流麗な細剣を携えている。

約三年前に起こったとある事件で様々なものを失い、あてもなく王国内を旅していた（放浪していた）とき、ミーファとエクスに出会う。

右腕が肩先から欠損しており、その身体的な特徴と引き起こした様々な凶行から《隻腕の剣鬼》という異名の殺人鬼として王国内では広く噂されている。

元は由緒正しい騎士の家系であるヴィリアスという姓の貴族出身なのだが、現在は別姓を名乗っている。

【ミステイリーファ・ミル・デルフィリア】 十六歳 女
通称ミーファ。

肩より先まで伸びた緩く波打った髪と、見るからに活発そうな顔立ちが特徴的な明るく朗らかな少女。

第一章開始時点の一月前までは普通の少女として暮らしていたが、王の隠し子ということとその他の諸問題あって政争に巻き込まれることになる。

人を殺すという行為を嫌っており、誰かを傷つけるといふ行為さえ疎んでいる。そして当然如く、戦争というものは絶対的に忌避している。

普段、自己紹介をするときは本名ではなくミーファという略称を名

乗ることにしている。

【イヴリーナ・テイラス】 十五歳 女
通称イヴ。

二つ年上のフェイスと同程度の長身に加えて早熟な体付きをしてはいるが、顔つきはまだ年相応の少女然としている。

乱雑に肩口で切り揃えられた後ろ髪に、顔両脇の前髪だけが胸部に
しな垂れ掛かるまで突出して伸びている髪型が特徴的。

フェイスのことを敬愛しており、また同時に彼の精神性 もと
い「功」による悪影響を憂いてもいる。

腰の後ろで二本の小太刀を交差させており、有事の際には二刀でも
つて対応する。

【リム・フレス】 八歳 女

黄玉のような金瞳と腰より先まで伸びた黒髪、加えて真っ白い肌が
特徴的な童女。前髪も疎らに長いため、特異な瞳は人目につきにく
い。

華奢な身体に反して性格は明るく無邪気。その一方で人の死や血な
どの生々しい光景を見る姿はどこか達観したような雰囲気漂わせ
る。

フェイスのことは父親や兄といった風に見ており、またそれと同
じようにイヴリーナとヴァンのことも慕っている。

その容姿から言いしれぬ不思議な魅力があり、また他人の気配や感
情といったものに聡い。

【ヴァン・ストレル】 三十五歳 男

常に口元に微笑を張り付けており、硬そうな短髪をした長身の男。

東洋風の胸の開けたゆつたりとした衣装を着こなし、腰に巻かれた藍色の帯には柄から鞘まで純白の刀を差している。

普段はふざけた口調と態度でフェイシスやイヴリーナをからかったりしているが、不意に真面目な話や態度をとることがある。

フェイシスのことには基本的に口を挟まないが、彼の狂気的な行いだけは一応案じている。

【グレン・ダージエン】 二十九歳 男

強面で身体が縦にも横にも大きい、まさに巨漢というべき男。

左腕の肘から先が欠損しているが、片腕で巨大な戦斧を軽々と繰る実力を持つ。

過去の任務で騎士候補生に腕を切断されたことが原因で騎士という存在を憎んでおり、都市アクナリアの一件で王国騎士であったエクスを殺す。

フェイシス・ヴィリアスにいつか復讐したいと思っている。

【エネス・イザウエ】 ?歳 男

少年にも見える面持ちをしているが、とはいえ年齢の判然としない謎の青年。

時に妖艶な笑みを浮かべ、女性と見紛うほどの容貌と、その顔立ちの左半分を覆い隠す長髪が特徴的。

《異端なる者たち》ことルーインアウターという謎の組織の者で、なぜかフェイシスを強く求めている。

グレンを見戯にも等しいほどに軽々といなす実力を持っており、手刀の一撃のもとにミクヴァンを殺した。

【エクス・オフィム】 二十一歳 女

男装の麗人と言つべき端正な容姿と凜とした雰囲気を併せ持った王国騎士。

長い髪を後頭部で一つに束ねており、女性ながらに成人男性にも負けないほどに背が高い。

剣術や体術の類いの実力は高く、また常に冷静であるように心がけている。

出会つて一月ほどのミーファを公私両面で慕つており、彼女のために全力を尽くしていた。

だがグレンに敗れ無く斬られてしまい、ミーファのことをフェイシスに頼んで亡くなる。

【ミクヴァン・オスリーム】 四十四歳 男

都市アクナリアの執政者である貴族の男。

どこか昏い瞳と後ろになでつけた白髪交じりの髪に相まって威厳さと高貴さを醸し出しており、執政者という文官でありながら剣の腕も立つ。

ミーファを巡る政争では王弟派に属していたが、最後にはミーファを見逃し、エネスに用済みと言われて殺される。

エネス曰く、昔はとある理想を抱えていたらしい。

【ガルヴィア・フロード】 二六歳 男

誰にでも慇懃無礼とした態度をとる、長髪で長身瘦躯の男。またミクヴァンの忠実な部下でもある。

フェイシスが毒蛇と称したように頭が良く回り、そのくせ荒事の対処などでは直接的な実力をも発揮する。

先の丸まった処刑剣という武器を元にした剣を使っていた。

ミクヴァンの下で彼のためにミーファを巡る一件では奔走していたが、狂気にあてられたフェイシスによつて殺され、果てには肉片と

化す。

〈第一章終了時点での登場人物紹介〉（後書き）

拙い部分が多々あったかと思いますが、拙作をここまで読んで下さった方、まずは御礼申し上げます。

今後の投稿予定なのですが、第二章は数ヶ月先になりそうです（とはいえ年内にはなんとかなりそうです……たぶん……）。

もし仮に続きが読みたいと思われた稀有な方がいらっしやれば、感想のところはその旨書いて頂けたら幸いです。

今後のことだったり、その他いろいろなことの詳細は活動報告に目を通して頂ければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2495w/>

想望する者たち

2011年10月19日03時13分発行